

フィクション劇場 イン트로ダクション



フィクション劇場（改）第一話〜第二十七話
イントロダクション
大 太 大



フィクション劇場 インTRODクシヨN

【はじめに】

○「フィクション劇場」作者の大太 大（おおた・だい）と申します。今回はつたない作品にご興味を持って頂き、ありがとうございます。この脚本は二十七話、総ページで1000ページ以上になりますので、最初に全体の概要をご説明致します。

【フィクション劇場とは】

○作者がマスメディアや政治・裁判等を中心に、違和感を感じたり、疑問を持ったことを可能な限り現実で起こりうるフィクションの形で、皮肉と風刺、そしてユーモアを交えて描いた、一話完結のオムニバスドラマです。作者の言いたいことが基本にあるので、長回しのセリフや長い会話もあります。

○実際にあった出来事をモチーフにしている場合もありますし、オリジナル要素のみの話や、おちゃらけ回もありますが、全

フィクション劇場 イン트로ダクション

体的にビターです。あえてカテゴライズするのであれば、性根の曲がった社会派ドラマ」というところでしょうか。恥ずかしい限りですが。

○ 本脚本はフィクションですが、あくまでも現実で起こりうる範囲内のフィクションです。つまり、超能力の類などは出てきません。

○ 低予算で映像化出来るように、複数の大きなセットや外ロケ、大人数のモブなどになるべく使わないように意識はしています。余計なお世話だとは思いますが。

○ 登場人物の名前は本編に必要なもの以外は苗字だけです。

○ 各話の脚本のボリュームは第一話を除けば、400字詰め原稿用紙で35枚前後です。但し、第二十六話と第二十七話は20枚程度のショート話になります。

○ 恋愛・ラブストーリー要素は一切ありません。アクションシーンもあります。

【頒布方法について】

○この作品は「CCO（クリエイティブ・コモンズ・ゼロ）」でパブリック・ドメイン化されています。「パブリック・ドメイン」とは一般に法律で定められた期間を経過して著作権の切れた創作物（くまのプーさんとか、プーさんとか、プーさんとか）のことを指しますが、CCOは、その期間を作者が定めるものです。で、作者はCCOを宣言していますので、本作品はパブリック・ドメインと同じ扱いとなります。ですので、商用・非商用を問わず、複製・改変・再配布などを制限なく遠慮なく自由に行って頂くことができます。

○CCOの詳細は左記、URLをご参照下さい。

https://wiki.creativecommons.org/images/3/3b/Publicdomain_Japan.pdf

○ただ、日本の法律でのいわゆる「著作権人

格権」はCCOでも放棄できません。です
ので、左記の契約文をもって「権利を
行使しない」形として、実質的に権利を
放棄します。

（契約文）

大太 大は本脚本の閲覧者及び第三者に対し、
本脚本に対して著作者人格権を行使しないこ
とを保証する。

（契約文終わり）

○尚、CCOでは作者のクレジットは、あり・
なし、どちらでもいいことになっている
ので基本、不要です。もし、厚意のある
方がいらっしゃいましたら「原案…大太
大」の表記でお願いします（変えられる
ことが前提と考えているので「原案」で
す）。

【お知らせとお願い】

フィクション劇場 イン트로ダクション

○ 本作品は、第一話から第二十五話（2025年6月15日フィルムバイヤーさんに公開。現在は削除）と個別で同サイトにアップした第二十六話、第二十七話（同削除）を加えて加筆・修正したものになります。

○ ワードファイルのご要望があれば、別途ご相談下さい。

○ （ノン）フィクション部分がどこなのかのお問合せはできるだけお控えください。小ネタや明示しにくいネタが多い話もありますので、対応が大変なためです。ご理解下さい。

○ 連絡頂いた際のお返事は、できるだけ対応致します。

【各話紹介】

○ さて、大分読むのに疲れて来ていると思いますが、二十七話分の簡単なあらすじを説明します。各話数のページ数の部分

をクリックすると、当該話のページに飛びます。

○各話の表紙には「▶（次の話に進む）」、「◀（前の話に戻る）」、「▲（各話紹介に戻る）」のリンクが張ってありますので、読むときにご活用下さい。

○（ ）内は本編の400字詰め原稿用紙の枚数です。

○第一話「芸能リポーター」・・・[P35](#)
（65枚）

大日本テレビ制作局の芸能リポーター柿本雅子は、歌手の如月秀人を追いかけているが、それが原因で如月は恋人の望月弥生と別れることになってしまう。

激怒した如月は、昔のワル仲間である渡辺聡たちを使って柿本連れ去り、自分への専属取材を許す代わりに、他のリポーターを追いかけることと、自分が連れ去ったことを口外しないことという芸能リポーター

の仕事とは真逆の2つの約束をさせられる。守れない場合は片目の視力がすごく悪くなると暗に脅す。

その後、柿本は2つの約束が果たせず、身の危険を感じて逃亡を図るが、渡辺たちが追いつめる。その結果は？そして柿本はどうなるのか？

○ 第二話「印象操作」・・・・・・・・P106

(35枚)

会社員の大林克典は、動画サイトでジャーナリストの大岩国男のニュース解説をよく見ているが、それに違和感を抱き、会社の同期で、大学で心理学を専攻していた伊部雅人を呼び出し、理由を尋ねる。

伊部は、その動画を見て、心理学者のアルバート・メラビアンが提唱したコミュニケーションの重要度の法則で、言葉のそれは7%しかないため、それ以外の要素の影響だと推測する。同時に伊部は、マスコミ

はその言葉だけでも印象操作ができると話すが……。全編二人の会話のみで進行する話。

○第三話「情報爆弾」……………[P145](#)

（36枚）

俳優の霜月雅彦は、メディアの振る舞いに怒り、ダークウェブからメディア上層部などの個人情報の調査を足立智に依頼し、リスト化する。

そのリストの存在を知る者は、キツネのハンドサインをするため、関係者の間では、このリストを、「フォックスリスト」と呼び、これを示した者に対して、取材を躊躇うことが起こっていたが、真偽は不明だった。

しかし、借金を抱えていた警察官の岸山吾郎が、別件で逮捕された足立のPCデータを週刊誌に持ち込み、実在することが分かる。

週刊誌は、特ダネだと見たが、記事にするにはリストのプライベート情報を出して本物であることを証明しなければならないと考え、これを断念する。

その代わりに週刊誌が取った行動とは？

○ 第四話「公人と私人」・・・・・・・・P185

（36枚）

国営放送JBA・民放を問わず子役の頃から多くのテレビドラマに出演している大物俳優・羽山輝樹は、プライベートに踏み込むことを嫌う。

しかし、JBA大河ドラマ撮影中に、大日本テレビの制作会社がそのタブーを破ったことに憤慨。大河ドラマ総合プロデューサーの佐藤に、自分が薬物を使っているように見せかけ、現在の大河ドラマ降板だけでなく、民放を含む過去の全ての出演作品がお蔵入りになると脅す。そして、JBAと民放キー局4社で「公人と私人」をテー

マにした討論会の開催を強要し、各々の記者が出席して開催される。羽山はオブザーバー参加する。

そこで各記者が「公人と私人」について語ったことは何か？ それを受けた羽山の反応は？

○第五話「容姿」・・・・・・・・P227

（31枚）

高校2年生の宮田健一は、一つ下の幼なじみ・志村知子、そして同級生で工藤優希がリーダー格の昭和の不良の容姿をした4人組と学校生活を送っている。

ある時、知子は工藤たちが健一をいじめていると誤解し、それを聞いたケーキ屋を営む、健一の母・久美子が学校にクレームを入れたことで、健一と4人組は、理由が分からないまま別々の教室で過ごすことになる。

その週末に、久美子の店にクレーマーら

しき客が来るが……。55歳以上推奨の学園
コメディ。

○第六話「矢面」・・・・・・・・・・ P263

（33枚）

東京都牛崎市・企画部長の飯山光吉が、
同市市長の佐藤真のパワハラ行為を告発
し、姿を消す。佐藤は、まずは飯山の保護
と認識合わせの必要性を話す。

その後、警察の搜索で、山中で飯山の靴
だけが発見されるに至り、記者たちの佐藤
への追求が激しくなる。

佐藤は記者への対応を続けるが、無理が
たたりストレス性の急性心不全を発症し、
入院する。他の職員への影響を考えて、病
状を含め詳細は伏せたために、かえって記
者たちから疑問を持たれる。

そして、佐藤は不調を押して記者会見を
開くが、その時の佐藤の容態は？ この
後、飯山は無事に保護されるが、その時の

マスコミの対応は？

○ 第七話「ファクトチェック」・ [P301](#)

（27枚）

大日本テレビに勤めるAD町田智昭は、ワイドショーで草間と言う老夫婦の取材をしている。一方、国会では議員の立法事務費の透明化を目的として、政策担当秘書に關係する支出の公開が決まる。

その中で国会議員・越山栄二の政策担当秘書・早見茂雄が支出した立法事務費が、架空の人物に渡った疑惑が浮上するが、早見は否定する。

しかし、日本ファクトチェック機構が、早見の主張の検証を行い、「誤り」であると結論付け、早見は秘書を辞任する。

その後、町田は早見の息子・貞雄から、早見の取った行動の理由を聞くことになるが…。

○ 第八話「報治国家」・・・・・・・・・・ [P3333](#)

（35枚）

下野していた与党が衆議院選挙で勝利し、2年振りに政権に返り咲く。しかし、前政権が成立させた、大手新聞3社の「社説」での指摘事項を努力義務で実行する「オピニオン法」が施行されることに懸念を抱いていた。

そんな中、ジャーナリストを目指す直江将道は、志を持って毎朝新聞社に入社する。

政府は、5年ごとのカスハラ対策の見直し案を発表するが、社説で対策不足を指摘され、厚生労働大臣の東野とその秘書たちは対応に追われる。

一方、日本新聞連合会会長・杜若（かきつばた）の政府の対応を揶揄する発言動画が流出し、非難の聲が高まる。

このような状況を見て、直江は友人の岡崎俊次に、何を語ったのか？

そして、新聞社は非難の声にどう対応したのか？

○第九話「存在意義」・・・・・・・・・・P373

（35枚）

2024年10月、石原首相が「世界に発信する日本」を掲げ、4テーマに計4千億円の補助金拠出を表明。分配は、所管省庁の縦割り行政を排除するため、当事者間の協議によって決めることになる。

テーマに選ばれたサッカーの小城涼太、バスケの島村康二、科研費の加藤由美子、ベンチャーの加賀美正夫が各団体の代表として参加。各々の要求額は約2千億円で、どこも譲らない。

期限が迫る中、進行役の内閣府参事官大内は各団体に要求額の半減案を提示する。小城はスタジアムの例外規定解消のための屋根設置費用として、1カ所100億の20クラブで2千億円としていた。それを

1千億に減額するためのいくつかの案を該当のクラブに提案するが、各クラブに拒否される。

そして、最終会議でサッカー以外は1000億を要求としたが、小城が要求した額は？ 最後は一発笑ってください。

○ 第十話「同額」・・・・・・・・P413

（31枚）

静岡太平洋テレビでは、毎年GW期間中に募金活動を行っており、田口昌弘が募金管理者となっている。

一方、ワイドショーでは、パーティー券収入をマネーロンダリングまがいの方法で得ている議員がいると報道され、批判されている。

これを受けて与党では当該議員の処分を決定し、その中に衆議院議員の塩川建男が居た。

募金終了後、田口の上司で募金責任者の

有山邦茂は、最近の募金額が少ないことを田口に問いただし、田口は着服を認めて退職する。

田口と塩川がお互いの処遇を知った時に呟いた言葉とは：

○第十一話「募金」・・・・・・・・P449

（32枚）

大日本テレビ毎年恒例のチャリティー番組が開催される。取締役の山田浩一は総合プロデューサーに宮下義弘を指名、原点回归と数値目標を示される。

宮下はプロデューサーの石川元基・真鍋邦夫・藤村直と動画サイトを使って、募金をスーパチャットで行なえる企画などを模索する。

一方、番組に否定的な江ノ島秀樹は、悪意を持って、ある「ことば」を付けて応援寄付サイトを立ち上げる。

番組が始まり、江ノ島の「ことば」の意

図を理解した人々が応援サイトに寄付を開始。しかし、江ノ島を協力者と見た宮下は、番組への出演依頼を指示するが、ADの近藤和美は江ノ島の行動が、番組への抗議であると宮下に告げる。

番組終了後、宮下に、元司会者の萩原から電話が入る。萩原が話したこととは？そして、宮下が下した決断とは？

○第十二話「名前」・・・・・・・・P486

（33枚）

昔、NPBに在籍していた「日本人には呼びにくい名前」の選手の孫が、パ・リーグ木更津アポロダイバーズに投手として入団し、開幕から白星を重ね、首位でセ・パ交流戦に突入する。

交流戦初戦で対戦するセ・リーグ東京ジエントルマンスとの試合は地上波放送予定で、その選手の先発が濃厚。そこでジエン

トルマンス社長は、その選手のフルネームでの出場を阻止しよう、同GMの菅藤雄大に指示する。そして、菅藤はアポダイバーズのGM鬼頭に依頼するが…。

登場人物の名前がどれだけ分かるかで、心の汚れ具合が分かる話。

一番汚れているのは、もちろん作者。

○ 第十三話「一日」…………… [P525](#)

(34枚)

毎朝新聞を定年退職した佐賀哲夫は、退職翌日に妻・美代子を殺害される。しかし哲夫は、既に記者ではないため何の情報も得られない。

そうした中、後輩記者の大西誠が哲夫の自宅を訪れ、独り言だとして犯人は18歳の特定少年であり、先方弁護士から匿名を要求されていると告げる。

哲夫は少年の情報を得るために裁判を傍聴するが、少年への配慮で隠蔽措置と人定

質問が省略され、何も分らない。その帰り道で哲夫は倒れて入院する。

そして、判決当日、哲夫は大西からの判決結果の連絡を待つが…。

○第十四話「一生」・・・・・・・・P564

（35枚）

俳優一家に生まれたサラブレット、俳優の小谷龍二は、突然、暴漢に刺されて病院に搬送され、妻の真央は病院に駆けつける。龍二は意識が戻らない中で走馬灯を見る。

誕生した時、初の映画出演、大河ドラマ主演、熱愛報道、真央との結婚、両親の事故死。長男宏樹の誕生と芸能界入り。

その宏樹も病院に駆けつけるが、まだ龍二の意識が戻らず、走馬灯が続いている。そして、意識が戻った龍二は、ベッドのそばにいる真央と宏樹に話しかける。それを聞いた真央と宏樹は、その言葉をどう受

け止めたのか？

○第十五話「オリンピック」・・・[P604](#)

(36枚)

2039年、IOC総会で名古屋での2048年夏季オリンピック開催が決まる。IOC副会長の山上康之は孫の小夜との2つの約束の1つを果たす。

そして山上は、もう1つの約束である「みんなで一緒にできるオリンピック」を名古屋で実現すべく動き出す。

これは、パラ選手がオリンピックに出場できるというもので、山上の尽力により一部競技で実現し、名古屋は「統合（ユニティ）オリンピック」と名付けられる。

小夜との約束のきっかけを作った車椅子パラ選手の国重誠は、男子100mのファイナリストに残り、銅メダルを獲得する。そして、表彰式。ファイナリスト達はあの行動に出る。それは何か？ それを見た

山上の想いとは？

○ 第十六話「矛盾」・・・・・・・・・・ P646

（36枚）

前職の死去に伴う衆議院 兵庫14区の
補欠選挙が行われ、4人が立候補する。候
補者の一人、「むくどりの会」の黒田浩孝
は、阪神神戸テレビ主催の公開討論会で、
選挙の自由を盾に他候補を貶める発言をす
る。他候補はテレビ局側に2回目開催時の
対策を求められ、プロデューサーの小柴は
苦肉の策で何とか凌ぐ。

しかし、候補の一人、浜口幸二は黒田の
一連の行動に怒りが収まらず、自作自演の
暴行事件を起こし、その犯人の特徴を教え
るとして、黒田の事務所を訪れる。

浜口の話聞いていた黒田は、自分が標
的であると分かったが、浜口の手下に取り
押さえられる。そこで、浜口が黒田に放つ
た言葉とは？ そして、その後の黒田の行

動は？

○第十七話「応援演説」・・・・・・・・P687

（34枚）

市長の汚職辞任による東京都桐山市の市長選挙が告示され、元市職員の白川秀之と元新聞記者の神田和明の2名が立候補する。

神田は元新聞記者の経歴を全面に出し、周辺への取材経験から桐山市の問題点を把握しており、自分が適任であると訴える。一方、白川は前市長の汚職で、市への信頼が損なわれており、苦戦を強いられる。そこで選挙参謀の関山浩平は、巻き返しを図る手の1つとして、白川に応援弁士の選定を打診する。了承した白川は、市役所の元同期で、退職した藤本文雄に依頼する。藤本は固辞するが、最終的に内容不問の条件で引き受ける。

選挙運動最終日、白川と共に駅前立つ

た藤本は、何を語るのか？ 大演説をお聞き下さい。

○第十八話「忘却」・・・・・・・・P725

（36枚）

1987年（昭和62年）、技術者の青葉海（あおは・かい）と、OLの空（そら）のきょうだいは二人で暮らしており、空には恋人の佐藤正弘がいる。

ある日、空は佐藤の両親に挨拶に行く日に体調を壊し、キャンセルする。

しかし、翌日の新聞に別人の名前が空と誤植される。訂正記事は出たが、佐藤は信じずに激怒し、空と別れる。精神的に落ち込んだ空は拒食症になり、それが原因で病死する。

海は復讐のため、記事を書いた記者が毎朝新聞の大東博也だと突き止め、殺害する。

38年後の2025年、事件は既に時効

となっており、逃げ切った海は、毎朝新聞の掃除アルバイトとして働いている。

そして、大東の命日の日、献花台の大東の遺影を見て海は何を問いかけるのか？

第18話と第19話は連続しています。

○第十九話「因果応報」・・・[P766](#)

(38枚)

企業団体連合会の会長に就任した東郷十
三は、経営者ファーストを掲げて与党への
献金を積極的に行い、世の中の先行き不安
払拭を目指すと宣言する。同時に、息子の
恒夫の裁判に係るマスコミの報道に立腹し
ている。

そこで、東郷は青葉陸（あおは・りく）
（第18話の青葉海のいとこ）を顧問弁護
士に雇い、献金の中止をチラつかせて、誤
報の場合に報道時と同等の紙面を謝罪に割
く「報道名誉回復措置法」を与党の議員立
法として国会に提出させる。

青葉は法案審議に際して、自分と日本新聞連合会長の杜若（かきつばた）の参考人招致を働きかけ、両者出席が決まる。

先に質問を受けた杜若の見解に対し、青葉はあくまで誤報に限ることを強調して必要性を説明する。

果たしてこの法案を成立させることができるのか？

第18話と第19話は連続しています。

○ 第二十話「椅子取りゲーム」・ [P809](#)

（36枚）

2034年、関連法案が改正され、在京キー局5社の中で最低評価の局が教育テレビと電波を共用することになる。評価項目は5つで、その中には全日帯視聴率と有権者の投票も含まれる。評価見直しは参議院選挙時に同時に投票を行うこととなったため、3年毎となる。

そのため、各局が生き残りをかけて番組

テコ入れを図る。対象局のアルプステレビ制作局長の村上望も奔走するが、他局の意外な作戦に遅れを取り、対応に追われる。しかし結果、ライバル局の大日本テレビが落選。犬猿の中だった同局制作局長の二神吉貴から食事の誘いを受けた村上は、二神から教育テレビも悪くないと告げられる。

村上はその理由を尋ねるが・・・。

○第二十一話「空」・・・・・・・・P851

（32枚）

東京都桐山市で台風による水害が発生。死者は出なかったが、建物の損壊や浸水が起こる。

市の職員は各種証明書発行の対応に追われるが、住民の菅原直之は、手続きが進まないことに腹を立て、責任者を出すよう要求し、これに総務部長の吉田郁夫が対応する。

吉田は台風が原因だから、責任は「空」にあると説明したが、菅原は納得せず、ワイドショーの報道を引き合いに出し、吉田たちの責任を問う。

しかし吉田は、それらの人間は「外野」であり、この水害を「誰か」のせいにしているのではないかと応じる。

それでも納得できない菅原は、SNSへの書き込み等をチラつかせるが、吉田は動じない。

逆に吉田は菅原にあることを迫るが…。

○第二十二話「双子」……………[P887](#)
(35枚)

一卵性双生児の兄・木原和明と弟・昌明は側から見てよく似ている仲の良いきょうだい。大学まで同じ学校で過ごしたが、子供の頃に父親の水沼一騎からDVを受けている。

それを抱えながら生活を送っていたが、

昌明は恋人の茂木雅子を巡って俳優の岡田龍平とトラブルになり、岡田を殺害してしまふ。

和明はマスコミからは責任などを追求され、イメージ悪化を恐れた会社からは退職させられる。

そして、昌明の裁判で、和明に検察側・弁護側両方から証人依頼が来るが、弁護側がある主張を知り、検察側を選ばふ。

検察側を選んだ和明の理由は？
そして和明は裁判で何を語るのか？

○第二十三話「幼なじみ」・・・[P928](#)
(30枚)

新聞記者の外山正雄と弁護士の蘭部健一は幼なじみ。小学校時代の恩師・山田宗春の影響で、「社会」に関する仕事をしている。

その二人が久しぶりに会って、お互いの

仕事の話をするが、外山は離婚し、蘭部はうだつがあがらずで、順風満帆とは言い難い。

そんな中、川崎知子という女兒が殺害された裁判を傍聴することになった外山が法廷に赴くと、検察側に元妻の幸子がおり、女兒が自分の娘であることを知り、動揺する。

一方、蘭部もその裁判で弁護側弁護士として出廷し、外山に自分が好きではないと話していた心神喪失での被告の無罪を主張する。

その裁判後、二人が取った行動は？
そして何を自覚したのか？

○第二十四話「化粧」・・・・・・・・P962

(38枚)

加納琴子は少女を保護する、一社「C.O.O.I.O」の代表。UNFPA(国連人口基金)の3年6億円の事業公募にエントリ

し、最終選考に残る。

加納は、選考要求の1つである先方指定の公認会計士の監査を受審するが、いくつかの項目で不備を指摘される。しかし、保護した女の子のプライバシーを守るためだと説明し、一定の理解を得る。

また、別の要求である「他団体との比較」を行政からの信頼度と考え、東京都に他団体を含む助成金関連資料の情報公開請求を行う。

しかし、その資料に書かれていたことは？
そして、最終選考の結果は？

○第二十五話「危険運転」・・・[P1004](#)

(32枚)

福村習仁は、妻の香と娘の里奈を、暴走した速水翔一の車に轢かれ、失う。

そして裁判前、原告側弁護士の井口清は福村に危険運転致死罪での起訴は、故意、つまり「相手に死ぬことを要求したかどうか

か」を立証する必要があり難しいと話すが、福村は同罪での起訴を決断し、意見陳述に立つ。

福村は、刑法は「こんなことをしてはいけない」とメッセージを出すものという考え方は理解するが、それは量刑で示して欲しいと訴える。

裁判長の館山正光は、福村に危険運転致死罪は判例が少なく、これから積み重なることで国民と当事者のコンセンサスが得られていくものと解く。

それに対する福村の反応は？　そして、速水の出所後に福村の取った行動とは？

○第二十六話「怪文書」(ショート)・・・P|

1041

(18枚)

東京都笹井市市長の久保正夫は謎の怪文書で学歴詐称を疑われ、辞任する。

出直し選挙は、後継候補で元市議の越川

正行と、前市長の疑惑を追及していた同じく元市議の杉本元の戦いとなる。

その公示前、久保の秘書を務めていた岡山義輝は、息子の義政がアルバイトのために電子証明付きの卒業証明書を取得しようとしていることを知り、久保の卒業証明書の取得に動く。

岡山は、取得した証明書を選挙期間中に大日本テレビの記者立石に送って確認させ、久保の疑惑を晴らす報道をするよう頼むが、立石は選挙中に特定の候補者に偏る報道は出来ないと断る。

そして、選挙は杉本が勝利。ワイドショーはそれを告げるが…。

○第二十七話「彼氏」(ショート)・・・P

1064

(22枚)

元SBS(首都圏テレビ)報道局デスクで、フリージャーナリストの来戸哲也(き

ど・てつや）は古巣SBSの報道番組「報道Prism（プリズム）」で解説をしている。

来戸は外国人対策がテーマの回に、難民の呼称や、過去にトラブルがあったが、収束した例を出して、好意的な形で解説する。

一方、哲也の娘で、高校2年生のえりは、オンラインゲームで知り合ったハンドルネーム「サーバン」に好意を抱き、妻の友里恵を通じて、哲也に顔合わせしたいと頼む。

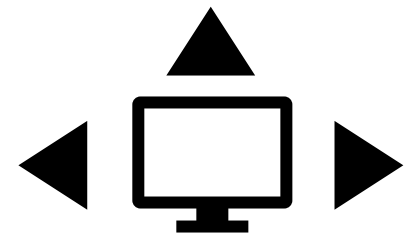
難色を示していた哲也だが、妻の説得で会うことになる。えりが紹介した彼氏とは……。そして、その後の哲也の行動は？ 番組ADが哲也に話したこととは？

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」



フィクション劇場 第一話
「芸能リポーター」

大太
大



フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

【登場人物】

柿本 雅子（かきもと・まさこ）（29）：大
日本テレビ制作局芸能部専属の芸能リポ
ーター。愛称は「まっちゃん」

如月 秀人（きさらぎ・ひでと）（27）：人
気アーティスト。昔の仲間の間での愛称は
「ヒデ」

（イントロ）

望月 弥生（もちづき・やよい）（24）：如
月の恋人

芸能記者 A（男…50）：芸能専門のベテラ
ン記者

芸能記者 B（男…26）：芸能記者 A の後輩

芸能記者 C（男…43）

芸能記者 D（男…45）

（柿本 監禁）

足ツボマッサージ師（初老の男）A、B

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

（如月の仲間…全員ごつい&人相悪い）

渡辺 聡（わたなべ・さとる）（26）…如月のワル時代の仲間。リーダー格。愛称は「ナベ」

大宮（おおみや）…同右

石川（いしかわ）…同右

飛田（とびた）…同右

寺島（てらしま）…同右

滑川（なめかわ）…同右。逮捕される

（大日本テレビ）

芸能部デスク（男…55）…柿本の上司

岸本（きしもと）…芸能部部員

高西（たかにし）…同右

柴田（しばた）…同右

池田（いけだ）（男…27）…報道局局員

（ワイドショー）

宮原（みやはら）（61）…ワイドショー
司
会者

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

澤田（さわだ）（28）：ワイドショー アシ

スタント

小川（男…37）：如月逮捕時のレポーター

古谷（ふるや（声のみ））：週刊誌編集長

（ホテル）

ホテルの受付（女…35）

ホテルの支配人（男…57）

ホテルの従業員（男…40）

タクシー運転手A、B

芸能記者（複数人）

報道記者（如月逮捕時 複数人）

ホテルの客

警察官（護送者運転手、赤坂警察署の道路規制など）

【あらすじ】

芸能リポーター柿本雅子は、歌手の如月秀人を追いかけているが、それが原因で如月は恋人の望月弥生と別れることになってしまう。激怒した如月は、柿本を連れ去り、自分への専属取材を許す代わりに、他のリポーターを追いつめ、連れ去ったことを口外しないことの2つを約束させる。守れない場合は片目の視力がすぐ悪くなると暗に脅す。

その後、如月の取材を独占しようとした柿本だが、事情を知らない他のリポーター陣の行動が抑えられず、1つ目の約束が破られる。そして、自分が連れ去られたことが勝手に週刊誌に報じられ撤回も出来ず、それが原因で如月が逮捕され、2つ目の約束も破られる。

報復を恐れた柿本は逃走するが、如月の仲間に居場所を突き止められ、約束を守らされる。動画配信者になった柿本だが、自宅や自身のChにも追い込みを掛けられ、気が触れる。

その中で、柿本はもうやめてくれと懇願する。

○コンサートホール 関係者出口（昼）

如月秀人がリハーサルを終えて、ホールの裏口から出てくる。

サングラス姿。

そこに芸能リポーターがむらがり、如月が歩いていくのに合わせて歩いていく。

その中に長髪ジーンパン姿の柿本。

柿本雅子「如月さん！ 一般女性との熱愛報道がありますが、本当なのでしょうか？」

柿本は如月にマイクを向けるが、如月は何も言わず、無視して道路に止めてあるタクシーに乗り込もうとする。

柿本「ショッピングモールで女性と二人でいるところを見かけたという話がありますが、それが恋人の方なのでしょうか？」

柿本は再び如月にマイクを向けるが、無視してタクシーに乗り込む。

タクシーが動き出す。

柿本はその車の後方に停めていた「予

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

約」の表示のタクシーに乗り込む。

運転手に向かって、

柿本「あの前のタクシーを追って！」

運転手A「分かりました」

他の芸能記者は柿本の乗ったタクシー
を目で追っている。

その様子を見ている芸能記者A。

芸能記者A「さすが、まっちゃん。準備万端
だな」

芸能記者BがAを見る。

芸能記者B「まっちゃんって、あの女性のこ
とですか？」

芸能記者A「そうだ。柿本雅子。俺たちは『ま
っちゃん』って呼んでる」

芸能記者A「最近、リポーターを始めたらし
いが、バイタリティーがあって、古参の連
中も一目置いてるよ。なんでも、学生時代
に陸上をやっていたって話で、体力勝負で
グイグイ押していくタイプだ」

芸能記者Bがタクシーを見る。

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

芸能記者B「へえ、そうなんですね」

芸能記者Bがもう一度Aを見る。

芸能記者B「ところで先輩、この如月って奴は、芸能界入りする前は、結構ヤンチャしてたって聞いたことがあるんですが、その辺は探らないんですか？」

芸能記者A「ああ。そこは事務所の力で押さえ込まれてる。下手に立ち入らない方がいい」

芸能記者B「でも、今回の熱愛報道には、圧力はかけてこないんですね」

芸能記者A「まあ、芸能界入りした後のことは、本人に任せてます、ってスタンスだからな。やりすぎないように考えているわけだ」

芸能記者B「いろいろと複雑ですね、芸能界ってのは」

柿本の乗ったタクシーを目で追う芸能記者B。

○如月の自宅（夜）

如月が自宅でくつろいでいると、恋人の弥生からSMSにメッセージが入る。

望月弥生（文字）「秀人くん、今日もまた居る」

如月は驚いて返事を返す。

如月（文字）「大丈夫だよ。弥生は一般人だ。

あいつらも変なことはしてこないよ」

弥生（文字）「でも、この前、知らない女の人から声を掛けられた」

如月（文字）「どんな感じの人だった？」

弥生（文字）「長い髪のジパンの女の人」

如月は柿本だと察知する。

如月「…」

如月（文字）「それで？」

弥生（文字）「買い物に行ってたんだけど、ずっと話かけられて。怖かった」

如月「…」

弥生（文字）「秀人くん、もうやめにしない？

私、こんな生活耐えられない」

如月は驚く。

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

如月（文字）「もう少し我慢してくれないか？
今、事務所とこれからの話をしてるんだ」

弥生（文字）「もう無理」

如月は驚いて、弥生に電話をかけるが
繋がらない。

呆然とする如月。

如月「…」

その呆然とした表情が、徐々に怒りに
変わる。

如月は渡辺に電話をかける。

呼び出し音。

如月「ナベか？」

渡辺聡（声）「おお、誰かと思ったらヒデじゃ
ねーか。久しぶりだな。人気アーティスト
様が何の用だ？」

如月「おいおい冗談はやめろよ、ナベ。昔の
よしみでお前らに頼みたいことがある」

渡辺（声）「オレ達にか!? あまりいい話じゃ
なさそうだな」

×

×

×

○路上（夜）

ネオンの輝くバーの前の路上に車が2台止まっている。

渡辺は車に寄りかかりながら、

渡辺「お前、マジでやるつもりか!? そんなことしたら、自分がどうなるか分かってるだろ!？」

如月（声）「ああ、分かってる。お前らに何かあったら、全てオレのせいにしていい。：引き受けてくれないか？」

渡辺「まあ：、今はこんな風だが、お前はすっとオレらのダチだしな。こういうことは慣れてるし。いいぜ」

如月（声）「すまんな：。詳しい話は追って連絡する」

× × ×

○如月の自宅（夜）

渡辺（声）「分かった。じゃあな」

如月が電話を切り、電話を見つめる。
如月が天井を見上げる。

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

○大日本テレビ玄関前（数日後…夜）

柿本（声）「それじゃ、失礼します」

柿本が会社から外に出る。

柿本「コンビニに寄って、ご飯買うか…」

歩道を歩いている柿本の後ろから、車が2台近づいてくる。

1台目の助手席の渡辺が笑顔で、

渡辺「すいませーん。もしかして、芸能リポーターの柿本さんですか？」

少し、怪訝そうな顔をして、後退りする

柿本。

柿本「そ、そうですね…」

渡辺「おお、本物だ！みんな来てみる。いつもＴＶで見てる有名人だぜ！」

エンジンをかけたまま、ドライバー以外の仲間が車から降りてくる。

渡辺が服で手を拭いて差し出す。

渡辺「こんなところですいませんですが、握手してもらえませんか？」

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

柿本は躊躇しながら、

柿本「…は、はい…」

渡辺は少しシェイクしながら、笑顔で柿本と握手する。

柿本は手を離そうとするが、渡辺は両手で握る。

渡辺が、手を自分の方に引っ張って、呟くように。

渡辺「柿本さん…、ちょっと付き合ってもらえませんか？」

柿本、驚く。

柿本「ちよっ、何を！」

渡辺は振り向き、仲間に向かって、

渡辺「おいっ！」

渡辺の声に呼応して、メンバーが柿本を捕まえて、1台目の車に押し込む。

仲間も車に乗る。

渡辺「出るぞ！」

2台の車が走り去る。

○港の荷物置き場（その日の夜）

柿本は木製の椅子に座らされ、手は後ろで、縛られている。

足はハの字で前に伸ばされ、足首の下に石の重しがあり、それに足首が縛られ、固定されている。

服はそのまま、靴と靴下は脱がされて裸足。

口は白のガムテープで塞がれている。

柿本「うう」

柿本が目を覚まして、周りを見回す。

如月が、柿本の後ろから歩いてくる。

そして、柿本の右斜め前に立つ。

如月「すいませんねえ…、柿本さん。無理やりお越し頂いて」

柿本「ううっ」

如月「まあ…、やってることは、あなたと差して変わらないですけどね」

柿本「うう」

如月「いや、私を追いかけて、足が疲れてい

るでしょうから、マッサージでほぐして差
し上げたいと思いましてね」

如月が柿本を見たまま、手を挙げる。

柿本の正面の暗がりから、白いチャイ
ナ服を着た足ツボマッサージ師A、B
が現れ、柿本の両方の足裏の前に座る。

如月「マッサージの時間と強さを調節します
ので、まず、『普通』で受けてみて下さい」

如月はマッサージ師A、Bに向かっ
て、

如月「お願いします」

マッサージ師が足裏をグリグリして、
柿本は体を反って、足を曲げるように
して痛がる。

柿本「ううっ！ ううう！」

如月は手を挙げて、マッサージを止め
る。

如月「…どうですか？」

柿本は如月を見る。

如月「…では、時間と強さを決めて頂きまし

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

ようか？」

如月が柿本にフリップを見せる。上から横書きで「施術時間」、「1分」、「10分」、「60分」と書いてある。

如月が「1分」を指差した後、柿本を見る。

如月「あまり疲れてないようでしたら、1分でもかまいませんが……」

柿本、首を縦に振る。

柿本「うんっ、うんっ」

如月は柿本の目を見る。

如月「あっ……、もっと下がいいんですね？」

柿本、目を見開いて、首を横に振る。

柿本「うゝ！ うゝ！」

如月「まあ、そう遠慮なさらずに。大は小を兼ねると言いますから。60分で行きましょう」

柿本、尚も首を横に振る。

柿本「ううっゝ！ ううゝっ！」

如月が別のフリップを持つ。2行に別

れており、横書きで、上の行には「強さ」、下の行には左に「弱い」、真ん中に「普通」、右に「強い」と書いてある。

如月「次は、強さを決めて頂きましょうか。

：普通くらいでいいですか？」

柿本、首を横に振る。

柿本「うゝっ、うゝっ」

如月、柿本の顔を見る。

如月「『普通』の横ですか？ では、『強い』ですね？」

柿本が目を見開き、首を右から左に振る。

柿本「うっ！ うっ！」

如月「もしかして、『弱い』ですか？」

柿本、首を縦に振る。

柿本「うんっ、うんっ」

如月、柿本を見る。

如月「柿本さん：、あなたはホントに奥ゆかしい方ですねえ。ここは思いつきり：」

如月は柿本に顔を近づけて、手を胸に、

如月「…私に甘えて下さい」

柿本「…」

如月「『強い』で行きましょう」

柿本、目を見開く。

如月はマッサージ師A、Bに向かって、

如月「では、『60分』、『強い』でお願いしま
す」

二人のマッサージ師が頷き、施術を始
める。

柿本が、体を仰け反ったり、屈んだりす
る。足を曲げようとする。

柿本「うゝっ！ うゝっ！」

如月「…それでは、終わったことに帰ってき
ますね」

如月は、振り向き様に、柿本の座ってい
る椅子の足を見ている。

机の足は、カタカタと不規則に音を立
てて揺れている。

×

×

×

柿本は、涙目でうつろに上を向いてい

る。

如月が柿本に歩み寄りながら、

如月「柿本さん、いかがでしたか？ 疲れが取れて、リフレッシュできたでしょう？」

如月が柿本に顔を寄せる。

如月「私がちょっと強引にお連れしておいて、恐縮なのですが…、2つお願いしたいことがありますして…」

柿本、如月の方に、ゆっくり首を向ける。

如月は、人差し指を立てて、「1」を作り、柿本の顔の前に出す。

如月「…1つは…、あなたに私への専属取材を許可しましょう」

柿本、目を見開いて、首を縦に振る。

柿本「!?、うん！ うん！」

如月「但し、他のレポーターは絶対に近づけないで下さいね」

柿本、首を縦に振る。

柿本「うん！ うん！」

如月は、人差し指と中指で「2」を作り、

柿本の顔の前に出す。

如月「2つ目は、当たり前のことですが…、
今夜の件は絶対、内緒にして下さいね」

柿本、首を縦に振る。

柿本「うん！ うん！」

如月「もし、この2つの約束が守れなかった
ら…」

如月、柿本の耳に顔を近づけて、囁く。

如月「片方の目が…、すごく、悪くなっち
ゃうかも知れませんよ…？」

柿本は、目を見開いて如月の顔を見る。

如月「守って頂けますか？」

柿本は首を縦に振る。

柿本「うん！ うん！」

如月「例え…、私が雷に打たれても…、です
よ？」

柿本は再び首を縦に振る。

柿本「うん！ うん！」

如月が柿本から顔を離す。

如月「それでは、ご自宅までお送りしましよ

う。目隠しはして頂きますが…、ね」

○大日本テレビ 制作局芸能部フロア（数日後…昼）

柿本が居心地悪そうに体を揺らしながら、自分の机に座ってノートPCを叩いている。

そこに、デスクが近づき、両手を後ろにして、柿本を覗き込む。

デスク「大丈夫か？ まっちゃん。3日も休むなんて君らしくもない。何かあったのか？」

柿本は、デスクから目を逸らす。

柿本「いえ、別に…」

デスク「なら、いいんだが…」

デスクは覗き込むのを止める。

デスク「今日、如月がイベントで外出するって、情報が入ったんで、行ってもらおうと思ってただけど…」

柿本は、驚いて振り返りデスクを見る。

柿本は「デスク！　そういう事は早く言っ
て下さい！　私、行きます！」

デスクは怪訝な顔をする。

柿本「私、如月さんの専属になったんです！
必ず、いいネタを取ってきます！」

柿本、ノートPCを畳み、自分のバック
に入れて、飛び出す。

デスクの視線が柿本の後ろ姿を追いか
ける。

デスク「専属？　ホントか…？」

○如月の自宅（当日…昼）

如月の自宅玄関前には、すでにリポ
ーター陣が集まっている。

その前に柿本が立つ。

柿本「みなさん、聞いて下さい！　私は如月
さんから、専属取材の許可を頂きました！
私の方から後でインタビューの内容と動画
をお渡ししますので、お引き取り下さい！」
リポーター陣が顔を見合わせてざわつ

く。

芸能記者A「おい、まっちゃん。そんな話、聞いてないぞ？」

芸能記者C「そうだよ。こっちはこっちでいネタ取ってこいって言われているんだよ。

全部一緒じゃ、どうしようもないじゃないか？」

芸能記者D「契約書とかあるの？ オレらを出し抜いて、自分だけおいしいところを持って行こうってんじゃないの？」

柿本、語気を強めて、

柿本「詳しい事は、言えないけど私が専属になっただんです！ ウソじゃないから、早く帰って！」

柿本と、レポーター陣が言い合いになる。

そのうち、如月が自宅の玄関を出て、階段から降りてくる。

レポーター陣が、階段下に殺到し、マイクを向けようと待ち構える。

その様子を、如月は冷めた目で見て
いる。

柿本は、レポーター陣に押されながら
も、両手を広げて静止しようとする。

柿本は、振り返って如月の方を見る。

柿本「如月さん！　これは……」

如月は無表情のまま、人差し指で「1」
を作って、柿本に見せつつ、口元を上げ
る。

柿本「!?」

柿本は目を見開いて、顔面蒼白になる。

柿本「如月さん！　違うんです！　すぐに退
かせますから、待って下さい！」

柿本はレポーター陣を押し返そうとす
る。

柿本「みなさん、早く帰って下さい！　如月
さんは私の取材しか受けないんです！　私
が専属なんです！」

押し合いへし合いが続く。

○大日本テレビ 制作局芸能部フロア（数日後…昼）

柿本はボ～としながら、ノートPCを叩いている。

（フラッシュ）

如月が「1」を出した場面。

（フラッシュ終わり）

柿本の手が止まる。

柿本M「あれは、一つ目の約束が破られたっ
ていう合図に違いない…」

柿本M「…でも…、もう一つの約束は大丈夫

…。私が何も喋らなければいいんだから…」

柿本から少し離れたところで、岸本、高西、柴田の三人の芸能部員が、週刊誌を机に置いて見ている。

岸本は立って机に両手をついて、高西は椅子に座って、柴田は机に座っている。

岸本は顔を下にしながら、

岸本「まいったなあ。また、週刊誌にやら

れちまったよ」

高西は両腕を首の後に組み、椅子にもたれて、

高西「まったくくだ。向こうの取材力は凄いな」

柴田は高西を見て、

柴田「ウチのワイドショーも、ここに金払って記事使ってるくらいだからな」

岸本「しかし、あのクリーンなイメージの如月が、女性を拉致して暴行するなんて考えられないけどなあ。昔、ヤンチャしてたって話は聞いたことがあるけど。それにこの話、ついこの間のことらしいじゃん」

柿本「!?」

柿本は、その話を聞いて背筋を伸ばしながら驚き、席を立て3人に足早に近寄る。

柿本は手を出して、

柿本「その記事、見せて！」

3人は、柿本を見て、驚いて顔を見合わせる。

高西「まっちゃんは、如月のことを追ってるから流石に気になるか」

高西が柿本に週刊誌を差し出す。

柿本は週刊誌を剥ぎ取るように手に取って後ろを向く。

柿本が週刊誌を読む。

見出しには「人気アーティスト 如月秀人、女性拉致暴行疑惑！」の文字。

柿本は小声で記事を読む。

柿本「：小誌は、人気アーティスト如月秀人が女性（M子さん）を拉致し、マッサージと称して暴行を加えたのと情報を得た。M子さんからの直接の証言は得られていないが、如月が本件に深く関わっている証拠が得られている：」

柿本M「：って、これ私のことじゃない！ 何でこんな事知ってるの？ 早く取り消してもらわないと！」

柿本は、3人の方を見る。

柿本「この週刊誌、貸して！」

柿本は部屋を出て、階段のそばに行く。

○同 芸能部フロアの階段そば（同）

柿本は、週刊誌の背にある、発行元の出
版社に電話する。

柿本「もしもし、週刊文々さんですか？ 私、
芸能リポーターの柿本と言います。今週号
の如月秀人さんの記事について、至急、お
話したいことが……。はい、編集長の古谷さ
んに取り次いで頂けますか？」

古谷（声）「はい、代わりました。古谷です」

柿本「古谷さんですか？ 何ですか、あの記
事は！ 如月さんはそんなことする人じゃ
ないですよ！」

古谷（声）「柿本さん、そう申されましても、
私どもは取材を尽くした上で記事にしてお
りますので……」

柿本「私は如月さんの専属取材を許されてい
るんですよ！ そんなこと聞いてません！」
古谷（声）「それは、そうでしょう。こういう

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

犯罪まがいのことをしました、なんて言える訳ないですから」

柿本「じゃあ、これはどこからの情報なので
すか？ 信憑性はあるんですか？」

古谷（声）「それにはお答え出来ませんね。柿
本さんもお存知でしょう。情報源の秘匿は
守らないと」

柿本は電話を顔から少し離して、

柿本「でも……」

古谷「ただ、信憑性は高いですよ。こちらの
やり方はご存知でしょう？ 既に第2弾、
第3弾を用意してますから。まあ、向こう
の出方次第ですが……」

柿本「……」

古谷「柿本さんだから、お話ししますが、写
真とか動画とか、そういうものを見せられ
て、これは嘘だ、とは言えないでしょう？
もっとも女性は口に白のガムテープを貼ら
れてたので、顔はよくわかりませんでした
が……」

柿本が顔面蒼白になる。

柿本M「誰が：？ 車の人？ それともマッサージの人？ とにかく止めないと：」

柿本がスマホを耳に近づける。

柿本「古谷さん！ 実は私、この女性を知っているんです！ その女性が、この話はどう終わったことだ、だから静かにしておいて欲しいって言っているんです！ お願いですからこれ以上、記事にはしないで下さい！」

古谷（声）「：さすがは柿本さんだ。私どもがコンタクト出来ていない女性をご存知だとは：。どうです？ その情報を頂けませんか？ もちろん相応のお礼はしますよ？」

柿本「そんなこと：、出来る訳ないでしょう！？」

古谷（声）「残念ですね。では、取材して見つけることにしますよ」

柿本「だから、さっきから言っているんです！ これ以上、記事にしないで欲しいと。お願い

いだから、言うことを聞いて下さい！」

古谷（声）「すいませんが、いくら柿本さんの
お願いとは言え、こればかりはねえ……」

古谷（声）「……それに……これはあなたにとっ
ても悪いことじゃないと思いますが……」

柿本「!？」

古谷（声）「……そういえば、M子さんの『M』
は柿本さんのイニシャルと同じですねえ……」

柿本「わ、分かりました！ もういいです！」

○同 芸能部フロア（数日後…昼）

柿本がオフィスでノートPCに向かっ
ているが、目の焦点が定まらず、手が止
まっている。

少し離れたところに、岸本、高西、柴田。

岸本は立って、高西、柴田は座っている。

岸本「なあ、如月の件だけど警察が動いてい
るって話だぜ」

柿本の背筋が伸びる。

高西「やっぱり、あのネタ、ホントらしいな」

柴田は椅子を揺らしながら、

柴田「でも、被害女性は見つかってないってことは、被害届は出てなんだろう？ 何で警察が動けるんだ？」

岸本「状況証拠とか誰かのタレコミとか、共犯が特定されたとか。そういうのがあるんだろうな。とは言え相手が相手だから、念には念を入れてって感じなんじゃないか？
まずは重要参考人とか」

柿本が3人のところに飛んでくる。

柿本「そ、その話、本当なのっ!？」

岸本が柿本の方に振り返る。

岸本「ああ。報道部の同期に聞いたんだ。まだ、確定した訳ではないらしいけど……」

柿本が岸本に顔を近づける。

柿本「報道部の誰っ!」

岸本が少し、仰け反る。

岸本「い、池田って奴だよ」

柿本、階段を降りて、報道フロアに走っていく。

3人とも柿本を見ながら、

高西「まっちゃん、如月のことになると必死
だなあ」

柴田「専属取材の許可貰っているらしいから、
インタビューでもするつもりなんじゃない
か？」

○同 報道局フロアの廊下（昼）
報道局フロアの廊下で、柿本が池田と
話をしている。

池田「困りますよ、柿本さん。こんなところに
呼び出して何の用ですか？ 僕にも仕事があ
るんですよ」

柿本「如月さんが警察に目を付けられている
って、本当なの？」

池田は怪訝そうな顔をする。

池田「誰に聞いたんですか？ それ」

柿本「ウチの岸本くんよ」

池田はおでこに手をやる。

池田「アイツは、ホント口が軽いなあ。これ

からネタ渡すのやめようかな」

柿本「そんなことは、どうでもいいの！ 信用できる話なの？」

池田「ウチは報道ですよ。警察記者クラブもありますから。確かな情報です」

柿本「今、どういう状況なの？」

池田「…岸本みたいに吹聴しないでしょうね？」

柿本は両手を胸に当てて、

柿本「私を信じて下さい！」

池田「仕方ないなあ、今回だけですよ。今は、証拠固めの最終段階ってところですね。共犯と思われる人物がゲロしたらしいんですが、それが、如月の昔の仲間らしくて。逮捕も時間の問題ですね」

柿本「でも、被害者が分かってないのに、なんでそんな話になるんですか!？」

池田「柿本さんは、警察のことをあまりよく知らないみたいですね。レアな場合ですが、被害届なしでも逮捕することは出来るんで

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

すよ」

柿本「どういった場合にですか？」

池田「例えば…、被害者がおおごとにしたくないケースとか…」

柿本の顔が青ざめる。

池田「ただ、そういう場合は、被害者の協力が得られない可能性が高いので、逮捕されても、不起訴処分ってところですね」

池田「ただ、今回の事件がホントなら如月って奴のダメージは大きいですし、女性ファンが多いみたいですから、芸能界復帰は無理でしょうね」

池田「その辺は、柿本さんの方が詳しいと思いますけど」

柿本「…」

池田「それに、ウチでこの事件をどう扱うかは、デスクやキャップの意見、他の事件との兼ね合いで決まるんですよ。尺が決まっていますから。僕は取材をして情報を上げるだけです。決定権はありません」

柿本「そ、そんな…」

池田「岸本の手前、話をしましたが、報道サイドに首を突っ込むのはやめた方がいいですよ。ただ、逮捕となれば、写真とかをお借りすると思いますので、その時は協力して下さいね。じゃあ、仕事に戻らないといけないので、失礼します」

○同 芸能部フロア（警察中継）（数日後：昼）

柿本は、オフィスのノートPCの前に座って、そわそわと作業をしている。

机の左には、自身のスマホを置いて、自分のところのワイドショーの音声を消して見ている。

そこに、デスクがやってきて、柿本を横から覗き込む。

デスク「まっちゃん、やっぱり気になるか？」

柿本は、デスクの方を見ずにそのまま。

柿本「当たり前です！」

デスク「逮捕されれば、こっちも忙しくなる。」

準備しておいてくれ」

柿本が席を立ち、トイレに向かう。

岸本はその様子を見ながら、柿本の力
バンにGPS発信機を入れる。

岸本はその場を立ち去り、柿本が戻っ
てくる。

スマホに「速報」の文字とともに、赤坂
警察署前が映し出される。

多くの報道陣が陣取っている。

柿本は、すぐにイヤホンを耳につけて、
音声を聞く。

○ワイドショー（昼…以下、ワイドショー内）

宮原「ここでアーティストの如月秀人さんに
関する速報が入ってきました。小川さんが、
赤坂署の前にあります。小川さん？」

（赤坂警察署前）

マイクと紙の資料を持つ小川。

小川「こちら、赤坂警察署前です。アーティ
ストの如月秀人容疑者が、拉致監禁容疑で

逮捕されました。繰り返します。アーティ
ストの如月秀人容疑者が拉致監禁容疑で逮
捕されました。如月容疑者の乗せた車が、
赤坂警察署に向かっているということです」

（ワイドショー内）

宮原「小川さん、今回は被害者が特定されて
いないままの逮捕となりましたが、今後の
取り調べはどうなるのでしょうか？」

（赤坂警察署前）

小川「警察関係者の話では、如月容疑者は、
容疑を認めているものの、被害者の情報に
ついては黙秘するとのことですよ」

（ワイドショー内）

宮原「それでは、全容説明はこれから、とい
うところでしょうか？」

（赤坂警察署前）

小川「：そうですね。警察としては、如月容
疑者の供述の裏付けを取るために、被害者
の証言は必要不可欠であると考えています。
如月容疑者の身柄を確保したことで、安全

は保証されたとして、被害者に名乗り出るよう促す予定です」

○同 芸能部フロア（警察中継）（昼）

スマホを見つめる柿本。

柿本M「出頭した方がいいのかな…？ でも、あの時、何人が居た…。その人たちは多分グルだろうから…、どうすれば…？」

○ワイドショー内

（赤坂警察署前）

小川「あ、今、如月容疑者を乗せたと思われる車が赤坂署に入って行きます！ 如月容疑者を乗せたと思われる車が赤坂署に入って行きます！」

如月を乗せたバンが警察署内に入っていく。

小川「大型のバンの後ろに如月容疑者と見られる人物が見えます。何かのサインのようなものをしているように見えますが…」

如月はフラッシュを焚かれながら、不適な笑みを浮かべて、ピースサインをする。

小川「これは：、ピースサインでしょうか？
ピースサインをしているように見えます」

○同 芸能部フロア（警察中継）（昼）

スマホを見つめる柿本。

ピースサインを凝視する。

顔面蒼白。

柿本M「こ、これって：？ 二つ目の約束も
破られたって意味!？」

（ワイドショー内）

宮原「小川さん、ありがとうございました。
引き続き情報が入りましたら、知らせて下さい」

宮原「しかし、澤田さん。逮捕されてピースサインというのは、これは反省の色が全く
見えませんね」

澤田「そう思います」

宮原「とにかく、続報を待ちたいと思います」

○同 芸能部フロア（昼）

柿本は自分の机の上で、固まっている。

そして、意を決してカバンを持って立ち上がり、デスクの机に小走りに行く。

柿本「デスク、すいません。今から2週間ほど休みます」

デスク、驚く。

デスク「今からか？」

柿本「はい！何かあったらメール下さい！」

デスクは手を出して呼び止めようにする。

デスク「お、おい、まっちゃん！」

柿本は走ってフロアを後にする。

デスク「何かあったらって…、今、何かあったんじゃないのか…？」

○大日本テレビ玄関前（昼）

柿本は、道で手を振り、タクシーを止める。

柿本は足早に乗り込む。

○タクシー車内（柿本）（昼）

柿本「東京駅まで！」

柿本はカバンを抱えて、小さくなっている。

○大日本テレビ 近くのビル横（昼）

建物の陰で、渡辺が柿本を見ている。同じように手を振って、タクシーを止める。

タクシーに乗り込む。

○タクシー車内（渡辺）（昼）

渡辺が柿本の乗っているタクシーを指さす。

渡辺「前のタクシーを追ってくれ！」

運転手A「あの黄色いのか？」

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

渡辺「そうだ」

運転手は斜め後ろに乗っている渡辺を
横目で見える。

運転手A「なんかドラマみたいだな。あんだ
警察の人か？」

渡辺「こんな警官がいるかよ。でもまあ、後
で警官になるけどな」

運転手A「？」

渡辺は前方を指差して、

渡辺「ちゃんと前を向いて運転してくれ。ど
こに向かっていている感じだ？ 高飛びできそ
うなとこだ」

運転手A「高飛び？ ますます刑事ドラマみ
たいだな」

渡辺「つべこべ言わずに答えろ！」

運転手A「うゝん。この道だと、多分、東京
駅じゃないかな？」

渡辺はスマホで柿本のカバンに仕掛け
たGPS信号を受信していることを確
認する。

渡辺 M 「よし、ちゃんと動いているな」

渡辺はSMSで、他のメンバーに「東京駅集合」とメッセージを打つ。

○東京駅（昼）

渡辺は他のメンバーを見つけ、駅のコ
ンコースに集合させる。メンバー達を
見回す。

渡辺 「全員揃っているな」

大宮 「いや、滑川のヤツがサツに捕まってる
が…、大丈夫なのか？」

渡辺 「それは問題ない」

大宮は首を傾げる。

大宮 「何でだ？」

渡辺 「あらかじめ捕まることになってる」

大宮 「そりゃ、ちょっと酷くないか？」

渡辺 「ヒデの指示だ。あいつも納得してる」

渡辺はメンバーがスーツケースを持っ
ているのを見る。

渡辺 「服は大丈夫だな」

石川「ナベ、こんなもん何に使うんだよ」

渡辺「お前は考えなくていいんだよ！」

渡辺はスマホで時間と柿本のGPSでの位置を確認する。

渡辺はメンバーを見渡す。

渡辺「みんな聞いてくれ。オレたちはこれから、柿本っていう女を追う。ヒデから自分が捕まったら、動くように言われているんだ。その柿本ってヤツのカバンにはGPS発信機を入れてある」

飛田「それを追うってことか？」

渡辺「そうだ。それを見ると、どうやら新大阪方面の新幹線に乗ったようだ。ただ、途中でGPSの動きが止まったりしてる。時刻表から見て、多分、『こだま』だ」

メンバー達は渡辺の話に耳をから向ける。

渡辺「だから、俺たちも次の『こだま』に乗る」

寺島が手を挙げる。

飛田「ナベ、それは構わねえが…、そんな金持っていないぜ」

渡辺は不適な笑みを浮かべ、ポケットから、札束を取り出して、見せる。

渡辺「金の心配はいらねえ。ヒデからたっぷりもらってるからよ」

○「こだま」車内（昼）

「こだま」車内で、3列シートを対面にして、メンバー達が座っている。

乗車している位置は車両の一番後ろ。

席の後ろにはスーツケースが置いてある。

渡辺は下を向いて、スマホで柿本の位置を確認している。

大宮「しかし、ナベ。そのGPS発信機、よくつけられたな」

渡辺「なあに、あそこの社員にやさしくお願いしたら、快く引き受けてくれたぜ」

大宮「…お前もワルだな…」

石川「でも、ナベ、大丈夫か？ この前の足ツボの時といい、今回といい、これじゃあ、バレたら俺たち全員、お縄だぜ？」

渡辺はメンバーの方を見る。

渡辺「今更心配する立場でもねえだろ？ 俺らは」

石川「まあ、そりゃそうだが……」

渡辺「ヒデには世話になってんだ。アイツの頼みは断れねえよ」

渡辺がGPSを確認して、熱海で新幹線を降りたことが分かる。

渡辺「女は熱海で降りたぞ。準備しろ！」

大宮「準備って何を……」

渡辺はスーツケースを叩く。

渡辺「トイレで着替えるんだよ、早くしろ！」

メンバーは次々とトイレに向かっていく。男性トイレのランプが点灯する。女性トイレは消えたまま。

渡辺「おい！ 女の方も使え！」

石川「ナベ、こんな狭いところ、両方とも無理

だぜ」

渡辺「そんじゃ、熱海で降りたら多目的トイ
シを探すんだ」

石川「でも、先客がいるんじゃない？」

渡辺「いねえよ！ 熱海はビルじゃねえ、駅
だ！」

大宮「しかし、熱海って、随分賑やかなところ
に行くんだな」

渡辺「ホテルにでも隠れるつもりなんだろう。

熱海は多いからな。木は森に隠せてヤツ
だ」

大宮「ナベ、お前難しいこと知ってるな」

渡辺「こう見えても、小学生の時は、優等生
って通ってたんだぜ」

渡辺「もう直ぐ着くぞ。準備しろ！」

○熱海のホテル（フロント）（昼）

柿本は山際のホテルに、肩にかけた力
バンをギュッと抱え込み、周りをキョ
ロキョロしながら入ってくる。

ホテルのフロント受付は柿本に向かってお辞儀をする。

受付「いらっしやいませ、お客様。ご予約は頂いておりますでしょうか？」

柿本「いえ。とにかくどこでもいいので、部屋空いてますか？」

受付「はい、空いておりますが……」

柿本「それじゃあ、その部屋、二週間で願います」

受付は不審がる。

受付「は、はい、かしこまりました。それでは、お手続きをしますので、宿泊カードに必要事項をご記入下さい」

柿本はペンを持ち、少し考えて、「正木貴子」と偽名を記入する。

受付「正木さま、本日は身分証明書をお持ちですか？」

柿本「忘れたんです！　2週間の間に持っ
こさせますから、とにかく部屋をとって下
さい！」

受付は柿本の勢いに押される。

受付「は、はい。ではそのように」

受付は準備をする。

受付「正木さま、お待たせしました。513号室をお取りしましたので、キーをお受け取り下さい」

柿本、フロントに身を乗り出す。

柿本「私を呼ぶ人が居ても、絶対、取り継がないで下さいね！ 食事も部屋に持ってきて！」

受付はたじろぐ。

受付「は、はい。かしこまりました」

受付はお辞儀をする。

受付「では、正木様、ごゆっくり」

柿本は、お辞儀が済む前に、カードキーをもぎ取ると、足早にエレベーターに乘る。

受付は柿本の後姿を見ながら、

受付「あのお客さん、どこかで見たような気がするんだけど…、でもお名前を聞いたこ

とがないし、気のせいかしら：」

○同（柿本の部屋・以下、昼）

（ドア前）

柿本は513号室のドアにカードキーを入れて部屋に入り、部屋の中のカードフォルダにカードを入れて、部屋の電気を点ける。

そして、ドアノブに「D o N o t D i s t u r b」の札をかける。

しかし、チェーンロックはかけていない。

（部屋の中）

柿本はカバンをベッドに置いて、仰向けに寝る。

柿本「：どうしよう？ とりあえず時間稼ぎできそうだから、何か考えないと：」

○同 玄関前

ガサ入れ姿の渡辺とメンバー達が、2

台のタクシーを降りて、走って入ってくる。受付は気圧される。

（フロント）

5人は渡辺をセンターにしてフロントに一列に並ぶ。

受付は圧で固まる。

渡辺が警察手帳を見せながら、

渡辺「大阪や」

受付はキョトンとしている。

受付「？」

渡辺の横にいる大宮が、渡辺に顔を近

づけて小声で、

大宮「おい、疑われてるぞ……」

渡辺は咳をして、

渡辺「んんっ、……ああ、すまない。私たちは大阪府警の者だ。ウチの部署は荒っぽいことを担当しているので、こういう連中が多くてな。そこは勘弁してくれ」

受付は困惑しながらも、表情を少し緩める。

受付「し、承知しました。で、どのようなご用件でしょうか？」

渡辺が胸元から柿本の写真を取り出して、机に置いて、受付に見せる。

渡辺「ここに、この女が泊まっているな？ 芸能リポーターの柿本雅子だ」

受付はハツとする。

受付「お顔が似ているお客様はいらっしゃいますが…、お名前が…」

渡辺「名前は多分、偽名だろう。確かめたのか？」

受付「い、いえ。身分証明書は後で持つてくると…」

渡辺「だとすると、ほぼ間違いないだろうな」
受付「…」

渡辺「それで、その女、何か持っていなかったか？」

受付「確か…、肩にカバンをかけていたと思います。ギュッと抱え込んでいたような…」

渡辺はメンバーを見渡し、頷く。

渡辺「やはりな……」

受付「カバンがどうかしたのですか？」

渡辺「我々の方に、女が爆弾を持っているという情報が入っている。その様子から見ると可能性が高いな」

受付は驚く。

受付「ば、爆弾!? 早くお客様を避難させないといと！」

受付は電話を掛けようとするが、受話器を持った時に渡辺が制止する。

渡辺「待ってくれ。客全員に、そのまま伝えたら、パニックになるだけだ。責任者を呼んでくれ。直接話がしたい」

受付「わ、分かりました。直ぐに呼びます」

受付がフロントの奥に走っていく。

× × ×

支配人「……状況は分かりました。それで、私どもはどうすれば……」

渡辺「その女が居るフロアの客だけを避難させてくれ。爆弾はそれほど威力ないと聞いて

ている」

支配人と受付は渡辺の言うことを前の
めりで聞いている。

渡辺「それと、理由はフロアの水漏れという
ことにしてくれ」

支配人「後はどうすれば……」

渡辺「このホテルには広間はあるか？」

支配人「は、はい。3階に宴会場がございま
すが……」

渡辺「よし、そこにフロアの客を誘導してく
れ。水漏れで、配線がショートするかもし
れないからエレベーターではなく、階段を
使うよう指示するんだ。他の階の人間がエ
レベーターを使えないようにもしてくれ」

支配人「かしこまりました」

渡辺「あと、この女の部屋番号を教えてくれ。
マスターキーもだ。避難の方は頼んだぞ」

支配人「は、はい、すぐに取り掛かります」

支配人と受付は、電話で5階の客に連
絡を始める。

○同 3階の宴会場

5階から避難してきた客がボツボツ入ってくる。避難客が従業員に話す。

客「水漏れって言ってたけど、いつ治るんだよ？」

従業員がお辞儀をする。

従業員「お客様、大変申し訳ありません。今、業者を呼んでいまして、至急修理するよう
に手配しております」

× × ×

フロントに、全員避難したと電話で連絡が入る。

支配人「全員避難としたと連絡が入りました」

渡辺「ご苦労だった。後は俺たちに任せてくれ。後、万が一のために、1階の非常口を開けておいてくれ」

支配人「かしこまりました」

渡辺がメンバーに向かって、

渡辺「よし、行くぞ！」

渡辺を先頭に、エレベーターにメンバーが走って行く。

エレベーターに乗って、5階を押す。
乗り込む。

しばしの間の後、メンバーが沸く。

大宮「ナベ！ 会心の演技だったぜ。ヒヤヒヤさせやがって」

渡辺はメンバーの方を向く。

渡辺「こう見えても、小学校の頃は、演劇部で主役を張ったこともあるからな」

メンバーは、エレベーターを降り、柿本の部屋のドアの前に集まる。

ドアノブには、「D o N o t D i s t u r b」の札が掛かって来る。

渡辺はそれを見る。

渡辺「…居るな」

渡辺は、メンバーを見回す。

メンバーは頷く。

渡辺はドアをノックする。

○同 柿本の部屋

（部屋の中）

柿本「は、はい？」

柿本、ドアの近くに行く。

柿本「どなたですか？」

（廊下のドア前）

渡辺「警察の者ですが、お聞きしたい事が…」

（部屋の中）

柿本「け、警察の方ですか？」

（廊下のドア前）

渡辺「はい、そうです」

（部屋の中）

柿本M「何だろ？ ホテルで何かあったのか
な…？」

柿本はドアを開けようとするが、止める。

柿本「…どういうご用件ですか？」

（廊下のドア前）

渡辺「いや、あるアーティストの事件のことで、少し…」

（部屋の中）

柿本M「如月さんのこと？　でも何で警察が？　チェックインの名前は私じゃないのに？　ここにいてることを誰にも言っていないし、私が関係してるなんて知らないはずなのに…」

柿本はハツとする。

柿本は大きな声で、

柿本「わ、私は、事件とかそういうの何にも知りません！」

（廊下のドア前）

渡辺「そんなことはないでしょう…？　『柿本』さん？」

（部屋の中）

柿本「な、何で私の名前を？　あなた方、誰ですか？　何のために来たんですか？」

（廊下のドア前）

渡辺「私たちですか…？」

ドアに顔を近づける、渡辺。

渡辺「私たちは、如月秀人との…」

（部屋の中）

渡辺（声）「…約束を守りに来たんですよ」

柿本、顔面蒼白。

ドアを叩いたり肩から押して、開けられないようにする。

柿本「帰って下さい！ フロントに電話しますよ！」

（廊下のドア前）

渡辺「…無駄ですよ、柿本さん。ホテルは『警察』が押さえていますから…」

（部屋の中）

柿本「帰って下さい！ 早く帰って！」

柿本はドアを叩く。

柿本はチェーンロックに目をやり、掛けようとするが、手が震えておぼつかない。

ガチャガシャする音が部屋の外にも聞こえる。

（廊下のドア前）

渡辺はドアの方を向いたまま、無表情

で大宮に指示する。

渡辺「…鍵、開けろ」

大宮はカードキーを差し込み、「ピッ！」と音が鳴る。

（部屋の中）

メンバーは、部屋になだれこみ、柿本を押さえ込もうとする。

柿本「や、やめて下さい！」

メンバーは柿本をベットに押し倒す。

右腕、左腕、両足、頭と目を一人ずつで押さえ込む。

渡辺が馬乗りになって、点滴麻酔（目薬のような形のもの）柿本の左目に近づける。

それを見る、柿本。

柿本「ち、違うんです！ 喋ったのは私じゃない！ 離して下さい！」

渡辺「そんなことは分かっていますよ、柿本さん…」

渡辺が柿本に顔を近づける。

渡辺「最初からこうなる予定でしたから……」

柿本、驚く。

柿本「最初からって……騙したんですか!？」

渡辺「騙したなんて、とんでもない。予定が変わらなかった、ということですよ」

渡辺、目薬を柿本の目に近づける。

柿本「ほ、本当にやめて下さい!」

渡辺、目薬を更に近づける。

渡辺「麻酔をかけますから、大丈夫ですよ。

それに、治療費は置いていきますから」

渡辺、目薬を更に近づける。

柿本の口が塞がれ、視界がぼやけて暗

くなる。

渡辺「ちょっとだけですから……」

暗転して、少しの間の後、「キュル!」

と短く高い音のモーター音になる。

○柿本のアパート（居間…夜）

アニメ「一騎当千」の呂蒙子明のコスプレをした、柿本がノートPCの前に座

っている。

椅子はメッシュタイプのゲーミングチ

ェア。

部屋にはベットがあり、壁にはアニメのポスターが貼ってある。

デスクには、フルーツ型の消しゴムが

10個ほど入った箱がある。

柿本がWebカメラに向かって、右腕を挙げる。

柿本「みんな、今日も、芸能系コスプレユーチューバー『まーさ』の生配信始めるよ
〜」

チャット欄に「こんばんは!」、「今日も楽しみ〜」、「呂蒙、決まってる!」、絵文字のハートマークなどが流れる。

柿本「前にも言ったけど、私、これ一本でやってるからさ、良かったらスパチャよろしくね〜」

早速、スパチャが飛ぶ。

柿本は、スパチャを目で追う。

柿本「早速、ありがとう」

柿本「じゃあ、今日はアイドルネタで行こっか！」

始めようとした時に、部屋の呼び鈴がなる。

無視していたが、何度も鳴らされる。

柿本「みんな、ちょっと待っててね」

柿本はインターフォンに出る。

柿本「どなたですか？」

渡辺（声）「荷物の配達に参りました」

柿本「何か頼んだ覚えはないんですけど…」

渡辺（声）「しかし、配達しないと、私が怒られますので…」

柿本は、画面を見る。

柿本「みんな、ゴメン。もうちょっと待っててね」

柿本は玄関口に向かう。

○柿本のアパート（玄関口…夜）

柿本「…ったく、タイミングが悪いなあ。今

度から時間指定にしようか、宛先が間違ってるんじゃないのかなあ」

ドアの前まで来る、柿本。

チェーンロックはかけてある。

ドア越しに直接話す。

柿本「すいません、何を頼んだんでしたっけ？」

渡辺（声）「…どこでもいいですよ…」

不思議がる、柿本。

柿本「…どこでもって、置く場所のこと？ 荷

物じゃないの？」

渡辺（声）「いえ、確かにあなた宛のものです

よ、…柿本さん」

柿本、声に聞き覚えがあることに気づく。

柿本「も、もしかして…、あの時の!？」

渡辺（声）「あの時の？ よくわかりませんが。

何かお疑いでしたら、覗き窓から見て頂いても結構ですよ」

柿本、覗き窓から覗こうとする。

しかし、不穏な空気を察して、右に避け

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

て窓を開ける。

窓から勢いよく硫酸が飛び、玄関マットを溶かす。

柿本、驚き、渡辺が配達員に化けていることを知る。

柿本「あなた：!?、帰って下さい！」

渡辺がドアを激しく叩く。

柿本「警察を呼びますよ！」

柿本、スマホを取り出し、外にも聞こえる大声で警察に通報する。

柿本「もしもし、警察ですか？ 私の家の前に不審者がいます！ すぐに来て下さい！

場所は：」

× × ×

柿本、ドアに向かって、

柿本「警察呼びましたからね！ 帰って下さい！

い！」

柿本は覗き窓をガムテープで開かないようにする。

柿本「どこで、私の住所を：？」

柿本は、ドアに耳を傾け、様子を見る。

気配がないことを確認すると、居間に戻る。

柿本「もうすぐ警察が来る。…大丈夫！」

気を取り直してパソコンの画面を見る。

柿本「みんなおまたせ。続きを始めるよ」

コメント欄に「大丈夫?」「早く話始めて!」などのコメントが流れる。

柿本「じゃあ、最近、失速してるアイドルグループで行こうか! あของกลุ่มは、昔と比べて、TV出演が7割くらい減ってるね、その理由がさあ…」

柿本の話を遮るように、窓ガラスを割って、ポケモンボールのようなものが、投げ込まれる。

柿本はそれに目をやって、不思議がる。そして、ボールから男性の低い声が出てくる。

渡辺(声)「はははははっ。次は…どこかな?」

柿本は顔面蒼白。

クッションでボールを包み、窓の外へ投げる。

そして、雨戸とカーテンを閉める。

柿本M「まだ、いるの!? 早く警察の人来て

…」

柿本は、パソコンに向かい直す。

柿本「いやあ、今日はトラブルが多くって、ごめんね。気を取り直していこう!」

励ましのチャットが流れる中、ハンド
ルネーム「如月秀人1」名で5万円のス
パチャが、「治療費。先払い」のコメン
トと共に流れる。「如月秀人2」でも5
万円、以下、「如月秀人3、4、5」と
続く。柿本は凝視する。

柿本「!?!」

コメント欄に「ナイスパ!」、「すげ
え!」、「太っ腹!」、「治療費って何?」、
「まーさ、どっか悪いの?」などのコメ
ントが流れる。

そして、「如月秀人6、7、8」と同じ

金額コメントのスパチャが流れる。柿本は目を見開く。

柿本「!？」

柿本は、手でノートPCを机から払う。ドアを叩く音と、雨戸を叩く音が始まる。

柿本は、震えながら、頭を抱えて机にうつ伏せになる。

頭の中をドアと雨戸を叩く音が舞う。

少しの時間が流れる。

音が止まる。

柿本「ははっ…、はははっ…」

柿本は瞬きせず、目を見開いたまま、頭をあげる。

口は半開き。

柿本「はははははっ…」

柿本は視線をまっすぐ前を向いたまま、背筋を伸ばす。

そして、椅子を左右に軽く振りながら、影's h a p e o f s h a d o w

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

（一騎当千GGエンディングテーマ）
を歌い出す。

柿本「ラララ… ラララ…」

柿本は失禁し、尿が椅子の支柱を伝わって、床に滴り落ちる。

椅子の揺れを止めて、視線はまっすぐ。

柿本「お腹…、空いた…」

柿本は、机の上のフルーツの消しゴムを一つ手に取って、口に入れる。

モグモグと噛んで、ゴクンの飲み込む。

柿本は、口元を上げて笑う。

消しゴムを2個残して、ほぼ食べる。

柿本「…寝よ」

× × ×

※カメラは天井固定で、部屋全体を映している。

柿本は、照明を付けたままベッドに仰向けになり、微動だにしない。

それが30秒ほど続く。

※カメラは柿本の横顔。

フィクション劇場 第一話「芸能リポーター」

柿本は、よだれを垂らしながら、絞り出すような小聲で、

柿本「もう…、やめて…」

暗転

E
N
D

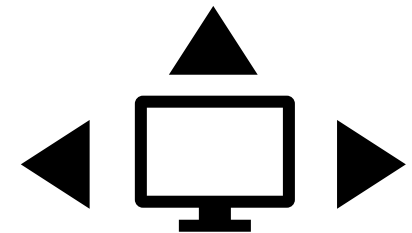
(2025年6月15日 初出)

(2025年11月16日 加筆・修正)



「印象操作」
フィクション劇場
第二話

大太
大



フィクション劇場 第二話「印象操作」

【登場人物】

伊部 雅人（いべ・まさと）（27）：会社員。

大学時代は心理学専攻

大林 克典（おおばやし・かつのり）（27）

：伊部の会社の同期

大岩 国男（おおいわ・くにお）（55）：T

NC（東海日本放送）テレビ解説委員

カラオケ店の店員（23…女性）

【あらすじ】

会社員の大林は、動画サイトで東海日本放送のジャーナリスト、大岩国男のニュース解説動画が気に入り、よく見ている。しかし、モヤモヤした感じを抱き、会社の同期で、大学で心理学を専攻していた伊部をカラオケボックスに呼び出し、理由を尋ねようとする。

伊部は、その動画を見て、心理学者のアルバート・メラビアンが提唱したコミュニケーションの重要度の法則で、言葉が7%しかないとことを大林に伝え、それ以外の要素から異なった印象を受けてモヤモヤしているのではないかと推測する。

また、伊部はTVニュースや新聞と言ったマスコミ・メディアは重要度が7%しかない言葉だけでも印象操作が出来るとし、ニュース原稿で単語同士の繋ぎ方や、新聞の事実の表現の仕方を挙げる。

最後に、大岩が現実をモチーフとした微妙なフィクションの是非について微妙に問う。

○カラオケボックス（夜）

伊部が入ってくる。

店員「いらっしやいませ」

伊部が手振りで店員に説明する。

伊部が大林の居る部屋を見つけて、部屋
のドアを開ける。

大林は座りながら、ドアを開ける伊部
を見て、

大林克典「おー、すまん、伊部」

伊部雅人「大林！　：　ったく、勝手に呼び出し
やがって」

大林「まあ、そういうなよ。お前、大学時代に
心理学勉強してたって聞いてたから、何か
分かるかと思ってさ」

伊部がソファーにドカッと座る。

伊部「じゃあ、早速、そのモヤモヤするって
いう話を聞かせてくれ」

大林「ああ。最近、動画サイトでTNC（東
海日本放送）の解説委員の大岩って人の動
画をよく見るんだ。硬派なジャーナリスト

って感じの。だけど、それがどうも……」

伊部「モヤモヤするって訳か」

大林「そうなんだ」

伊部「ふーん。サブリミナルとかか？」

大林「そんな訳ないだろ。そういうのは運営側で弾いているはずだよ」

伊部は少し、考える。

伊部「話だけだとよく分からんな。今、見れるか？」

大林「ああ、大丈夫だ」

大林は、自分のスマホに動画を出して、伊部に渡す。

大林「それで悪いんだが……、聞くだけでもモヤモヤするんで、イヤホン使ってくれないか？」

伊部「ああ、いいよ。じゃあ、お前の貸してくれ」

伊部は大林からイヤホンを受け取って、着けようとする。

大林は部屋の電話に近づいて、

大林「何か、頼むか？」

伊部はイヤホンを着けるのを止めて、

伊部「ちよっと待ってくれ」

伊部はテーブルにあるラミネートした
メニュー表を取って、裏と表を見る。

伊部「…フライドポテト。特盛で」

大林「飲み物はどうする？」

伊部は飲み物の一覧を指差しながら、
小声で、

伊部「クリームソーダが飲みてえな。クリー
ム、クリームと…」

メニューにクリームソーダがない。

伊部はしかめ面で、

伊部「ううっん」

伊部は、もう一度、メニューを指差し
ながらレモンスカッシュのところでは
める。

伊部「レモンスカッシュで」

大林「はいよ」

大林は電話で注文を伝える。

フィクション劇場 第二話「印象操作」

大林はコカコーラゼロ。

伊部はイヤホンを付けて、動画を見始める。

× × ×

店員がオーダー品を持って、部屋の中に入り、テーブルに置く。

× × ×

伊部はフライドポテトをつまみ、レモンスカッシュを飲みながら、動画を見終わり、ソファーに寄りかかって、腕を組んで上を見る。

伊部「うーん」

大林「伊部、何か分かったか？」

伊部「何となく分かる気がする」

大林「ホントか？ 教えてくれよ」

伊部「…大林…、お前、竹中直人さん知ってるよな？」

大林「もちろんだ。日本を代表する個性派俳優。たまに声優もやってるよな」

伊部「そうだな。借りた金返せないようなア

ニメにも出てたけど」

伊部はソファーに寄りかかって、

伊部「じゃあ、竹中直人さんの十八番（おは

こ）、分かるよな？」

大林「知らない訳ないだろ。『笑いながら怒る人』だ」

伊部「ああ。あれを最初に見た時は腹抱えて笑ったよ。でもさ、あの芸で絵面が見えなかったら、面白さが全然伝わらないよな？」

大林「そうだな。ラジオで聞いているようなもんだし」

伊部「そうだ。ラジオで出来るのは、いいところ、馬の鳴き声とか効果音を使って、何かしら変な想像させるくらいが関の山だ」

大林「おい、オレの質問の答えはどうした？ 回りくどいな」

伊部「わりい、わりい。つまりオレが言いたいのは、人に何かを伝える時に、受けとる側は言葉だけで判断している訳じゃないってこと」

大林「でも、竹中さんののは特別って言うか…、例外じゃないのか？」

伊部「ところがそうでもないんだ。今からオレがお前に話かけて見るから、どう感じたか聞かせてくれ」

大林「分かった」

伊部は、両手でゴマすりポーズをして、大林の時計を見る。

伊部「大林。お前、いい時計つけてるなあ。スイス製の数十万するやつだろ？ ホント羨ましいぜ」

伊部は動きを止めて、大林の方を向く。

伊部「今、オレの言った方と、やった方、どっちを信じる？」

大林は無表情に、

大林「やった方」

伊部は両手を鼻の前に持っていき、天狗のポーズを取る。

伊部「いや。オレ、この前の大会で優勝したけど、まだまだ未熟者だからさあ、こ

れからも精進・精進の毎日だぜ」

伊部は動きを止めて、大林の方を向く。

伊部「今度はどうだ？」

大林は再び無表情で、

大林「やった方」

伊部「だろ？」

大林「そもそも、オレはそんな時計つけてないぞ」

伊部「そういう設定にただただよ、気にするんな」

大林「……ったく」

伊部「お前は今、2回ともジェスチャーの方が正しいと思ったよな？ だから、さっき俺が言ったように、言葉だけで判断してないってことだ。言葉とジェスチャー、つまり仕草や表情が違っている場合は特に、な」

大林は、少し語気を強めて、

大林「……で、オレの質問の答えは？」

伊部「つまり、あの動画はホントに言いたいことを言うと、いろいろとカドが立つんで、

遠回しに受け手側に伝えるためにやってる
ように見えたってこと。実際に意図的なの
かどうかは分からないけどな」

大林「なるほどな……。つまりオレが感じてた
モヤモヤってのは、言葉の意味とそれ以外
が、自分の中でうまく噛み合ってたなかった
ってことなのか？」

伊部「まあ、そんなとこだ」

伊部はレモンスカッシュを飲む。

伊部「ところでお前、アルバート・メラビア
ンって人、知ってるか？」

大林「いや、知らないけど」

伊部「アルバート・メラビアンって人は、ア
メリカの心理学者なんだ。人とコミュニケ
ーションを取る時に、何が重要かを調べて、
法則を導いた人だ」

大林「どういう法則なんだ？」

伊部「人とコミュニケーションを取る時に、
相手の何に注目して受け取るかを『言葉』、
仕草とか表情とかの『態度』、そして『声』、

声の中には、大きさ、高さ、間とかが含まれるけど、実験でこの3つの受け取り方の重要度と言うか、どれを信じたのか、その割合を求めたんだ」

伊部は大林を見て、

伊部「どのくらいだったと思う？」

大林はあごに手をやって、

大林「そうだな……。さっきのが、あんまり言葉信じてなかったから、言葉の割合が少ないことは確かだと思う……。言葉が4で、それ以外が6あたりか？」

伊部「ところが、全然違うんだ。メラビアンによれば、態度が55%、声が38%で、言葉は7%しかない。これを授業で聞いた時は、オレもびっくりしたよ」

大林「マジか！　言葉が7%ってのは凄いな。全然じゃないか」

伊部「ああ。ただ、このメラビアンのホームページには注意書きがあってな。使い方は注意してくれって」

大林「使い方？」

伊部「そう。この実験結果はあくまで、言っていることと、やっていると違っている場合のものだと念を押してあるんだ」

大林「どういう意味なんだ？」

伊部「読んだことないのにいうのも何だが、いわゆるHow To本によくある、見た目が：、とか、声が：、とかで印象が：、的なものに引用する時は、この数字だけを一人歩きさせるのは控えてねってこと」

大林はコカコーラゼロを飲みながら、

大林「そう言えば、割と見かけるな」

大林はフライドポテトを摘む。

伊部「こういうのは、ちょっとカッコよくいうとバーバルとノンバーバルって言うんだ。バーバルが文字や言葉で表されるもの、ノンバーバルがそういうものでは表せないもののって感じだな」

大林「じゃあ、さっきまでの話だと、言葉：、バーバルっていう方か？ それだけじゃこ

っちの意図がうまく伝わらないってことなのか？」

伊部「そういう場合もあるんだ」

大林「例えば？」

伊部は大林に近づいて、少し上目つかいで、

伊部「『はあく』っていう単語とかな」

大林は手を叩いて、伊部を指さす。

大林「それ、知ってるよ！ ゲームのことだろう？」

伊部「そうだ。あれは言葉だけじゃ状況や感情を伝えることが難しいのを、逆手に取ったゲームだからな。考えたヤツは多分、この辺の話を知ってるんだろうな」

大林「なるほどな」

二人はそれぞれ、フライドポテトを食べたり、ジュースを飲んだりする。

大林「なあ、ちょっと思いついたんだけど、言葉のみの、つまり、お前の言うバーバルだけのものってあるだろ？ 普通の文章と

か。そういうのだけで真意を伝えるのって
難しいのか？」

伊部「そうだな：、誤解されないようにかっ
ちりしないといけないものと、行間に意図
みたいなものが入られるものの2つがあ
ると思ってるよ」

大林「どんながあるんだ？」

伊部「かっちりしないといけないのは、契約
書とか特許とかだな。特許はホントにめん
どくさいというか回りくどいよ。あとはメ
ールも割とかっちりしないといけないかな」
大林「メールにも気を使わないといけないの
か？」

伊部「誤解を招かないように気をつけないと
いけないものだからな」

大林「そうか？ メールでトラブったことな
んで、ほとんどないけど：」

伊部「仕事の場合は、お互いの共通認識で補
完できるところがあるから、そんなに問題
にはならないだろうな。だけど、それほど

親しくない人から『〇〇はどうなんですか』だけのメールが来たらどうだ？ 疑問なのか、同意を求めているのか、迫っているのか分からないだろう？」

大林「なるほどな。文字面だけだから判断しにくいってことか」

伊部「そういうこと。だから、分かりやすくするように顔文字や絵文字を使う訳だ。間接的にだけど、態度や表情を表してることになるからな」

伊部はフライドポテトを食べて、ジュースを飲む。

大林「その辺は分かったよ。じゃあ2つ目の行間に意図が入れられるってのは？ 誰かそんなことやってるヤツが居るのか？」

伊部「ああ、マスコミだ」

大林「マスコミ!? マスコミがそんなことやってるのか？」

伊部「そうだ。意図を極力入れないようにしているのか、それとも入れるようにしてい

るのかのどっちかって感じだな？」

大林「どっちにしても、マスコミがやってたら大問題じゃないのか？」

伊部「だから、さっき言ったろ？ 極力入れないようにしてる場合もあるって。悪い方だけじゃないよ。オレはほとんど国営放送のニュースしか見ないからかもしれないが、アレは原稿を書く方もキャスターも氣を使ってると思ってる」

大林「：でも、原稿は事実をまとめて書いてるんだろ？ 何が難しいんだ？」

伊部は腕を組んで考える。

伊部「あんまりいい例えじゃないが：、事故で怪我人が100人出たとする。お前なら、こういう原稿を書く？」

大林「そりゃ、『事故で100人の方が怪我をしました』の一択だろ？」

伊部「そうだ。じゃあ、その場に居たのが120人だったらどう書く？」

大林は、顎に手を当てる。

大林「うゝん、怪我人が多いな……」

伊部は指を立てる。

伊部「そこなんだ。オレたちみたいな素人だと、怪我人の割合が多いから、ついつい『100人』も“怪我をした”って書きたくなるんだよ」

大林「そりゃそうだが、100人怪我をしたのは事実なんだから、問題ないんじゃないのか？」

伊部「いや、違う。100人怪我をしたのは事実だが、『も』を入れたってことは、原稿を書いた人間が、100人という人数が、『多い』と認識してるってことだろ？　つまり、送り手の意図が入っちゃってる訳だ」

大林「そうか……なるほどな」

伊部「逆に1000万人に一人でも『だけ』とは言わない。その人にとっては1分の1だからな」

大林「そうだな。当事者からすれば、少ないって印象を持たれるのが面白くない場合も

あるし」

伊部「特に、人の絡む数字には気を使っていると思うよ。ただ、みんながある程度共通認識を持っているようなもの、例えば気温とかはそれよりは気にしてないように見える。まさか、この日本で気温35度が寒いなんてヤツはいないだろうからな」

大林「普通にやってるように見えて、いろいろ細かいところにも気を配っているってことか？」

伊部がフライドポテトを摘んで、ソファーに寄りかかりながら、

伊部「そうだと思う。『も』があると無いとじゃ大違いだろ？」

大林、腕を組んで、ソファーに寄りかかる。

視線を泳がせながら、くねくね動く。

大林「なるほどな。オレもやっぱ『も』が無い方がいいよな」

伊部が冷めた目で、

伊部「お前、今、変な7桁の数字とか…」

大林が遮る。

大林「何でもない！ 何でもない！ 次行こ、次」

伊部「…ったく。次は、その原稿を読むキャスターだな。これも難しいと思う」

大林「大体キャスターって、準備された原稿をそのまま読んでる感じだけど。速報とかの対応のこと？」

伊部「いや、そこじゃない。読み方だ」

大林「読み方？」

伊部「そうだ。メラビアンの話を思い出してくれ。言葉が7%だって言ったよな」

大林「ああ」

伊部「だが、キャスターは態度も声の調子もTVから流れるだろ？」

大林「そうだな」

伊部「…ってことは、受け手は言葉以外の93%も把握ができるってことだ」

大林「それは分かるが…、何が難しいんだ？」

伊部「もし、その93%の一割でも、伝えて
いることと違っていたらどうだ？」

大林「…そっか」

伊部「そうだ。だから、細心の注意を払って
いると思う。特にキャスターが立って伝え
ているニュースは全身が映るしな。かつ、
普通、ニュースにはスポーツや天気予報の
コーナーもある。そこで同じことをやって
もダメだし」

大林「何がダメなんだ？」

伊部「例えば、スポーツで日本人選手が海外
で活躍してるような明るい話題なのに、能
面みたいな顔で抑揚の無い声で話したら違
和感あるだろ？ だから、少し声を高くし
たり、テンポを早くしている感じだ」

大林「そう言われると、そうだな」

伊部「天気予報とかは、極力無難っていうか、
あまり緊張感を出さずに話してるように見
える。大雨や台風が来てもな」

大林「なんで？ 結構、大ごとじゃないのか？」

伊部「いや、さっきも言ったように、送り手側が強調して、『これは大変です!』とか、取り乱したらパニックになる可能性があるだろう?」

大林「確かにそうだな。キャスターが取り乱すとこっちまで慌てそうだし」

伊部「まあ、ネットのお天気番組とかで、そういうのが緩めのところもあるけど、何か起きればきちんと締めるし。地上波でも人相が悪い訳じゃないのに、笑顔がぎこちなくて損をしてる人もいるし」

大林はコカコーラゼロを飲みながら、

大林「…何となく、分かる」

伊部「ただ、さっきのスポーツや天気予報で、しゃべりがコロっと変わっても違和感が出るから、ジングルとかで『場面転換』してるって感じだな」

大林「ジングルにも意味があるってことか」
伊部「そうだと思う。毎時ちようどの5分くらいのニュースあるだろ? それだところ

いうことが出来ないから、逆に難しいんじゃないかな？」

大林「キャスターも一人みたいだしね」

伊部「そう。それに比べてって訳でもないが、ワイドショーや情報番組のキャスターはその辺は割とフリーみたいだし。如何に正確に事実だけを伝えるのかと、如何に視聴者を惹きつけるかの違いかな？ 扱うネタもそうだし。ただ、オレからすればニュースキャスターの方が難しいと思ってるよ」

大林「そんなもんか？」

伊部は、手をおでこに当てながら、

伊部「昔の…、35、6年くらい前かな？ のキャスターの人はホントにいつでも同じ平坦なしゃべり方だったみたいで、MADがやりやすかったって話を聞いたことがあるよ。もちろん声だけだったらしいけど」

大林「えっ!? MADって、そんなに昔からあったのか？ 動画なら知ってるけど…」

伊部「そうらしい。いつも同じ口調で話すか

ら、切り貼りしやすかったみたいだったって。スキージャンプの原田雅彦選手が100m以上飛んで、海に投げだされて、拿捕されて取り調べを受けてる、とか聞いたことがあるよ」

大林「なんだそりゃ？」

二人は、フライドポテトを食べて、ジュースを飲む。

大林「事実だけを伝えるってのが難しいことは分かったよ。じゃあ、お前の言ってた、もう一つの『意図を入れてる』ってというのはどういう意味なんだ？ それも使っているのは、言葉だけなんだろう？」

伊部「ああ。一番分かりやすいのは新聞だな。言葉というより文字になるけど」

大林「新聞!? あれはガチガチの事実だけじゃないのか？ 誤報でもしたら大変なんだろう？」

伊部「そうだな。まあ実際、ひどいのもあったし……。でも、細工するのは割と簡単だと

思うよ」

大林「事実だけなのにか？」

伊部「そうだ」

大林「どうやって？」

伊部「いろいろ方法はある」

大林「どんな？」

伊部はレモンスカッシュを飲む。

伊部「この前、都知事選挙があっただろ」

大林「ああ。ポスターがどうこう言ってたのは覚えてる。2位じゃダメなんですか？

って言ってる、3位になった候補が…」

伊部が遮る。

伊部「それは言っちゃいけない」

大林「その人が今度の参議院選挙に…」

伊部が再び遮る。

伊部「それとも言っちゃいけない」

大林「…」

伊部「危ない話はやめろ」

大林は少し力を抜く。

大林「…分かったよ。で？」

伊部「あの時、選挙期間中に、主要候補9人のいわゆる『マニフェスト』の比較・評価をした有名私立大学の研究会があつてな。当選した現職の女性候補のマニフェストが34点って、選挙後の夕刊に出てたんだよ。お前、これ聞いてどう思う？」

大林は、上を向く。

大林は、伊部の方を向きながら、

大林「…50点満点でか？」

伊部「いや、100点満点だ」

大林は、手を後ろに組んで、

大林「だとしたら全然だな。赤点ギリギリじゃないか」

伊部「オレもそう思う。じゃあ、トップが50点で、当選した女性の現職が9人中2位だったと言われたらどうだ？」

大林「…随分辛口だな。でもそう言われると、それほど悪くない気がするな…」

伊部「だろ？ どっちも事実だ。だけど、印象が全然違うよな？」

大林「そうだな」

伊部「この話には、続きがあってな。34点
って数字だけを出したのは、紙面本文じゃ
なくてコラムなんだ。そして、その評価ト
ップの候補は本文で紹介されている。それ
も数字は書かずに『トップの評価』だとし
て、持ち上げているんだよ。それも『トッ
プの評価』に、括弧付きでな」

大林「たまたまなんじゃないのか？」

伊部「いや、オレはそうは思っていない。何か
あった時に予防線を張ってるように見える。
片方は数字を出して、もう一方は出してな
いのか！ って言われる可能性もあるから
な」

大林「そんなもんか…、考えすぎのような気
もするけど…」

伊部はフライドポテトを摘む。

伊部「まあ、この研究会ってのは、どっかの
元知事が中心でやってるみたいで、招聘研
究員とかも20人くらい居るけど、東京と

関係あんの？　って人もいるし、何か議事録的なものが出てる訳でもないんだけどね。まあ、別にオフィシャルでやってるんじゃないから、その辺はどうでもいいんだけどさ」

大林「でも、まあそこそこ信用できそうじゃないのか？」

伊部「信用していないって訳じゃない。気にしているのは、自分たちがこういう風に言いたい、記事にしたいから、こういう研究会みたいところを探してきてるんじゃないかってこと」

大林「つまり、事実を書くのではなく、書きたいことがあるから事実を探してくるって感じか？」

伊部「オレにはそう見えるな。結局、この都知事選の場合は、権力、つまり当選した現職候補を叩きたいから、それを裏付ける材料を持ってきてるんじゃないかってこと」

大林「それじゃあ、今みたいな記事は誰が書

いたか分かるのか？」

伊部「今は分かる。でも昔は、誰が書いたかは分からなかったんだよ。でも、世間からいろいろ言われたんだろうな、96年くらいから、主要な記事には書いた記者の名前が入るようになった。いわゆる『署名記事』ってヤツだ」

大林「じゃあ、その記者に聞くことは出来ないのか？ お前の言ったような意図があるのかって」

伊部「直接は無理だよ。それに元の記事は、その記者が書いているんだろうが、内容はデスクとか、キャップとかが確認して、必要なら修正するだろうし。それはウチの会社でも同じだよ。上司の許可なしに勝手なマネは出来ないだろう？ 結局、出てきたものしか分からない」

大林「そうか、まあ、そうだよな」

伊部「ただ、一つ言えるのは、これでOKが出てくるってことだ。記者やその上の人間は、

オレたちよりも文字で表現することに長けてるはずだから、オレがそう思うってことは、向こうもそう思っている可能性が高い。だけど、さっきも言ったように確かめようがないんだよ」

大林「お前がさっき意図を入れてるって言うてたのはこういうこと？」

伊部「そう。その辺りがTVニュースと違うところだな。まあ、民放だとあるにはあるんだろうが、新聞の方が目に付くよ」

大林「でも、メディアは基本的に、中立・公正なんだろう？ その考えと合わないんじゃないか？」

伊部「何、寝ぼけたこと言ってんだ？ 世の中に、公正・公平、中立・平等なんて無いんだよ。意図がどうこう以前の問題だ」

大林「なんで、そんな簡単に断言できるんだ？」

伊部「全部、人がやってるからだ」

大林「そんなに人がすることが悪いのか？」

伊部「悪い訳じゃない。ただこういうのは、

人がどう認識とか判断をするかで決まると
思ってる。だから、全員が納得できるよう
な完璧なものはない」

大林「でもさ、それが無理だとしても、中立・
公正になるように注意してやればいい話じ
ゃないのか？ さっき、お前、記者はオレ
たちより長けてるって言ったろ？」

伊部「ああ、そういうところは長けてるかも
知れない。だけど、別に特別な人間だとは
思ってるない」

大林「そうなのか？ TVとか新聞とかに名
前が出るけど……？」

伊部はレモンスカッシュを飲む。

伊部「……お前、どうやってら記者になれるか
知ってるか？」

大林「いや、よく知らないが……」

伊部「簡単さ。マスコミやメディアに就職し
て、そういう部署に配属される。それだけ
だ。普通の会社員と変わらない」

大林「そう言われりゃあそうだが……」

伊部「しかし、それで得られる特権は大きい」

大林「特権？」

伊部「そうだ。警察に行けば、事件・事故の情報ももらえるし、取り調べの状況なんかも手に入る。被害者が何も得られないのに。でも、闇雲に行っても貰えない。『クラブ』に入っていないといけないけどな」

大林「クラブって？」

伊部「よく政治のニュースで『国会記者会館から中継です』って出てくるだろ？ ああいうのだ。国会で取材する記者のために、国会議事堂近くにクラブに入っている記者用の建物があるのさ。クラブは政治以外の取材先にいろいろある。警察なら『警察記者クラブ』って感じでな。で、クラブに入っていない人間は取材が難しい。だから、取材したい他の記者を排除してるって話もあるんだ」

大林「へえ。何か村社会みたいだな」

伊部「そう。だから、一般人のオレが警察や

国会議員のところに行っても、情報なんかもらえない。そういう意味でマスコミの記者の情報量は圧倒的なんだ」

大林「我が軍は、ってどこか？」

伊部「：お前、そんなこと言っていると、身内に後ろから撃たれるぞ」

伊部・大林「：」

大林「：でも、そんな組織的なものがあるんだね」

伊部「そう。一般企業と同じように、会社に就職して、部署に配属されているだけなのにな」

大林「でも、教育はきちんとされてるんだろ？」

伊部「そうみたいだな。記者の規範みたいなのは、ネットを見れば出てくるよ。でも、それは一般企業も同じだろ？」

大林「まあ、オレたちも導入教育は受けたしな」

伊部「ああ。ただ問題は、そういう特権を持っているから、自分は特別な人間だって勘

違いすることだと思う。これが当たり前だ
と思ったら、もうダメだろうな。そして、
その特権をなるべく中立・公正な報道にと
う使うのか、それを行うために、自分が会
社に守られているって自覚があるかってと
ころだ」

大林「守るって？」

伊部「メディア内で不祥事があったら、大体
名前が出ないだろ。他のところもほぼ報じ
ない。そういうところだ。あれはどうかと
思うけどな。逆メディアスクラムみたいな」

大林「…しかし、お前、ホントに新聞嫌いな
んだな。恨みでもあるのか？」

伊部「まさか。タ刊までとってて、そんなこ
とある訳ないだろ」

大林「そう言えば、さっきの都知事選の話は、
タ刊だって言ってたな。他にどういう記事
が載ってるんだ？」

伊部「朝刊は、速報性というか政治・経済の
ことが主だけど、タ刊は割とじっくり取材

したネタが一面になることが多いな」

大林「例えば？」

伊部「『ホテル本能寺』の話とかな」

大林「『ホテル本能寺』？ あの本能寺のことか？」

伊部「違うよ。京都にある旅館の名前。修学旅行に来る生徒とかが多く宿泊するところみたいなんだけど、食事の終わりに箸袋にお礼を書いて置いていくらしくってさ。その辺の心のつながりというか、そういうのが記事になってた」

大林「そんなことがあるんだ」

伊部「ああ。まだ、日本は捨てたもんじゃないって思ったよ」

伊部「あと、国立科学博物館のクラウドファンディングがあったの覚えてるか？」

大林「…何となく。…結構な額が集まっていたイメージはあるけど…」

伊部「9億くらいだったかな。あれ、開始時にタ刊で紹介されたんだよ。電子版にも載

ってた。それが引き金になったかどうかは分からないけど、一般の人が知るきっかけにはなったと思うよ」

大林「そうなんだ」

伊部「その後も、クラファンの記事がいくつか載ったけど、この時ほどの勢いはなかったな」

大林「二匹目のどじょうは…、ってどこか？」

伊部「穴戸錠だな」

大林「…怒られるぞ、お前」

伊部「ま、夕刊一面は、いろいろネタを探すところから始めてるんだろうな。それなりの期間取材しても、ボツになるのも多いんだろう。でも、オレはそういう記事が好きなんだ。だから、夕刊ってのはやめられないんだよ」

大林「好きなのか、嫌いなのかよく分からない…。(時計を見て)そろそろどうだ？」

伊部「ああ。お前が良いって言うならいいよ。呼んだのはお前だし」

二人が荷物を整え始める、

伊部「つらつら話をしたが、お前が言ってたモヤモヤする、つまり何らかの違和感を感じるってのは大切なんだ。常に送り手を疑えって訳じゃないが、鵜呑みにしないことも必要だし、言葉以外の事も合わせて解釈しないとな。合っているかどうかは別として、人のやることにはだいたい何かしらの意味がある。そのとっかかりが違和感なんだ。その答えを探っていくってのは結構面白いもんだよ」

大林「ああ、覚えとくよ」

ＯＴＶスタジオ

ワイドショー的なセット。

小さく前へならえをしている大岩。

カメラに近づきすぎて魚眼レンズっぽく映っている。

大岩 國男「こんにちは。東海日本放送の大岩です」

カメラから離れながら、

大岩「今日は、フィクションについて解説して行きたいと思います」

大岩「みなさんは、フィクションと聞いて何を思い浮かべるでしょうか？ 人が空を飛ぶことでしょうか？ それとも、異世界への旅なのでしょうか？」

大岩「：もし、意図的に現実の何かをびみよくなニュアンスでモチーフにした、びみよくなフィクション。それは：、許されるのでしょうか？ ：それとも：」

大岩がカメラに向かって一歩進む。

大岩「許されないのでしょうか：」

大岩がカメラに向かって一歩進む。

一回目より、声を大きく。

大岩「許されないのでしょうか：」

大岩がカメラに向かって一歩進む。

二回目より、声を大きく。

大岩「許されないのでしょうか！」

大岩「：これから取材を続けて、みなさんと

フィクション劇場 第二話「印象操作」

一緒に考えて行きたいと思います」

E
N
D

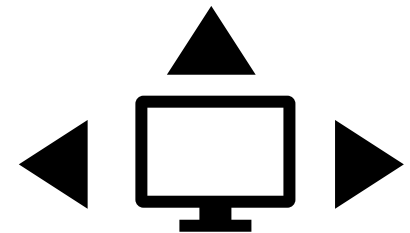
（2025年6月15日 初出）

（2025年11月16日 加筆・修正）



「情報爆弾」
フィクション劇場
第三話

大太
大



【登場人物】

霜月 雅彦（しもつき・まさひこ）（31）：

人気俳優

市川 達也（いちかわ・たつや）（23）：

月の後輩俳優。霜月のことを「マサさん」

と呼ぶ

足立 智（あだち・さとる）（37）：

ウェブ探偵

岸山 吾郎（きしやま・ごろう）（51）：

警察官。証拠品保管責任者。役職は警部

花井（はない）（45）：

週刊誌 編集長

新島（にいじま）（43）：

週刊誌 副編集長

富樫（とがし）（35）：

女性レポーター

松本（まつもと）（39）：

男性レポーター

平林（ひらばやし）（37）：

男性レポーター

古谷（ふるや）（59）：

男性レポーター

永田（ながた）（33）：

カメラマン

フィクション劇場 第三話「情報爆弾」

木原 浩之（きはら・ひろゆき）（37）：レポ
ーター。回想シーンで霜月の車に追突され
る

奈良沢（ならさわ）（67）：霜月と市川の出
演する舞台監督

宮原（みやはら）（61）：ワイドショー司会
者

澤田（さわだ）（28）：ワイドショー アシ
スタント

ニュースキャスター（40…女性）

郵便配達員

タクシー運転手

【あらすじ】

俳優の霜月雅彦は、メディアの振る舞いに怒り、ダークウェブからメディア上層部の個人情報調査を足立智に依頼し、リスト化する。

そのリストの存在を知る者は、キツネのハンドサインをするため、関係者の間では、このリストを、「フォックスリスト」と呼び、これを示した者に対して、取材を躊躇うことが起こっていたが、真偽は不明だった。

しかし、借金を抱えていた警察官の岸山吾郎が、別件で逮捕された足立のPCデータを週刊誌に持ち込み、実在することが分かった。

週刊誌は、特ダネだと見たが、記事にするには、リストのプライベート情報を出して証明しなければならず、これを断念する。

そして、週刊誌はリスト掲載者に金で揉み消す提案し、受けた者の情報を書き換えた。

その後、ワイドショーがこのリストがデータめだと報じる。そして自分達にもプライベートやプライベートがあると主張する。

○霜月雅彦の自宅（昼）

自宅前に芸能リポーターが集まっている。

霜月が家から出てくる。

富樫「霜月さん、例の女優さんとはどのような関係なのですか？」

松本「ショッピングモールで彼女と一緒にのころを見たという方がいましたが、本当ですか？」

霜月は、芸能リポーター達を見下して、右手でキッネのハンドサインを作る

（音…カーツ）。

芸能リポーター陣は、静かになって、後退りする。

尚も、霜月が前に進む。

芸能リポーター陣は、また後退りする。

霜月は周りを見回す。

霜月「…みなさん、どうされました？」

霜月「私の家まで来て、手ぶらでは帰れないでしょう？」

霜月「今、タクシーを呼んでいます。みなさんにもたすよ」

霜月は、木原浩之の方を見る。

霜月「お怪我をさせてはいけませんから。来るまでに少しだけですが、時間があります。お聞きになりたいことがありますたら、お受けしますよ」

芸能レポーター陣はお互いに見回す。

平林「…それでは、よろしいですか？」

霜月「はい、どうぞ」

平林「例の女優さんについてですが…」

霜月はレポーターを睨みつける。

平林「い、いえ…」

平林「こ、今度の舞台の抱負をお聞かせ下さい」

霜月の表情が緩む。

霜月「はい。今度の舞台は、私にとっては初めてのことばかりですが、逆に挑戦のしがいがある仕事だと思っています。先輩のみなさんに色々と教えて頂きながら、最高の

ものを作っていければと思います」

タクシーが来る。

霜月が手を挙げる。

×

×

×

タクシーの後部のドアが開く。

霜月が乗り込もうとしながら、

霜月「舞台の方、楽しみにしていて下さい」

×

×

×

タクシーが去っていく。

富樫「：また、コレかよ」

松本「これで、何人目だ？」

古谷「5人目くらいだ。勘弁して欲しいよ」

永田「古谷さん、みんな取材をためらってた

みたいですが、何かあるのですか？」

古谷「永田、お前知らないのか？」

永田「はい」

古谷「霜月がキツネのハンドサインしてる？ アレがマズいんだよ」

永田「何か意味があるんですか？」

古谷「大アリだ。あれは、オレらのプライベ

「ト情報を握ってるってサインだ。柿本（第1話「芸能リポーター」参照）って女のレポーターが居たろ？」

永田「ええ、話は。結構、やり手の方だったと聞いていますけど……」

古谷「あいつが突然、辞めちまったのはこれのせいじゃないかって噂なんだ」

永田「じゃあ、その柿本さんの情報を、誰かが持っていたってことですか？」

古谷「そういうことになるな」

永田「誰がですか？」

古谷「分からない」

永田「分からないって？」

古谷「分からないものは分からないんだよ。それに誰のどこまでの情報を知っているかも分からないから、余計にタチが悪い。もしかするとオレ達が騙されているかも知れないんだよ。だから、レポーターの間では、キツネのハンドサインに引っ掛けて、その情報リストを『フォックスリスト』って呼

んでるんだ」

永田「そうなんです」

古谷「さっきも言ったように、あの手の形をしたからといって、そのリストを持っていたとしても限らないし、そもそもそういうリストがあるかどうか分からない」

永田「そうなりますね」

古谷「噂によると、情報には、昔、ヤンチャしたり、ちょっとした悪いことをしたこと
も書いてあるらしい」

永田「例えば？」

古谷「子供の頃、駄菓子屋からアメをがめたとかな」

永田は、苦笑いを浮かべながら、

永田「古谷さん：、いくら何でも、そういうのはもう時効というか：」

古谷「いや、そうとも限らない。週刊誌なんかは、何十年前のことでもネタにするからな」

古谷「それに、家族や子供の通っている学校

とかも載ってるって話もある。踏み込むのはリスクが大きいんだよ」

永田「でも、そのフォックスリストを持って
いる可能性があるのは、限られた人だけ
なんでしょう？」

古谷「そうだ。持っているぞ、っていうやつ
は、さっきの霜月のようにキツネのハンド
サインをする。だが最近、そうする芸能人
が増えているんだよ。元締めを見つけて、
はっきりさせない限り、手が出せない」

永田「大元を見つけることはできないのです
か？」

古谷「オレたちも動いているが難しい。まさ
か、あなたは持っていますか？　とか、ど
こからこのリストを貰いましたか？　なん
て聞いても教えてくれる訳ないだろ？　自
分の身を守るために使えるんだ。話す訳が
ない」

永田「そうですね……」

○タクシーの中の霜月（昼）

霜月がタクシーに乗っている。

霜月M「うまくいってるようだな…」

（回想シーン1始め）

○霜月の自宅（昼）

芸能レポーターが霜月の家に群がる。

もみくच्याにされながら、霜月が自分の車に乗って前に動かそうとする。

しかし、レポーター達が周りを群がったまま。

霜月は窓を開けて、身を乗り出す。

霜月「みなさん、危ないですから、車から離れて下さい！」

レポーター陣はあまり離れず。

霜月がアクセルを少し大きめに踏んでしまう。

レポーターの足にあたる。

木原浩之「痛っ！」

霜月は車を降りて、木原に駆け寄る。

霜月「大丈夫ですか？」

木原は足を抱えて痛がる。

霜月は、スマホを取り出し、救急車を呼ぶ。

霜月「もしもし、すいません、救急車を回してもらえませんか？」

（回想シーン１終わり）

〇タクシーの中の霜月（昼）

霜月「…」

（回想シーン２始め）

〇霜月の自宅（昼）

霜月はリビングのソファに座り、テーブルにノートPCを広げて、くつろいでいる。

霜月「…さて、次の舞台の台本でも読み込むか…」

呼び鈴がなる。

霜月がインターフォンまで歩いていく。

霜月がインターフォンの応答ボタンを
押し、画面に顔を近づける。

霜月「はい」

配達員「霜月さんのお宅ですか？ 簡易書留
です」

霜月「はい。伺います」

霜月は、簡易書留の受領証に印鑑を押
す。

配達員「どうも」

霜月は封筒の裏を見る。

木原の所属する芸能レポーター事務所
の文字（書留なので、フル住所名前）

霜月「何だろ？」

霜月はリビングに戻る。

霜月は、封筒を開ける。

中には「霜月 雅彦様、先般の弊社社員
木原 浩之の怪我に関しまして、以下、
請求致します。 振込先は 住吉銀行
大平支店 普通 3757674。二
週間以内にご入金下さい」の紙とともに

に、怪我をした木原の診断書と治療費の請求書のコピーが入っている。

霜月、怒り心頭。

霜月は、その診断書と治療費を凝視する。

霜月「これを…、オレに払えっていうのかっ？」

（回想シーン2終わり）

○タクシーの中の霜月（昼）

霜月がタクシーに乗っている。

道路沿いに中古パソコンショップが見える。

霜月は横目でそれを見る。

霜月「…」

（回想シーン3始め）

○霜月の自宅（昼）

霜月の部屋に中古PCの入っていた空の段ボール。

霜月がその中古のノートPCを操作し

ている。

霜月「これで、行けそうか……？」

霜月がデスクトップにある長ネギアイコン（名前はs c a l l i o n）をクリックしてダークウェブの画面を立ち上げる。

霜月はマウスで画面をスクロールしながら、身元調査系を探す。

霜月「身元調査なんでも請け負います……。正確無比情報量MAX。まずはチャットにてお問い合わせを……か」

霜月はチャット画面をクリックして開く。

○同（セリフはチャットの文字）（風）

霜月「話が出るか？」

少し、間が空く。

足立智「大丈夫だ」

霜月「身元調査を頼みたい」

足立「調査範囲は？」

霜月「全部だ」

足立「具体的に言ってくれ」

霜月「顔写真、勤め先、住所、年齢、電話番号、職歴、学歴。偽名を使っている場合は本名だ」

足立「それだけか？」

霜月「家族構成。子供がいる場合は、学校名もだ」

足立「手間だな」

霜月「あと、過去にやらかした悪さも頼む。

どんな小さなことでもいい」

足立「欲張りすぎじゃねーか？」

霜月「500万出す」

少し、間が空く。

足立「やる気が出るね。OKだ」

足立「で、誰だ？」

霜月「30人だ」

足立「ますますやる気が出るね。引き受けるぜ」

霜月「その前にやって欲しいことがある」

足立「何だ？」

霜月「オレが誰だか当ててくれ」

少し、間が空く。

足立「試すって訳か？」

霜月「額が額だからな」

足立「分かったよ。2〜3時間待ってくれ」

霜月「1時間だ」

少し、間が空く。

足立「気に入ったよ。1時間だ」

霜月はコーヒーを飲みながら、画面を
見ている。

チャットの返事が画面に現れ、霜月は
画面をのぞく。

足立「待たせたな、俳優の霜月雅彦さんよ」

霜月はニヤツと笑う。

足立「満足か？」

霜月「ああ。金は仮想通貨だな？」

足立「先払いでな。リストも頼むぜ」

霜月「分かった。30人分振り込んでおく」

足立「額が足りないぜ」

霜月は首を傾げる。

足立「31人分だ」

霜月はまた、ニヤッと笑う。

霜月「了解だ」

足立「リストの受け渡し方法は」

（回想シーン3終わり、チャットの文字終わり）

○タクシーの中の霜月（昼）

霜月がタクシーに乗っている。

霜月M「：せいぜい震えてな：」

○ホール（舞台練習）（昼）

まだ、衣装は着ていない。

出演者は、舞台上で位置取りの確認をし

ている。

舞台監督（奈良沢）は、舞台の中央で上手にいる市川達也に手招きをする。

奈良沢「市川くん！」

市川達也「はい！」

奈良沢「市川くんは、上手から出て来て、この位置で、セリフ。いいね！」

市川「はい！」

奈良沢は少し強い口調で、床を指差しながら、市川の顔を見て、

奈良沢「君の立ち位置が決まらないと、他のみんなが迷うから。ブれないように！」

市川「はい！」

奈良沢が手を2回叩く。

奈良沢「ようし、それじゃあ、15分休憩にしよう」

各々、舞台を降りて、客席に座って飲み物などを飲んでいる。

霜月が紙コップに入れたコーヒーを持って、市川の横に座る。

霜月「達也、どうかしたのか？ 演技にキレがないような気がするが……」

市川「さすがマサさんですね。周りに迷惑をかけないように演じてはいるんですが……」

霜月「何かあったのか？」

市川「はい。実は最近、お付き合いし始めた女性がいました：」

霜月「そう言えば、ワイドショーでやってたって話は聞いたことがあるな」

市川「はい。既に芸能レポーターが嗅ぎつけているみたいで。一般人の方ですから、名前こそ出ていませんが：」

霜月「それで、演技に身が入らないって訳か：」

市川「情けない話ですが、おっしゃる通りです。今回はボクが主役ですから、舞台を壊すようなことはしたくないのですが：」

霜月「下手なマネをすれば、その女性にこじつけられる可能性もあるしな」

市川「その通りです：」

市川は霜月の方を見る。

市川「マサさんは一時期に比べて、そういう話題が減っている感じがするのですが、何かいい方法があるのですか？」

霜月は少し考える。

霜月「…方法は…、ある」

市川の腰が少し浮く。

市川「あるんですか!？」

霜月「ある…。達也、お前、口は堅いか？」

市川「もちろんです！ 必要ならお金でも何

でも…」

霜月は、市川の話を遮る。

霜月「金是要らない。約束を守ってくれるだ

けでいい」

市川「約束…、ですか？」

奈良沢が2回手を叩く。

奈良沢「じゃあ、続きを始めるぞ！」

霜月が立ち上がる。

霜月「後で、連絡する」

○ゲネプロ（舞台スタッフ&キャストインタ
ビュー）（昼）

メディアも入れてのリハーサル（ゲネ
プロ）。

役者は衣装を着ている。

後には、舞台名が入ったよくあるベニヤ板。

レポーター陣が奈良沢を狙ってマイクブームポールを近づけている。

インタビュアーは富樫。

富樫「監督、ありがとうございます」

監督が上手（向かって右）にはける。

下手（向かって左）から、白のタキシードに胸に赤いハンカチを入れた、市川が入ってくる。

マイクブームポールを持っている取材陣がずずっと少し下がる。

富樫は恐る恐る市川にインタビューする。

富樫「い、市川さん…、イ、インタビューしても、…よ、よろしいでしょうか？」

市川、笑顔で、

市川「もちろんです。今日は舞台の宣伝も兼ねていますから」

市川「ですの…」

市川は目だけを富樫に向けて、ニヤツとして、低い声で、

市川「舞台の話だけに…、して下さいね？」

マイクブームポールを持っている取材陣がまたずずっと少し下がる。

富樫、テンパる。

富樫「も、もちろんです！ もちろんです！」

富樫「こ、この舞台への、い、意気込みを！」

市川「いや、準備万端です。〃公私〃ともに

充実していますし、〃みなさんのおかげで〃

安心して、舞台に打ち込めています。これ

も先輩である霜月さんのおかげです」

霜月が黒のタキシードにシルクハットとステッキとつけ髭姿で下手から出てくる。

霜月「おい、達也！」

霜月はステッキで、市川の足を叩きながら、登場する。

霜月「お前が主役だろ？ もっとドーンと構えてろよ」

霜月・市川「ははは」

レポーター陣は顔を引きつりながら苦笑い。

○ＴＶニュース（数日後…夜）

キャスター「今日、午後６時ごろ、ＴＶ局のサーバーに侵入し、社員情報を盗んだとして、住所不定無職の足立 智容疑者３２歳が逮捕されました。足立容疑者は、いわゆるダークウェブで依頼を受け、個人の身辺調査を行っていたと見られています。警察では容疑者のノートＰＣを押収し、データの解析を続けており、余罪があるものと見て、捜査を進めています」

○警察署（証拠品部屋）（数日後…昼）

岸山吾郎が足立のノートＰＣを調べている。

岸山「暗号化解除のパスワードをゲロしたから、復号するか…」

復号すると、「依頼一覧」というフォルダが出てくる。

岸山がフォルダをクリックすると、ファイル名が数字「1、2、3」のエクセルファイルが300くらい出てくる。

岸山「…随分と、繁盛してやがったな。解析に時間がかかりそうだ…」

すると、岸山のスマホが鳴り、SMSで「07」のメッセージが表示される。

岸山はびっくりして、証拠品部屋の外に出て、妻に電話をかける。

岸山「お前か？ 今か？ いや、今はない。いくらだ？ 200万!? なんとか明日まで待ってもらように言ってくれないか？ 必ず何とかするって話をしてくれ。ああ。とにかく今日は無理だ。なんとか頭を下げて引き取ってもらおう言ってくれ。頼む」

岸山は電話を切る。

岸山はうなだれて証拠品部屋に戻る。

岸山M「…いよいよヤバいな…」

岸山は証拠品を見回す。

岸山 M「…証拠品は…、無理だ。すぐバレル…」

岸山はノートPCを見る。

岸山 M「この情報をどこかに高く売れば…」

岸山は押収したノートPCのデータを
USBメモリに入れて持ち出す。

○居酒屋（週刊誌記者との接触…その日の夜）

岸山が居酒屋に入って、店員と話を
する。

岸山は、個室に通される。

岸山は個室で正座して、ソワソワして
いる。

週刊誌副編集長の新島が入ってくる。

岸山はお辞儀をしながら、

岸山「すいません、新島さんですか？ お呼
びだてしてしまって…」

新島「いえいえ、岸山さん。こちらも逮捕さ
れた足立ってヤツのPCに何が入っている

かは気になりますからね。特に個人情報ってところが」

岸山「データは一通り持ってきたのですが、どうにも分からないことが多くて……。とにかく高く買って欲しいんですよ」

新島「まあ、そう焦らずに。とにかく、データをを見せて下さい」

岸山は新島にUSBを渡す。

新島は自分のノートPCを取り出し、USBメモリを差し込む。

新島はUSBメモリに入っているファイルを見て行く。

新島「これで、全部ですか？」

岸山「はい、全部です」

新島はフォルダの下の「項目」の欄を見ると、「352項目」とある。

新島M「ファイルが300以上あるのか……。全部見るのは手間だな……」

新島が画面をスクロールしていくと、一番最後に「一覧」という名のファイル

がある。

新島 M 「まとめたヤツか？」

新島は「一覧」ファイルを開く。

新島は画面に顔を近づけて、ファイルの中身を見る。

「一覧」ファイルには、左からファイル名（番号）、依頼受付日、依頼完了日、ギャラが並んでいる。

新島 M 「やっぱりそうか……」

新島はこのファイルの中身をスクロールしながら、

新島 M 「一件、100万くらいか。結構稼いでるな」

スクロールを続けていくと、ギャラの欄に「1億5500万円」の文字を見つける。

新島 M 「なんだ!? ここだけ額がデカすぎる」

新島は視線を左に向け、どのファイルか確認する。

新島 M 「49番ファイル！」

新島は、49番ファイルを開く。

新島は、スクロールしながら、ファイルの中身を見る。

新島が驚く。

新島 M「こ、これは、ウチの編集部員の情報じゃないか。それに、これは芸能リポーターのやつだ。マスコミの偉いさんの名前もある。…これは、例の『フォックスリスト』だ。本当にあったんだ」

岸山「新島さん、どうでしょうか？ お願いします！」

新島は平静を装って、岸山に、

新島「落ち着いて下さい、岸山さん。お気持ちわかりますが、こちらも確認が必要ですから」

フォックスリストを指差して。

新島「これらを依頼した人物が誰か分かっているのですか？」

岸山「分かっています。お互い匿名でやりとりしていたようです。」

岸山「ただ：」

新島「ただ？」

岸山「名前は分かりませんが、芸能人からの依頼もあったという供述をしているようです」

新島は考える。

新島「分かりました。買い取りましょう。200万でよろしかったですね？」

岸山は頭を下げて、

岸山「はい！ありがとうございます！」

新島「ただし、USBごと頂きますよ？ 他

言は無用です」

岸山「もちろんです！」

新島はカバンから200万円を取り出し、テーブルの上に置く。

岸山は200万円をもぎ取り、席を立つとする。

新島「岸山さん」

岸山は新島の方を振り返る。

新島「：もう少し、お聞きしたいことがある

のですが…」

○週刊誌編集部（次の日…昼）

編集部の会議室。

編集長の花井と新島が立っている。

花井が机の上のノートPCの画面を覗き込んでいる。

花井は立って、画面に視線を向けたまま、

花井「ホントにあっただな…、『フォックスリスト』ってヤツが…」

新島「はい。他のファイルも調べましたが、どうやらこれだけのようです」

花井「それにしても、調べ方がうまいな」

新島「私もそう思います。現場のレポーターは数が多いので、全員という訳には行きませんから」

花井「…だから、マスコミ・メディアの偉いさんを主に狙ってってことか…」

新島「はい。自分の振る舞いで、上の情報が

漏れる可能性があるかと分かれれば、下の連中も迂闊なマネはできませんから」

花井「その辺は、上に匿名のメールでも送ってるんだろうな」

新島「そう思います」

花井「しかし…、これをどう出すかが難しいな…」

新島「そうですね。少なくともウチの部員は、消した形になると思います」

花井「載ってた部員には？」

新島「はい、すぐに電話番号を変えさせて、引越しの準備をするよう言いました」

花井「…ならいい」

二人は考える。

花井「もう少し、コレのウラが欲しいな…」

新島「ええ。容疑者の足立ってヤツは、依頼者に芸能人が居たと話しているらしいのです」

花井「芸能人か…。まあ、こういうのを欲しがるのはその手の人間だろうからな」

新島「はい」

花井「：一番最初に例のサインをしたのは、誰か分かっているのか？」

新島「はっきりしていませんが：、俳優の霜月じゃないかという話を聞いています。その線で動きますか？」

花井「いや、今はまだ早い。下手に刺激して、このリストをばら撒かれてもしたらシャレにならない」

新島「そうですね。金を払って入手したスクープがパーになりますから」

花井「そうそう、その金だが君から700万欲しいと言った時はびっくりしたよ。その警官は200万でいいと言ったんだろう？」

新島「はい。しかし、金を渡してから、そいつと話をしたのですが、他に300万円ほど借金があるそうで。一応、今回の件は口外するなとは言いましたが、いざとなれば、このデータを別のところに売りかねません。ですので、借金をチャラにして、それと当

面の生活費と合わせて700万円渡し
ました」

花井「なるほどな……。保険ってところか？」

新島「はい、そうです」

花井「先々の情報提供代の前払いってところもあるしな」

新島「はい。コネクションは作って置いて損はありませんから」

花井と新島は腕を組んで考える。

花井「：しかし、ホントに難しいな、これは。霜月がやったってことは探るのはリスクがある。かと言って、業界でこれだけ話題になってるこのリストの存在をお蔵入りさせるのはもったいない」

新島「はい。そもそも追い詰める相手がいませんから、第2弾、第3弾と打ったところで効果が薄いです」

花井「ああ。リストの信憑性を小出しにすることも出来るが、誰かのプライベート情報を出して、『この人の情報は合ってるから信

憑性が高いですよ』なんて言える訳がない」

新島「そんなことをすれば、訴えられかねませんしね」

花井「うゝん…、難しいな…」

花井と新島は考える。

新島「どうでしょう、編集長。リストにあるヤツらに個別に話を持って行って、金で揉み消すかどうか聞いてみてはいかがでしょう？ 応じなかったところは出すぞ、ということで」

花井は考える。

花井「…悪くはないな。ウチとして動きにくいのは確かだし、普通の記事ではメリットが薄い」

花井「しかし、金で揉み消すと言っても、既に持っているヤツがいるんだろう？ それが出ないようにする保証が必要だと思うのだが？」

新島「はい。これは早速、あの警官に動いてもらおうと思っています」

花井「具体的には？」

新島「リストの書き換えです。どこまで書き換えるかは、話を持っていく連中が決めるということだ」

花井「そうすると…、多分、全員、金を払うから消してくれ、になりそうだが…？」

新島「その場合は、偽の住所・電話番号に差し替えるというのはどうでしょう？」

花井「それは分かるが…、でもどうやってすり替える情報を決めるんだ？ 一般人を巻き込むと面倒臭いぞ」

新島「ネットで適当な中小企業を見つけて、その住所・電話番号に書き換えます。リストを見た連中はまずそこに問い合わせるでしょう。ですが、当然、そんなヤツはいません。それでストップです」

花井「なるほどな」

新島「あとは、例の警官に証拠品に入っているPCのデータと入れ替えてもらいます」

花井「タイムスタンプは大丈夫なのか？」

新島「間違って消してしまったので、USBメモリに取っていたバックアップを入れた、とかなんとかで誤魔化せるかと」

花井「分かった。それで行こうか」

新島「で、いくらにしましょうか？」

花井「そうだな。一応、メディアの間の阿吽の呼吸ってのがあから。やり過ぎは良くない」

新島「ええ。でも数百万ってのは安すぎると思います。前にそいつを足蹴にしてやったことがあります」

花井「そうだな。まあ、多少、吹っかけても大丈夫だろう。1000万円ですべてくれ」

新島「全部で3億ですね。分かりました」

○ワイドショー（2週間後くらい…昼）

宮原「それでは、次の話題に行きましょう」

澤田「はい。先日、TV局のサーバーに侵入して、社員情報を盗んだ疑いで逮捕されま

した足立智容疑者ですが、取り調べの供述で、何者かの依頼を受け、マスコミ・メディア関係者のプライバシー情報のリストを作成していたことが分かりました。これは通称『フォックスリスト』と呼ばれているものだとのことですよ」

宮原「TVをご覧のみなさんは、あまりご存じないかも知れませんが、業界では有名な話というか、都市伝説というか……」

澤田「はい、そうです」

宮原「それで、警察は何と？」

澤田「リストに掲載されていたとされる関係者に確認を取っているとのことですが、詳しい内容はプライバシー保護の観点から公表を差し控えるということでした。ただ、私どもの独自取材によりますと、リストに記載されている、住所、名前、電話番号の全てが一致している人物は、まだいないようです」

○霜月の自宅（同日…昼）

霜月はＴＶのワイドショーを見ている。

霜月はコーヒーを飲みながら、

霜月 M 「偽物ってことにした訳か……。まあ、オリジナルを持っているのはオレだけで、達也とかにはキツネのサインをすれば良いって、言っただけだからな。金がいくら動いたかは知らないが……」

霜月は、またコーヒーを飲む。

霜月 M 「ま、でも、これで足立ってヤツの口からオレの名前が出ても、依頼はしたが偽物をつかまされたって言い訳が出来るし、偽物に仕立てたヤツらは、オレが本物を持ってること分かるから、手は出せないだろうし……。もう少し、楽しませてもらうとするか……。黄門様になった気分だ……」

霜月は、もう一口コーヒーを飲む。

霜月 M 「これからフェイクでこういうことをしても、メディアは身構えるようになるかな。億の金を使った甲斐はあったってと

こか：「

○ワイドショー（続き…昼）

宮原「しかしこれは、かなり悪質な事件ですね」

澤田「そうですね」

宮原「まあ、プライバシーについて言えば、こういう番組をやっていると、視聴者の方からいろんなご批判もあります。ですが、私たちにも当然、プライバシーというか、プライベートと言いますか、そういうものはあります」

宮原「子供に会いに行ったりもしますし、食事もします。食事の後に一服するくらい、いいじゃありませんか？」

E
N
D

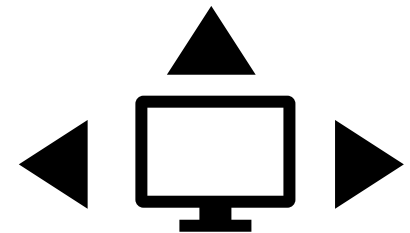
（2025年6月15日 初出）

（2025年11月16日 加筆・修正）



フィクション劇場
「公人と私人」
第四話

大太
大



フィクション劇場 第四話「公人と私人」

【登場人物】

羽山 輝樹（はやま・てるき）（57）：大物

俳優。愛称は「テル」

羽山 京子（はやま・きょうこ）（声のみ）（5

3）：輝樹の妻。一般女性。

（JBA…Japan Broadcast

ing Association 大河ド

ラマ「老松」制作スタッフ）

木嶋（きじま）（28）：アシスタントディレ

クター

小林（こばやし）（36）：ディレクター

佐藤（さとう）（45）：総合プロデューサー

（大日本テレビ…委託制作会社）

加藤（かとう）（40）：ディレクター

村上（むらかみ）（35）：社員

下村（しもむら）（32）：社員

大森（おおもり）（31）：社員

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

（アルプステレビ）

山口 弘（やまぐち・ひろし）（54）…アル

プルテレビ 報道局長

平井 武（ひらい・たけし）（52）…同 制

作局長

藤川 誠（ふじかわ・まこと）（50）…同 コ

ンテンツ部部长

（JBA TV 討論会参加者）

牛山 加奈子（うしやま・かなこ）（33）…

JBA 討論会司会者

高橋 修二（たかはし・しゅうじ）（56）…

JBA 報道局次長

長谷川 芳輝（はせがわ・よしてる）（48）…

…アルプステレビ記者

多良 伴内（たら・ばんない）（45）…SB

S（首都圏テレビ）記者

三上 さおり（みかみ・さおり）（43）…大

日本テレビ記者

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

植村直之（うえむら・なおゆき）（45）
：
毎朝テレビ記者

【あらすじ】

国営放送JBA・民放を問わず多くのテレビドラマに出演している大物俳優・羽山輝樹は、プライベートに踏み込むことを嫌う。

しかし、JBA大河ドラマ撮影中に、大日本テレビの制作会社がそのタブーを破ったことに憤慨。大河ドラマの総合プロデューサー佐藤に、自分が薬物を使っていると騙し、現在の大河ドラマ降板だけでなく、民放を含む過去の全ての出演作品がお蔵入りになると脅す。そして、JBAと民放キー局4社で「公人と私人」をテーマにした討論会の開催を強要する。各社の報道局長に参加要請したが、結局、各々の記者が出席。羽山はオブザーバー参加した。

各記者は全員一個人の意見として、この話題について発言するが、羽山は、結局のところ取材したいがために都合よく公人になっている、との意見を述べ、記者たちに、討論会にどういう立場で出席しているのか問う。

○JBA大河ドラマ「老松」収録現場（昼）

スタジオの入り口の扉に、「JBA大河ドラマ『老松』の張り紙がある。

佐藤「OK！ 次、カメラ変えるので、キャストの方は小休止して下さい」

羽山輝樹は椅子に座る。

ADの木嶋がペットボトルの水を羽山に差し出す。

木嶋「羽山さん、お疲れさまです。どうぞ」

輝樹「ああ、ありがとう」

輝樹はペットボトルの水を飲んで、足を組む。

ディレクターの小林が羽山に横から近寄りながら、

小林「羽山さん、どうですか？」

輝樹は、小林の方を見て、

輝樹「『羽山』って堅苦しい呼び方はやめてくれって言ってるだろ？ 『テル』でいいよ」

小林は頭に手をやって、

小林「すいません。…じゃあテルさん、調子

はどうですか？」

輝樹は小林から視線を外して、

輝樹「いいですよ。でも、今回の『老松』は古い歴史上の人物と違って、ご存じの方が多いから、そういう意味で緊張感があるね。

志ん朝師匠の嘶は一級品でしたし」

小林「そうですね。戦国物や時代劇はそれなりの数字が見込めますが、今回は、こちらも冒険していますんで」

輝樹は小林を見て、

輝樹「じゃあ、数字が取れなくても、私のせいじゃあないってことでいいんだよね？」

小林「それは、勘弁して下さい」

輝樹・小林「ははは……」

輝樹「でも、まあ、とにかくセリフが……、というか、嘶を覚えるのが大変で」

小林はセット切り替えの様子を見ながら、

小林「寄席のシーンが多いですからね。これでもカメラの切り替えを細かくして、テル

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

さんの負担を減らすようにしてはいるのですが……」

輝樹「別にイヤだと言ってる訳じゃないんだよ。こうやって実際にやってみると、嘶家の方は本当に凄いなあと」

小林「どの辺が、そう思いますか？」

輝樹「舞台だと何かあれば周りの出演者が助けてくれるが、落語は一人だからね。一人芝居も何度か演ったことはあるが、基本的な落語は座って、声と座りながらの動きしかないだろう？ だから起伏が付けにくい。それに、一人で何役もこなさないといけないし」

小林「同じ演目を演っても、個性が出ますしね」

輝樹「ああ。CDを買って勉強はしていたんだが、その所作というか、そういうのが足りないと思ったので、そちらからVTRを貸してもらって」

小林「こちらでお手伝いできることは何でも

しますから、遠慮なくおっしゃって下さい」

輝樹「ありがとう」

輝樹は小林から視線を逸らして、ペットボトルの水を飲む。

輝樹「しかし、今回の脚本家の方がうらやましいよ」

小林「なぜですか？」

輝樹は小林を見ながら、

輝樹「嘶の部分は枕を考えて、後は『二番煎じのここからここまで5分』とかでしょ？」

小林「いやいや、テルさん。師匠は枕だけでもお金の取れる方でしたから。実際使った枕にするか、新しく考えるかで大変みたいですよ。下手なことはできませんからね」

輝樹「そうだね」

小林「確かに書く量は少なくなるかも知れませんが、どの場面にどの嘶を持ってくるかってのは考えないといけませんから。テルさん同様、嘶は全部聞いているみたいです」

輝樹は小林から視線を外して、

輝樹「そりゃ良かった。とにかく一生懸命やりますよ」

小林「よろしくお願いします。行き詰まっても深酒とかはやめて下さいね。そこはマネしなくてもいいですから」

輝樹・小林「ははは…」

小林「ところで、テルさん。最近、奥様のために家を買ったと聞いていますが…」

輝樹の表情は豹変。

持っていたペットボトルが手が落ちる。

組んだ足を解き、小林を睨む。

語気を強めて、

輝樹「その話、どこで聞いた？」

小林「い、いや、風の噂っていいですか…」

輝樹「どこの風だ？」

輝樹の怒りの表情と小林の固まった様子を佐藤が見る。

雰囲気が悪いのを察して、二人に近寄る。

佐藤「テルさん、どうかしたんですか？」

輝樹「…こいつが、妻の話をした」

佐藤は青ざめる。

佐藤「す、すいません！ こいつには私から
きちんと言っておきますから」

佐藤は小林の腕を引っ張って連れていく。

佐藤は小林の腕を下に引っ張って自分の顔を近づける。

佐藤は、ちらっと羽山の方を見る。

小聲で、

佐藤「おまえ、テルさんに何を話した？」

小林「い、いや、奥さんのために家を建てた
みたいですね、としか言っていないが…」

佐藤「バカ！ 知らないのか？ テルさんは
そういうのが一番嫌いなんだ」

小林「プライベートの話が、ということです
か？」

佐藤「そうだ。テルさんの奥さんは一般人の
方なんだが、付き合っていた時に散々メ
デアに追い回されていたんだ。それに結婚

してから、しばらくテルさんの仕事がつま
く行かなかった時も支えてくれてたって話
だ。だから、テルさんはプライベートに触
れるのを、極端に嫌う」

小林「そういう話は聞いていましたが…、そ
こまでとは思ってなかったです。すいませ
ん…」

佐藤は輝樹の方を見ながら、

佐藤「テルさんにはオレから詫びを入れてお
くから、二度とその話はするなよ」

小林「…分かりました。気を付けます」

佐藤は輝樹のところに小走りに向かっ
て、頭を下げている。

○輝樹の自宅（その日…夜）

輝樹が帰宅して、リビングのソファ―
に座る。

輝樹が妻の羽山京子に電話をかける。

輝樹「もしもし、京子か？」

京子（声）「はい」

輝樹「今、帰ったよ」

京子（声）「お疲れ様でした」

輝樹「そっちの生活には慣れたか？」

京子（声）「安心して下さい。大丈夫ですよ」

輝樹「それは良かった」

京子（声）「でも輝樹さん。こういう離れ離れの生活はいつまで続くのですか？」

輝樹「辛抱してくれ、もう少しだ」

京子（声）「もう少しって…、何か当てがあるの？」

輝樹「実は、大手配信サイトから海外を中心に活動してみないか？　っていう話が来てるんだ」

京子（声）「そうなの」

輝樹「ああ。最近、日本を題材にしたドラマの評価が高くなってて、日本人俳優の需要が結構あるらしい。ギャラもいい。それがうまく行けば二人揃って、海外で生活できる。メディアの連中もそこまでは追ってこないだろう」

京子（声）「それはうれしいけど……。でも無理
しないでね」

輝樹「大丈夫だ」

輝樹「……ところで、そっちで何か変わったこ
とはなかったか？」

京子（声）「特にはないけど……。どうかしたの？」

輝樹「いや、今日、現場で京子の家を建てた
ことを知ってるヤツが居たんだ。風の噂と
か言ってたから、出所はよく分からないん
だが……」

京子（声）「そうなの？ この辺は閑静な住宅
街だから、変な車とかが止まっていたらす
ぐに分かるけど……」

輝樹「とりあえず注意してくれ。お手伝いさ
んに、買い物とかをお願いして、なるべく
外に出ないように頼む。用心するのに越し
たことはない」

京子（声）「輝樹さん、何もそこまでしなくて
も、私は……」

輝樹「いや、ダメだ。もう結婚前のような思

いをさせたくない。すまないが我慢してくれ」

京子（声）「…分かったわ」

○大日本テレビの委託制作会社 会議室（昼）

村上、下村、大森の3人の社員が居る。

会議室にディレクターの加藤が浮かない顔で入ってくる。

加藤「それじゃ、打ち合わせ始めるぞ」

村上「加藤さん、浮かない顔ですね。やっぱり

ウチのコーナーの数字ですか？」

加藤「ああ、そうだ。帯コーナーの中で最低だ。プロデューサーから、お前んとこのコ

ーナーはトイレタイムだ、って言われたよ」

下村「トイレならCM中に行ってくれればいい

いのに…」

加藤「バカ！ そんなこと言ったら、一発で干されるぞ」

大森「…で、プロデューサーから何か指示があったんですか？」

加藤「指示も何も、とにかく数字が上がるモノを作れ、それだけだ。次のクールもダメだったらヨソに頼むって真顔で言われたよ」

大森「じゃあ、かなり食いつきのいい企画を
考えないといけませんね」

加藤「そういうことだ」

加藤は三人を見ながら、

加藤「何かいい案はないか？」

村上「ネットで流行っているものは、あらかじめ出尽くしてた感がありますね。帯となると単発と違って、月々金ですから。ハプニング系や動物系もお腹いっぱいな感じですよ」

下村「私もそう思います。お店紹介とか食レポでは数字はあがない気がします」

大森「それに、その辺のリサーチ力は、動画配信者の方が上でしょうね」

加藤「まあ、あいつらは再生数が収入に直結するし、自分の時間を全部それに突っ込めるからな。目立てば案件ものも来るだろうし」

村上「案件が頼りだってヤツもいるって聞きますからね」

加藤「そうだ。あいつらに真っ向勝負しても勝てないだろう」

下村「そうになると、配信者とかが、あまりやらないというか、やれないようなネタでしょうか？」

加藤「そんなもんあるのか？」

下村「芸能関係者の情報なら、少なくとも、そいつらよりは持ってるはずですよ。スキヤンダルとかは別ですけど。そういう情報がつまく使えれば、行けそうな気はするんですけど……」

加藤「例えば？」

下村「芸能人のお家拝見とか」

加藤「ダメだな。それも昔、やってたことがあるし、今は自分で動画上げてる芸能人も多い」

下村「難しいですか……」

加藤「それに、オンエア前にVに口出しして

きたら面倒だ。宣伝とかのバスターを要求してくるかも知れないし。そういうのが視聴者に見え隠れしたら終わりだ」

大森「じゃあ、やはり素人ですか？」

加藤「でも、素人にしても、おいしいことを言ってくれるまで聞き回らないといけないから、視聴者ウケするようなテーマを考えなきゃな。それに週1ならともかく、帯だ。取れ高の予想が付かないぜ？」

村上「それじゃ、素人に聞くネタは芸能人ネタ、というのはどうでしょうか？」

加藤「芸能人は誰にするつもりだ？ 番組のゲストとかか？」

村上「いえ、ゲストとか関係なく、芸能人の自宅周辺に住んでいる素人に、です」

加藤「住人ってことか？」

村上「はい。最近は芸能人とは言え、プライバシーにはうるさくなっています。ただ、周辺の住人に何か聞く分には問題ないと思います。芸能人の意外な一面が分かりますが……。芸能人の意外な一面が分かる

かも知れませんか」

加藤「なるほどな……」

村上「これなら、インタビューするダーゲッ

トも絞れますね」

下村「好意的なコメントだけ切り取って、持

ち上げれば、出して欲しい芸能人も増える

のではないのでしょうか？ 仕込みが入るか

も知れませんが……」

加藤「仕込みはオレたちには関係ないしな」

大森「私も悪くないと思います」

加藤「分かった。じゃあ、とりあえずその線

で行ってみるか。初っ端は誰で行く？ 最

初にガツンと行かないと」

村上「俳優の羽山さんはどうでしょう？ 超

有名人なのにプライベートの話を聞いたこ

とがないので、視聴者も興味を持つと思い

ますが……」

加藤「バカ！ あそこはアンタッチャブルな

んだよ」

村上「なぜですか？」

加藤「理由はよく知らないが、羽山さんはプライベートに踏み込むことを極端に嫌う。今は大河の主演をやってるが、ココの局のドラマにも子役時代から主役級でたくさん出てもらってる。怒らせたらえらいことだ」

下村「じゃあ、ウチが直接やらなければいいのではないですか？」

加藤「何が言いたいんだ？」

下村「どこかに外注、という形ではどうでしょうか？」

加藤「うゝん：。言い訳になるとは思うが、リスクが大きすぎる」

下村「とは言っても、私たちのこれからがかっているんですよ？ 多少のリスクは：」

加藤「もしものことがあったら、どうする気だ？ 取材拒否とか」

下村「そうになったら、下の責任にして、ウチが直接やった訳ではないということにすればいいのではないのでしょうか？ 実際、ウチは依頼しているだけなので。外注先に行

き過ぎた点があったという形で」

加藤「うゝん、まだリスクは残るが…、背に腹は変えられないか…」

大森「やってみる価値はあると思います」

村上「私も、そう思います」

加藤「よし、じゃあそれで行こう。タイトルは『突撃！ 芸能人のご近所さん』だ。準備してくれ」

村上・下村・大森「はい！」

○輝樹の部屋（夜）

輝樹の電話になる。

輝樹が電話を取る。

京子（声）「すいません、輝樹さん。今、大丈夫？」

輝樹「京子か？ 大丈夫だ。収録が終わって、家にいるよ。何かあったのか？ そちらからは出来るだけ掛けてこないでくれと言ってるはずだが…」

京子（声）「ええ。そうなんだけど…。今日、

お昼のワイドショーを見てたら、私の家が映っていたの：」

輝樹、驚く。

輝樹「何だって!？」

京子（声）「正確には、モザイクがかかってい
ただけど：、あれは間違いなくここだっ
たわ」

輝樹「どこの局だ？」

京子（声）「大日本テレビよ」

輝樹は顔を歪める。

輝樹M「あいつら：」

輝樹「インタビューとかされたのか？」

京子（声）「いえ、私はされてないけど：、近
所の方が何人かされてたみたいだわ」

輝樹「その方達は、何と言ってた？」

京子（声）「輝樹さんの言うとおり、ご近所付
き合いはほとんどしてないから、みなさん、
私の家だっことを初めて知ったみたいで。
光栄だとかおっしゃっていたわ」

輝樹、激怒。

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

輝樹「…」

京子（声）「輝樹さん、どうかしたの？」

輝樹「京子…、今の生活を全部捨ててもいいか？」

京子（声）「輝樹さん、何を急に…」

輝樹「理由は聞かなくてくれ。捨ててもいいか？」

京子（声）「私たちが苦しかった時に戻るってこと？」

輝樹「ああ。いや、もっとひどくなるかも知れない」

京子（声）「…」

輝樹「京子…」

京子（声）「輝樹さんが、そうしたいのならかまわないですよ。余程の覚悟なんでしょう？」

輝樹「…ありがとう、京子。そっちにも迷惑がかかるだろう。京子がそう思うなら、別れてもかまわないが…」

京子（声）「何をおっしゃるんですか？ そんな

なことにしませんよ」

輝樹「ありがとう、京子」

輝樹は電話を切る。

輝樹は、台所の小麦粉の袋を見る。

輝樹M「：オレの：演技力の見せ所だな：」

○大河ドラマ…輝樹の控え室（昼）

輝樹が座っている。

佐藤がドアをノックして入ってくる。

佐藤「どうしました？ テルさん。お話とい

うのは」

輝樹「まあ座ってくれ」

佐藤「では、失礼します」

佐藤は輝樹と対面のソファに座る。

輝樹「佐藤くん、突然だが、オレは大河を降

りることにした」

佐藤は、目を丸くして、苦笑いする。

佐藤「何を言っているんですかテルさん、冗談はやめて下さいよ。テルさんが居なければ番組が成り立たないですし、もう収録は

半分以上、終わってるんですよ？」

輝樹「いや、降りる。正確には降ろされる、だな」

佐藤「そんな：、私たちがテルさんを切る訳ないじゃありませんか：」

輝樹はポケットから、折ってある白い紙を取り出し、机の上に投げる。

佐藤はそれを見る。

輝樹はソファーに寄りかかる。

輝樹「いやあ、噂には聞いてたが、その通りだったよ。スカッとして演技のキレが数段上がった気がするね」

佐藤は、ちょっとびっくり。

佐藤「また、また：。テルさん、悪い冗談はやめましょうよ：」

佐藤は手を伸ばして、白い紙を取ろうとする。

輝樹「指紋が付くぞ？」

佐藤は手を止めて、輝樹を見る。

佐藤は声を詰まらせながら、

佐藤「こ、小麦粉かなんかんでしょう？」

輝樹は自分のスマホを取り出して、机の上に置く。

テンキー画面を表示させて、ゆっくり

「1、1、0」を押す。

スピーカーモードにする。

佐藤は凝視して、息を呑む。

コール音になる。

「ガチャ」と電話がとられる。

警察（声）「もしもし、警察です。事件ですが、事故ですか？」

輝樹「もしもし、警察ですか？ 私は俳優の

羽山輝樹と……」

佐藤「わあゝ！」

佐藤が電話をかつさって立ち上がって電話に出る。

佐藤「すいません！ 番号を間違えました。

失礼します！」

佐藤は、ハアハア息をついて、輝樹を見る。

輝樹「佐藤くん、私から一つお願いがある。

聞いてくれれば、これは君と私だけの事になる」

佐藤「な、何をすればいいのですか？」

× × ×

佐藤「そ、それは…、無理です！　ウチだけでも難しいのに、民放も、というのは…」

輝樹「いや、全部だ。表沙汰になれば、オンエアしている番組、配信している過去の番組は全て休止、パッケージも販売停止・回収だ。大河だけでも3つ4つ出てるからな」

佐藤「し、しかし…」

輝樹「民放の人気シリーズにも子役時代から満遍なく出てる。オレがばらせば、JBAは知ってて隠してたのかって話になる。それでもいいんなら、構わないが…？」

佐藤「…わ、分かりました。上に掛け合っとなんとかしてみます」

輝樹「『なんとかしてみます』じゃない。やるんだ」

佐藤「…」

輝樹「君の総合プロジューサーとしての腕に期待しているよ。…これはトイレにでも流しておくから」

佐藤「このトイレで流さないで下さいよ!」

輝樹「…分かってるよ」

○輝樹の自宅（その日…夜）

輝樹がトイレに紙を流す。

輝樹M「…企画会議は終了だ。後は、キャスティングだが…、ロクな役者は出てこないだろうな…」

○アルプステレビ（報道フロア）（昼）

机に座っている報道局長の山口弘、机に前には、制作局長の平井武、コンテンツ部部長の藤川誠が立っている。

山口「何だって!? オレにJBAの討論会に出ろって言うのか? 冗談も休み休み言え。それに君たちがこのフロアに入ってくるこ

と自体問題なんだぞ」

平井「それはよく分かっています、山口さん。でも、これは局にとって大問題なんです」

山口「俳優の羽山がらみ、としか分らないのに、なぜ私が出なきゃならんだ。そういうのはそっちの仕事だろう？ J B Aは何を考えているんだ」

平井「おっしゃる通りなのですが、J B Aからは報道の責任者に出て欲しいとの脅しに近い要望がありまして……。それに出来ないとなると、編成にとって大打撃なんです」

藤川「そうなんです、山口さん。これも詳しいことは言えないのですが、出なかった場合は、コンテンツ部としても大幅な減収は避けられないんです」

山口「何を言われようと、オレは断固として出ない。この討論会のテーマの『公人と私人』の問題は、一言で片付けられるような簡単なものじゃない。それにオレが出れば局の総意と受け止められかねない。断る」

平井「：それでは、キャップかデスクにお願いできませんか？」

山口「それも同じことだ。無理だ」

藤川「：では、他の記者の方ではどうでしょうか？」

山口「それも変わらない」

平井「：どうしても、ご協力頂けないということですか？」

山口「そういうことだ」

2人とも、キsher。

平井「：分かりました。仕方ないですね。：でしたら、この件に関する局全体の損失は、報道に負ってもらいますから。支局の2つ、3つは飛びますよ？」

山口「おい！　ウチの報道体制を壊そうっていうのか？」

平井「支局が飛んでも、そちらの数字は下がらないでしょう？」

藤川「平井さんのいう通りです。儲けている訳ではないでしょうから」

山口「そういう言い方はないだろう？ 君たちも知っているように、報道は使命を持つてやっているんだ。金や数字の問題じゃない」

平井「使命とおっしゃるのでしたら、同時に責任も負って下さい。なぜ出ることが出来ないかという説明責任を。他局が出てるのに、ウチだけ出てなかったら、どういう説明をするつもりなのですか？ 逃げてると思われるだけじゃですか？」

藤川「そうです。この『公人と私人』の件は、局全体の姿勢が問われているんですよ。報道を前提としない、基本的に公益性を有していない私人に、報道としてお金を使うことが許されるのですか？ それをはっきりして欲しいということなんですよ」

平井「きちんと報道ができるのも、お金があるってことでしょうか？ お金に関する説明責任は、いつも国会議員に追及してるじゃないませんか？」

山口「あれは、国民の税金だからだ」

平井「でしたら、会社のお金は私たちが稼いだお金ですから、モノを言う権利はあるはずですよね？」

山口「…」

藤川「…何でしたら、この話、上にあげますか…？」

山口「…」

山口は、椅子に寄りかかる。

山口「分かった。ベテランの記者を出す。ただし、あくまで、その討論会の取材という形にしてくれ。それ以上は譲れない」

平井と藤川は顔を見合わす。

平井「分かりました。こちらとしても不満はありませんが、仕方ないですね。それで相談してみます」

山口「相談？」

平井「はい。足並みは揃えておかないといけませんので」

○ J B A 討論会（午前中）

N H K の日曜討論会のレイアウト。

お誕生日席には、司会の牛山加奈子と

J B A 報道局次長の高橋修二。

司会から見て、右に、S B S 首都圏テレ

ビの多良伴内、毎朝テレビの植村直之。

司会から見て、左に、アルプステレビの

長谷川義輝、大日本テレビの三上さお

り、

牛山「みなさま、おはようございます。日曜

討論の時間です。今日は、報道の根幹に関

わるテーマの一つであります『公人と私人

に対する取材のあり方』について、特別に

民放各局の報道部門の記者のみなさんにお

越し頂き、議論して行きたいと思います」

以下、呼ばれたら軽くお辞儀をする。

牛山「ご参加頂いているのは、アルプステレ

ビの長谷川さん、S B S テレビの多良さん、

大日本テレビの三上さん、毎朝テレビの植

村さん、そして、J B A 報道局次長の高橋

です」

牛山「そして、今回オブザーバーとして、俳優の羽山輝樹さんにもお越しいただいております」

輝樹が向正面に歩いてきて、座る。

四人とも、怪訝そうな顔で輝樹を見る。

牛山「ではみなさま、よろしくお願い致します」

全員、礼。

全員「よろしくお願い致します」

牛山「さて、今回のテーマですが、議論に先立ちまして、まずJBA報道局次長の高橋よりお話をさせて頂きます」

高橋「JBA報道局次長の高橋でございます。みなさまご承知の通り、私どもJBAは公共放送であり、視聴者のみなさまからの受信料で成り立っております。ですので、私どもは視聴者のみなさまに、その名の通り、公共に資する番組作りをしなければなりません。ですので、公人と私人の取材につい

ては、局内で十分議論して慎重に行なっております。もちろん取材対象の方にも、当方の取材意図や番組構成などを細かくご説明し、ご理解を頂いた上で、取材をしております」

牛山「では次に、アルプステレビの長谷川さん、お願い致します」

長谷川「長谷川でございます。まず、私個人の意見として申し上げますが、国民の選挙で選ばれた国会議員や、都道府県知事、各自治体の首長さんや議員の方が公人であることは、みなさん異論のないところだと思います」

出席者が頷く。

長谷川「また、政府の意思決定の中枢にいる方、例えば、事務次官や財務官なども、その動静が社会的に与える影響が大きいですから、公人と捉えてもいいかと思えます。日銀総裁などもそれに当たるでしょう」

長谷川「ただ、私どものようにメディアに関

わる人間、特にアナウンサーなどについては、露出があり、その発言に一定の影響力はあるものの、あくまで民間のテレビ局の局員、または、その局と契約をしている方々ですから、その周辺、つまり局員や契約している方の家族のみなさんも含めて、一概に公人とみなすのは短絡的で、取材の対象と考えるのは難しいのではないかと思います」

牛山「ありがとうございます。それでは、BSテレビの多良さん、お願い致します」

多良「多良でございます。私も同じく、一個人の考えとして申し上げますが、テレビ局は公共の電波を利用させて頂いているのは確かでございます。ですが、あくまで民間の会社ですので、私も、先ほどの長谷川さんのご意見に近いです。」

多良「ただ、民間の方でも、以前は経団連の会長にSPが付いていた期間もありましたので、線引きが難しいことは確かです」

多良「後は、宗教団体も公人ではないものの、社会的な影響力が大きい場合もあり、公的な団体とみなして、取材の対象となる場合もあるかと思っています。もちろん、宗教の自由は憲法で保障されていますので、公人としての取材は慎重に行う必要があると思います」

牛山「ありがとうございます。それでは、大日本テレビの三上さんお願いします」

三上「三上でございます。私もみなさんと同じく一個人の意見としてお話しますが、今までおっしゃっていた、政治や経済に関わる分野以外にもエンターテインメントの分野にも公人・私人の課題はあると考えております。芸能人やアーティスト、映画関係者、小説家や漫画家の方がそれに当たるでしょうか」

三上「芸能人の方は、積極的にご自身を売り込むために、逆に取材をして欲しいと依頼されることもあります。その場合は、取材

できる、という意味で公人とみなしてもいいのではないかと思います」

三上「ただ、最近是一部の方で、顔出しNGの方もいらっしゃる。そういう方の創作されたものを元にしたドラマなどが作られるような場合には、公人・私人の区別は別として、取材などに関してはご本人の意志を尊重しています」

長谷川が横から、

長谷川「そういう方にご迷惑をおかけしないことが大切ですよね」

三上「そうですね」

長谷川「三上さんのご意見に付け加えさせて頂きますと、スポーツ選手が挙げられますね。プロ野球選手などは多くの人の憧れやなりたい人物の方が多いので、公人として取材させて頂くことが多いのですが、その親族、つまり、ご家族やご両親となると線引きが難しいと思います。その選手の成長の過程で親御さんの役割は少なくありませ

なので。ですから、親族の方が取材に応じて頂ける場合は、そうしますが、競技に集中したい方に対して許可を取らない無理な取材ということは如何なものかと思います。

ただ、最近は卓球に代表されるようにトップ選手の低年齢化が進んでいますから、未成年の方に対しての取材には気をつけています。しかし、どのくらいの力量のある選手を取材するかというのは、悩ましいところですよ。選手の成長物語のような番組を作ることもありますから。もちろん対象の方には必ず許可は取っています」

牛山「ありがとうございます。それでは、毎朝テレビの植村さん、お願いします」

植村「植村です。私も、今までのみなさんと同じで申し訳ないのですが、一個人の意見として述べさせて頂きますと、他局の方と同様に私どもの局も人員が限られていますので、自分たちだけで取材できる範囲というのは限られております。その場合に頼ら

せて頂くのは、専門家の方やノンフィクション作家のみなさんです。憲法で言論の自由は保障されていますが、出版前に全てのノンフィクションの書籍をファクトチェックするというのは、現実的ではありません。ですので、当然、私たちも裏付けの取材をします。そこを怠ると誤報になってしまいますので。そう言った作家のみなさんは、ご自身の責任で世の中に書籍などを通じて発信をしている方ですので、ある意味、公人と言ってもいいのではないかと思います。牛山「ありがとうございます。それでは、議論に入らせて頂きます」

議論 1 (音なし。長谷川と三上)

×

×

×

議論 2 (音なし。多良と植村)

×

×

×

議論 3 (音なし。牛山が長谷川を指す)

×

×

×

牛山「それでは、最後に羽山さん、何かご発言ありますでしょうか？」

全員、羽山を見る。

輝樹「まずはオブザーバーとして参加させて頂きありがとうございます。JBAさんを始めとする各局の記者の方にもご参加いただいたことを感謝申し上げます」

輝樹は口調を変える。

輝樹「…で、お話でみなさんあれこれとおっしゃってましたが、結局、誰を公人とするか私人とするかは、あなた方が決めているんですよね？取材対象として『おいしい』と思えば、公人にしてるんでしょう？」

場が静まる。

輝樹「だって、『私たちは、この人、私人かどうか取材してます』、なんて言わないでしょ？公人だから取材できるのではなく、取材したいから公人に行っているのではないのですか？」

輝樹「…ま、これは私一個人の意見ですが…」

フィクション劇場 第四話「公人と私人」

場が、静まり返る。

輝樹「ところで、みなさんは今日どういう立場でここにいらしているのですか？ 取材する時は『テレビ局』で、意見をおっしゃる時は『一個人』なんですか？」

E
N
D

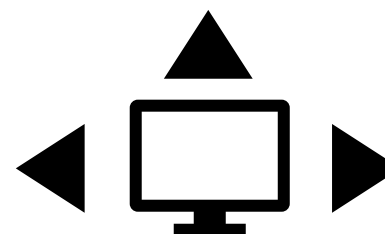
（2025年6月15日 初出）

（2025年11月18日 加筆・修正）



フィクション劇場
第五話
「容姿」

大太
大



【登場人物】

宮田 健一（みやた・けんいち）（17）：高校2年生。母子家庭。愛称は「ケン」

志村 知子（しむら・ともこ）（16）：健一の幼なじみ。高校1年生。愛称は「トモチヤン」

工藤 優希（くどう・ゆうき）（17）：健一の友人4人のリーダー格。高校2年生。昭和の香りのする不良スタイル。短ラン・赤いシャツ着用

冲山 悟（おきやま・さとる）（17）：工藤の仲間。高校2年生。長ラン長いツメ襟の制服着用

高野 修平（たかの・しゅうへい）（17）：工藤の仲間。高校2年生。ドカン着用

田沢 弘（たざわ・ひろし）（17）：工藤の仲間。高校2年生。4人のプレーン的存在。メガネ。ツータック・ボントタン着用

フィクション劇場 第五話「容姿」

宮田 久美子（みやた・くみこ）（39）：健

一の母親。ケーキ屋「カムイ」を經營して
いる

工藤 秀明（くどう・ひであき）（37）：優

希の父親

坂上 昌也（さかがみ・まさや）（43）：健

一のクラスの担任

生徒（モブ）

教師（モブ）

【あらすじ】

高校2年生の宮田健一は、一つ下の幼なじみ・志村知子と、同級生・工藤優希がリーダー格の昭和の不良の容姿をした4人組と学校生活を送っている。

ある時、知子は工藤たちが健一をいじめていると誤解し、それに対してケーキ屋を営む、健一の母・久美子が学校にクレームを入れたことで、健一と4人組は、理由が分からないまま別々の教室で過ごすことになる。

その週末に、久美子の店にクレマーらしき客が来るが、工藤が偶然通りかかり、この客は自分の父親の工藤秀明で、技術者なので細かいところが気になるだけだと話す。そして、父親のように容姿だけで判断されないような服を作りたいと語る。

週明け、誤解に気づいた知子は4人組に謝罪し、許される。工藤は二人が恋人だろう、とからかおうとするが、それが理解されず、他の3人と落ち込む。

○健一の家・登校風景（月曜日…朝）

志村知子が宮田健一の家の呼び鈴（お店の裏に玄関がある）を押す。

知子「おはようございます。知子です」

宮田久美子「ああ、トモちゃん、おはよう。

ほら、健一！ トモちゃんが来てるから急ぎなさい！」

健一が玄関を出る。

健一「行って来ます」

健一と知子が並んで歩いて学校に向かっている。

健一「トモちゃん、新しいクラスには慣れた？」

知子「何とかってところ。ネットで話題になってることとかを知らないと話に入っていないから、ちょっと大変かな」

健一「例えば？」

知子「セイウチ幼稚園とか」

健一「ああ、あれね。人気あるみたいだね」

知子「『茶柱』がどうか『利休』がどうか、単語の意味を覚えないといけないから」

知子「ケンくんの方は、どうなの？」

健一「うん、面白い人たちが居て、楽しいよ」

知子「じゃあ、良かったね」

健一「うん」

○健一の教室（同）

健一が扉を開ける。

健一「おはよう」

話をしていた4人の不良系の生徒が、

健一を睨む。

健一「お、おはよう…」

そして、健一を見て、微笑む。

工藤優希「よお、ケンじゃねーか」

健一「優希くん、おはよう。みんな元気？」

沖山智「おーよ。オレたちや元気が取り柄だ

からよ」

高野修平「悟、お前は元気　〃だけ〃じゃね

ーのか？」

沖山「うるせえな修平。まるでオレがそれだ
けみたいじゃねーか」

田沢弘「まあまあ、落ち着けよ、悟。ウチの
じいちゃんも、体が資本だって言ってたか
らよ。そこが大丈夫なら、とりあえずそれ
でいいんじゃないか？」

健一「ところで、みんな何の話をしてたの？」

工藤「ああ、どうやったら成り上がるかっ
てことを話してたんだよ」

健一「みんな、上昇志向なんだね」

工藤「上昇っていうか、一発当てて一生楽し
て暮らせる方法ってヤツだな」

健一「じゃあ、スマホのゲームアプリとかど
う？ 潰れかけてた老舗のＩＴ会社が復活
したくらいだし」

工藤「ケン、オレはそういうのがよく分かん
ないんだよ。一応、スマホは持ってるんだ
が、ほとんど電話にしか使ってなくてな。

田沢「お前、この辺詳しくなかったか？」

田沢「はっはっは。この４人のブレインと呼
ばれている、このオレだ。それくらいは先
刻承知だぜ。実は、すげえアプリのアイデ

アがあるんだ」

健一「へえ」

高野「聞かせろよ、田沢」

田沢「ああ。ずばり、数字でひらがなを表示させるアプリだ」

沖山「どういう風にだ？」

田沢「具体的には2桁の数字を使うんだ。みんな五十音は知ってるだろう？」

工藤「バカにすんなよ、田沢。そのくらい分かるぜ」

田沢「五十音の行の『あかさたな…』を1桁目の数字に、縦の『あいうえお』を2桁目の数字に割り当てるんだ」

健一「それで、どうするの？」

田沢「つまり『11』なら『あ』、『12』なら『い』という具合だ。な、ウケそうだろう？ この法則を知らないと、他のヤツにはパッと見じゃあ分からねえ。メッセージと暗号の両方を兼ね備えているんだぜ？」

高野「そりゃ、面白そうだ。で、いつ出来る

んだ？」

田沢「…それが、プログラムってヤツが難しくってよ。一緒にやってくれるヤツが居りゃあ、ドカンと行くんだがな…」

沖山「田沢、お前が履いてるのは、ドカンじゃなくてツータック・ボントンだろ？」

田沢「悟！　そういう切り返しはいらねえんだよ！」

一同「ははは」

沖山「修平はどうなんだ？　なんかアイデアあるのか？」

高野「オレは、そういうのじゃなくて、モノを作ってナンボだと思ってるからさ。そっちな」

健一「面白そうなのがあるの？」

高野「ああ。『なめ猫』みたいなヤツだ。うちのじいちゃんが若い頃に凄く流行ってたらしくってよ。だから動物系とかがいいんじゃないかと思ってさ」

健一「へえ、そういうのがあったんだ」

高野「猫にオレたちみたいな服着せてよ。決
め台詞は『なめんなよ』ってヤツ」

健一「『なめこ』じゃないんだ」

高野「あれは、服着せられないだろ？」

健一「じゃあ、修平さんの服のセンスが活か
せる動物ってことだね」

高野「そういうこと」

健一「優希くんは？」

工藤「オレか？ オレも服には興味あるが…、
ここでは言えねえよ」

沖山「なんだよ、優希。もったいぶらずに話
せよ」

工藤「うるせー！ ダチでも言えないことが
あるんだよ。ほっとけ！」

沖山「…ったく言って減るもんじゃねえのに」

健一「優希くん、僕に出来ることがあれば手
伝うよ」

工藤「ケン、ナマいってんじゃねーよ」

工藤が健一の胸を小突く。

健一「ごほっ、ごほっ」

一同「ははは」

知子が廊下を上がって、工藤が小突くところから、健一の教室を覗き見している。

知子は健一の姿を見て、いじめられていると誤解してびっくりする。

知子「!?」

担任の坂上が向こうから歩いてくる。

知子はそれに気づき、小走りに階段を降りて、自分の教室に戻っていく。

坂上が知子を見て少し不思議がる。

担任の坂上が入ってくる。

坂上「よし、そろそろホームルーム始めるぞ」

クラスの全員が席に戻る。

坂上は4人を見る。

坂上「工藤たち、何回も言ってるが、その服装なんかなんなのか？」

工藤「先生、これはファッションだよ。ちゃんと制服だろ？」

田沢「そうそう。最近は、『水溶性』とか言つて、いろんなのがあっていいってのがナウいんだろ？ 細かいこと気にすんな」

高野が田沢に顔を近づける。

小声で、

高野「さすが田沢だな」

田沢も高野に顔を近づける。

小声で、

田沢「まあな。民明書房は伊達じゃねえ」

坂上「田沢、それを言うなら『多様性』だぞ」

田沢と高野は顔を見合わす。

坂上「あまり目立って、他と揉め事を起こさないようにしろよ」

4人「はい」

○健一の家（火曜日…朝）

知子が呼び鈴を鳴らす。

久美子が外に出てくる

知子「おはようございます、おばさん。ケンくんは？」。

久美子「ごめんね、トモちゃん。今日、健一
は胸が痛いから休むって言って」

知子「そうなんだ…」

知子が少し考える。

知子「もしかしたら…」

久美子「トモちゃん、学校で何かあったの？」

知子「詳しいことは分からないんですけど…」

○学校の職員室（火曜日…昼）

坂上が直立不動で、緊張して電話で話
している。

坂上「はい！ はい！（頭を下げて）大変
申し訳ありません！ 生徒の方はきちんと
指導しますので！ はい！ はい！（頭
を下げて）失礼します！」

○健一の教室（水曜日…朝）

健一が教室のドアを開ける。

4人に向かって、

健一「みんな。おはよう」

4人は俯いたり、顔を背けたりして、挨拶しない。

健一「どうしたの？」

工藤「どうもしねーよ」

健一「？」

坂上が入ってくる。

坂上「よし、ホームルーム始めるぞ」

健一は、後の工藤の方を見る。

健一「…」

○健一の教室（木曜日…朝）

健一が教室のドアを開ける。4人に向かって。

健一「みんな、おはよう」

4人は前日と同じリアクション。

健一「優希くん、どうしたの？ 昨日といい

今日といい」

工藤「気にしないでくれ」

健一「気にしないでって…、気になるよ」

坂上が教室に入ってくる。

坂上「ホームルーム始めるぞ」

工藤が健一の耳元で囁く。

工藤「昼メシ早めに食って、体育館の裏に来てくれ」

○学校の廊下（同日…昼）

知子は、健一が階段を降りてくるのを見かけて、声を掛けようとする。

知子「あ、ケンく…」

健一の後ろから工藤たち4人が階段を降りてくる。

知子「…」

知子は工藤たちの後をつける。

知子「…」

○体育館裏（同日…昼）

健一が体育館を背にして立っている。
その周りを工藤たちが取り囲んでいる。
それを知子が体育館の影から隠れて見ている。

知子「…」

健一「僕に近づくなって？」

工藤「そうだ。先公がそう言いやがったんだ」

健一「いつ？」

工藤「お前が休んだ日だ」

健一「理由は？」

工藤「知らねえよ。こっちが聞きたいぜ」

健一「なら、どうして？」

冲山「ケン、ホントにオレたちにもよく分か

らねえんだよ。元々、オレらは先公のウケ

が良くねえのは分かっちゃいるが、ケンに

近寄るなっつてのは初めてだしな」

健一「そうだね」

高野「ケン、お前の方は、何か身に覚えはね

えのか？」

健一「あるわけないよ」

高野は田沢の方を向いて、

高野「おい、田沢。お前の頭で何かわからね

えのか？」

田沢「オ、オレはブレインだが、探偵とかじ

やねえ。刑事とか警部補でも無理だ」

高野「お前とオレたちが、これまで仲良くやってきたのは、先公も知ってるはずなんだから……」

健一「そうだよな」

工藤「まあ、タイプは全然違うけどな。けど、オレたちにとって、お前は『清四郎』みたいなもんだからよ。胸張って人に話せるダチの一人だし」

健一は茶化して、

健一「もしかして、この前、田沢くんが『水溶性』とか言ったからじゃないの？」

田沢「そんな訳ねえだろ！」

田沢は健一の頭を叩く。

(フラッシュ)

知子が目を見開いてびっくりする。

知子「!？」

(フラッシュ終わり)

健一「じゃあ、どうしてこうなったんだろうね……」

知子はその場を立ち去る。

全員考える。

全員「…」

○職員室（同日…夜）

職員室で電話を取っている坂上。

直立不動。

坂上「はい！ はい！ いいえ！ きちんと
生徒の方には指導を…。はい！ 教育委員
会にですか!? いや、それはちょっと…。
はい！ こちらの指導が行き届かず！ は
い！ 該当の生徒には厳しく対応しますの
で！ はい！ はい！（頭を下げて）そ
れでは失礼します」

○健一の教室（金曜日…朝）

健一が教室のドアを開ける。

健一「おはよう」

4人ともいない。

健一「あれ？」

周りをキョロキョロ見回す。

坂上が教室に入ってくる。

坂上「それじゃあ、ホームルームを始めるぞ」

ホームルーム。

× × ×

坂上「最後に、工藤、沖山、高野、田沢の4人は、都合により、今日から当分の間、別の部屋で授業を受けてもらうことになったので伝えておく。それではホームルームを終わる」

健一が坂上に駆け寄る。

健一「先生、優希くんたちが別の部屋ってどういうことですか？」

坂上は健一から顔を背ける。

坂上「どうもこうもない。職員会議で決まったことだ」

健一「理由を教えてください！」

坂上「だから、さっきも言ったように、職員会議で決まったことだ。それ以外には何も
ない」

健一「…」

○ケーキ屋「カムイ」(日曜日..昼)

知子が手伝いにやってくる。

宮田久美子「ゴメンね、トモちゃん。いつも手伝わせちゃって」

知子「いいんです、おばさん。今日は特に何もすることがないので」

× × ×

優希の父親の工藤秀明が陳列棚を舐めるように見ている。

ストリート系の尖った服装とアクセサリ。

二人は直立でテンパりながら、目で秀明を追っている。

久美子と知子はチラチラとお互いを見ながら、

久美子・知子「…」

秀明「いちごのショートケーキ…」

久美子「か、かしこまりました」

久美子が陳列棚からトングでケーキを
取り出そうとする。

久美子「おいくつですか？」

秀明が、久美子の言葉を遮る。

秀明「トレイごと出してくれ」

久美子は不思議そうに、

久美子「？ は、はい……」

久美子はケーキを陳列棚の上に置く。

秀明「……一つ一つの重さを測ってくれ」

久美子「お、重さですか？」

秀明「……そうだ」

秀明は厨房を見て、

秀明「クッキングスケールがあるんだろ？」

久美子「あるには、ありますが……」

秀明は少し、怒気を含んで、

秀明「測ってくれと言ってるんだが……」

久美子「は、はい。分かりました」

久美子は知子にその場で伏せるように
手で指示を出す。

知子は秀明に見えないように、陳列棚

に隠れるように、座る。

久美子が厨房から、クッキングスケールを持ってくる。

秀明がスマホを取り出して、計算アプリを立ち上げる。

秀明「測った数値を読み上げてくれ」

久美子「は、はい」

× × ×

久美子はクッキングスケールから最後のケーキを戻しながら、

久美子「これで、全部です」

秀明「14個、だったな」

久美子「はい、そうです」

秀明がスマホで計算を確認している。

秀明「平均値が118gで誤差が最大8gか

」

久美子「」

秀明「これはこの店の誤差範囲内か？」

久美子「？」

久美子は少し考える。

久美子「ご、誤差といいますが、なるべく大きさが合うように作っているだけです。で…、具体的な基準というものは…」

秀明「…分かった。じゃあ、3つくれ」

久美子「は、はい」

久美子は三角形のショートケーキを違いに入れ始める。

秀明が手を出して、

秀明「ちょっと待ってください」

久美子「はい。何か…？」

秀明は、箱に入っているイチゴのショート

ケーキを指差して、

秀明「この2つのショートケーキ、切っている角度が違っていませんか？」

久美子「…手で切っておりますので…、多少ずれているとは思いますが…」

秀明「切った角度を測ってくれないか？」

久美子「こ、ここには角度を測るようなものはありませんで…」

秀明「分度器はないのか？」

久美子「は、はい……」

知子は座ったまま。そして、久美子を見上げる形で、様子を見ている。

知子「……」

秀明「イチゴは仕方ないとしても、重さや切った角度が違うケーキを同じ値段で売るのが？」

久美子「い、いえ……、決して悪気がある訳ではなくて……」

久美子、困る。

優希（声）「親父か？」

秀明が振り返る。

久美子が優希を見る。

ケーキ屋に面した道路を優希が歩いて近寄る。

白系の服装にネックに紺の線の入ったクリーム色のベスト。

ジャケットを片手で持っている。

優希「やっぱり親父か。何してるんだ？」

秀明「優希か。いや、久しぶりにケーキでも

買って帰ろうかと思ってな」

優希「…その割には、なんか雰囲気が硬いな
…」

優希が久美子を見る。

優希「おばさん、親父が何かしましたか？」

久美子「い、いえ、何もされてはいませんが
…、ケーキの重さがどうか、切った角度
がどうかおっしゃいまして…」

優希、大声で、

優希「はっはっは！」

優希、秀明の肩を叩いて、

優希「親父！ またやったのかよ！」

きょんとする久美子と知子。

久美子・知子「？」

優希「おばさん、ウチの親父はこう見えても
技術者でさ。こういうのに無茶苦茶うるさ
いんですよ。角度がどうか、誤差がどの
くらいあるのかとか」

優希「親父は、ただでさえガタイがデカくて
怖そうだし、私服がこんなんでしょ？ だ

から、せめて技術者になるのは会社だけに
しとけて言ってるんですけどね」

秀明はちよつと縮こまる。

秀明「す、すまん……」

奥から健一が出てくる。

健一「何か笑い声が聞こえて来たけど、どう
かしたの？」

健一が優希を見つける。

健一「優希くん？」

優希「ケンじゃねえか。こんなとこで何して
んだ。バイトか？」

健一「バイトも何も、ここ僕ん家だよ」

優希「えっ？　ここお前ん家なのか!?　そん
な話し聞いた事ねえぞ？」

健一「うん。ウチ、母子家庭だからさ。そう
いうのって、みんなが気を使っちゃうかな
って思ってる……」

久美子は健一の方を向いて、

久美子「健一、この子知り合いなの？」

健一「うん。学校の友達の工藤優希くん」

工藤は礼をしながら、

優希「おばさん、こんにちは。工藤優希と言います」

久美子「は、はい……。こんにちは」

健一「：それにしても、今日の優希くんは随分おしゃれな格好だね」

優希は、ジャケットでベストを隠す。

優希「それを言うんじゃないえ！」

健一「学校にいる時は、みんなと同じ変わっただ形の制服だけど」

久美子「健一、みんなって？」

健一「優希くんとあと3人友達がいるんだ。

4人とも変わった制服を着てるんだ」

久美子は知子を見る。

知子は何回か頷く。

優希が秀明の肩を叩く。

優希「さあ、親父。さっさと買って家で食べようぜ。美味しいんだろ、ここのケーキ」

秀明「：ああ」

健一「母さん、何かおまけ付けてあげてよ」

久美子「じゃあ、他のケーキをどれか一つ……」

秀明がムツとして、久美子を睨む。

久美子「!？」

優希「おばさん、いいよ。親父はそういうのが嫌いでさ。まったく技術者ってのは頭が固いから。ケン、気持ちだけもらっとくわ」
健一「分かった。買ってくれてありがとう」

久美子はケーキを包んで、優希に渡す。

優希「あと、おばさん。大人の人にこういう言い方は失礼だと思いますけど、親父は親父なりに何とかしようと思っているんです。ガタイは変えられないし、服やアクセサリの趣味もそんなには変えられない。髪を染めるのだって、ファッションの一部だと思っ
てますから」

久美子「……」

優希「ただ、それを怖いと思うのは仕方がないし、実際そういう人の方が多いとは思いますが。でも、混んでる電車でそういう人と体が触れて、向こうから『あ、すいません』

って言われたりすると、『この人、いい人じゃない』って思ったりするんですよ。だから、そういうのを気にしなくていいような服ってないのになって思ってた」

久美子「…」

優希は振り返りざまに、健一に手を挙げながら、

優希「ケン、ありがとな。また来るよ」

健一「こっちこそ。ありがとう」

優希と秀明は何か話をしながら帰っていく。

○健一の教室（次の週の月曜日…朝）

4人が教室に居る。

優希が、教室の入り口をチラチラ見て
いる。

沖山「優希、お前、なんか落ち着きがねーな」

優希「そ、そんなことねーよ」

沖山「さっきから廊下の方ばっか見てるじゃねーか。何かあるのか？」

優希「だから、何でもねーって」

健一が教室のドアを開ける。

健一「おはよ…」

優希が健一に向けてダッシュする。

優希「ケン、ちょっとこい！」

優希は健一の腕を掴み、教室の隅に連れて行く。

健一「優希くん？」

高野「なんだあ？」

優希は健一に顔を近づける。

小声で、

優希「ケン、昨日のこと、あいつらには絶対

言うなよ」

健一「昨日のこと？」

優希「そうだ、昨日のことだ！」

健一「昨日のことって、もしかして…」

健一は大声で、

健一「優希くんがおしゃれなベスト着て…」

優希が手で健一の口を塞ぐ。

優希「だ・か・ら！ それを言うんじゃないえ

って言ってるんだ！」

健一「何で？」

優希「あいつらの手前、そういうのはマズいんだよ！」

優希は目を見開いて真顔で、

優希「分かったか？」

健一は少しニヤツとする。

健一「分かったよ」

優希はホッと胸を撫で下ろす。

優希「…ったく、頼むぜ」

優希は手を健一の口から離す。

二人は、残りの３人の方に向かって歩く。

田沢「優希、ケンと何かあったのか？」

優希「男同士のサシの話だ。首突っ込むじゃねー」

沖山、高野、田沢の３人は不思議がる。

健一は４人を見回して、

健一「…あ、そう言えば、今日はみんないるんだね」

沖山「そうなんだよ、ケン。先公が今日から今まで通りでいいってさ」

高野「そうそう。まったく、お前に構うなっ
て言ったり、戻って良いつて言ったり…、
よく分からんぜ」

田沢「ホント、おれの頭でも分からんよ」

健一「…じゃあ、ちょうど良かった。みんな
と話したいって子がいるんだけど、いい？」
優希「構わないぜ。ホームルームまで時間あ
るしな」

健一が、廊下で見てる知子に手招きす
る。

健一「トモちゃん、入って来なよ」

恐る恐る知子が入ってきて、小走り
で健一のちょっと後ろに立って、健一の
腕を持って、半分隠れるように立つ。

知子「…」

高野「ひゅ〜♪」

沖山「マブいスケじゃねーか」

田沢「誰よ？」

健一「幼なじみの志村知子ちゃん」

優希「幼なじみ？ それにしちゃ見かけない顔だな」

健一「僕が早生まれだから、学年はいつこ下なんだ」

優希「…で、オレらに何の話があるんだ？」

知子「あ、あの…」

知子は頭を下げる。

知子「ごめんなさい！」

4人は顔を見合わせる。

沖山「オレたちに、なんか悪いことしたか？」

知子は俯いて、

知子「みなさんが怖い人で、ケンくんが悪いことをしたんじゃないかって…」

4人は顔を見合わせて、笑顔で、

4人「はははは」

知子「…？」

高野「気にしてねえよ。いつもの事だ」

沖山「オレらのこと変な目で見る奴らもいるけどさ、オレたちはナウいと思ってやって

るからよ」

田沢「そうそう、唯我独尊よ」

優希「知子ちゃんゝ、とか言ったな。詳しいことは分からねえが、謝ってくれるのは嬉しいぜ。人を見かけで判断するってのは、なるべくやめた方がいいからな」

優希は3人の方を向いて、

優希「なあ！」

沖山「そうそう、オレたちやこう見えて真面目なんだぜ。族の集会なんか、行ったことねえし」

高野「アンパンキメて、ラリったりしたこともねえしな」

高野、歯を見せる。

高野「どうだ？ 綺麗なもんだろ？」

高野、腕をまくって、叩いて、

高野「ほら、ヤキの一つも入ってねえー」

田沢「タバコ吸ったこともねえからな。なあ

優希」

優希「そうそう。こう見えてもオレたちやガ

ラスのハートだからさ、お手柔らかに頼むわ」

4人「はははは」

知子のはにかむ。

優希「ところで、ケン。お前、知子ちゃんのこと幼なじみだとか言ってるが…」

小指を立てて、健一に見せながら、

優希「ホントは『コレ』なんじゃねえのか？」

沖山・高野・田沢「へっへっへ…」

4人はニヤニヤする。

健一は、首を傾げる。

健一「…小指がどうかしたの？」

（音）優希が目を見開く。

（音）沖山が右にいる優希を見る。

（音）高野が少しのけぞる。

（音）田沢が左下を向く。

優希「い、いや…。取り立てて意味はねえよ」

健一「？」

沖山、動揺を隠しながら、

沖山「と、知子ちゃん、こっちに来て話し…」

フィクション劇場 第五話「容姿」

しょうぜ」

知子「…うん」

知子は健一の腕を掴みながら、恐る恐る
沖山の方に行く。

3人は、話題を逸らそうと、健一と知子
と話をし出す。

工藤は自分の小指を見つめながら、

工藤M「オレは、これで…、ハートが、割れ
ました…」

E
N
D

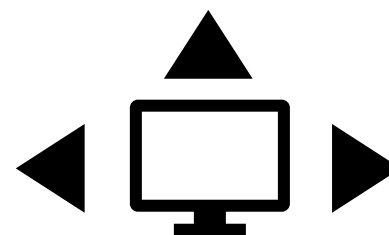
(2025年6月15日 初出)

(2025年11月18日 加筆・修正)



フィクション劇場
第六話
「矢面」

大太
大



フィクション劇場 第六話「矢面」

【登場人物】

佐藤 真（さとう・まこと）（39）：東京都

牛崎市市長。パワハラ疑惑にさらされる

飯山 光吉（いいやま・みつよし）（56）：

同企画部部长。パワハラ告発者

山川（やまかわ）（53）：宅配運転手。

宮原（みやはら）（61）：ワイドショー 司

会者

澤田（さわだ）（28）：ワイドショー アシ

スタント

平木（ひらき）（37）：ワイドショー 現地

レポーター

小田島（おだじま）（66）：ワイドショー コ

メンテーター

司会（46）：佐藤市長の記者会見司会者

後藤（ごとう）（33）：記者 佐藤を遮る

麦林（むぎばやし）（34）：毎朝新聞 女性

フィクション劇場 第六話「矢面」

記者

立石（たていし）（31）：大日本テレビ記者

大友（おおとも）（45）：日刊アルプス記者

藤野（ふじの）（44）：共同プレス記者

日野（ひの）（35）：SBS首都圏テレビ記

者

横山 一郎（よこやま・いちろう）（68）：

フリーの記者

田島（たじま）：佐藤の主治医

看護師3名

警察官A、B

警察署長：記者会見対応

公用車の運転手

秘書

新聞読者

記者多数

【あらすじ】

東京都牛崎市・企画部長の飯山光吉が、同市長の佐藤真のパワハラ行為を告発し、姿を消す。佐藤は、まずは飯山との認識合わせの必要性を強調する。

しかし、警察の搜索で、山中で飯山の靴だけが発見されるに至り、記者たちの佐藤への追求が激しくなる。

佐藤は記者への対応を続けるが、ストレス性の急性心不全を発症し、入院する。しかし、他の職員への影響を考えると、詳細は伏せたため、返って記者から疑問を持たれる。

不調を押してストレッチャーで会場に現れた佐藤は、記者の取材姿勢に疑問を呈し、自分にもしものことがあったら誰が責任を取るのかと問いかける。

その後、飯山が無事に保護されたが、記者たちは飯山に佐藤の不調の責任を正す。

2ヶ月後、佐藤の名前が新聞のおくやみ欄に、顔写真もなく掲載される。

○真っ直ぐな道路（夕方）

宅配の運転手の山川が、4トントラックを走らせている。

人気のない真っ直ぐな道。周辺は森。

山川「……まったく、オレの担当エリアは2つに分かれちゃってるから、面倒臭いんだよね。向こうで配ったら終わりなんだが、日も暮れて来たし。今日中に配達しないとうるさいから、さっさとやらないとな。ホント外資は人使いが荒いわ」

対向車線にハザードランプを付けた車が路肩に止まっている。

山川は横目で見るが、そのまま通り過ぎる。

× × ×

夜、山川が運転しているトラックが、対向車線から戻ってくる。

山川「ふう……今日はこれでおしまいっと。

さっさと家帰って、酒飲むか」

同じ場所に、ハザードを付けた車がま

だ止まっている。

山川「あの車、まだいるのか？　ずっとハザード点けっぱなしだったら、バッテリー上がっちゃうぞ。運ちゃんに教えとくか」

山川は、その車の後にトラックを止める。

ヘッドライトに照らされたナンバープレートに「わ」の文字。

山川「レンタカーか……。だったら余計に、だな」

山川は車を降り、中を覗き込む。

山川「誰もいないな……」

山川は運転席に、一通の封筒を見つけてる。

封筒には「佐藤真市長のパワハラを告発する。身の危険を感じるので、探さないで下さい」と書いてある。

山川「!?　こりゃ、ヤバいな。警察に連絡しない」と

山川は、その場で110番通報をする。

山川「もしもし、警察ですか？ 乗り捨ててあったレンタカーに変な封筒が置いてありまして。はい。場所は…」

× × ×

パトカーが到着する。

警察官が2名、降りてくる。

警察官A「あなたが、通報された方ですか？」

山川「はい。山川と言います」

警察官A「何があったか、状況を説明して頂けますか？ 最初から」

山川「はい。夕方に配達する時に、この車を見かけたのですが…」

運転手が状況を説明する。

○牛崎市 市庁舎玄関（翌日…朝）

佐藤真が公用車で当庁してくる。

佐藤が公用車から降りて、玄関に向かう。

マスコミが玄関で待ち構えている。

歩いている佐藤にマイクやICレコー

ダーを向けながら、

後藤「市長！　市長へのパワハラ告発文を残して、行方不明になっている方がいるという話は本当なのでしょうか？」

麦林「その告発文に身の危険を感じると書いてあったとの情報もあります。市長が反社などとの関わりがあるのではないのですか？」

立石「市長！　一言お願いします！」

佐藤は、記者たちの方を向く。

佐藤「そのような事実があったことは承知しています。ただ、反社などとの繋がりはありません」

佐藤「警察の捜査には全面的に協力致します」

○ワイドショー（以下、ワイドショー内（昼）

宮原「次は、パワハラを告発された、牛崎市の佐藤市長の問題ですが、何か進展があったのでしょうか？　取材している平木レポーターを呼んで見ましょう。平木さん？」

（市役所前）

平木「はい。平木です。私は今、朝から牛崎市役所の前にいます。佐藤市長のパワハラ疑惑について、職員の方にお話を聞こうとしたのですが、みなさんうつむいて足早に市役所に入って行きました。市の広報にも問い合わせたのですが、コメントは差し控えるということです」

（ワイドショー）

宮原「警察からの情報がありますか？」

（市役所前）

平木「はい。警察では現場に乗り捨ててあった、告発者が乗っていたと思われるレンタカーの貸し出し履歴から、行方不明者の特定は出来ているとしています。ただ、告発文に『身の危険を感じている』との文言があったことから、氏名を明らかにしていません」

（ワイドショー）

宮原「では、警察はこれからどのような対応

をすることになるのでしょうか？」

（市役所前）

平木「警察では、付近の森林に隠れている可能性も考え、捜索隊を出すとともに、告発者に対しては警察に出頭し、保護を求めるよう呼びかけています」

（ワイドショー）

宮原「そうすると、この告発内容の真偽については、まだ分かっていないということですか？」

（市役所前）

平木「はい。少なくとも、今のところは分かっていない状況です。ですが、警察への取材によると、告発内容に市の職員しか知り得ない情報があったとして、職員からの内部告発の可能性が高いと見ています」

（ワイドショー）

宮原「分かりました。では、この件に関しての、佐藤市長の記者会見などは予定されているのでしょうか？」

（市役所前）

平木「定例の会見が、明後日行われる予定です。その際に何か言及があるものと思われるます」

（ワイドショー）

宮原「ありがとうございます。引き続き取材をお願いします」

宮原「小田島さん、この件、どうお感じになりますか？」

小田島「そうですね。告発文の真偽のほどは分からないのですが、告発した方の『身の危険を感じる』というところが気になるですね。それほどの覚悟を持って今回の行動に出た訳ですから。私の感じでは信憑性はあるのではないかと思います」

宮原「そうですね。いずれにせよ、市長が記者会見でどのように説明されるのか、見守りたいと思います」

○記者会見場（明後日…昼）

舞台には演壇、後には『牛崎市』のよくある市松模様の看板。

司会「それでは、定例の記者会見を始めます。まず市長からお話頂き、その後、質疑応答を行います。それでは市長、ご登壇下さい」

佐藤が演壇に立つ。

佐藤が軽く礼をする。

佐藤「それでは、よろしくお願い致します」
佐藤「まず、ふるさと納税の返礼品につきまして、新たに品目を5品目追加することを決めました。詳細はお手元の資料にありますので、ご覧下さい」

記者たちが渋い顔をする。

佐藤「次に、市職員へのカスタマーハラスメント対策についてですが…」

記者の後藤が市長の発言を遮る。

後藤「市長！ 今日私たちが聞きたいのは、カスタハラの話ではなく、市長へのパワハラ疑惑についてです。それ以外の件は、後で資料を見ますから、その件に絞ってお話し

下さい」

記者たちがざわつく。

佐藤「…分かりました」

佐藤「私のパワハラを告発した文書の件につきましては、警察から市への協力要請があり、対応しました。結果として、市の職員が作成したものと認められるとのことでした。ですが、告発した職員の安全面に配慮し、お名前は差し控えさせて頂きます。私把握している事実はそれだけです」

佐藤は司会者の方に目線で合図する。

司会「それでは、質疑に入らせて頂きます。ご質問のある方は、挙手をお願いします。私の方で指名しますので、所属とお名前をお話し頂いてから、ご質問下さい。では、どうぞ」

記者数名が手を挙げる。

司会「では、そちらの青のYシャツの方」

麦林「毎朝新聞の麦林と申します。このパワハラ疑惑について、市長としてはパワハラ

があったとの認識ですか？」

佐藤「まず、告発した職員の一刻も早い保護をお祈りします」

佐藤「ご質問の件ですが、私としましてはパウハラとの認識はありませんし、私のどういう行為がパウハラだったのかも分かりません。ただ、こういう事柄というのは、行為を受けた側の認識というのもあります。ですので、その告発した職員との認識合わせを行い、結論を出す形になるであろうと思います」

司会が当てる。

立石「大日本テレビの立石と申します。ただいま市長は『職員との認識合わせを行う』とおっしゃりましたが、その職員が現在、行方不明になっています。疑惑の結論を出すのは、その職員の所在が明らかになってからということですか？」

佐藤「みなさんにきちんとしたご説明をするためには、そういうことになるかと思いま

す」

記者がざわつく。

司会が当てる。

大友「日刊アルプスの大友です。しかし、その職員がいつ保護されるか分かりませんし、『身の危険を感じて』いるということは、その職員が告発した内容は事実なのではないですか？」

佐藤「ですので、お話ししていますように、認識合わせが必要だということです」

司会が当てる。

藤野「共同プレスの藤野です。職員が『身の危険を感じて』いるということは、市長が何かしらの圧力をかけているのではありませんか？」

佐藤「そういうことはありません。私が職員のみなさんに身の危険を感じさせるような圧力を掛けられる訳がありません」

司会が当てる。

日野「首都圏テレビの日野です。しかし、今

日の朝、登庁して来る職員の方にインタビューしようとしても、どなたにも答えて頂けません。本当に圧力をかけていないのですか？」

佐藤「他の職員 みなさんにも圧力をかけるような事はしておりません。いずれにせよ、当該職員の保護を待たないと、結論についてはお答え出来ません」

司会が当てる。

後藤「それでは、職員との認識合わせがなされて、市長がパワハラだと認められた場合は、その責任を取るおつもりがあるのですか？」

佐藤「おっしゃる通りです。とにかく、職員が早く保護されることを祈っています」

○新聞読者の自宅（昼）

テーブルの上に新聞を置いて読んでいる。

市長のパワハラ疑惑の記事を見ている。

新聞読者「また、パワハラか…、最近多いなあ…」

○レンタカーが発見された周辺の山中（夕方）
警察が搜索していた時に、沢の横に、職員
員の靴が置いてある。

警官A「おい！ これは、例の職員の靴じゃないか？」

警官Bは沢の方を見ながら、

警官B「その可能性が高そうだな…。しかし、場所が良くない。急いで鑑識を呼ぼう。あと、親族の方を呼んで靴の確認も」

警官A「了解しました」

○警察の記者会見場（その日の夜）

警察署長が長机に座っている。

長机にはマイク。記者多数。

カメラのフラッシュが焚かれる。

警察署長「えー、行方不明となっている、牛崎市職員の搜索について、新たな事実が判

明しましたので、お知らせします」

警察署長「本日、午後6時頃、行方不明者が
乗り捨てたと思われるレンタカーの場所か
ら、東方向に500mほど入った森林の中
の沢のそばから、行方不明者のものと思わ
れる靴を発見しました」

警察署長「これを受けまして、警察としまし
ては、この事案が緊急性の高いものと判断
し、ご家族のご了承の上、本案件を公開捜
査とすることとしました」

警察署長「行方不明者の氏名は『飯山 光吉』
さん、56歳。牛崎市市役所勤務。役職は
企画部部長です」

警察署長「では、質問をどうぞ」

○牛崎市 市庁舎玄関（朝）

記者が群がっている。

佐藤が車で乗り付ける。

佐藤が車から降りる。

佐藤が市庁舎に入っていく。

後藤「市長！ 行方不明の飯山部長の靴が見
つかったそうですね？」

麦林「沢のそばにあったとの話ですが！」

立石「市長、何かおっしゃって下さい！」

佐藤は記者の方を向く。

佐藤「その件は、警察からご連絡頂いて把握
しています。記者会見の準備をしますので、
ご連絡をお待ち下さい」

○記者会見場（昼）

司会「それでは、これより警察の捜査に対す
る市役所の対応について、記者会見を行い
ます」

佐藤が説明する。

× × ×

司会「それでは、ご質問をどうぞ」

司会が記者を当てる。

後藤「市長のパワハラ疑惑の件ですが、告発
した部長の靴が沢で見つかった件はご承知
でしょうか？」

佐藤「承知しています。今、警察の方で周辺の搜索をしていると聞いております。部長の一刻も早い保護をお祈りしておりますし、私たちが協力できるところは全面的に協力していく所存です」

麦林が続けて、

麦林「これでも、パワハラ疑惑を否定されるのですか？」

佐藤「以前にもお話したように、当該部長と認識合わせをして、結論を出すという考えに変わりはありません」

司会が立石を当てる。

立石「私どもの警察への取材から、状況として部長に最悪の事態が起きたことも考えられます。その場合は、どうされるおつもりですか？」

佐藤「そういう状況は考えたくありませんが、パワハラ疑惑については、まず、認識合わせを……」

大友が市長の発言を遮る。

大友「市長！ 人の命に関わることも知れないんですよ！ そんな呑気なことを言っているでもいいのですか！」

藤野「そうです！ もしものことがあったら、どう責任を取られるおつもりなんですか!？」

佐藤「…」

日野「部長は『身の危険』とおっしゃってますよね!? 認識のずれがあったとしても、そう思わせたのは市長ではないのですか!?! その責任をどのようにお考えなのですか!?!」

佐藤「…ですから、先ほどからお話していますように、まずは認識を合わせることが必要だと…」

日野「市長！ 私たちは市長の認識ではなく、事実関係を聞いているんですよ!? 部長の告発文が正しいかどうかということをし！」

佐藤「…」

栗本「先ほどから市長は、何を他人事のようにおっしゃっているのですか!?! ご自身の職員の方が身の危険を感じてまでも、訴え

ている話でしょう!? 当事者意識が無さすぎですよ！」

横山 一郎 「裏で揉み消そうとしてるんじゃないのか!? お前、反社の親分だろ！」

佐藤の表情が曇る。

佐藤「…」

記者会見の様子が続く。

× × ×

(別の日)

佐藤市長のぶら下がり取材。

多数のマイクを向けられなら話す。

記者は詰め寄る。

× × ×

(また別の日)

次の記者会見の様子になる。

佐藤市長が説明している。

記者が手を挙げて、立って市長を指差し、オーバーアクションで質問している。市長は少しやつれている。

× × ×

（またまた別の日）

再び、佐藤市長のぶらさがり取材。

市長の後ろからもうＣレコーダーが顔の前に出される。市長はやつれている。

× × ×

再び、記者会見。市長はかなりやつれている。

○市長の公用車（夜）

佐藤は公用車に乗り込む。

佐藤「ふう…」

佐藤はネクタイを緩める。

運転手「市長…、大変ですね」

佐藤「ええ。はっきりしていないことが多いので。下手に否定をすれば、部長に迷惑がかかることになりかねませんから、慎重にならざるを得ないんですよ。こちらの言い分だけを記者のみなさんにお伝えしても…、と。その辺りをご理解頂きたいのですが…」

× × ×

佐藤の家の前に到着する。

運転手「お疲れさまでした」

佐藤「ありがとう、お疲れさま」

佐藤が車を降りるためにドアを開けた時に、胸を押さえながら車の外に倒れる。

佐藤「ううっ…」

運転手「市長、大丈夫ですか!? しっかりして下さい。市長!」

○記者会見場（翌日…昼）

司会「マスコミのみなさま、大変申し訳ございません。佐藤市長は体調が悪く、本日の会見は中止と致します」

記者たちはざわつく。

後藤「ちょっと待って下さい。そんな急に言われても困ります。なぜ、もっと早く連絡をもらえなかったのですか？」

司会「すいません、私どもが聞いたのも急でしたので…」

麦林「体調不良なら、診断書を見せて下さい。

あるんでしょう？」

司会「それは…、私どもも把握しておりませんので…。申し訳ありませんが…」

立石「何も分からないでは、こちらも何も分からなですよ。せめて最低限の説明をして下さい」

司会「申し訳ありませんが、こちらも本当に何も分からないものですから…。それでは失礼します」

司会が退出する。

大友「…体調不良でドタキャンしておいて、診断書も出せないって…」

藤野「なんか…、なあ」

日野「そうそう」

記者たちは渋い顔。

○ワイドショー（昼）

宮原「…ということで、市長は体調不良で、会見をキャンセルとのことです。しかし、

こう言っただけですが、ちょっと……。小田島さん、どう思われますか？」

小田島「市長の容態については、何とも言えないところではあるので失礼な言い方になってしまのですが……。よく、国会議員が疑惑を追及されて、入院することがありますよね？」

宮原「ありますね」

小田島「あれも個人的には疑問に思うところはあるので、今回はそれに近い感じが……」

宮原「そうですね。それに今回は診断書が出せないというところが余計に……」

小田島「……はい、その辺りも気になりますね」

宮原「いずれにしましても新しい情報が入り次第、お伝え致します」

○市役所内の記者クラブ控室（数日後…昼）

控室に記者数名が待機している。

機材も運び込まれている。

秘書がノックして、ドアを開ける。

秘書「記者のみなさん、本日夜１０時から、市長が会見を開くことになりましたのでお知らせします」

後藤が立ち上がる。

後藤「夜１０時からですか？ 体調の問題ですか？ もう少し早くなりませんか？」

秘書「すいません。市長から、この時間でないと都合が悪いとのこと。秘書の私も詳しいことは承知しておりません。ご容赦下さい」

後藤「必ず会見を開くんですよ？」

秘書「はい、そうです。それでは失礼します」

秘書が控室から去る。

麦林「：おい、いくら何でも：」

立石「でも、やるっていうんだから：」

藤野「診断書もまだ出てないし：」

日野が立ち上がる。

日野「いずれにせよ、出なきゃいけないことには変わらないよ。デスクに残業の申請をしておかないと」

記者たちは控室で準備を始める。

○記者会見場（夜）

演台と後の市松模様の壁がある。

司会「遅い時間にお集まり頂きありがとうございます。ございます。それでは、今から市長の記者会見を行います。尚、市長の方は、まだ体調が思わしくないため、会見の時間は10分とさせていただきます」

記者がお互いに顔を見合わせて、ざわつく。

後藤「これだけ待って、たった10分なのか？」
麦林「まったく勝手過ぎるんじゃないか？」

会見場の外。

秘書が、市長を見下ろしている。

秘書「市長…、よろしいのですか？」

佐藤（声）「構いません。お願いします」

会見場内。

司会「それでは、佐藤市長、お入り下さい」

演台が職員二人に持ち上げられて、向

かって右に避けられる。

記者が、演題を目で追いながら不思議そうに見ている。

左の扉から、ドクターが入ってくる。

その後に、看護師3人が動かすストレッチャーに乗って、点滴と酸素吸引器を付けた佐藤が現れる。

会場が静まり返る。

市長が、田島（ドクター）の方を向く。

市長「ドクター、お願いします」

田島は頷く。

田島「私は、佐藤市長の主治医を務めております田島と申します。始めに市長の容態について、簡単にご説明させていただきます」

田島「市長は5日前の夜、自宅前で社用車を降りようとした際に、倒れて私どもの病院に救急搬送されました。病名はストレス性の急性心不全です。容態は専門用語で申しますと、NYHA3から4、安静時は無症状ですが、いつ発作が起きてもおかしくな

い状態です」

記者たち「：」

田島「私は医者立場として、今回の記者会見を開くことを控えるように強く助言しました。ですが、ご本人の意思が固く、私の付き添いと短時間を条件として、許可をしたら次第です。以上でございます」

司会「それでは、時間が限られていますので、お早めにご質問の方、お願い致します」

シーンとなる会場。

後藤が手を挙げ、司会が当てる。

後藤「市長。なぜ、この時間に会見を設定したのですか？　それほど容態が悪いのでしたら、もっと早い時間に：」

佐藤「：田島先生は、外来も担当しておられます。どこも医師不足なんだそうです。付き添いが条件でしたので、外来が終わってから、ということ、この時間に設定させて頂きました」

司会が麦林を当てる。

麦林「診断書を開示頂けなかったのは、なぜでしょうか？ 容態が分かっていれば、私どもも配慮できたのですが…」

佐藤「…今、明らかにしてしまおうと、職員が動揺してしまうと考えまして。それに、私がこの状態だと分かれば、記者のみなさんは私以外の職員への取材に行くでしょう？ 市長の容体はどうなんだ、と。でしたら何も知らない方がいいと」

記者たち「…」

司会が立石を当てる。

立石「パワハラ疑惑について、再度市長のご見解をお願いします。あったのですか、なかったのですか？」

佐藤「今までお話して来ましたように、私自身としてそういう認識はありません。ですが、部長がそう感じられたのであれば、その責任は全て私にありますし、それを負うことに躊躇はありません」

司会「他にありますでしょうか？」

佐藤「横山さん…、何かありますか？」

横山「…」

司会「では、これで…」

佐藤が司会に手を出して言葉を制する。

佐藤「少しだけお話しさせて下さい」

佐藤「失礼な言い方かも知れませんが、みなさんは、私が悪人であることを前提として、それを裏付けるようなことばかり探していませんでしたか？ 私市長であるとは言え、人間です。ああしろ、こうしろと言いたくなる時もありますし、虫の居所が悪くて、つい強い口調になることもあります。もちろん、職員によって受け止め方は違いますから、そういう配慮を怠っていたと言われれば、その通りです」

記者たち「…」

佐藤「ただ、この件で、みなさんは関係者の方にどのような質問などをされたのですか？ それを明らかにせず、結果だけが一人歩きしているのではないのですか？ そ

れは、曲がりなりにも事実だ、と言われればその通りですが……」

記者たち「……」

佐藤「パウハラ疑惑については、きちんと出るところに出て、説明を尽くして来たつもりです。それでもご納得頂けないのであれば、当然、身を引くことも考えますよ」

記者たち「……」

佐藤は一息おく。上を向いて、

佐藤「ところで……みなさんは、今日ここに何をしにいらしているのですか？」

佐藤「『取材』ですか……？」

記者たち「……」

佐藤「『取り調べ』ですか……？」

記者たち「……」

佐藤「それとも……、（顔を記者に向けて）『誰かの敵討ち』ですか……？」

記者たち「……」

佐藤「……私に、もしものことがあったら……、どうなさるんでしょうね……」

会場は静まる。

司会「それでは、他にないようですので、本日の記者会見を終わります」

○ワイドショー（次の日の昼）

宮原「さて、佐藤市長のパワハラ疑惑ですけれども、昨日夜に、市長の会見が行われしました。市長が体調不良だということは聞いていましたが、予想以上に悪いようでしたね」

澤田「そうですね。ドクター同伴でしたから」

宮原「そういう状況だったのですが、市長が

「必ず会見を開く」とのことでしたので、

私どもは取材を行いました」

宮原「ですので、今日は市長の容態に「最大限」配慮致しまして、会見の動画・音声は使わずに、ボードのみで会見内容を説明したいと思います」

○牛崎市の記者クラブ控室（昼）

後藤が電話で話をしている。

後藤「なんだって!？」

記者クラブにいる記者に向かって、

後藤「おい！ 例の部長が保護されたりし
い！ ウチの記者から連絡が入った！」

栗林「どこだ？」

後藤「病院に向かっているそうだ！」

○病院前（同日・昼）

飯山が病院から出てくる。

記者が群がる。

飯山「今回は、関係各位に多大なるご心配と
ご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げ
ます。誠に申し上げありませんでした」

飯山が頭を下げる。

後藤「部長！ 市長のパワハラは本当にあつ
たのですか!？」

飯山「はい。あったと確信しております」

栗林「身の危険を感じたというのは、具体的
にどういうことだったのですか！」

後藤「市長に…、叱責されるのではないかと
いうことです」

飯山「では、なぜ私たちに対して会見しな
ったんですか!? 隠れずに自分の意見をき
ちんと話せばよかったでしょう!」

立石「そうです! それで今、市長が大変な
ことになっていきますよ! 責任についてど
う考えなのですか!? 他に方法はなかつ
たのですか!?

飯山「佐藤市長の件は、私も先ほど聞いたば
かりですので、何とも申し上げられません」
日野「もし、市長の身に何かあったら、どう
責任を取られるおつもりですか!?

飯山「それは、分かりません。このような状
況になることは考えておりませんでしたの
で…」

藤野「この後、市長にお会いする予定はあり
ますか!?

飯山「はい。そのつもりです」

藤野「謝罪されるんですよね!?

飯山「…」

記者たちが飯山の乗る車に群がる。

飯山は車に乗り込む。

○新聞読者の自宅（2ヶ月後…昼）

新聞を読んでいる。

新聞読者「今日もこの辺、以上なし、っと」

呼び鈴がなる。

新聞を開いたままテーブルに置いて、

インターホンに向かう。

新聞読者「はい、どなたですか？」

山川「お荷物です」

新聞読者「はい、伺います」

新聞読者がテーブルに新聞を広げたま

ま、荷物を取りに行く。

その新聞のおくやみ欄に佐藤市長が亡

くなったことが顔写真なしで掲載され

ている。

E
N
D

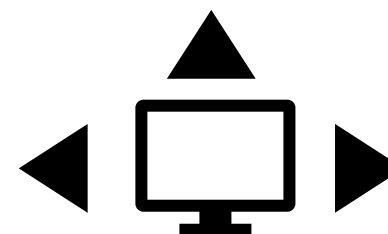
フィクション劇場 第六話「矢面」

(2025年1月18日 加筆・修正)
(2025年6月15日 初出)



フィクション劇場 第七話
「ファクトチェック」

大太
大



フィクション劇場 第七話「ファクトチェック」

【登場人物】

町田 智明（まちだ・ともあき）（26）：大

日本テレビ制作部 アシスタントディレク

ター

（テレビクルー）

川上（かわかみ）（33）：同 ディレクター

沢山（さわやま）（36）：同 カメラマン

久保（くぼ）（28）：同 マイク

岡本（おかもと）（29）：同 照明

椿（つばき）（25）：同 アナウンサー（女

性）

草間 道成（くさま・みちなり）（86）：越

山の恩師

草間 悦子（くさま・えつこ）（85）：道成

の妻

越山 栄二（こしやま・えいじ）（65）：草

間の地元選出の与党国会議員

フィクション劇場 第七話「ファクトチェック」

早見 茂雄（はやま・しげお）（59）：越山の政策担当秘書

早見 貞雄（はやみ・さだお）（26）：茂雄の息子。町田の友人。

宮原（みやはら）（61）：ワイドショー司会者

澤田（さわだ）（28）：ワイドショーアシスタント

杉山（38）：ワイドショーコメンテーター
I

井出（いで）（67）：与党幹事長

種村（たねむら）（66）：同 政調会長

霧島（きりしま）（65）：同 総務会長

レポーター1

レポーター2

【あらすじ】

大日本テレビに勤める町田智昭は、ワイドショーで草間と言う老夫婦の取材をしている。一方、国会では議員の立法事務費について政策担当秘書の概算支出の公開が決まる。その中で国会議員・越山栄二の秘書・早見茂雄が支出した立法事務費が、架空の人物に渡った疑惑が浮上するが、早見は否定する。しかし、日本ファクトチェック機構が、早見の主張の検証を行い、「誤り」であると結論付ける。そして、早見は秘書を辞任する。早見の息子・貞雄は、町田に電話をし、父親から、金は昔の恩人のために匿名で送金していたとの話を聞く。その後、突然、草間夫妻への取材が打ち切られる。

後日、草間宅を訪ねた町田は、草間の妻・悦子から、お金を貰っているのは事実だから、それ以上は求めないと告げられる。

そして町田はファクトチェック機構のWebページからこの件が消えているのを見る。

○草間夫妻の自宅（昼）

町田 智明が先乗りで草間の自宅の前に
バンを止めて、寄りかかりながら外に
立っている。

そこに、早見貞雄が通りかかり、町田
を見つけて、近くに寄ってくる。

早見は手を挙げながら、

早見貞雄「よっ、町田。何してんだ？」

町田「早見か。見りゃ分かるだろ？ 今から
ロケだよ」

貞雄は草間の家を見る。

貞雄は草間の家を親指で差し、

貞雄「こんな古い家か？」

町田「そっ。何も政治家や官僚をマイクで追
っかけてる訳じゃないんだよ。ウチは制作
だから、その辺とは別だよ」

貞雄「ふーん」

町田「それとも、お前んとこの親父さんにマ
イク向けて欲しいか？」

貞雄「おいおい、ウチの親父は秘書だぜ？」

そういうのはごめんだよ」

メインのバンが近づいて来る。

町田「あっ、来た。そろそろ始まるから、またな」

貞雄「ああ。まあ、頑張ってくれ」

メインのテレビクルーが、草間の家の前にバンで乗り付ける。

機材をおろし始める。

川上「町田くん、お願い」

町田「はい」

町田が呼び鈴を鳴らす。

草間悦子（声）「はい。どちらさまですか？」

町田「今日、取材をお願いします、大日本テレビの者ですが」

悦子（声）「ああ、テレビ局の方ですね。伺います」

悦子が玄関のドアを開ける。

悦子「どうぞ」

町田「お邪魔します！」

テレビクルー各々「お邪魔します！」

テレビクルーもあいさつして続いて家に入っていく。

テレビクルーはセッティングを始める。

× × ×

アナウンサーの椿はマイクを持っている。

草間の夫の道成はベッドに横になっている。

悦子は正座。

ディレクターの川上がキューを出す。

椿「私は、今、草間道成さん悦子さんご夫妻のご自宅にお邪魔しております」

椿「早速ですが、お二人には秘密があります
…、ということなのですが」

椿は悦子にマイクを向ける。

悦子「秘密というほど大げさなこともないんですがね。十数年前から、匿名で金
が振り込まれていました」

椿「失礼ですが、どのくらいですか？」

悦子「それは言えませんが。強盗に来てもらっても困りますからねえ」

椿は少し笑う。

悦子「多いか少ないかは別として、お父さんの体があまり良くないので、ホントに助かっていますよ」

椿「：ということは、今はお二人とも？」

悦子「ええ。働いていませんわ。なので余計に」

椿「誰か、心当たりはあるのですか？」

悦子「それが、お父さんも私も覚えがなくて。でも、頂けるものなので、ありがたく頂戴してますよ」

椿「まるで、あしながおじさんみたいですけどね？」

悦子「私はもうおばあさんですけどねえ」

椿は少し笑う。

椿「お二人ともありがとうございました。それでは、スタジオにお返しします」

○ワイドショー（昼）

ワイドショーのセットに切り替わる。

宮原「椿アナウンサー、ありがとうございます
しました」

宮原「いや、いろいろとトゲトゲしい世の中ですが、こういう話は心温まりますね」

澤田「そうですね」

宮原「以前、アニメのキャラクターを名乗った寄付運動がありましたが、私たちもこういう話題を積極的に取り上げて行きたいですね」

澤田「そうですね。以上、ちょっとほっこりするいい話をお届けする『ぽかぽか』のコーナーでした」

宮原「今度は長く続けたいですね」

澤田「はい」

宮原「それでは、最新のニュースをお伝えします。ニュースセンターの木嶋さん、お願いします」

○ ニュースセンター（ワイドショー内）

木嶋 「はい、お伝えします。本日午前中から、国会では調査研究広報費、いわゆる旧文通費の使途の範囲や公開方法について、与野党の協議が行われました」

木嶋 「その中で野党側から、旧文通費に加えて、立法事務費を合わせた透明性の確保が必要との主張がなされています。与党側は、立法事務費については収支報告書で使途は十分担保しているとの認識を示し、協議は難航しています。以上、ニュースセンターよりお伝えしました」

○ ワイドショー

宮原 「木嶋さん、ありがとうございました」

宮原 「さて、今回、野党側が求めている『立法事務費』というものなのですが、一般の方はあまり存じ上げないと思いますので、澤田さんに説明して頂こうと思います。澤

田さん、お願いします」

澤田「はい。『立法事務費』というのは、国会議員に交付されるお金の一つで、議員一人当たり月65万円となっています」

宮原「旧文通費とはどう違うのですか？」

澤田「はい。違いは大きく二つあります。一つは、旧文通費のような歳費、つまり一般で言うところの給与ではない、ということです」

宮原「もう一つは？」

澤田「もう一つは、議員の人数分をまとめて政党に交付されるということです。これは各政党の収支報告書にも記載されています」

宮原「それは、私も見ました。政党交付金を受け取っていないと言っている政党も、立法事務費は受け取っているみたいでしたね」

澤田「そのようです」

宮原「では、野党はこれのどこを問題にして

いるのでしょうか？」

澤田「はい。現在、国会議員一人当たりの歳費、つまり給料は月額129万4千円、加えて旧文通費は月100万円です。そして、先ほどからお話ししていますように、この立法事務費は政党に交付されますが、議員一人当たり月65万円です。つまり、歳費と比較しても、決して少ない額ではありません」

宮原「それで、どの辺が問題だと？」

澤田「これは立法に関わる費用と位置付けられているのですが、野党に比べて、与党の議員立法が少ないことから、野党はその趣旨から逸脱した事に使われているのではな
いか、ということの問題視しているので
す」

宮原「なるほど。杉山さん、元国会議員として、この辺はどうなのですか？」

杉山「はい。野党の議員立法が多いのは事実です。ただ、与党からの立法は各省庁との

すり合わせを経て内閣から提出されること
がほとんどですので、議員立法の数だけを
比較するのは少し乱暴のような気がしま
す。それに、内閣が提出した法案はほぼ成
立するのに対して、議員立法はなかなか通
りません。法案の内容うんぬんはケース・
バイ・ケースですので何とも言えません
が、国会は立法府ですから、それに資する
使い方なのかどうか、というのは問われて
もいいのではないかと思います」

宮原「ありがとうございます。この件は今後
の協議の行方に注目して行きたいと思いま
す」

○与党本部会議室（三役会議…昼）

Ｔ『与党幹事長 井出』

井出「しかし、野党の要求には困ったものだ
な、種村くん」

Ｔ『与党政調会長 種村』

種村「そうですね、幹事長。政調会長とし

て、野党との調整をしていますが、難航しています。旧文通費の件で強気に出ていますから。調整が長引くようなら、やはり与党はやる気がない、と映るでしょうし…。

そこが狙いのようにも感じます」

井出「まあ、議員立法の数っていうのは、取ってつけたような理由だが、数の比較はシンプルで国民には分かりやすいからな」

種村「おっしゃる通りです」

井出「霧島くん、党内の反応はどうだ？」

T『与党総務会長 霧島』

霧島「はい、幹事長。立法事務費は政党に交付されるお金ですので、各議員の収支報告書には個別ではっきりと書かれています。ですので、透明性と言われても何をすればいいのか？ と。無理難題だ、という声も少なくありません」

井出「そうだろうな。交付額は議員一人当たりの金額だが、交付するのは政党単位だからな」

霧島「はい」

井出「…だが、このまま座していても時間が過ぎるだけだ。何か妙案はないか？」

少し、間。

種村「…幹事長。立法事務費だけを取り出して公表するのは、事実上不可能です。実際問題、今後も開示を義務付けるということになれば、関連の法案を改正する必要があるし、正直、そこまでする話なのかと。…です。今回は特別に立法の事務、という位置付けを鑑みて、各議員の政策担当秘書が関係する支出を対象としてはどうでしょうか？」

井出「しかし、かなり乱暴というか…、無理があるな…」

種村「それは承知しています。ですので、野党にも同じ条件で開示を迫る、という形ではどうでしょうか？」

井出「なるほどな…。秘書の名義貸しで有罪になったヤツもいたし、向こうにも同じこ

とを迫ればブーメランになる可能性がある
ってことか？」

種村「あとは、野党が主張している議員立法
の数より、法案成立数を全面に出して、立
法事務費の効率な使い方をしている、とい
う形で」

井出「分かった。そういう方向で行こう。霧
島くん、野党と調整を頼む。出来るだけ向
こうの案を取り入れてくれ。調査結果が出
た時に、そちらの言う通りにやりました
よ、と向こうから難癖をつけられないよう
にな」

霧島「分かりました。その線で調整します」

〇ワイドショー（昼）

宮原「さて、旧文通費の与野党協議ですが、
その後の進展はあったのでしょうか？ 澤
田さん、お願いします」

澤田「はい。協議が難航していた立法事務費
の取り扱いについては先週、国会議員の政

策担当秘書に関する支出の概算を公開するというところで、与野党が合意しました。各党で調査した結果、与党の越山栄二議員の政策担当秘書である、早見茂雄秘書の不明瞭な支出が問題となっています」

宮原「具体的にはどういう内容でしょうか？」

澤田「はい。この早見秘書から政策のアドバイス料の名目で金を受け取っていたとされる人物が、架空の人物だったのではないかということですよ」

宮原「で、早見秘書は何と？」

澤田「早見秘書は、『きちんと領収書もあり、収支報告書に従って、適正に処理している』と述べています。しかし、私どもの取材で、この人物は15年ほど前に亡くなっている可能性が高いことが分かりました。野党はこの点を問題視しており、越山議員と早見秘書への追及を強めています」

宮原「分かりました。ありがとうございます」

す」

○日本ファクトチェック機構のHP（PC画面）

（見出し）

「越山議員の秘書、早見氏の立法事務費の支出先の人物は存命である」

（ファクトチェック）

（内容）

「越山議員の収支報告書から、対象の人物の住所を確認したが、北海道に転居していることが分かった。そこで、『北海新聞訃報サイト』及び、全国の故人データサイト『The おくやみ情報』で検索を行い、対象の人物と同名の人物が同日に亡くなっていることがダブルチェックにより確認された。よって『誤り』との記事。」

○国会内の廊下（昼）

多数のICレコーダーとマイクを向け

られる越山。

レポーター1「越山さん！ 秘書の早見さんの件は、どう説明されますか？」

越山「その件は、早見の方から私に迷惑をかけた、ということで辞職の申し出があったので、受理しました」

レポーター2「では、早見さんは事実を認めた、ということですか？」

越山「迷惑をかけたから辞めた、ということです。それだけです」

越山は足早に去っていく。

レポーター陣「越山さん、待ってください！ はっきりと答えて下さい！」

レポーター陣はICレコーダーとマイクを持ちながら付いていく。

○町田の自宅（夜）

町田の電話が鳴る。そして取る。

貞雄（声）「もしもし？ 町田か？」

町田「ああ、早見か……。どうした？」

貞雄（声）「ちょっと話があるんだが…、時間あるか？」

町田「構わんよ」

貞雄（声）「実は、俺の親父のことなんだが…」

町田「それは知ってるよ。だけど、お前の親父さんがあんなことするなんてな」

貞雄（声）「オレもびっくりしてるんだ。自分で言うのも何だが、真面目を絵に描いたような人間だし、それに義理堅いしな」

町田「それも分かってるよ。小さい頃、お前と一緒に遊んだ時にそう思った。…で？」

貞雄（声）「今回のことで、SNSで散々やられててな。オレにまでとばっちりが来る。今は鍵をかけてるが…」

町田「最近のこういう関係の事件になると、そうなるなあ」

貞雄（声）「ああ。それで、親父に問い詰めただんだよ。オレにも迷惑がかかってるから、何とかしてくれってな」

町田「それで？」

貞雄（声）「やっぱり、別の人間に金を渡していたらしい」

町田「まあ、不自然だしな。もらってた方も名前が出たら、向こうに迷惑がかかるからな」

貞雄（声）「ああ。義理堅いっていやあそうなんだが…」

少し、間。

貞雄「…お前…、旧文通費のこと知ってるだろ？」

町田「部署が違うとは言え、テレビ局に勤めてるんだぞ。知ってるに決まってるだろ」

貞雄（声）「以前はそこから金を渡していたらしいんだ。ブラックボックスだったからな」

町田「…そうらしいな」

貞雄（声）「でも、それがバレそうになったらから、立法事務費から出すように変えたらいいんだが…」

町田「そっちも公開することになったからってことか？」

貞雄（声）「そうだ…」

町田「しかし、何のためにそんなことしてたんだ？ やましいことなのか？」

貞雄（声）「いや、そうじゃない。逆だ」

町田「逆？」

貞雄（声）「ああ。昔、親父に秘書のイロハを教えてくれた恩人がいるらしいんだが、その人の生活が厳しいらしくってな」

町田「だったら、素直にそう話せばいいじゃないか」

貞雄（声）「バカ！ さっきお前が言ったように、話したらその人に迷惑がかかるってことが分らないのか？ お前が金をせびったのかとか、メディアが押しかけるとか…。そうになったらマズいだろう？」

町田「…そうだな。でも、だったら自分の給料から出すとかは出来なかったのか？」

貞雄（声）「政策担当秘書の給与は公費、つ

まり国の金で賄われているから、乱暴な言い方だが、結局のところ、どっちも国の金を使っていることには変わりはない。それに、このことは越山さんも知ってたらしい。同じように世話になってたみたいだな」

町田「：で、どちらも公費だったら、お前の親父さんの給料を当てるよりは、ってことか？」

貞雄（声）「そういうことだ。実際のところ、政策担当秘書の給与は、幅があるが月50万くらい。そして、その人に送っているのは月20万」

町田「：確かに、給与から出すのは厳しいな」

貞雄（声）「そうだ」

町田「しかし、身内だとは言え、親父さんよくそんな話をしてくれたな」

貞雄（声）「まあ、世間には言えないし、越山さんも知ってたなんて言えないし、その

人のせいだとも言えない……。溜まってたんだろうな……」

町田「でも、何でそんなことをオレに？ オレがテレビ局の人間だってのは知ってるだろ？ バレるとか考えなかったのか？」

貞雄（声）「お前、この前、部署は別だって言ってたろ。オレだけならまだしも、ウチの親父を売ることなんてしないだろ？」

町田「……」

貞雄（声）「それに……。オレも親父と同じだ……。誰かに話したかったんだよ……」

町田「……」

○大日本テレビ 制作部フロア（昼）

町田「えっ？ 中止ですか!？」

川上「そうだ。この企画は中止になった。再来週のロケもなしだ」

町田「でも、どうして……？」

川上「オレも知らん。上からの指示だ」

町田「でも、このコーナー評判がいいんじゃない？」

なかったんですか？ 明るいい話だって
…」

川上「だから、オレも知らんと言ってるだ
ろ。…悪いが、向こうに断りの電話を入れ
といてくれ」

町田「…はい…」

○草間夫妻の自宅（昼）

町田が、草間の家の前で呼び鈴を鳴ら
す。

悦子（声）「はい。どなたですか？」

町田「大日本テレビの町田と申します」

悦子は玄関のドアを開ける。

町田「どうも、こんにちは」

悦子「ああ、あなたね。どうぞ」

町田は居間に通される。

部屋を見ると、夫の道成の姿がない。

町田「おばあちゃん、おじいちゃんは？」

悦子はいつも道成が居る方向とは逆の
方向に顔を向けて、

悦子「こっちだよ」

顔の先には、仏壇。

町田「…すみません」

悦子「いいんだよ」

町田「お線香、上げさせてもらってもいいですか？」

悦子「ええ。お父さんも喜ぶと思いますよ」

町田は線香をあげる。

× × ×

畳の居間で、ちゃぶ台を囲んで二人でお茶を飲んでいる。

町田「すみません、おじいちゃんのことを知らずにお邪魔してしまっ…」

悦子「いいんだよ。一人だと寂しいから、話し相手がいた方が気が滅入らなくていいしね」

町田「…失礼ですが、おじいちゃんはいつ頃？」

悦子「2週間前くらいだったかな？ あんたから電話をもらってすぐだったよ」

町田「そうですか…」

悦子「…そう言えば、電話で話してもらったけど、月に一回ウチにくるって話はなくなったって？」

町田「はい、そうです。すいません…」

悦子「謝ることはないよ。こっちもお父さんが亡くなって、どうしようかと思ってたから…」

町田「ところで、おばあちゃん…、例のお金はまだ振り込まれてるんですか？」

悦子「そうだよ…。お父さんのことを知らないみたいだね」

町田「前に、お伺いしたのですが、いくら振り込まれていたのか教えていただけませんか？」

悦子「…お父さんが居なくなったから、もういいかな…。月に20万だよ」

町田はピクツとしてちょっと下を向く。

町田「…」

町田「まだ…、誰か分からないんですよ…
ね？」

悦子「ああ、分からないよ。でも分からなくてもいいってのは前と変わらない。ありがたく頂戴してるよ」

町田「…」

悦子「そう言えば、あんたテレビ局の人だったね？」

町田「はい、そうですが…」

悦子「私は、昔からテレビが好きでね。出歩くことも少ないから、ずっと見てるよ」

町田「インターネットとかはやらないんですか？」

悦子「私にはそういうのは難しくてね。スマホっていうのかい？ ああいうのも苦手で

…」

町田「そうなんですネ」

悦子「ああ。…そう言えば、お父さんと私が出てた番組、あれをよく見るんだけど、国会議員の越山さんとか、秘書の早見さんと

かがよく話題になってたね」

町田「そうですね…」

悦子「なんか悪いことしてたみたいだけど、最近、パタッとやらなくなったな。何かあったのかね？ …あんだ知ってるかい？」

町田「いえ…、僕は何も…」

悦子「そうかい…」

悦子はお茶を飲む。

悦子「越山さんと早見さんはこくら辺が地元だろ？ ウチのお父さんはああ見えて、昔はそこそこの名の通った人でね。お祭りの時とかに、二人を呼んだりしてね」

町田「親しかったんですか？」

悦子「それなりってところじゃないかな？ 二人は東京にすることが多かったみたいだし、お父さんは家では仕事のことはしなかったし…。昔は女の人家事だけして、仕事には口を出さないってのが、普通だったからね…」

町田「そうだったみたいですね…」

悦子「それで、今回のことだろう？ お父さんもテレビを見ながら渋い顔してたよ。恩を仇で返してとか、曲がったことしやがって…とかね」

町田「…この話が出てから、お二人はここへは？」

悦子「来てないよ。お父さんに怒られると思ってるんじゃないかな。仏壇に手を合わせてもいない」

町田「そうなんですネ…」

悦子「理由がどうあれ、お線香の一本もあげにこないってのは、ね…。あんたもそう思うだろ？」

町田「そう…、ですね…」

町田がお茶を飲む。

町田「おばあちゃん、もう一度聞きたいんですけど、誰がお金を振り込んでいるか知りたくはないんですか？」

悦子「全然知りたくないってことはないよ。だけど、名前を出さないってことは、送っ

てくれてる人にも何か訳があるんだろう？
：私には身に覚えはないんだけどね。もし
：、私がその訳を知ったとしても、それで
何か変わるのかい？」

町田「理由を知ったら：、気持ちの変化もある
と思いますけど：」

悦子「そうかも知れないね。：でも、誰かが
お金を送ってくれて、私が受け取ってる。
これが本当なのは変わらない。：それでい
いんじゃないかね：」

町田「：」

○町田の部屋（夜）

町田がノートPCを操作している。

日本ファクトチェック機構のホームペ
ージを見る。

早見の発言の検証ページを見ようとす
ると、ファイルが消されていて「40
4 Not Found」の文字が出
る。

フィクション劇場 第七話「ファクトチェック」

町田「…」

E
N
D

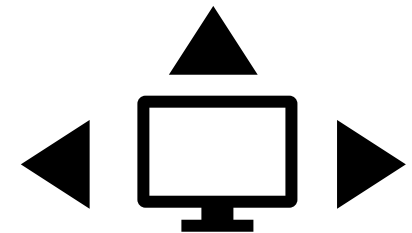
(2025年6月15日 初出)

(2025年11月19日 加筆・修正)



フィクション劇場
第八話
「報治国家」

大太
大



【登場人物】

直江 将道（なおえ・まさみち）（24）：毎
朝新聞 新米記者。政治部所属。その後、
フリーに転身

岡崎 俊次（おかざき・しゅんじ）（24）：
直江の友人

村尾（むらお）（51）：同政治部 部長
奥村（おくむら）（26）：同政治部 直江
の先輩

杜 若（かきつばた）（63）：日本新聞連合
会 会長（毎朝新聞出身）

丸田（まるた）（56）：毎朝新聞社長

谷山（たにやま）（60）：与党総裁

井出（いで）（55）：同 幹事長

種村（たねむら）（53）：同 政調会長

霧島（きりしま）（57）：同 総務会長

フィクション劇場 第八話「報治国家」

東野（とうの）（62）：厚生労働大臣

里見（さとみ）（50）：厚生労働大臣 公

設第一秘書

横内（よこうち）（48）：厚生労働大臣

公設第二秘書

高橋（たかはし）（45）：厚生労働大臣

政策担当秘書

レポーター1

記者1

記者2

記者3

市民（パソコンを見ている）

【あらすじ】

下野していた与党が衆議院選挙で勝利し、2年振りに政権に返り咲く。しかし、前政権が成立させた、大手新聞3社の「社説」での指摘事項を努力義務で実行する「オピニオン法」が施行されることに懸念を抱いていた。そんな中、ジャーナリストを目指す直江将道は、志を持って毎朝新聞社に入社する。政府は、カスハラ対策の見直しで企業内に専門部署の設置を義務付け、補助金を給付する案を発表するが、社説で対策不足を指摘され、予備費まで使って対応する。

一方、日本新聞連合会会長・杜若の政府の対応を揶揄する発言の動画が流出し、非難の声が高まって、電凸などの攻撃がされる。

直江は友人の岡崎俊次に、このような新聞の在り方に疑問を持ち、フリーの記者になったことを話す。岡崎もそれを応援する。

その後、新聞社は杜若発言への非難を政府の責任とし、社説で同法の改正を求める。

○（下野前の）与党の開票センター…開票速
報会場（夜）

夜１１時頃、開票センター。

後にある選挙区と立候補者名が書かれたボード。

総裁の谷山は、笑顔で選挙区の当選議員の名前の上に赤い花を付けるポーズを取る。

マスコミからフラッシュが焚かれる。

× × ×

壇上に、谷山と党三役（井出、種村、

霧島）が並んで座っている。

レポーター「谷山総裁、今回の選挙の勝因をお聞かせ下さい」

谷山「やはり、国民のみなさんは内政外交ともに、安定感を求めていたからではないでしょうか」

レポーター「今の与党では、それが役不足だったと？」

谷山「いえ、そうは思っていません。今の与

党もいろいろな施策を打ち出して、我々も賛同するところは賛同しました。ただ、何かを変えたり、新しいことをする時には国民の不安を払拭するために、説明を尽くすことが必要になります。それが少々足りなかったのではないかと思います」

レポーター「これで、2年ぶりに与党に返り咲きになることが確実にになりました。今後の政権運営については、いかがお考えでしょうか？」

谷山「まだ、開票は続いていますから、まずは結果を最後まで見届けるのが総裁の役目です。それが終わってからお話しさせて下さい」

×

×

×

谷山と党三役全員が立ち上がって中央に扇形に集まり、両手を前に出して、握り合いながら、写真撮影に応じている。

○与党総裁室（夜）

4人は応接スペースでこの時にソファ

ーに座っている。

谷山「ふう、ようやく終わったな」

T『幹事長 井出』

井出「ええ。とにかくにも与党復帰です、

谷山さん」

谷山「ああ、そうだな……」

谷山「しかし、野党のトップってのは寂しい

ものだったな。記者が誰も来てくれない」

井出「以前も、そんな調子だったと聞いてい

ます。それも今日までですよ、谷山さん」

谷山は一息つく。

谷山「さて、まずは追加公認だな。霧島く

ん、ウチに入ってくれそうな人に声をかけ

てくれ」

T『総務会長 霧島』

霧島「はい。既に何人かピックアップしてい

ますので、すぐに」

谷山「あと、新人に引っ越しの準備を指示し

てくれ。秘書の人選も併せてな。フォローを頼む」

霧島「分かりました」

谷山「それと、種村くん……」

T『政調会長 種村』

種村「はい」

谷山「一番問題なのは……、アレだな」

種村「……そうですね」

谷山「向こうがとんでもないものを残してくれたからな……」

種村「『オピニオン法』ですね？」

谷村「それ以外に何がある。周知期間が1年あって、施行が来月からってタイミングが最悪だ」

種村「結局、向こうは自分たちへの影響が、ほぼなくなりましたからね」

谷山「そうだ。さっきはテレビの手前、触れないようにしたが、マスコミが政府の政策に首を突っ込める法案なんで、とんでもない」

種村「私もそう思います。対象が毎朝新聞をはじめとした大手新聞3紙の社説の意見のみというのがせめてもの救いです」

霧島「向こうは建前的には、いろんな考えを取り入れようって形で法案を作ったのでしようが、実際のところは、マスコミからの追及を逃れたいのが見え見えでしたからね」

谷山「ああ。政権与党に慣れてないから打たれ弱いんだ。タウンミーティング的な考えが抜けてないんだよ」

霧島「しかし、種村さん。その社説の意見に従うのは努力義務ですから、その辺はうやむやに出来ないのですか？」

種村「法律的に強制力が伴う案は、ウチが断固反対の立場を取ったのでそうになりましたが、法案審議の質疑で向こうが『原則従うものだ』って答弁してます。それを盾に取られたら、言い訳のしようがありません」

谷山「新聞もそれが分かっているから、無茶

はしないだろうが、目の上のたんこぶとはこのことだ」

種村「ホントにそうです」

霧島「ウチの党勢が回復したら、真っ先に廃案にしてやりたいですよ」

谷山「まあ、ここは当面乗り切るしかないな。：種村くん、他には何かあるか？」

種村「はい。カスハラ対策強化の法案が5年に一度の見直しに当たっています」

谷山「あれか：。指針を出したのはウチの政権下だったが、あまり改善してないと不評のようだな。これも向こうの政権が怠けていた部分が大半だが：」

種村「そうです。ここは強い対策を打って、向こうとは違うんだ、政策遂行能力があるんだというところを見せるいい機会だと思います。それで、政権基盤を固めたいですね」

谷山「分かった。その辺は厚生労働省の官僚とウチの内部で揉んでくれ。内閣立法にす

る」

種村「承知しました」

○歩道（朝）

直江が背広で歩道を歩いている。

ラフな格好の岡崎が後から声をかけ

る。

岡崎「直江！」

直江が振り返る。

直江「何だ、岡崎か」

岡崎「何だはないだろ？ 今日決めてるじ

ゃないか」

直江「そりゃそうだ。今から入社式だから

な。お前は？」

岡崎「オレは明後日だ」

直江「ネクタイの結び方だけは練習しとけ

よ。時間がかかったからな」

岡崎「覚えとくよ。じゃあな！」

直江「あいつ…、大丈夫かな」

○ 毎朝新聞社…入社式（朝）

毎朝新聞社のホール。看板に「202
9年度 入社式」の文字。

社長の丸田が登壇して、挨拶をしてい
る（バックに声）。

直江はパイプ椅子に座って、話を聞い
ている。

○ 同 政治部フロア（昼）

政治部の部員が集まっている。

政治部部長の村尾と直江が並んで立っ
ている。

村尾は直江を手で示して、

村尾「今日から、政治部に配属になった直江
くんだ」

直江は一礼する。

直江「直江将道を申します。よろしくお願
いします」

政治部員、拍手。

村尾「じゃあ、当面は奥村くんに面倒を見て

もらうから。早く、戦力になれるように頑張ってくれ」

直江「はい」

直江は奥村の方を向いて、

直江「奥村さん、よろしくお願いします」

奥村「こちらこそ、よろしく。まずはパソコンの設定と記事のデータベースの使い方からだな」

直江「はい」

2人は直江の席に向かう。

奥村「ところで、直江くん、今度新しい法律が施行されるのを知っているよね？」

直江「『オペレーション法』のことですか？」

奥村「そうだ。オレたちの記事が政府にダイレクトに反映される。オレはまだ社説が書けるほど偉くはないけど。でも、そう思うと、背筋が伸びるよ。お互い、いい記事を書いていかないと」

直江「そうですね」

○厚生労働大臣 記者会見場（昼）

記者１「大臣、今年でカスハラ法案が５年に一度の見直しになります。どのような形を考えていらっしゃるのでしょうか？」

東野「みなさんもご承知のように、カスハラから適切に企業とその従業員を守ること、従業員の精神的ストレスの軽減と共に、業務に支障をきたさないようにして、豊かな働き方を実現することに資するものであります。政府は、５年前に法律を改正し、指針を出しました。結果として、悪化はしていないものの、横ばい傾向であります。ですので、今回の改正で大胆な指針の見直しを図りたいと考えております」

記者２「具体的には？」

東野「シフト勤務などで、問い合わせ案件の引継ぎがうまく行かなかったという例なども踏まえ、従業員１００人以上の会社にカスハラ対策専門の部署の設置を義務付けることを考えております」

記者3「努力義務ではない、ということですか？」

東野「その通りです。但し、猶予を3年程度とし、今のところ罰則を課すことはしないつもりです」

○厚生労働大臣室（朝）

東野が座っている。

里見が扉をバンと開ける。

里見が毎朝新聞を握りしめて部屋に駆け込んでくる。

里見「先生、大変です！」

東野「どうした？ 里見くん」

里見「今日の毎朝の社説です。早速、来ました。オピニオン案件です！」

東野「何だと!? 何と書いてある？」

里見は新聞をテーブルの上に広げて、社説の記事のところを指差す。

里見「政府が企業に対してカスハラ専門部署の設置を義務付けるのであれば、補助金を

出すように、と書いてあります」

東野「金か……。ハラスメント対策費全体で確保してある予算でやりくりできないか？」

里見「政策担当の高橋秘書と相談して、関係部署に打診してみます」

東野「頼む。それとオピニオン法対象の３紙を毎日届けさせてくれ」

里見「はい。横内秘書に伝えます」

○厚生労働大臣 記者会見場（昼）

東野「先般、お話ししました企業へのカスハラ部署の設置義務についてですが、企業側の負担も考え、義務付けは従業員１０００人以上の約４０００社を対象とし、それ以外は努力義務という方向で検討します。尚、設置義務に該当する事業所には、最大で１０万円の補助金を拠出致します」（約４億円。ちなみに２０２５年予算でのハラスメント対策費は約９億円）

○厚生労働大臣室（朝）

東野が毎朝新聞を読んでいる。

社説のところで目を見開く。

スマホで里見に電話。

東野（声）「里見くん、急いで来てくれ！」

× × ×

里見は少し息を荒くして、大臣室に駆け込んでくる。

里見「遅くなりました。どうされましたか？」

東野「どうしたもこうしたもない。また社説だ！」

東野は紙面を指差し、

東野「ここだ！」

里見は新聞紙面を見回す。

里見「どこですか？」

東野「この記事が目に入らないのか!？」

里見は、社説部分を読む。

里見「…政府の施策は不十分である。カスハ
うは従業員の業務が滞ることを考えれば、

設置義務に従業員数の少ない中小企業にまで広げ、補助金を増額する必要がある：」

里見は東野の顔を見る。

里見「先生：、ということとは？」

東野「やらなきゃならんだろう」

里見「しかし、もう予算が：」

東野「：予備費を使うしかない。調書の作成を手伝ってくれ。あと、横内くんと高橋くんには、財務大臣と事務次官への根回しをするよう伝えてくれ」

里見「はい」

東野「特に高橋くんは、うっかりミスが多いから気をつけるようにと」

里見「はい」

東野「総理には事前に私から話をしておく。オピニオン法案件だから、総理からも財務大臣へプッシュしてもらえば行けるはずだ。今週中に閣議決定まで持っていく」

里見「分かりました。すぐに取り掛かります」

○厚生労働大臣 記者会見場（昼）

東野「カスハラ対策での専門部署設置義務の対象事業所についてですが、従業員1000人以上から、10人以上に、補助金も最大10万円から100万円に引き上げることで検討することと致しました」

記者1「財源はどうなるのですか？」

東野「予算はほぼ固まっております、追加は難しいため、予備費分を充当する形で、閣議決定を頂きました」

記者2「予算規模はどのくらいになりますか？」

東野「対象事業所が約44万社ですので、予算は約4400億円となります。予備費の約9割になります」（毎年の予備費は大体5000億円）

○厚生労働大臣 大臣室（会見後…昼）

居るのは、東野、里見、横内、高橋の

4人。応接スペースに座っている。

東野はネクタイを緩める。

東野は深く腰掛けている。

東野「全く、立て続けに来るとたまらんな」

里見「そうですね。今回の件を見て、他の大臣も戦々恐々としていますよ」

東野「世間はこう見てる？ その辺が気になるが……」

里見「概ね、好意的です。こちらとしては言ってみれば頭ごなしですから、釈然としませんが、法律ですので飲み込むしかありません。ただ、やりすぎだという声も少なからずあります。なぜ、新聞のいうことだけ優先的に聞くんだと。あと、党内からもかなり不満が出ていると聞いています。議員立法より新聞に頼んだ方が早いんじゃないか？ という恨み節も聞こえてきます」

東野「まあ、そうだろうな……。野党は？」

里見「自分達で作った法律ですから、表立っ

て異論は出ていないようです。こちらで野
党を攻撃するようなことはしていません
か。結局、作りっぱなしで、しらんぷり
ですね。マスコミ出身の議員などは、『戻
った方がいいかな？』とか冗談を飛ばして
いるらしいです」

東野「：ここまで来ると、腹が立つとい
うより、呆れるな。ツケが全部こちらに
回っている」

里見「おっしゃる通りです」

東野、溜息をつく。

東野「ふう…」

東野「さて、金の話はもう出てこない
だろうから、指針の内容の話を進めてい
こうか。

高橋くん、何か考えているアイデア
はあるか？」

高橋「はい、先生。今回、オピニ
オン法の設定とは言え、幅広くカス
ハラ担当部署の設置が義務付けられ
ることになります。今までは、（厚
労省の）「カスタマーハラスメン

ト対策企業マニュアル」を土台に、各社独自に事業所内のルールを作っていますが、対応がまちまちです」

東野「それは、承知している。それで？」

高橋「業界ごとに一定の共通ルールを示すというのはどうでしょう？」

東野「横串を通す、ということだな？」

高橋「おっしゃる通りです」

里見「高橋さん、メリットは？」

高橋「例えば、飲食業界なら、このチェーン店では問題がなかった行為が、別のチェーン店ではNGとかになりますと、客からの不満が余計に出てしまう懸念があります。ですので、どこまでまとまるか分かりませんが、こちらからの指針を受けて、業界全体で、その業種にあった個別の指針の策定をしてもらうことを考えています」

東野「なるほどな。他にメリットは？」

高橋「業界でまとめれば、相対的に弱い立場にある中小の事業者の対策が決めやすくな

ります。言わば、業界の上からのお墨付きを受けた対策が出来る訳ですから、心理的な負担も軽くなるでしょう。あとは、業界は違うが大規模なコールセンターを持っている企業同士というのも考えられます」

東野「いいかも知れないな」

横内「先生、私も高橋さんの提案はいいと思います。国の広報活動としても、各々の業界に特化した形ならやりやすいと」

東野「分かった、それで行こう」

東野はカレンダーを見る。

東野「今週の金曜日には間に合わないから、来週火曜日の会見で話すことにする。一度、バルーンを上げないと、世間のリアクションが分からないからな」

高橋「業界の意向も探れるチャンスにもなりますしね」

×

×

×

○厚生労働大臣 記者会見場（昼）

東野がしゃべっている絵だけ。

×

×

×

○厚生労働大臣 大臣室（昼）

東野と里見、横内、高橋が大臣室の応

接スペースで座っている。

東野「会見から1ヶ月経ったが、何か動きは

あったか？」

里見「いくつかの業界団体の関係者に話を聞

いたのですが、概ね前向きです。特に飲食

業界と小売ですね」

東野「客との接点が多いからな」

里見「ええ。特にコンビニ各社は指針が決ま

り次第、共通フォーマットのシールを作成

して、店舗の入り口に貼ろうかという話も

出ているそうです」

東野「今でも一部やっているみたいだが…、

いい感じだな」

里見「はい」

東野「ところで、コンビニはカスハラ対策

で、店員の名札を本名以外にする動きがあ

ったと思うが、この辺も歩調を合わせる感
じか？」

里見「そのようです。ただ、全員強制という
形はどうかという意見もあるようです」

東野は、椅子にもたれる。

東野「…まあ、個別の考え方もあるだろうか
らな。こちらからはあまり口出しせずに、
状況を見守ろうか」

里見「はい」

東野「…すると、問題はやはりマスコミか
…」

里見は、毎朝新聞を机に置く。

里見「…そうなりますね」

東野「せっかくいい流れが作れたと思ったん
だが…」

横内「先生。また、社説ですか？」

東野「そうだ」

横内「また、何かしろって内容ですか？」

東野「いや、今度は何もしないって内容だ。
それに世の中の流れに逆行しとる」

横内「里見さん、どんな話なのですか？」

里見「さっきの話です。新聞は独立性を保つため、業界でのまともりは拒否する、だそうだ」

東野「一度、TVのBPOのような組織を作ろうという話があったが、潰れたからな」

里見「ええ。それから」

横内「まだ、あるのですか？」

里見「コンビニ業界に倣って、署名記事を極力無くすって言うんだ」

横内「何ですかそれは!? やっと署名記事が定着してきたというのに」

高橋「そうですよ。報道する時は匿名はけしからん、実名だ、と言っている割にこれですか!? 退化してるもいいところじゃないですか」

里見「これも社説に書いてあるんだ。：仕方ない」

東野「とりあえず、マスコミには触れないよ
うな指針を作るか？」

高橋「先生、それでしたら今と変わリませ

ん。補助金を出すなら、もう少しこちらが
主導権を握った形にしないと」

東野「それは分かっているが、向こうを説得
しようとして、逆に社説でやられても困る
からな……」

横内「そうですね。『報道の自由に踏み込ん
だ』とか言われかねませんし」

東野「……仕方ない。マスコミの件は一旦、ペ
ンディングにしよう。ただし、前回の指針
より良くなったことが分かる形になるよう
に、知恵を出しておいてくれ」

三人「分かりました」

○ホール（日本新聞連合会 第83回定例総
会）

司会「それでは、まず、会長の杜若さまより
ご挨拶頂きます」

場内、拍手。

杜若が演壇に立つ。

杜若「みなさん、こんにちは。毎朝新聞の杜若でございます。今年は、私ども日本新聞連合会に取って画期的な法律が施行されました。みなさんもご存知の『オピニオン法』であります」

杜若「基本的に、私ども新聞の使命は権力監視であります。ですが、この法律は前政権からの“強い”ご要望を受け入れたものでございます」

会場内、少し笑い。

杜若「その意図は、政府の政策に対する切れない監視を目的としているものと承知しております。実際、カスハラ対策では、政府案の問題点を指摘し、よりよい形になったと自負しております」

会場内に頷く人がちよこちよこ。

杜若「ですが、世論の中には、新聞社の越権行為ではないか、とのご批判があることも承知しております。しかしこの法律は、政府に対し、あくまで“努力義務”を課して

いるものでございますので：」

会場内、少し笑い。

杜若「どういう形で私どもの意見を政策に反映させるかは、政府のご判断になります。ですので、私どもにも責任があるとのこと指摘はあたらないと考えております」

杜若「今は、私ども毎朝を含む大手3紙のみですが、個人的にはこれからはもっと多くの新聞社さんに参画して頂きたいと考えております。えー、一部で大手はずるいと言われておりますので：」

会場内、笑い。

杜若「今後も新聞の使命を全うすべく、一丸となって、権力監視と偏りのない正確な報道を推進してまいりますよう」

会場内、全員拍手。

○家でネットを見てる人（夜）

以上の様子を隠し撮りした動画を動画サイトで見ている（ノートPC）。

動画のタイトルは「【悲報】日本新聞

連合会長 天狗になる」

小声で、

市民「このヤロー、何をのぼせ上がってんだ

： バカにしやがって：」

○居酒屋（どこかの金曜日の夜）

岡崎はステンカラーのコート、直江は

スーツ。

座敷に座っている。

生ビールを飲みながら、つまみを食べ

ている。

岡崎「直江、久しぶりに飲みたいっていうか

ら来たが、随分よれた格好だな」

直江「ああ。会社を辞めたんでな」

岡崎「辞めた？」

直江「そうだ。今はフリーでやってる」

岡崎「何か、気に入らないことでもあったの

か？」

直江「いや、そういう訳じゃないんだが：」

岡崎「じゃあ、なんでだ？」

直江「…入ってから、過去の取材のデータベースを見ながら記事を書く練習をしてたんだが、『こういう結論で書いてくれ』って指示が多くて…。それがしっくり来なくてな…」

岡崎は生ビールを飲んで、

岡崎「そうか？ 割と普通だと思うけど」

直江は岡崎の顔を見て、少し驚く。

直江「普通？」

岡崎「ああ。オレも部署の予算が100万くらい足りなくなりそうだからって、資料を作られたことがあるよ。所長と経理に説明するための」

岡崎はつまみを食べながら、

岡崎「結局のところ、100万くれているのが結論だから、いろいろと理屈をこねくり回して作ったけどな。まあ、バレバレだったと思うけど、上も何かしらの理由が欲しかっただろうし…。違うのか？」

直江「オレの方は世間に出るんだ。そんな内輪の話とは違うよ。オレの考えるジャーナリズムと、違ってたってこと」

岡崎「結論ありきってところがか？」

直江「そうだ。取材内容を吟味して結論を出すのが当然だろ？ でも結論が決まっていたら、それに合った取材内容しか選ばない」

岡崎「まあ、お前らしいっちゃらしいが……。政治部に居たんだよな？ じゃあ、フリーで政界のスクープみたいなのは取れそうなのか？」

直江「いや、難しい。『記者クラブ』ってのに入らないと不利なんだ」

岡崎「そうなのか。クセ強の煙たがられてるヤツは？ よく見るが……」

直江「アレはフリーだけど入ってる」

岡崎「あの、よくわめきちらかしてるヤツもか？」

直江「入ってる。アレはフリーじゃないけど

な」

岡崎「でも、記者会見くらいなんだろう？

その『記者クラブ』ってのは。そんなに重要なのか？」

直江「ああ。プロ野球に『番記者』ってのがいるだろ？ 特定のチームに張り付いて取材している記者。それと似てる」

岡崎「どの辺がだ？」

直江「番記者はチームに顔売って親しくな
って、情報を貰ってそれを記事にする。だ
から外から見ているよりも内容の濃い記事
が書ける」

岡崎「そうらしいな」

直江「『記者クラブ』ってのは、番記者の集
まりみたいなもんだ。チーム、つまり権力
側と親しくなって情報をもろう。だが、マ
スコミの使命は権力監視だ。なのに、逆の
ことをしてるように思えてな。それなら無
理に……って感じだ。会社にも同じようなジ
レンマを抱えてる人がいたよ……」

岡崎「…まあ、誰でも嫌なヤツとか知らないヤツには情報を渡したくないからな」

直江「そういうこと」

直江はビールを飲む。

直江「なあ、岡崎。お前最近オピニオン法で揉めてるの知ってるよな」

岡崎「ああ、知ってる。新聞なんかの会長の態度が何様だって話だろ？ 例の3つの新聞社に電凸かましてるヤツもいるらしいな。毎朝は質問フォーマットのみで、返事をしない場合もありますとか書いてあるから、余計にネットで燃えてるって話だ。だから、販売店に電凸してるらしいし。デモしようとかSNSで呼びかけてて、実際に2、3回やったって話は聞いたな」

直江「そうだ。オレはそのデモの取材に行っただが、その記事はどこにも載せてもらえなかったよ」

岡崎「まあ、自分とこの悪口は載せたくないだろうしな。でも、カスハラ対策自体は、

悪くは無かったと思うが：」

直江「そうだ。だが、それを新聞は誉めていない」

岡崎「？」

直江「学校教育だと『誉めて伸ばすのはいいことだ』とか言っておいてな。それに、何か制度を変えたり、追加すればどこかに歪みが出てくる。他に全く影響がないなんてありえない。その揚げ足取りをしてもしょうがないだろう？ 『さすが政府、今回の政策で今までより良くなった。グッジョブ！』って言えないのかなと思ってさ：」

岡崎「そりゃあ、割を食った方から見れば、この野郎！ ってことになるからだろう？ そういうことになっているのかどうかを監視するのがマスコミの役割じゃないのか？ いわゆる『知る権利』の行使ってヤツで」

直江「：岡崎、その『知る権利』を使って、みんなが一番知りたいことは何だと思ってる？」

岡崎「：政党内部の権力構造とかか？」

直江「いや。一番知りたいのは『マスコミの姿勢』だとオレは思ってる」

岡崎「姿勢？」

直江「そうだ。オレは、マスコミは中立・公正でなくてもいいと思っている。偏っているなら堂々とその立場を示せばいい。けど、無理やり中立・公平の形に持って行くとするから、よく分からない理屈が出てくる。『知る権利』を行使する前提は、知らせる人たちに信用されてこそ、だろ？『人の事は知りたいけど、自分たちの事は知られたくない』じゃあブラックボックスだ。それで私たちを信じて下さい、は通らないだろう？」

岡崎「そう言われれば、そうだが：」

直江「だから、オレはフリーを選んだ。これからオレが書くものは、オレ自身がこれに示さないといけないと判断したものになる。偏っているかも知れないし、批判も

あるかも知れない。でもそれは、全部自分の責任で上等だと思っている。新聞みたいな後ろ盾もない。自分の信念で書く」

岡崎は少しのけ反って、

岡崎「直江、書いたものがまとまったら、オシに送ってくれよ。…一番最初に読んで、ケチつけてやるからよ」

直江「ああ…、頼むよ」

○厚生労働大臣 大臣室（朝）

東野が毎朝新聞の社説を読んでいる。

社説を見て、驚く。

そこに、新聞を持った里見と高橋が入ってくる。

里見「先生！ 見ましたか？」

東野「見た！ 早速、高橋くんと一緒に準備に取り掛かってくれ！ 総理には私から直接、話をする」

里見と高橋は、部屋を出る。

東野は、総理に電話をかける。

東野「総理ですか？ 東野です。今日の毎朝お読みになりましたか？ お持ちですか。その件で。はい、伺います」

東野は部屋を出る。

東野の机の上に毎朝新聞が広げられている。

社説部分の後半には、以下のように書かれている。

○社説（毎朝新聞 紙面）

「…一部の市民から、オピニオン法対象の各新聞社に対し、政府の政策に強制力を持つた介入をしているとの声が挙がっている。しかし、各新聞社・社説の掲載内容の政策への反映は、あくまで政府の努力義務の位置付けであり、この認識は誤まっている。この誤った言説がネットを中心に拡散され、各新聞社及び、その販売店にカスハラとも言える行為がなされている。にも関わらず政府は報道機関全体への誤解を解消する効

果的かつ十分な対策を現在も施しておらず、放置していることは、大きな問題である。また、周知期間が1年あったにも関わらず、同法の意義や効果などについて、政府から国民に対し十分な説明がなされていなかったことも大きな要因の一つである。

これらの報道機関に対する行動は、言論の自由が萎縮されるだけでなく、引いては報道の自由を脅かしかねない暴挙であり、これは政府の怠慢によって引き起こされたものであると言わざるを得ない。

よって、政府に対し報道機関への誤解と偏見を生まないような形で同法の改正を求める。

尚、我々、報道機関は報道の自由と国民の『知る権利』を守り、引き続き国家権力の監視に邁進していく」

E N D

（2025年6月15日 初出）

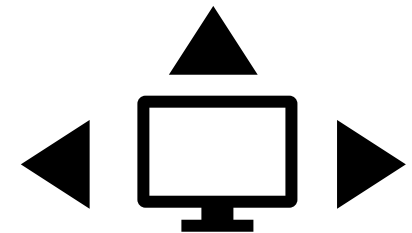
フィクション劇場 第八話「報治国家」

（
2
0
2
5
年
1
1
月
1
9
日
加
筆
・
修
正
）



「存在意義」
フィクション劇場
第九話

大太
大



【登場人物】

小城 涼太（こしろ・りょうた）（47）：日

本サッカー機構 ライセンススマネージャー

島村 康二（しまむら・こうじ）（50）：日

本プロバスケットボール運営協会 執行役

員

加藤 由美子（かとう・ゆみこ）（37）：分

子生物系学会連合会 理事

加賀見 正夫（かがみ・まさお）（67）：日

本ベンチャー連絡会 代表

大内（おおうち）（40）：内閣府参事官

会議の進行役

石原（いしはら）（58）：総理大臣

（オプザーバー）

スポーツ庁 参事官

文部科学省 参事官

（サッカークラブ 社長のみなさん）

フィクション劇場 第九話「存在意義」

学 生 2	学 生 1	記 者 （ 首 相 官 邸 ）	佐 橋	岡 部	浜 崎	高 木	村 上	大 島	小 倉	河 瀬	石 川

【あらすじ】

2024年10月、石原首相が世界に向けて発信する日本を掲げ、4テーマを対象に合計4千億円の補助金拠出を表明。分配は、当事者間の協議によって決定することとした。

選ばれたサッカーの小城涼太、バスケの島村康二、科研費の加藤由美子、ベンチャーの加賀美正夫が各団体の代表として参加。各々の要求額は約2千億円で、どこも譲らない。期限が迫る中、進行役の内閣府参事官大内は各団体に要求額の半減案を提示する。

小城はスタジアムの例外規定解消のための屋根設置費用として、一カ所百億の20クラブで2千億円としていた。優先順位をつけ10カ所とする案、一カ所の分配を五十億とする案を出す、各クラブから拒否される。

結局、他の団体は一千億円で妥協したが、小城は「サッカーは文化」として譲らない。これを見て、ある学生が「自分たちの存在をアピールする時は金が欲しい時」と呟く。

○首相官邸（ぶら下がり取材）（昼）

石原「本日、2024年10月11日であります。2025年度予算につきまして、内閣の方針である『発信する日本』を実現すべく、日本から海外への発信強化の目的として、4000億円の補正予算の策定を指示しました。臨時国会を招集し、年内の成立を目指す所存でございます」

記者「詳細はどういう形なのでしょうか？」

石原「今後3年間行うこととし、毎年4テーマ、合計12テーマを選定いたします。テーマにつきましては、分野を問わず、本方針の目的に資するものを考えております。尚、補助金につきましては、短期間・集中的に行い、その分配は、各省庁の縦割り行政を排除するため、選ばれた団体間での協議によって決定することと致します」

記者「今年選ばれたテーマは何でしょうか？」

石原「スポーツの分野から、野球のような世

界的な選手を輩出するべく、サッカーとバスケトボール。科学技術での存在感を高めるために、以前よりご要望のあった科学技術研究費。そして、日本の潜在能力をアピールできるベンチャー支援の4テーマで
「ございます」

石原が首相官邸から退出する。

○会議1（イントロ）（昼）

大内が誕生日席、大内から右に向かって、加藤由美子、加賀美正夫、左に小城涼太、島村康二が座っている。大内の横には、オブザーバーの参事官が二人。

大内「みなさまお集まりになりましたので、会議を始めさせていただきます。私は本会議の進行役を務めます、内閣府参事官の大内と申します。よろしくお願い致します」

全員、礼。

全員（4人）「よろしくお願い致します」

大内「では、参加のみなさまのご紹介を致します」

大内「日本サッカー機構 ライセンスマネージャーの小城涼太さん」

小城「小城です。よろしくお願い致します」

大内「日本プロバスケットボール運営協会

執行委員の島村康二さん」

島村「島村です。本日はよろしくお願い致します」

大内「分子生物系学会連合会 理事の加藤由美子さん」

加藤「加藤です。よろしくお願い致します」

大内「日本ベンチャー連絡会 代表の加賀美正夫さん」

加賀美「加賀美です。よろしくお願い致します」

大内「あと、オブザーバーとして、文部科学省とスポーツ庁から参事官各1名が同席しております」

二人の参事官、礼

大内「会議に先立ちまして、この補助費を趣旨につきまして、改めてお話し致します。先般、石原総理が述べた通り、この補助金は短期間・集中的にご活用頂くためのものです。ですので、団体の内部留保や基金としての運用、赤字補填には使えません。また、活用期間は、テーマのスパンは分野によって差がありますが、原則３年以内とし、必要があれば、以後の計画をご提出頂くことを条件に、最長５年とします」

大内「また、この補助金の多寡で、各団体への別の補助金が影響を受けることはありません。ただ、地方自治体に関しては、地方自治の観点から、独自に判断をされます」

大内「事前に各団体より要望金額をお聞きしておりますが、４団体とも要望額が約２０００億円となっております」

大内「では、各団体からご提出頂いた資料がお手元にあるかと思しますので、まずそれに沿った形でご説明頂き、それから議論に

入りたいと思います。それでは、小城さんからお願いできますでしょうか？」

○会議１（最初の説明…小城）

小城「はい。日本サッカー機構の小城です。

ご説明させて頂きます。よろしくお願い致します」

全員、礼

小城「近年、ヨーロッパを始めとする海外で活躍する選手を多く輩出しているのは、私どものリーグあればこそだと考えております。W杯もリーグが出来てから、7年連続で本戦に出場しており、そのレベルの高さは各方面から認められているものだと思います」

小城「トップリーグ全体としては、2023年度は黒字ですが、世界で戦う選手を育てるためには、一段の環境整備が不可欠だと認識しております。ですので、本補助金をスタジアム整備に当てたいと考えております」

す」

小城「私どもでは、トップリーグに昇格するための条件として、ホームスタジアムに対して、一定の水準を保つために設置基準を設けております。しかし、その基準が未達のクラブが多いため、制裁として例外規定を設けております。それが20数クラブございます。具体的には、その解消に充てる予定です」

小城「みなさんもお承知のように、日本人メジャーリーガーが打ったホームランが日本企業の広告看板のすぐ横を通り、TVで大寫しになったことで、元が取れたんじゃないかという話もありましたが……」

全員、少し笑い。

小城「私どもがいきなりそのレベルになることは難しいと思います。ですが、スタジアムの整備によって、サッカーの試合での広告効果が認められ、さらに広告やスポンサーが付く。こういう好循環になることを目

指したいと考えております。以上です」

大内「ありがとうございます。それでは島村さん、お願い致します」

○同（最初の説明…島村）

島村「プロバスケットボール運営協会の島村です。よろしくお願い致します」

全員、礼。

島村「私どもの団体は、発足が2016年と比較的新しいのですが、発足当初に比べて入場者数は2倍以上になっており、成長が著しい団体です」

島村「みなさんバスケットボールといえばアメリカのNBLという印象が強いと思います」

全員、頷く

島村「実際、世界のバスケットボールリーグの中では、NBLは人気・実力、そして興行面にも抜きん出ており、それに対抗するようナリーグを作るのは難しい」

島村「そこで、私たちは世界で2番目を目指しております。どこかで2番じゃダメなんですかと言って、3番になった方がいらっしやいましたか？」

全員、少し笑い。

島村「私どもは自分たちの身の丈を理解しております。実現不可能な目標は立てません。最初から2番を目指します。世界のリーグで言えば、中国のCBAやヨーロッパのユーロリーグと同じくらいの規模になります」

島村「そのため、私たちは『夢のアリーナ』構想を進めております。お配りしているのは、少し古いですが、私どもも参画している経済産業省のスポーツ未来開拓会議の2023年7月の資料です」

全員、資料をチラチラめくる。

島村「バスケットボールが他のプロスポーツと異なるのは『エンターテインメント性の追求』を掲げている点です」

島村「もちろん、これは遊びでやるということではありません。選手はプロですから。選手はパフォーマンスで魅せる、そして、観客は、そのパフォーマンスを引き出す。その相乗効果を狙ってのものです」

島村「そのためには『夢のアリーナ構想』を実現させることが必要不可欠だと考えております」

島村「ただ、現在は渋谷や島根のチームなどは、既存の体育館をお借りして試合を行っております」

島村「もちろん、これらの関係者のみなさまにご理解頂いて開催できていることは大変ありがたいと思っています。ご協力に感謝申し上げます」

島村「しかし、私どもの『エンターティメント性の追求』には、コート中心の上部にあるセンターディスプレイを始めとして、照明・音響設備が欠かせません」

島村「また、サッカーと同じように、トップ

リーグには、その質を担保するために、アリーナに一定の基準を設けております」

島村「ですが、施設だけに基準を設けても収支が伴わなければ意味がありません。そこで、私どもは売上高についても、12億円以上という基準を設けております。それらを伴ったアリーナの整備に今回の補助金を使わせて頂きたいと考えています」

島村「また、アリーナは多目的で使うことができますので、オリンピックの競技種目や、DJイベントなどの若者向けのイベントも積極的に開催することを考えています。以上でございます」

大内「ありがとうございます。それでは次に加藤さん、お願い致します」

○会議1（最初の説明…加藤）

加藤「加藤由美子と申します。分子生物学会の理事をしております。よろしくお願い致します」

全員、礼。

加藤「科学技術で世界に最もアピールできるのは、なんと言ってもノーベル賞でしょう。これについてはみなさん異論はないと思います」

全員、頷く。

加藤「また、ノーベル賞は受賞の栄誉はもちろんのこと、私たちの生活にも恩恵をもたらしてくれています。みなさんに馴染みのあるものと言えば、やはり青色発光ダイオードとIPS細胞でしょうか」

加藤「ただ、これらの研究は一朝一夕にできるものではありません。原理が発明されてから数十年経って花開く研究もあるのであります」

加藤「私たちは、その花が開くための芽を摘んではいけないと考えております。かつ、芽を出すためには出来るだけ早く、タネをまく必要があります。それで今回、この補助金での科学研究費助成事業の増額をお願い

いした次第です」

加藤「しかし、芽が出る可能性があるからと言って、全ての研究に均等に費用を出してくれとお願いしている訳ではありません」

加藤「科学研究費には、いろいろ種類がございますが、一般的な『基礎研究』のカテゴリで言いますと」

加藤は手を水平にして、上から順番に下げていきながら、

加藤「S、A、B、Cの4つのランクがあります。これらは各研究者が応募して、審査を経て採択されます」

加藤は再び手を水平にして、上から順番に下げていきながら、

加藤「補助金額はSで最大二億円程度、以下、Aで5000万円、Bで2000万円、Cで500万円です」

加藤は再び、Sは右手、Aは左手でランクを呼ぶ毎に、その位置を示しながら、

加藤「SとAは重複応募が出来ますが、それ以外は出来ません。つまり、A、B、Cのどれかのみに応募して採択されなければ、補助が全く受けられないことになります。そのため、有望な研究であっても、落選することを恐れて、一つ下のランクに応募しているのが現状です」

全員、頷く。

加藤「また、採択されたとしても、要望した金額の満額を補助して頂ける訳ではありません。みなさんの団体もそうだと思いますが、何かをする際に満額の予算を頂けることは少ないかと思います」

全員、頷く。

加藤「私たちは、申請した金額に対して、補助して頂いた金額の割合を『充足率』と呼んでいまして、それが約75%です」

加藤「一番下のランクCは先ほどお話ししましたように、補助金額は最大500万円ですが、採択されたテーマの平均補助額は約

126万円です。これでは1年間アルバイトを一人雇うこともままならないのです」

加藤「ですので、私もはこの充足率を上げることを中心として、この補助金を使った
いと考えております。以上でございます」

大内「加藤さん、ありがとうございます。それでは最後に加賀美さん、お願い致します」

○会議1（最初の説明…加賀美）

加賀美「日本ベンチャー連絡会の代表をしております、加賀美と申します。よろしく
お願い致します」

全員、礼。

加賀美「みなさん、ベンチャー企業と言え
ば、どの会社を思い浮かべるでしょうか？
月並みですが、GAF Aと呼ばれるIT企
業でしょう」

全員、頷く。

加賀美「創業時期は異なりますが、例えばグ

ーグルなどは1998年創業で、親会社のアルファベットの時価総額は1兆7500億ドルを超えます。一ドル155円とすると約270兆円、日本の国家予算の2倍近くになります。こういう企業が日本にあれば、国債を発行しなくてもやりくりできるのではないかと思うのですが……」

全員、笑い。

加賀美「今でこそ、ベンチャーと言えばアメリカ、というイメージですが、日本でも、古くはパナソニックの松下幸之助さんを始め、ソフトバンクの孫正義さんなど、みなさん、最初はベンチャーだったのです」

加賀美「ベンチャーに求められているのはアイデアを具現化するスピードです。今回の補助金の趣旨である短期的かつ集中的に、目的に沿うものだと思います。早期に具現化し、投資家へアピールして目に止まれば、それ以降の資金が集めやすくなり」

加賀美は両手の指を回しながら、

加賀美「より開発が加速できるという、正のスパイラルを生み出すことができます。そのきっかけを作りたいと考えております。その点、ご理解頂ければと存じます」

○同 議論（科研費、ベンチャーのターン）

大内「みなさんのご説明が一巡しましたので、議論に入らせて頂きます。ご質問のある方は拳手をお願い致します」

小城が手を挙げる。

小城「よろしいでしょうか？」

大内「小城さん、どうぞ」

小城は手元の資料を見ながら、

小城「加藤さんにお伺いしたいのですが、頂いているこの資料は、科学研究費増額の署名活動に使われたとお聞きしていますが」

加藤「はい、そうです」

小城「この要望書は270近い団体が連名となっていますが、署名の方は2万5000筆くらいと聞いています。ですので、研究

者のみなさんは、本件についてそれほど問題にしていけないのではないのですか？」

加藤「いえ、私はそうは捉えておりません。

私の周りを含め、いろんな方から増額の要望を聞いているのは確かです」

島村「私からも一つお伺いしたいのですが、この資料の８ページに例として、２０２２年の医薬品が、４・６兆円の貿易赤字であるという記述があります。特に２０２１年から２２年での増加量が多いですよね？これは、コロナワクチンの輸入の増加で一過性のもののように思うのですが」

加藤「はい。そうとも言えるかと思います。しかし、財務省の貿易統計の資料では、『医薬品』という項目までしかなく、それ以上の詳細までは示されていませんので、分けることが出来ません。ですので、このような形にしております。ただ、注釈としてそのページの左に吹き出しで、その旨、記載しています」

小城は加賀美を見ながら、

小城「ワクチンと言えば、大阪のベンチャーが開発から撤退したと聞いていますが…」

加賀美「おっしゃる通りです。ただ、当時ワクチンについては危急を要していましたので、開発を急ぎすぎたのだと思います」

加賀美「この会社もそうですし、特撮で使うようなバイクの開発をしていたベンチャーもそうですが、マスコミのみなさんは話題性や絵面の良さで露出していた感があります。世間の方がそれを見て『やっぱりベンチャーってダメなんだ』という印象を持たれるのは残念なことですよ」

小城はベンチャーの資料を見ながら、

小城「あと、コロナ禍に出されたそちらの提言書の8ページにある『提言5』ですが、『一般中小企業への補助金、助成金、貸付金に対する手続きとは異なる優先的な資金支援を行うことも有効だ』と、あります。これは中小企業支援よりベンチャー支援を

優先せよ、と受け取れるのですが、どうなのでしょうか？」

加賀美「いえ、そういう意味ではありません。その前に書かれていますように『一定の評価がなされているベンチャーに対して』です。つまりベンチャー全てを対象にしてくれと言っている訳ではありません。ですので、中小企業のみなさんをないがしろにしている訳ではありません」

○同 議論（サッカー・バスケのターン）

加藤「私からもご質問したいのですが、小城さん、島村さんとも、主にスタジアムの整備に使うということでしたが、一定の基準があるとおっしゃっていたかと思います。具体的にはどういう基準なのですか？」

小城「サッカーの場合、細かい規定はあるのですが、大きなところで言いますと、観客席が15000席以上、新規でスタジアムを建設する際は、観客席は原則全て屋根を

覆うことが基準となります。既存のスタジアムに対しては、3分の1以上でも満たしていることにしています」

加藤「それでスタジアムの、どの部分がメイ
ンになるのですか？」

小城「屋根になります」

加藤と加賀美は少し、びっくり。

お互いに顔を見合わせる。

加賀美「しかし、小城さん。屋根でスタジアムあたり100億円というのは、金額が大きすぎる気がするのですが……」

小城「いえ、実績から見積もっています。長野のスタジアムで屋根を改修したのですが、その時の費用が約80億円でした。また、現在、クラブのホームスタジアムにしている施設は老朽化が進んでいるところもありますので、立て替えた方が安くなる場合もあります。もちろん、地元の自治体の協力も必要になりますが、九州に新設したスタジアムは、約107億円です。ですの

で、見積もりとしては妥当だと考えています」

加藤「島村さんの方は？」

島村「私どもは2026～2027シーズンから構造改革を行い、リーグのトップは『プレミアムリーグ』となります。その基準で言いますと、収容人数500人以上でスイートルームなどを設置するアリーナが新基準になります。その建設費用に各アリーナに50億円ずつを割り当てたいと考えています」

加藤「アリーナ全体でどのくらいの費用がかかるのですか？」

島村「収容人数にもよりますが、150～180億円、大きなものですと200億を超えることもあります。ただ、その場合は体育館としても使える前提で建設すること、公共性も確保できますから、比較的自治体の協力が得やすいように感じています。私どものチェアマンもアリーナがリー

グ改革の一丁目一番地とおっしゃって
います」

加賀美「…私からしますと、小城さん、島村
さんともやはり1件あたりの金額が大きい
という印象です。いわゆる『ハコモノ』と
違うのでしょうか？」

島村「はい。私の考えでは『ハコモノ』は目
的や見通しが曖昧なまま作ってしまい、お
荷物になってしまった施設という認識で
す。しかし、私どもは目的が明確で、それ
を実現するための施設を作るというスタン
スです。結果として施設が出来上がること
に変わりはないのですが、考え方が逆なの
です」

加賀美「わかりました。ありがとうございます
す。あと、島村さん。私は仕事柄、どうし
ても決算の方に目が入ってしまうのですが
…、バスケはトップリーグトータルで赤字
ですよ？ この補助金は赤字補填には使
ってはいけないことになっていますが、そ

の点は大丈夫なのでしょうが？」

島村「赤字の話をされると、言い返す言葉もないのですが……」

全員、少し笑い。

島村「先ほどからお話ししていますように、トップリーグでは売上高の基準を設けることにしています。また、現在、収容人数4000人の体育館で行われている試合でチケットの完売が多かったので、試験的に10000人規模のアリーナで試合を行なったことがあるのですが、その際には9600人以上のお客さんに足を運んで頂きました。ですので、赤字を解消するポテンシャルは十分にあると考えています」

小城「ところで、加賀美さん。先程の加藤さんのお話で、『基礎研究』にも将来性を考えて4つのレベルというか、補助金額に差があるとおっしゃっていましたが、ベンチャー支援にもそういう形をお考えなのですか？」

加賀美「はい。それは考えていますが…、考
え方が少し異なります」

小城「…と、言いますと？」

加賀美「最初に申し上げました通り、日本に
名だたる、世界に名だたる企業に育てたい
というベンチャーは比較的投資が呼び込み
やすいのです。理由はシンプルで、大きな
リターンが望めるからです」

小城「確かに上場したら株で大金が、という
話はよく聞きますね」

加賀美「そうです。それは市場原理としては
間違っていないませんし、悪いことでもありま
せん。しかし、逆に言いますと小ぶりのベ
ンチャーには資金が回りにくいのです。で
すから、クラウドファンディング方式で
資金を調達しているところもあります。そ
このケアをしてあげたいのです」

加藤「でも、リスクが大きいと思うのです
が、なぜ？」

加賀美「大企業化を目指すベンチャーはいい

意味で野心があります。ただ、中小のベンチャーはそれ以外に別の考えを持っていると感じているからです」

加藤「それは？」

加賀美「『使命感』です。自分たちの技術なり、サービスなりが大企業にならないかも知れないが、必ず世の中の役に立つ、そういう確固たる信念のようなものです。それを資金面でサポートしてあげたいのです」

加藤は加賀美を見る。

加藤「私どもの基礎研究と似ているところがあるのです。『確固たる信念』というところが……」

加賀美は加藤を見返す。

加賀美「……そうですね」

大内「……それでは、今日はこの辺で終わりますでしょうか。概算要求まで時間ありませんので、次は1週間後の開催とします」

○会議 2 ～ 5

（会議 2）小城が手を資料に手をやりながら、話をする。

× × ×

（会議 3）島村が手で四角を作りながら、話をする。

× × ×

（会議 4）加藤が手で丸を作りながら、話をする。

× × ×

（会議 5）加賀美が手を広げながら、話をする。

× × ×

○会議（6回目）

大内「なかなか結論が出ませんね。大臣の方からも、補正予算の概算要求に間に合わせるよう言われていますし、総理も気にしておられます。本来は当事者のみなさんの話し合いで決めることになっていますが、予

算額から大きく超過したままです。ですので、まず、各団体の希望額の半減を目安にご検討下さい。それを持って次回の会議での『話し合い』で、最終決定という形にしたいと思います。よろしくお願い致します」

小城「：」

○会議室（サッカー）

前に小城が座っている。

向かい側に長机があり、各クラブの代

表が座っている。

小城「：と、いうことで、要望額を半分にするよう指示がありました。私としては、今季の成績順に資金の割り当てをしたいと考えていますが、いかがでしょうか？」

石川「小城さん、これから始まる入れ替え戦は反映させるんですか？」

小城「いえ、入れ替え戦の結果は含まないつもりです。自動昇格・降格も同様の扱いで

す。あくまでリーグ戦のみの成績です」

河瀬が手を挙げる。

河瀬「ちょっと待って下さい！ この予算は来年度からのものでしょうか？　ウチは昇格が決まっています。それなのに反映されないんですか？　納得できません！」

小倉「ウチも入れ替え戦で昇格の可能性があるんですよ？　その案は受け入れられないですよ！」

大島は小倉の方を見て、

大島「小倉さん、入れ替え戦の反映は難しいと思いますよ。１００億のかかった試合となれば何が起こるか分かりませんし、下手をすれば警察沙汰です。機動隊まで出てくるかも知れません。そうなればサッカーのイメージダウンは避けられませんし、最悪、それで私たちへの補助金はなし、となりかねません。反映しても自動昇格・降格のみにするのが穏便だと思いますが…」

小倉は大島の方を見て、

小倉「それなら、いっそのことリーグ戦の順位のみが公平でしょう！」

村上「小城さん！ 私は今季の成績のみで判断ことには反対です！ 私たちのクラブは、今は二部ですが長く一部に所属していましたが、リーグの発展に寄与してきた自負もあります！ こういう過去の実績を無視して今年の成績だけで優先順位を決めるというのは納得いきませんよ！」

小城は紛糾を見ている。

小城「：わかりました。では、例外規定が適用されている期間の長いクラブから、という形ではどうでしょうか？」

浜崎「反対です！ 期間が長いってことは、それだけ例外規定の解消を放置してたってことでしょう？ そういうクラブは解消する努力をしていないからですよ！ それに後から参入したクラブが不利です！ とても受け入れられません！」

村上は浜崎を見て、

村上「浜崎さん、そういう悪意のある言い方はやめてもらえませんか？ 努力はしてま
すよ！」

小城は再び紛糾を見ている。

小城は頭を抱える。

小城「…困りましたね。…では、対象のクラブに１００億の半分、５０億円ずつ割り当てることにしませんか？」

佐橋「小城さん、残りの５０億はどうするんですか？」

小城「そこは、地元の自治体などの協力を得る形でお願いしたいと…」

佐橋「仮に自治体の協力が得られずに例外規定が解消できなかったら、どうするんですか？ 最悪、全滅もあり得ますよ？ 国に
なんて言うつもりですか？」

岡部「その通りです！ この話、当然地元自治体も知っています。ただでさえ風当たりが強いのに、『残りの５０億お願い』なんて言える訳ないでしょう！」

石川「そうですね！　うちも既に自治体から補助金の削減を匂わされていますよ。こちらには１００億を当てにして、施工業者の選定も始めてるのに！」

小倉「それに、サポーターが黙っちゃいない！　満額回答じゃなければクラブの力がない、裏切られたと私たちが突き上げをくらうのは目に見えています！　どうしても減らすというのであれば、小城さんが自ら出向いてサポーターに説明して下さい！」

複数「その通りだ！」

紛糾するのを小城が見ている。

小城「…」

○会議（最終）

大内「それでは、会議を始めます。前回お願いしていました補助金要望額の削減について、ご報告をお願いします」

加藤「私どもは削減しまして、１０００億円をお願いしたいと思います。不本意ではあ

るのですが、これで少しでも科研費が確保出来るならと考え、苦渋の決断をしました」

加賀美「私どもも、当初額の約半額の1000億円を要望します。難しい選択ではあったのですが、投資先をより精査して対応することになります」

島村「こちらにも要望額を1000億円に下げることになりました。国の他の予算には影響しないということでしたので、引き続き夢のアーリーナ構想の実現を国や地方自治体に働きかけて行きたいと思います」

大内「それでは、最後に小城さんお願いします」

小城「私たちは当初の金額を要望します」

全員、小城に注目する。

大内「前回、半額を目安に、とお伝えしたはずですが……」

小城「もちろん、内部で調整をした結果です」

大内「理由を教えて頂けませんか？」

小城「サッカーは文化だからです。エンタメとは違います」

島村が立ち上がる。

島村「ちょっと待って下さい、小城さん。そういう言い方はないでしょう。あたかもエンタメの方が格下だと言わんばかりじゃないですか。失礼でしょう」

小城「エンタメを見下している訳ではありません。サッカーは文化です。文化にお金を出すのは当然だと言っているんです。それにそこらは赤字じゃないですか。赤字の団体にお金を出すだけ無駄でしょう？」

島村は、顔を紅潮させて、語気を強める。そして、資料を持って、

島村「それじゃあ、言わせてもらいますけどね。ドコとは言いませんが、特別利益の名目で毎年、決算の辻褄を合わせているクラブがあるじゃないですか！」

島村は資料を手の甲で叩いて、

島村「去年は14億！　それがなければそっ
ちも全体で赤字でしょう！」

小城も応戦。

小城「特別利益の話は、そちらも同じでしょう！」

島村「ええ、確かにいくつかのクラブは特別
利益を計上していますよ！　でも、それを
差し引いても、それらのチームは全て黒字
ですよ！」

小城も顔を紅潮させて、両腕で机を叩
いて、

小城「とにかく、サッカーは文化なんです！
文化を残していくためには、お金が必要
なんです！」

加藤「小城さん…、それほどサッカーは文
化、文化とおっしゃっているのですたら
…、文化庁に移ってはいかがですか？」

小城も顔を紅潮させて、両腕で机を数
回叩きながら、

小城「サッカーは、スポーツであり！　文化

なんです！」

大内は手を広げて3人をなだめる。

大内「まあ、3人とも、落ち着いて下さい
：」

島村は席に座る。

大内「：加藤さん、少し言葉が過ぎませんか？」

加藤「すいません：、つい：」

大内「小城さん。他のお三方は、苦しい中ご協力して頂いています。：ですので、要望額の方、もう少しまけて頂くことできないのでしょうか：？」

小城「：」

小城は両腕で、机を叩いて、

小城「：絶対にマケられないんです！」

○エンディング（大学のキャンパス…昼）

学生1「なあ、例の4000億の話、揉めてるらしいぞ」

学生2「そうみたいだな。まあ、おれには興

フィクション劇場 第九話「存在意義」

味ないから、どうでもいいけど」

学生「そんなもんか？」

学生2「そうだ。：でも、一つだけ言えることがある：」

学生1「何だ？」

学生2「自分たちの存在意義をアピールする時ってのは：、金が欲しいときだ」

E
N
D

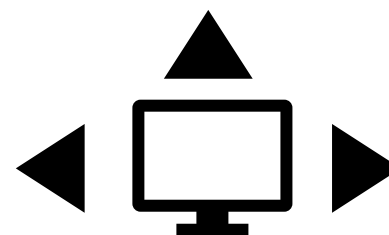
（2025年6月15日 初出）

（2025年11月20日 加筆・修正）



「同額」
フィクション劇場
第十話

大太
大



フィクション劇場 第十話「同額」

【登場人物】

塩川 建男（しおかわ・たてお）（54）：静

岡8区選出の衆議院議員（パーティー収入
200万円）

田口 正弘（たぐち・まさひろ）（50）：大

日本テレビの系列局、静岡太平洋テレビ

企画部課長 募金管理者（着服200万

円）

有山 邦茂（ありやま・くにしげ）（53）：

同 企画部長 募金責任者 田口の上司

山下（やまぐち）（33）：同 企画部員

募金実働部隊リーダー

古賀（こが）（29）：同右

斉藤（さいとう）（25）：同右

宮原（みやはら）（61）：ワイドショー司

会者

澤田（さわだ）（28）ワイドショー アシ

フィクション劇場 第十話「同額」

スタント

杉山（すぎやま）（38）：ワイドショー

コメンテーター

井出（いで）（55）：与党 幹事長

種村（たねむら）（53）：同 政調会長

霧島（きりしま）（57）：同 総務会長

記者 1

記者 2

記者 3

募金者（年配の方）

【あらすじ】

静岡太平洋テレビでは、毎年GW期間中に募金活動を行っており、今年も募金管理者の田口昌弘が中心となって活動している。

一方、ワイドショーでは、パーティー券収入をマネーロンダリングまがいの方法で得ている議員がいると報道し、批判されている。

そのため、与党では当該議員の処分を検討したが、違法ではないため、以前の問題より軽い処分とすることを決定。その中に衆議院議員の塩川建男も含まれていた。

田口の上司で募金責任者の有山邦茂は、最近の募金額が減っていることに違和感を持ち、自分の進退をかけて田口を試し、田口に募金を着服していることを認めさせた。

塩川と田口の該当金額は同じだったが、塩川は議員は続けられるものの、名前が出てしまふ。田口は名前は出なかったが諭旨免職。相手の処分が自分より軽いのではないかと考え、お互い「なんで？」と疑問をぶつける。

○国会内の廊下（昼）

フラッシュが焚かれる。

塩川建男が足早に歩いている。

それをＩＣレコーダーやマイクを持った記者たちが追う。

記者１「塩川さん！ 週刊誌報道について一言お願いします！」

記者２「政治資金規正法に違反している事実はあるのでしょうか？」

塩川は立ち止まる。

塩川「政治資金規正法に違反している事実はありません。適正に処理しています」

塩川が足早に去る。

記者１「塩川さん！ 待って下さい！」

記者が追いかける。

○ワイドショー（昼）

宮原「今回、一連の週刊誌報道を受けて、明るみに出しました、一部の与党議員が改正政治資金規正法の抜け穴を突くような形で、

政治資金を還流していたとされる問題ですが、澤田さん、説明をお願いします

か？」

澤田「はい。今回、問題視されたのは有志が開催したパーティーが、実質的に特定パーティー開催団体が主催していたものだった、というものです」

宮原「具体的には？」

澤田「はい。通常、政治資金パーティーを開催できるのは、法律で定められた政治団体の一つである『特定パーティー開催団体』のみだと決められています」

宮原「と、言うことは、今回有志が企画したパーティーが違法だったということですか？」

澤田「いえ、そうではありません。政治資金規正法では、パーティー収入が1000万円未満の場合は、有志、ここでは政治団体や後援会関係者以外の方を指しますが、それらの方が開催する分には問題ありません」

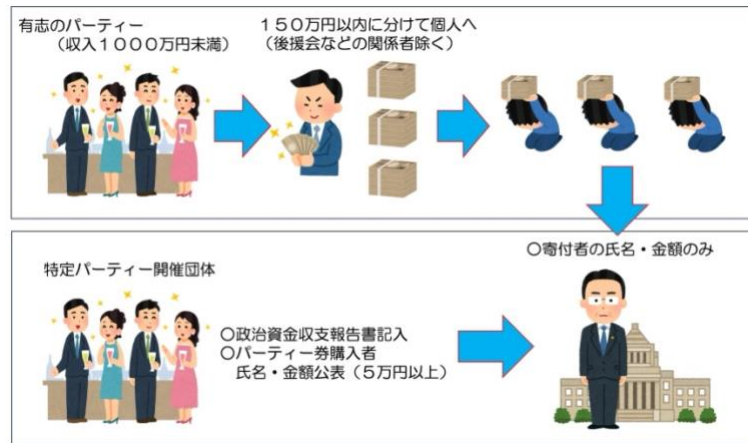
フィクション劇場 第十話「同額」

ん」

宮原「では、どこが問題だったのでしょうか？」

澤田「はい。問題となっているのは、そのパーティー収入の使われ方です。週刊誌で指摘されたのはこうです」

澤田はフリップを出して、



澤田「まず、開催した有志が、パーティー収入を一旦、プールします」

宮原「それで？」

澤田「そのプールされた収入を政治団体以外の方に、150万円以内の範囲で渡します。ただ、議員の後援会などからの寄付は禁じられていますので、それ以外の方になります。」

宮原「150万円というのは、個人が一人団体に寄付できる年間の限度額ですよ。」

澤田「そうです。そして、そのお金を受け取った方が、その議員本人に寄付をする、というものです。その際に寄付者の名前と、その金額は収支報告書には記載されますが」

宮原「なるほど。それで、今回問題視されたのは、こういった点なのでしょうか？」

宮原「2つあります。一つ目は、特定パーティー開催団体が開催した政治資金パーティーではないので、政治資金収支報告書に記載が不要なことです」

宮原「なるほど。つまり単なる寄付、という形になるのですね」

澤田「そうです」

宮原「もう一つは？」

澤田「一つ目と似ているところですが、政治団体が開催する政治資金パーティーではありませんから、パーティー券の購入者を公表する必要がないことです」

宮原「本来であれば、5万円以上の購入者は名前が公表されますからね」

澤田「その通りです」

宮原「で、そこから、個々人の寄付という形で、実質的にパーティー収入が議員本人に流れたと」

澤田「そう言えます」

宮原「なるほど。つまり、このやり方だと政治資金規正法で義務付けられている、政治資金パーティーの収支報告をしなくていいですし、せっかく改正して決めた、5万円以上のパーティー券購入者の氏名公開もしなくていい。しかし、実際のパーティー収入は議員に入ってくる、ということですよ」

ね？」

澤田「はい、そうです」

宮原「これ、杉山さん、どう思われますか？」

杉山「マネーロンダリングと言われても仕方のないやり方ではないでしょうか？ この政治資金規正法は、ザル法、ザル法と言われていました。以前の派閥のキックバック問題で、改正はされたものの、今回もその抜け道が露呈した形になっていますね。届出のあった政治団体だけではなく、各々の議員に関連する組織についても対象とすることも必要かも知れません」

宮原「ただ、有志の集まりを対象とするのは難しいですね」

杉山「私もそう思います」

宮原「この件、塩川議員以外も行なっている可能性があるかも知れません。引き続き注目していきたいと思います」

○静岡太平洋テレビ社内（昼）

社屋全景。

企画部フロア。

山下「田口課長、それでは行って来ます！」

田口正弘「おう、気をつけてな」

若手の数人の部員が外へ出ていく。

有山邦茂「そう言えば、もうそんな時期か

：

田口「そうですね、有山部長」

有山「ウチのキー局の大日本テレビほど大掛かりじゃないが、草の根活動として定着しているからな」

田口「ええ。正直、最初はなんでオレたちが？　って思いましたよ」

有山「それはオレも一緒だ」

田口は苦笑い。

有山「：まあ、これも上の理解があつてのとだな。社長も昔は駆り出されたみたいだし：」

有山「ところで、今日はどこに行くんだ？」

田口「いつものところですよ」

有山「…ACAO FORESTか…」

O A C A O F O R E S T 入 出 場 口 (昼)

小さい風船をアーチ型にデコレーション

した前に、募金箱を持った、社員が

5人。男性3人、女性2人。

5人の後には、静岡太平洋テレビの横

断幕。

お辞儀をしながら、

全員「恵まれない方への募金をよろしくお願

いします」

一人、入れる。

山下「ありがとうございます」

古賀がリーダーの山下に声をかける。

古賀「山下先輩、これ毎年やってるんです

か？ 去年もやりましたけど…」

山下「ああ、毎年やってる。ウチの恒例行事

だ」

齊藤も会話に入る。

山下に、

斉藤「いつも、この時期にですか？」

山下「そうだ。GWを挟んでの10日間だ」

斉藤「そうなんですネ：」

山下「GW中は観光客が多いし、ここはこの時期はバラが見頃だからな。人が多いところで募金を募るってのは、理にかなってる
だろ？」

古賀「まあ、そうですね」

山下「静岡の観光地っていうと、まずは富士山、次は温泉って感じなんだろうけど、ここは熱海駅からも近いから、結構、観光客が来るんだよ。自然を満喫できる場所だからな。散策にもってこいだ」

斉藤「へえ、僕は地元の人間じゃないから知りませんでしたよ」

山下「まあ、そこそこの有名だけど、全国区とも言い難いからな。でも、今はまだ試験的みたいなんだけど、ここからヘリを飛ばして、富士山を見る遊覧ツアーも考えてるみ

たいなんだ」

古賀「そんなのがあるんですね。SNS映えしそうじゃないですか。そんな景色普通じゃ見えませんし。：お金はかかりそうだけど：」

山下「費用はよく知らないが、見てみたいことは確かだな。外国人観光客なんかにはウケそうだ」

斉藤「でも：、みんながGW中の観光気分の中で募金してるっていうのが、どうにも：」

山下「まあ、そう言うな。ウチの社員が全員通る道だ」

一人、募金しようと山下に近寄ってくる。

募金者「：この募金、あんた方がいくらかもらうんじゃないだろうね？」

山下「もらいませんよ、おばあちゃん。私たちは仕事の一環でやっています。給料は会社から出ますので安心して下さい」

募金車「後の風船とかもかい？」

山下は後の風船のアーチを見てから、

山下「はい。全部会社の持ち出しです」

募金者はニコツとして、

募金者「それじゃあ、募金させてもらうよ」

募金者は募金箱にお金を入れる。

山下「ありがとうございます！」

募金者は去っていく。

古賀「…最近、こういうのが多いらしいですね」

山下「そうだな。募金してくれた方は当然、使い道は気になるだろうし。そういうところは、ウチでもきちんとしなないと…」

古賀「そうですね」

引き続き、募金の呼びかけ。

○与党本部会議室（昼）

幹事長室の応接スペースで、3役（井出、種村、霧島）の会議。

Ｔ『与党幹事長 井出』

井出「霧島くん、例のパーティー収入の件、党内の状況はどうなっている？」

T『与党総務会長 霧島』

霧島「はい、幹事長。各議員にアンケートを実施してまして、9割方回答が来ています」

井出「調査対象の期間は？」

霧島「昨年までの5年間です」

井出「で、数はどのくらいだ」

霧島「今のところ40名ほどです」

井出「多いな……。金額は？」

霧島「バラツキがあります。100万から最高で1000万円です」

井出「上限も何人かいるのか？」

霧島「そうなります」

井出、考える。

井出「：違法じゃないとは言え、道義的な責任がないとも言いきれないし、お咎めなしでは世間が納得ないだろう。この件は、対応を間違えると酷いことになる。またか

：、と」

霧島「私もそう思います」

井出「うーん。今回も党内の処分と政治資金
規正法の再改正の二本柱あたりだと思うが
：。種村くん、どうだろう？」

T『与党政調会長 種村』

種村「再改正は致し方ないところがあります
が、どこまで改正するかは拙速に決めるの
は良くないと思います。そもそも『有志』
の定義が難しいです。議員がからむパーテ
ィーが全て規制法の対象になると、身動き
が取れません」

井出「確かに。野党はどう出て来そう
だ？」

種村「今回の問題の発端は、有志が開催した
パーティーが、実質的に特定パーティー開
催団体が開いたのと同じことというところ
です。ですので、その線引きの基準となっ
ている１０００万円の金額を下げてくるよ
うに要求してくるでしょう」

井出「いくらくらいを考えていそうだ？ 肌感覚でいい」

種村は顎に手を当てて、

種村「実質的に無効化するのであれば…、個人献金の上限と同じ、150万円以下くらいでしようか…」

種村「ただ、それですと少人数の集まりでもパーティーと見なされて、管理が大変になります。それは野党でも同じでしょうから、そこまでは要求してこないと思います
が…」

井出「そうだな…。で、ウチはどうするつもりだ？」

種村「金額を半額の500万円以下、で各党に打診しようと思っています」

井出「…また、金額闘争になる形か…」

種村「落とし所としては、仕方がないかと…」

井出「しかし、今までの半額なら、2回開催すれば一緒じゃないかという話も出てくる

かと思うが」

種村「はい。パーティー以外の収入源を持っている党は、回数不問で全面禁止か総額キヤップのような要求をしてくるかも知れませんが、ここは金額で多少の譲歩はしても、押し切るしかないと考えています」

井出「分かった。では進めてくれ」

種村「はい」

井出「次に党内の話になるが、霧島くん、どういう対応を考えている？」

霧島「はい。今回の件は、政治資金規正法に明確に違反している訳ではありません。ですので、議員の倫理的問題、つまり、党規約第九十二条の二の『黨員たる品位をけがす行為』を根拠とした処分を考えています。ただ、今回はあくまで倫理的問題ですから、前回とは話が別になるかと思うのですが……」

井出「しかし、世論はそう思ってはくれないだろう。マネーロンダリングだとか言われ

てるしな」

霧島「はい。前回の処分は不記載500万円以上に限定しましたが、今回はそれだと、対象の議員が少なくなり、対応が甘いと捉えられるでしょう。ですから処分は対象の全議員として、全体的に軽い処分とする、という形ではどうでしょうか？」

井出「具体的には？」

霧島「前回の一番軽い処分は『戒告』でしたが、これを1段階軽い『党則順守の勧告』とします。そして、『党の役職停止』、『戒告』と合わせ3段階とする形です」

井出「役職停止は誰になる？」

霧島「選挙対策本部長の大泉議員だけです」

井出「よりによってそこか……」

霧島「まあ、選挙の顔として知名度はあるのですが、世間では言説の一致というか不一致というか、そういうところを揶揄される部分もありましたが、最近は息を吹き替えしたように評価も上がっているので、話

題を提供してくれているという意味では悪くないのですが……」

井出「仕方ないな」

霧島「そして、処分を決めるのは党規委員会ではなく、幹事長とします」

井出「……なるほどな。幹事長処分となれば、党内では党規委員会が決定した処分よりは意味合いが軽い。だが対外的には、あまり気にされないだろうからな。もちろんマスコミは違いについて報道するだろうが」

霧島「いかがでしょうか？」

井出「それで行こう。アンケートが出揃い次第、前回の処分内容と比較して、各議員間で不満が出ないように調整してくれ」

霧島「分かりました」

○静岡太平洋テレビ（昼）

企画部フロア。

田口が有山の机に向かう。

田口「有山部長、今回の募金、無事に終わり

ました」

有山「お疲れさま。大体どのくらい集まった？」

田口「1日3万円、合計で30万円ちょっとでところですよ」

有山「分かった。他の自主募金会場の分も集金しておいてくれ。あと、いつもの2つのところは別で頼む。ウチの上が出て感謝状を渡すからな」

田口「はい。承知しています」

有山「ところで、6年ほど前に田口くんに担当を引き継いでから、両替を銀行でやっているそうだが、ウチの経理に任せることはできないのか？ オレはそうやっていたが……」

田口「私も経理にお願いしているのですが、最近の業務効率化のせいで、負担が増えるから、と断られているところがありました……」

有山「そうか。銀行だと両替手数料がかかる

が、必要悪ってところか？」

田口「はい。実際問題、小銭が多いですから大変ですのて」

有山「分かった。お金はいつものように、ウチの金庫に入れておいてくれ」

田口「はい」

○静岡太平洋テレビ（数日後…昼）

企画部フロア。

田口から集金完了のメールが来る。

有山はノートPCで、メールを見て、

有山M「今年も、みんなよくやってくれたな

…」

有山M「コロナの影響もあって、募金額は減っているが…、こればかりは仕方ないか

…」

有山M「ん？ でも、田口くんに引き継いでから減っている感じだな。銀行の手数料の負担が大きいのか？ だとしたら、両替のやり方を工夫する必要があるが…」

有山は、自分のPCにある過去の募金額を見る。

有山M「これは、明らかにおかしいぞ？ コロナの影響で熱海に来る観光客が大体半減している年は分かる。しかし、コロナ後の今年は、観光客が8割程度に回復しているのに、募金額がそれほど戻っていない。他の募金会場も減っている」

有山M「レポートには書かれていない、何か、細かいトラブルでもあったのか？」

有山は考える。

有山M「…まずは、実際に募金した部員たちに聞いてみるか」

○同 企画部（同日…昼）

有山「山下くん、ちょっといいか？」

山下「はい。何でしょうか、部長」

有山「今年の募金だが、何か変わったことはなかったか？」

山下「変わったことですか？ 特になかった

ですが……」

有山「募金してくれた人はどうだった？」

山下「それなりに来てくれましたよ。今年はずっと晴れてましたから」

有山「この数年で雨が降ったことはあったか？」

山下「小雨程度はあったと思いますが、募金を中止するような日はありませんでしたけど……」

有山「そうか……」

山下「何か問題でもあったのですか？」

有山「いや、そうではないんだが……」

有山「募金の集計は？」

山下「各々の募金箱に入っているお金を一つの募金箱に集めて、田口課長に渡す感じですよ。かなり重たそうでしたけど」

有山は考える。

有山「分かった。ありがとう」

山下「？」

○同 企画部（数日後…夜）

フロアの人まばら。

有山「田口くん、ちょっといいか？」

田口「はい」

田口は有山の机に向かう。

有山「最近の募金金額が少なめのような気がするのだが、何か心当たりはあるか？」

田口「私の感じではあまり……。手数料による目減りはあるかと思いますが。後は、AC

AOFORESTの経営状態が影響しているかも知れませんね」

有山「一時期、良くなかったからな」

田口「はい」

有山「両替は、全部終わった後にしているのか？」

田口「はい。募金期間中は、他の自主募金会場の分と合わせて金庫にしまっていて、終了後にまとめて銀行に持って行って両替しています」

田口「：何か、やり方に問題があるのです」

か？」

有山「いや、そうではないが……」

有山、考える。

有山「今年の募金は、まだ、金庫の中か？」

田口「はい。既に両替はしていますが……。何でしたら確認しましょうか？」

有山「そうだな。だが、今日はもう遅い。明日、一緒に確認してくれるか？」

田口「はい。分かりました。それでは失礼します」

有山「お疲れさん」

フロアで有山のみになる。

机の引き出しを開け、中に入っている「経理予備」のタグのついた鍵を見つめる。

有山「……」

○同 企画部（翌日…朝）

有山を出勤してくる。

山下が有山に向かって歩いてくる。

山下「部長、おはようございます」

有山「ああ、おはよう」

山下「少し前に田口課長から電話がありました、少し遅れるそうです」

有山「…分かった」

有山は机で仕事をしている。

田口がフロアに入ってくる。

田口「すいません、遅くなりました。募金の確認の件はお昼からでいいですか？」

有山「ああ。田口くんの都合のいい時間に呼んでくれ」

田口「ありがとうございます。では、後でお呼びします」

お昼、休憩が終わる（チャイム）。

田口が有山の机に来る。

田口「有山部長、今から大丈夫ですか？」

有山「ああ。じゃあ会議室でよろうか」

田口「はい」

○同 会議室（昼）

田口が金庫から持ってきた手持ちの金庫を開けて、お札を数えている。

有山はそれを静かに見ている。

田口「有山部長、金額はご報告した通りです。問題ありません」

有山は少しの沈黙。

有山「そうか…、残念だな…」

田口「？ 金額が合っているのに、残念なんですか？」

有山「そうだ」

田口「なぜ、そんなことを…？」

有山が田口を見る。

有山「…昨日、オレが金庫から5万円抜いておいたからだ」

田口、びっくり。

田口「…」

有山「なぜ、金額が足りないことを正直に言わなかった？」

田口「…」

有山「やましいところがあったからだろ」

う？」

田口「：試した：のですか？」

有山「そうだ。確証はなかったがな：」

有山は懷から辞表を取り出し、机に置く。

田口は辞表を凝視する。

田口「辞めるつもりなんですか、部長？ 悪いのは私です！ 部長は悪くないのに、なぜですか？」

有山「：今のうちに、田口くんがお金が足りないことを隠していたら、それは私の監督責任だ」

田口「：」

有山「：もし、正直に言ってくれたら、私は部下を信じられなかったことになる。上司として失格だ」

田口「それを覚悟の上で：、ですか？」

有山「そうだ」

田口「しかし、なぜ、そこまでして：？」

有山「オレは、企画に来る前は報道で記者を

やってたのは知ってるだろう？」

田口「はい：」

有山「記者っていうのは、自分が違和感を感じたことは調べるものだと思っている。少なくともオレはな：。そういうのが染み付いているんだよ。それが記者の嗅覚のようなものなんだ：」

田口「それで：、私にその匂いがした、ということなんですな」

有山「：その通りだ」

田口「：」

有山「：しかし、証拠はない。オレは警察じゃないから、罪に問うようなこともできない。：だが、見過ごす訳にもいかない：。相應の覚悟はしてくれ」

田口「：分かりました」

有山「一つだけ聞いておきたい。：いくらだ？」

田口「：有山部長から担当を引き継いでから：、全部で：200万ほどです」

有山「そうか……」

田口「……」

有山「この件は、田口さんから直接申し出てくれ。そうすれば、懲戒免職にはならないだろう……」

田口は礼をしながら、

田口「ありがとうございます……」

○与党本部 記者会見室場（昼）

井出が演台に立っている。

フラッシュが焚かれる。

井出「今回のパーティー収入の還流問題ですが、党内のアンケート結果を踏まえ、問題があったとされる議員全てに対し、幹事長として処分を行うことと致しました。処分する議員のリストはお手元の通りです」

記者1「党規委員会での決定でないのは、なぜですか？」

井出「今回の件は、法令違反ではなく、あくまで議員の倫理的問題との認識です。で

すので、幹事長による処分とさせて頂きました」

記者2「政治資金規正法の改正については、どうお考えでしょうか？ 既に一部の野党から提案がなされていますが」

井出「野党のご提案については、真摯に、そして前向きに検討して行きたいと考えております」

記者会見、続く。

○議員会館…塩川の部屋の前（昼）

塩川が立っている。記者多数。

記者3「塩川議員、今回の処分を受けてどう感じになりますか？」

塩川「大変厳粛に受け止めております。今後は有志の方のパーティーであれ、私自らが確認し、個人献金についても同様の確認をしていきたいと思っております」

塩川が部屋に入る。

○同 塩川の部屋（夜）

TVのニュース。塩川が井出の記者会見のVを見ている。

キャスターが各議員の還流額をテロップで出している。

その中に「塩川建男議員 200万

円」とある。

塩川「：全く、法律を犯してないのに処分されているのは、たまらんよ。今回の件に無関係で寄付してくれた支援者の方にも、片っ端からマスコミが押し寄せているようだし。誰がこんなことを考えたんだって、犯人探しも始まっている。まさか、上からちょっと試してみたら？ って言われたからなんて話せる訳がない。当分、地元で謝罪と釈明の毎日だ。ただ、このやり方は選挙区のみなさんに私からお願いした話だから、信頼度ゼロだろうな。：次の選挙はかなり厳しくなりそうだ：」

○田口の自宅（夜）

田口は、塩川と同じＴＶのニュースを
見ている。

田口「おい、この塩川って議員、オレと同じ
２００万なのに、『党則遵守の勧告』って
…、一番ゆるい処分じゃないか。いくら法
令違反じゃないといっても軽すぎだろ？」

同じテレビの次のニュース

キャスター「次のニュースです。静岡太平洋
テレビの企画部の課長が、同テレビが行な
っている募金を着服していたことが分かり
ました。課長は既に諭旨退職しており、着
服金額は約２００万円と見られています。
これを受けて静岡太平洋テレビはコメント
を出し、『募金を頂いたみなさまに大変申
し訳なく思っております。今後は信頼回復
に向け、社内のガバナンス強化を図って参
ります』としています」

○塩川の部屋（夜）

フィクション劇場 第十話「同額」

同じテレビのニュースを見ている。

塩川「このテレビ局のヤツ、オレと同じ額なのに、名前が出ないのか？　こっちは晒し者で、次の選挙も危ないってのに……。それに、諭旨退職って何だ？　退職金がもらえるじゃないか……」

塩川「……」

×

×

×

田口「……」

×

×

×

塩川「……」

×

×

×

田口「……」

×

×

×

画面を分割して、二人の顔。

塩川・田口「なんで？」

E
N
D

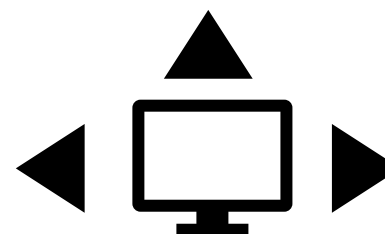
（2025年6月15日 初出）

（2025年11月20日 加筆・修正）



「募金」
フィクション劇場
第十一話

大太
大



フィクション劇場 第十一話「募金」

【登場人物】

宮下 義弘（みやした・よしひろ）（48）：

大日本テレビチャリティー番組「S・A・

G・I・」総合プロデューサー

山田 浩一（やまだ・こういち）（63）：大

日本テレビ取締役

石川 元基（いしかわ・もとき）（40）：

「S・A・G・I・」プロデューサー

真鍋 邦夫（まなべ・くにお）（44）：同右

藤村 直（ふじむら・ただし）（45）：同右

近藤 和美（こんどう・かずみ）（27）：同

アシスタントディレクター

本木 英智（きもと・ひでち）（53）：アニ

メ1 プロデューサー

武山 慶次（たけやま・けいじ）（50）：ア

ニメ2 プロデューサー

仁科 弘明（にしな・ひろあき）（37）：深

フィクション劇場 第十一話「募金」

夜アニメ プロデューサー

江ノ島 秀樹（えのしま・ひでき）（27）：

「S・A・G・I」の応援寄付サイト立ち上げ者

萩原：電話（声）

ネット民1

司会

「S・A・G・I」総合司会

メインパーソナリティ

宮下の息子

【あらすじ】

大日本テレビ毎年恒例のチャリティー番組が今年も開催される。取締役の山田浩一は総合プロデューサーに宮下義弘を指名、原点復帰と数値目標を示される。

宮下はプロジューサーの石川元基・真鍋邦夫・藤村直と動画サイトで、募金をスーパーチャットでも行なえる企画を模索する。

一方、番組に否定的な江ノ島秀樹は、悪意を持って、応援寄付サイトを立ち上げる。

番組が始まり、江ノ島の意図を理解した

人々が寄付を開始。江ノ島を協力者と見た宮下は、番組への出演依頼をADに指示する。

しかし、番組ADの近藤和美は江ノ島の実動が、番組への抗議であると宮下に告げる。

番組終了後、宮下は、元司会者の萩原から番組に存在意義があれば形は問わないのではないかと助言される。そして宮下は一度立ち止まって考えたいと山田に申し出るが、山田からの返事に疑問を持ち、退社する。

○番組制作記者会見（昼）

舞台の壇上に、総合司会とメインパーソナリティが立っている。

舞台の後には、「セーブ・アンド・ギフト・ウィズ・愛 2025」の横断幕。

フラッシュが焚かれる。

司会「今年も大日本テレビのチャリティ番組

「セーブ・アンド・ギフト・ウィズ・愛

2025（略称S・A・G・I・202

5）が開催されることになりました」

司会「放送時間は、全日帯、つまり午前6時から夜の12時になります」

司会「それでは、総合司会とメインパーソナリティのみなさんから抱負を頂きたいと思っています」

総合司会とメインパーソナリティが

抱負を述べていく。

それを宮下が見ている。

（回想シーン始め）

○大日本テレビ 取締役室（昼）

取締役の山田浩一は椅子に座っている。
る。

山田「宮下君、今年のS・A・G・I・は君に任せたい」

宮下義弘「はい。光栄です」

山田「君に任せるのは、ウチのゴールデンで人気番組を手がけている手腕を買ったのとだ」

宮下「ありがとうございます」

山田「君も知っている通り、この番組は40年以上続くウチの看板番組だ。チャリティ番組で社会活動に貢献する意味合いもある。だから多少単価は高いが、スポンサーも積極的に広告を出してくれている」

宮下「はい。承知しています」

山田「：ただ、最近は番組の構成や考え方が時代に合っていないのではないか、という話も漏れ聞こえてくる。ここは原点回帰を

基本に、今の要素も取り入れて、うまく融合させるように考えてくれ」

宮下「はい。分かりました」

山田「それと：」

山田は椅子から立ち上がり、外を見る。

山田「：15と20で頼む」

宮下「えっ：？ 数字が必要なのですか？」

山田「：この番組の『格』だ」

宮下「：」

山田「頼んだぞ」

宮下「：はい」

宮下M「原点回帰：か」

（回想シーン終わり）

○プロデューサー会議（番組編成の話…昼）

宮下・石川元基・真鍋邦夫・藤村直の

4人が会議室で打ち合っている。

宮下「石川、第一回目の番組プログラムは調べであるな」

石川「はい」

宮下「どんな感じだった？」

石川「2時間枠でアニメをやってますね、手

塚先生の。数字は良かったみたいです」

宮下「時間帯は？」

石川「お昼です」

宮下「アニメか？」

真鍋が身乗り出す。

真鍋「宮下さん、アニメと言えばウチには大

きなコンテンツが2つあります。後、深夜

帯を制作している子会社も」

宮下「ああ。今回はTシャツのデザインもし

てもらったしな。オンエアは日曜日だか

ら、昼の目玉になるかも知れないが？」

宮下「いつものヤツの再放送は難しそう

か？」

真鍋「分かりません。それなりに数字は取れるかと思いますが、新鮮味という点ではど

うかと？」

宮下「…まあ、そうだな」

真鍋「しかし、もしやるならアニメは時間がかかりますんで、早めに話を通しておかない」と

宮下「分かった、すぐアポを取って説明しに行くことにする」

宮下「他には？」

石川「最後の方に、パレードをしていましたね。外です」

宮下「出演者でか？」

石川「主に司会者とパーソナリティのようです。直近のコーナー出演者も参加していたみたいですね」

宮下「そうか……。マラソンをどうするかって話はあるが、国技館で待っているより、こちらからどこかに出向いて、それからみんなで募金箱を持って練り歩くっていうのもありかもな……。近くで確保できそうな場所はあるか？」

真鍋「小規模でもステージくらいは作らないといけないでしょうから、代々木公園くら

いしかないですね。ただ、国技館から10km以上、歩いて2時間はかかりますから、現実的ではありません。第一回目は代々木がメイン会場だったようですが……」

石川「あとは、道路の使用許可もありますし、募金するために一般の方も付いてくるでしょうから、交通整理の人員確保のことを考えると……」

宮下「……難しそうだな。天候のこともあるしな」

宮下「ドラマは？」

石川「3回目からです」

宮下「今までは基本、ヒューマンドラマだったが……。ドラマは数字に直結するしな」

石川「はい。それもフィナーレ直前です。で、それなりの盛り上げが必要かと思えます」

宮下「何かアイデアがあるヤツはいるか？」

藤村が手を挙げる。

藤村「宮下さん、アクションものとかはどう

でしょうか？」

宮下「アクション？ アクションと番組の趣旨をどう結びつけるんだ？」

藤村「例えば、自閉症だが頭脳明晰な主人公が事件を解決していくような。フランスのドラマでありましたよね？」

宮下「ああ、それは知ってる。他局でやってたヤツだろ？」

藤村「はい。それにカーアクションとかを組み合わせ、って感じで」

宮下「カーアクションって言うても…、最

近、そういうのは見たことないぞ？ 大丈夫なのか？」

藤村「この番組の大口スポンサーが昔、やってたと聞いていますので、ノウハウはあるんじゃないかと思っています」

宮下「そう言えば、そうだったな」

藤村「その時のキャスト再集結となれば、それなりの数字が取れるかと…」

宮下「なるほど。確かにM3、F3層あたり

にはウケるかもな」

藤村「音楽はもちろん、あの方で」

宮下「あの人は、ウチの局とも関係が深い

し、この番組とも関係が深い。アニメのテ

ーマ曲は誰でも知ってるしな。いいと思

う。ただ、名トランペッターが亡くなって

しまったのは残念だが……。とりあえず、候

補の一つとしておこうか」

宮下「それじゃあ、他の項目も進めておいてくれ」

石川・真鍋・藤村「はい」

○同所 会議の続き（募金の話）

宮下「さて、次は募金だ。目標金額達成に

は、今までの募金のやり方にプラスアルフ

アが必要だ。アイデアはあるか？」

石川が手を挙げる。

石川「宮下さん、より気軽に募金出来る方法を伸ばすのがいいと思います。前回もそれで伸びましたし」

宮下「具体的には？」

石川「すぐに目に見える形にするのはどうでしょうか？」

宮下「目に見える？」

石川「はい。今までの募金は、一度まとめてから、各団体に分配していました。ですが、それが不透明さを招いていたことも事実です」

宮下「それで？」

石川「前回の募金では、キャッシュレス募金
が手軽ということとで好評でした。ですの
で、動画サイトのスーパチャット、いわ
ゆるスパチャでそれをやればいいんじゃない
かと。実際にスパチャみたいだったとい
う話もあったみたいです」

宮下「：つまり、この番組のチャンネルを作
ってスパチャで募金を募る、ということ
か？」

石川「はい。スパチャならチャンネルを見て
いる人たちにすぐに分かりますので、募金

した感が出るんじゃないかと」

宮下は顎を手に当てる。

宮下「悪くはないな……。しかし、同時配信となるとスポンサーとの調整が難しくなりそうだが……」

石川「宮下さん、全部マラソンの中継とかはどうでしょう？」

宮下「いいな！ それ。応援スパチャみたいな感じで。前回も目的がはっきりしていたからマラソンは好評だったし」

真鍋「私も面白いと思います」

藤村「私もいいアイデアだと思います。……だた、チャット欄にアンチが来て荒れませんか？ ただでさえ風当たりが強いのに……」

宮下「……そうだな。じゃあ、メンバー登録制にするか？」

真鍋「アンチが登録すれば、同じことになるかと思っています」

宮下「……分かった。まずアンチ対策と、実際に出来るかどうかの2つを確かめることに

しよう。配信と編集のチームに相談して見
てくれ。この2つの目処がたった時点で考
えよう」

石川「はい、分かりました」

宮下「よし、今日の打ち合わせはここまで」

○アニメスタジオ1（昼）

本木英智「2時間スペシャル：ですか？」

宮下「はい。是非お願いしたいと：」

本木「そちらの趣旨に沿う話は、題材的に難
しいですね。このシリーズのスペシャルド
ラマは、舞台が外国でスケールが大きい話
が多いですし、そうでないとキャラが立ち
ません。情緒的なシーンもありますが、そ
れは、他の迫力あるシーンとの対比があっ
てのことですから」

宮下「そうですか：」

本木「：ところで、製作費はどのくらいを見
込んでいますか？」

宮下「一応、チャリティ番組ですので、格安

でお願いしたいと思っていまして：」

本木「それはますます難しいです。そちらには大変な恩義を感じていますが、そういうことでしたら、お断りさせて下さい」

宮下「そこを何とか：」

本木「他の出演者のみなさんを悪くいうつもりはありませんが、タレントや芸能人の方は、オフア―を受けて何回か打ち合わせをしての出演、なのでしょう？」

宮下「はい、そうです。ロケやドラマに出て頂ける方はそれなりの拘束がかかりますが：」

本木「でも、ウチが引き受けたとなれば、アニメーターを始めとするスタッフが月単位でかかりつきりになります。それで金払いが良くないということになれば、ウチの存続に関わりますので」

○アニメスタジオ2（昼）

宮下「：どうですか？」

武山慶次「これは…、難しいですね」

宮下「どの辺りが、ですか？」

武山「『社会的な弱者』をメインで描くって

ところですね。ウチのストーリーでいう

と、こういう人物は犯人側になってしまう

場合が多いんですよ」

宮下「どういう感じになるのですか？」

武山「こういう方が社会に対して怒りを持っ

てしまつて、復讐するために犯行に及ぶ、

ってストーリーですね。最後に犯人の悔恨

のシーンとかは入れられると思いますが、

ほぼ悪役になってしまいます」

宮下「…」

武山「あと、製作費もツライです。この尺な

らもう映画です。宮下さんもご承知だと思

いますが、ウチのコンテンツで新作映画を

作れば、興収100億は下らない。それを

TVでやるというのは、どうかと…。そち

らには十分貢献しているはずですよ」

○アニメスタジオ3（昼）

仁科弘明「えっ？　深夜帯やってるウチが2時間アニメ？」

宮下「はい。そちらはウチの子会社なので、お願いしたいと……」

仁科「中身はどうするのですか？　オリジナルですか？　それとも版權物ですか？」

宮下「そこまでは、まだ決めていませんが……」

仁科「もし、版權物なら、こちらにも相應の覚悟が必要になりますよ」

宮下「覚悟ですか？」

仁科「はい。版權物は原作の漫画なり小説なりに、既にファンがついていますから評価もシビアですし、当たり前ですが、作者の意向が無視できません。ですから、こちらで勝手にやっていいものではありません」

宮下「それは、承知していますが……」

仁科「この辺のことを先にきちんと契約とかで決めておかないとダメですね。何かあつ

た時に、誰がどう責任を取るのかって話も含めて」

宮下「では、オリジナルではどうですか？」

仁科「こういう系の話はやったことがないの
で、何とも言えません。ただ、私たちが制作している深夜帯のアニメは万人向けではなくて尖っているものが多い。：とかいうか、尖ってることをやれるのが深夜帯の魅力だと思っています。例えば、スケジュールがタイトで製作費が少なくても、です。でも正直、ホントにキツイんですよ。落とし
てる作品を見たことがあるでしょう？」

宮下「耳にしたことはありますが：」

仁科「それに、まさか『謎の光』とか『謎のBGM』とかがバンバン出てくるようなアニメを、真っ昼間にオンエア出来る訳ないですよ」

○プロデューサー会議 2回目（昼）

宮下「それじゃ、始めようか。この前の宿題

から」

石川「宮下さん、アニメの方はどうでした？」

宮下「お願いはしに行ったが、無理だな。やはりアニメは人とお金と時間がかかる」

真鍋「子供たちが見てくれれば、世帯の数字もあがるんですけどね」

宮下「そうだが、こればかりは仕方ない」

宮下「真鍋くん、ドラマの方は？」

真鍋「はい。スポンサーからは、やはりカーアクションは、番組にそぐわないので協力できないとのことでした」

宮下「じゃあ、アクション抜きで、オリジナルのフランスのドラマのように、メインを二人にするような形ではダメそうなのか？」

真鍋「その話もしましたが、それですと他局の番組と似てしまうという懸念があると言われました」

宮下「：確かに向こうの方が有名だしな。例

年通りの線で行くしかないか……」

宮下「ネットの方はどうだ？」

藤村「はい。配信は技術的には出来そうだとのことでした。ただ、アンチ対策が大変そうですねです」

宮下「どの辺りがだ？」

藤村「まだ、調べている最中ですが、チャットのコメントの制御は出来ます。ブロックする単語の設定、メッセージの待機、管理者対応の三段構えになります」

宮下「じゃあ、その三段構えについて説明してもらえるか？」

藤村「はい。まずはブロックする単語の設定ですが、あらかじめ設定できますし、途中で変更も出来ます」

宮下「最初にブロックする単語は、どのようなを考えてる？」

藤村が躊躇する。

藤村「……言ってもいいのですか？」

宮下「かまわん」

藤村「えっと…、『偽善』とか『感動ポル

ノ』とか、『ギャラ』とか『やらせ』とか

『着服』とか…」

全員「…」

宮下「…全部、聞きたくないヤツだな…」

藤村「ブロックする単語ですから…」

宮下は息をつく。

宮下「まあ、分かった。次のメッセージ待機
っていうのは？」

藤村「送られたチャットの間隔に時間制限を
設けることです。一度に大量のチャットが
来た場合に有効です」

宮下「D D O S 対策みたいなのか？」

藤村「イメージ的にはそうですね。ただ、あ
まり間隔を開けてしまうと、ライブ感が薄
れますから、その辺の匙加減は必要だと思
います」

宮下「最後のは？」

藤村「チャット全体の管理です。非常時にチ
ャット欄がオフレます」

宮下「そうすると、まず単語で弾いて、メッセージ間隔を空けて確認する時間を設けて弾いて、どうしようもなくなったらチャット欄を無効にする、という感じか？」

藤村「そうですね」

宮下「でも、最後の手段は取りたくないな」

藤村「その通りです。しかし、ブロック出来なかったチャットの削除は基本的に手作業になります。ですので、それなりに人を当てないとパンクする可能性があります」

宮下「どのくらい必要になりそうなんだ？」

藤村「初めての試みですから、正直、読めません。具体的に言えば、同接、つまり同時に接続するアカウントの数の見積もりが難しいんです」

宮下「似たような前例とかはないのか？」

藤村「募金では知りませんが、ネットの人間は興味本位でアクセスするヤツらが多いですから、今回やるとすれば、かなりの数になると思います。あまり良い例ではありません」

せんが、ネットの気象情報番組のキャスターさんの時なんかは、目で追えないくらい
のチャットが飛び交ってましたから。確
か、同接が1万人以上はいたと思います。
ただ1アカウントあたりのコメント数が
なり多かったのではないかという話です」

宮下「：リスクがあるってことか？」

藤村「そうですね。同接の人数と、その人たちのコメント数によりますが：」

宮下「しかし、募金の間口を広げる意味では何とかやりたいところだな。いざとなればチャット欄を無効にすればいい訳だし」

藤村「それはそうなのですが：」

宮下「：よし、これについてはやる方向で行こう。他から何か言われたら私が出向くって言うてくれ」

石川・真鍋・藤村「はい」

○江ノ島秀樹の部屋（夜）

テレビで「S・A・G・I」の告知

を見ている。

江ノ島「……ったく、今年もやるのかよ、これ。オレも昔はピュアだったから、募金箱を持ったおねえさんに『少ないけど』って、小銭を入れてたもんだが……。これだけ、いろいろ言われているのになあ。さっさと終わればいいのに……」

江ノ島は、腕を頭の後に回して仰向けに寝る。

江ノ島「あゝあ、オレだって、社会の役に立ちたいとは思ってるんだけど……。募金の使い道とか募金額がホントかどうかはつきりしないんじゃないかな……。まあ、億とか寄付すりゃあ別なんだろうけど……、オレ一人じゃ無理だしなあ……」

江ノ島は、ハツとして起きる。

江ノ島「オレ一人……？ 一人じゃなきゃいいってことか？」

江ノ島が、ネットで探す（注……クラブアンのサイト）。

江ノ島「いや、普通のじゃダメだ。寄付する
ような形でないと…」

江ノ島が、また、ネットで探す（注…
募金サイト）。

江ノ島「NPO法人とかじゃないとダメなの
か？ 他にないのか？」

江ノ島が、また、ネットで探す（注…
寄付サイト）。

江ノ島「…これなら行けそうだ！」

○国技館（番組スタート…朝）

宮下が国技館のスタッフルームで立つ
て様子を見ている。

宮下「ネットの方は？」

石川「今のところ、特にトラブルはありませ
ん」

宮下「分かった、引き続き頼む」

石川「はい」

○ネット民（自宅…朝）

ネット民1はPCでマラソンの様子を
動画で見ている。

ネット民1「結局やるのかよ、マラソン。動画で走ってる場所が分かるけど、ワープとかしないだろうな？ まあ、そうなりや自分の首絞めるだけなんだろうけどさ……」

配信チャット欄に「海岸のゴミを拾って寄付しよう！（URL）」のチャットが現れる。

ネット民1「なんだこりゃ？」

ネット民1はURLをクリック。「キフハウス」のHPに飛ぶ。

キフハウスのHPには「S・A・G・I・
応援企画。海岸のゴミを拾って
寄付しよう！」の文字。

ネット民1「よく分からんな……これ。ゴミを拾って寄付するって、ビンとかカンとか拾って廃品回収に出せてか？ そもそも、ここから海まで行くのにどれだけかかるとかってんだ？ ……まったく、こういうゴ

ミチャットこそ運営で消してくれりゃいいのに……」

ネット民1はネットでマラソン配信を見ている。

ネット民1は、ハッと気づく。

ネット民1「ちょっと待て……。海岸のゴミ

……？ 何か聞いたことあるぞ」

ネット民1は検索で「海岸 ゴミ」と入力する。

ネット民1は最後に「2ch」と入力する（この単語は見えていない）

ネット民1「これだ」

ネット民1「……」

ネット民1「……そうか、そういうことか！」

○国技館（午前中）

宮下が国技館のスタッフルームで、番組の様子を見ている。

石川「宮下さん、配信のチャット欄に、URL付きの『海岸のゴミを拾って寄付しよう』」

う！』ってコメントが増えています」

宮下「新手の嫌がらせか？」

石川「よく分かりません。悪意はないよう
すが…」

宮下「そのURLの先は？」

石川「どうやら寄付の専門サイトのように、
個人が発起人になってるみたいです。一
応、この番組の応援サイトを謳っています
が…」

宮下のスマホに真鍋から電話。

宮下「宮下だが」

真鍋（声）「宮下さん？　ウチへの寄付サイ
トが立ち上がっています！」

宮下「ああ、それは石川から聞いたが…」

真鍋「すごい勢いで寄付が伸びています！
番組が始まって3時間ほどですが、既に1
億を突破しています！」

宮下「なんだって!?　誰がやってるんだ？」
真鍋「分かりませんが、まだ伸び続けていま
す。このままのペースだと4億円を超える

かも知れません！」

宮下「凄い味方が出てきたな……。よし！ この発起人と連絡を取ってくれ！ 出来れば、フィナーレに出演してもらいたいと。リモートでもいい。それも無理ならコメントだけでも欲しいと伝えてくれ！」

真鍋「分かりました！」

宮下「これで、募金の方は行けそうだ。後は、視聴率か……」

宮下「ステージの方、もっと盛り上げるように言ってくれ！」

○国技館（お昼くらい）

真鍋から宮下に電話。

宮下「はい、宮下だ」

真鍋「宮下さんですか？ 真鍋です！ 例のサイトの件、A Dの近藤にお願いしましたが、大変です！ そちらに行って説明します！」

真鍋が電話を切る。

宮下「？」

真鍋とA Dの近藤和美が駆け込んでくる。

宮下「真鍋、何が大変なんだ？ 金額がそんなに伸びているのか？」

真鍋「違います！ 詳しくは近藤に説明してもらいます」

近藤「宮下さん、マズいです！ これはうちの番組に対する抗議です！」

宮下「抗議？ ということだ？」

近藤「この『海岸のゴミを拾って』のところでです！」

宮下「ああ、それか。あまり気にしていなかったが、何か意味があるのか？」

近藤「大有りです！」

宮下「どういう意味なんだ？」

近藤「昔、他局の報道姿勢に抗議するために、その局のゴミ拾い企画をつぶそうと、ネットの連中が、先回りして海岸のゴミを全部拾ったことがあったんです。つまり、

この言葉は、それと同じことをやるぞ、という意思表示なんです！」

宮下「…ということは？」

近藤「そうです！ この寄付は善意じゃなんです！」

宮下、顔面蒼白。

真鍋「宮下さん！ これだけの額になれば、当然、使い道のチェックも求められます！」

宮下「石川！ チャットから、これを弾けないのか？」

石川「で、できますが…。応援を謳っているんですよ!？」

真鍋「宮下さん、この話、既にSNSで広がっています！ だから、このゴミ拾いの意味を知らない人間も、このサイトで寄付しているようです！」

近藤「それに、このサイトは、私たちに寄付した金の使い道の詳細を公開させると言っています！ それも拍車をかけていま

す！」

宮下「…」

石川「宮下さん、どうしますか!? チャット欄を無効にしますか!？」

宮下「…」

○大日本テレビ局内（番組翌日…昼）

番組の結果が出る。

視聴率は目標に届かなかったものの、

募金額は大幅増。

ネットでは「大勝利！」などのSNS

や動画が上がる。

落ち込んでいる宮下。

宮下に、元司会者の萩原から電話が入る。

宮下「はい、宮下です」

萩原（声）「僕だ」

宮下「あ、萩原さん！」

萩原（声）「今年も見てたよ。お疲れさま」

宮下「ありがとうございます」

萩原（声）「それで…」

宮下「何でしょうか？」

萩原（声）「僕が、もうこの番組にどうこう
言える立場じゃないのは分かってるんだけ
ど…、一度立ち止まって考えてみてはどう
かな、と思ってね」

宮下「…」

萩原（声）「この番組の歴史は長いが、最初
は単発のスペシャル番組だった。それは、
知ってるよね？」

宮下「はい、存じています」

萩原（声）「それが、今まで続いてきたの
は、視聴者のみなさんに、この番組の意義
を認めてもらってたからだと思ってる」

宮下「その通りだと思います」

萩原（声）「僕は、ネットとかよく知らない
んだけど、募金で何かあったらしいね？」

宮下「…はい」

萩原（声）「『やらない善よりやる偽善』とは
よく言ったものだけど、募金は受け取らな

きやいけないだろう？」

宮下「その通りです」

萩原（声）「…僕は、何もやめようと言って
いるんじゃない。1回目の時は、それが時
代に合っていたからそうなったんだと思
う。冒険心みたいなものもあったしね」

宮下「はい」

萩原（声）「視聴者のみなさんに番組の意義
を認めてもらえるなら…、形にこだわら
ないんじゃないかな？」

宮下「…」

○同局内 取締役室（昼）

山田「宮下くん、お疲れだった。今回の募金
額は凄かったね」

宮下「はい」

山田「そこを見込んで、来年も君にやって欲
しいと思っているんだが…」

宮下「取締役、ありがたいお話なのですが
…、私は一度立ち止まって、この番組のこ

とを考えたいです。ですから、来年は番組を一度休む形をご提案したいのですが……」

山田は机を叩き、

山田「何を言っているんだ！ 一度休めば、再開する時に苦労するのは分かっているだろう！」

宮下「はい……」

山田「それに、私がいる間にこの番組を止めるなんてとんでもない！ 先輩方に顔が立たん！ この番組に憧れて入社して来る新人たちもいるんだぞ！」

宮下「……それが……、この番組の意義なのか……？」

○宮下自宅（翌年…昼）

自宅で宮下と息子がTVを見ている。

息子「この番組、父さんがやってたんだよね？」

宮下「そうだ」

フィクション劇場 第十一話「募金」

息子「これ、マラソン100kmって、凄い

よね」

宮下「…映ってる時はな」

E
N
D

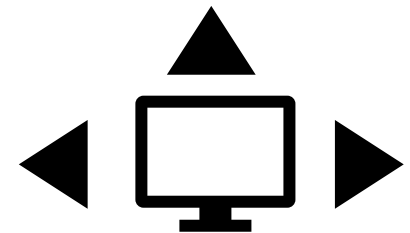
(2025年6月15日 初出)

(2025年11月20日 加筆・修正)



「名前」
フィクション劇場
第十二話

大太
大



【登場人物】

菅 藤 雄大（かんとぅ・ゆうだい）（50）：
プロ野球セ・リーグ 東京ジェントルマン
ズ ゼネラルマネジャー（GM）
又 レール・マンコビッチ（27）：プロ野球
パ・リーグ 木更津アポロダイバーズ投手。
背番号69。フランク・マンコビッチの孫

（試合実況）

清 水 健一（しみず・けんいち）（54）：ジ
ャパンCS放送 試合実況

加 藤 孝雄（かとう・たかお）（58）：同 試
合解説

向 井（むかい）（41）：同 ベンチレポート
アナウンサー

（木更津アポロダイバーズ）

村 西（むらにし）（55）：監督

田 所（たどころ）（24）：先発投手

遠 野（とうの）（22）：抑え投手。田所の高

フィクション劇場 第十二話「名前」

校の後輩

鬼頭（きとう）（49）…ゼネラルマネジャー

黒木（くろき）（47）…監督代行

（ラテックス岡本カバース）

多田原（ただはら）（25）…先発投手

軍畑（いくさばた）（27）…多田原の代役投手

ペペロ・コーガン（68）…MLBオレゴン・

オクトパシーズ オーナー

男性アナ

女性アナ

司会（入団会見）

記者1

記者2

大日本テレビ記者

フィクション劇場 第十二話「名前」

大日本テレビカメラマン

コンビニ客

観客 1

観客 2

シエントルマンス社長

シエントルマンス職員

対シエントルマンス実況

対シエントルマンス解説

【あらすじ】

フランク・マンコビッチの孫ヌレール・マンコビッチが投手としてパ・リーグの木更津アポロダイバーズ（KD）に入団し、開幕から白星を重ね、首位でセ・パ交流戦に突入する。交流戦で対戦する東京ジェントルマンズ（TG）の試合は地上波放送で、TGの社長は名前の変更をGMの菅藤雄大に指示する。

菅藤はKDのGM鬼頭との話し合いの末、マンコビッチの恩人のMLBオーナー、ペペロ・コーガンが容認すれば、変更できる旨の約束を取り付ける。

しかし、コーガンは提案を拒否し、英語で菅藤の名前も呼びにくいが、本人の名前を尊重していると話す。結局、交流戦で菅藤は名前を「マニー」することを強行し、そのせいでKDは本人とチーム共々不調に陥る。

シーズンが終了し、菅藤は名前が英語で読みにくいとの理由でGMから外される。菅藤は能力があればかまわないではないかと嘆く。

○入団記者会見（昼）

後ろには「木更津アポロダイバーズ新外国人選手入団記者会見」の横断幕。

壇上には周りに花を添えたマイクが2つ。

向かって左に鬼頭GM（机に名札）、右にヌレール・マンコビッチ（名札なし）。マンコビッチの斜め後に通訳。フラッシュが焚かれる。

事前にマンコビッチの選手プロフィール資料が記者に渡されている。

名前の欄には、英語で「N u l l a i r e ・ M a n k o v i t c h」、その下に「ヌレール・マンコビッチ」と書かれているが、微妙に見切れている。

記者1、2は小声で、

記者1「…おい、これ大丈夫なのか？ そのまま読むと、ちょっと…」

記者2「知るか！ オレらは取材するだけだ」
司会「お待たせ致しました。それでは、ただ

いまより、木更津アポロダイバーズ、新外国人選手の入団会見を行います。まず、ご本人から自己紹介をお願いします」

フラッシュが焚かれる。

マンコビッチ「ハジメマシテ。ワタシノ、ナ

マエハ……」

場が一瞬静まる。

全員「……」

マンコビッチ「又レッ、マンッ、ビッチ、デ

ス」

場の空気が緩む。

全員「ふう〜」

記者には安堵した雰囲気。

マンコビッチ「(英語)日本に来ることが出来て光栄です。私の祖父は、少しだけですが、日本のプロ野球でプレーしたことがあります。祖父からは、日本は素晴らしいところだと聞いており、私もそれを実感しています。日本出身のプレイヤーがメジャーで活躍していますので、レベルの高い野球が求

められると思います。早く戦力になれるよう、努力していきたいと思います」

通訳は「ハジメマシテ…」から、通訳する。

名前はフルで言うが、後で小さく聞こえている。その中、小声で、

大日本テレビ記者「おい、このV使えるのか？」
大日本テレビカメラマン「知るか。音無しでNA入れるだろうよ」

× × ×

マンコビッチは鬼頭にユニフォームを着せてもらい、背番号「69」を見せるように、半身でガッツポーズを取る。
フラッシュが焚かれる。

マンコビッチは、GMとにこやかに写真撮影に應じる。

OTVの野球ニュース(2ヶ月後くらい…夜)
男性アナ「それでは、今日のプロ野球の結果をおさらいしましょう。まずはセ・リーグ

から」

セ・リーグの試合結果が出る（左記）。

セ・リーグ

北海道KH	3 - 7	名古屋K
大槻 2勝3敗		三上 2勝1敗
福岡Y	5 - 7	東京G
成瀬 3勝3敗		風間 3勝1敗
愛知D	6 - 74	栃木R
高橋 2勝2敗		エイミー 4勝1敗

男性アナ「ベテランの風間、粘りのピッチングで完投。3勝目です」

男性アナ「あ、誤植がありますね。申し訳ありません。愛知と栃木は6対7で栃木の勝利です。トミー・ジョン手術から復帰のエイミー、4勝目。好調をキープしています」

男性アナ「次はパ・リーグです」

パ・リーグの試合結果が出る（左記）。

パ・リーグ

大阪T	3	-	6	青森NE
推川 1勝4敗				優月 1勝5敗
神奈川SJ	3	-	0	岡本P
瀬戸 1勝0敗				上野 2勝1敗
木更津AD	07	-	0	広島M
新外国人 6勝1敗				松本 2勝4敗

男性アナ「先ほどもお伝えしましたが、神奈川のルーキー瀬戸、初先発でノーヒット・ノーランを達成しました。前評判が高かった選手ですが、期待通りの活躍です。これから楽しみですね」

女性アナ「そうですね」

男性アナ「そして…、あっ、また誤植です。申し訳ありません。木更津の得点表示で『7』

の前に『O』が入ってしまっていますが、アポロダイバーズの新外国人投手が、今日も勝って6勝1敗。ダイバーズの首位に大きく貢献しています」

女性アナ「ダイバーズにとっては、この新外国人投手の活躍が優勝への鍵になりそうですね」

男性アナ「はい。この新外国人投手から目が離せませんね」

女性アナ「そうですね。この新外国人投手に期待しましょう」

男性アナ「さあ、明日からの3連戦が終わりますと、いよいよ、セ・パ交流戦に突入です」

Oコンビニ(夜)

スポーツ新聞に1面に「マンコビッチ花開く！」の見出し。

ただ、微妙に見切れている。

コンビニ客「お、例の新外国人のヤツか…、

行けそんな感じだな…」

○スピリッツ・フィールド木更津（交流戦前最後の試合…ナイター）

球場全景。

球場がザワザワしている。

○同 放送席

清水健一と加藤孝雄が並んで座っている。

二人とも中継用のヘッドセットを付けている。

清水「ジャパンCS放送をご覧のみなさま、
こんばんは。プロ野球パ・リーグの試合をお届けするプログラム『ドリーム・イン・パ』」

清水「今日は、スピリッツ・フィールド木更津から、木更津アポロダイバーズ対ラテックス岡本力バースの試合をお送りしております。解説は加藤孝雄さん、ベンチレポー

トは向井アナウンサー、実況は清水健一で
お届けしております。加藤さん、引き続き
よろしくお願い致します」

加藤「よろしくお願い致します」

清水「さて、これから7回の表、カバース、
ラッキーセブンの攻撃になります」

加藤「はい」

清水「今日の試合は、ダイバース田所、カバ
ース多田原の先発で始まりましたが、ダイ
バースが7対0と、大量リードになってい
ます。加藤さん、ここまで無失点の田所の
気迫あふれるピッチングが光っていますね」

加藤「そうですね。田所はその気迫が空回り
して、制球を乱すこともあるのですが、今
日は田所のフォーシームがコーナーに決ま
っています」

清水「フォーシームはいわゆる昔で言うスト
リート、ですよ」

加藤「はい、そうです。人差し指と中指をボ
ールの縫い目に引っ掛けて投げますが、そ

の指の隙間を狭くするとボールに力を伝えやすくなります」

清水「しかし、田所のピッチングを見ていますと、オールドファンの私としては、当時の阪急プレースで抑えとして活躍したアニマル・レスリーを思い出してしまうのですが……」

加藤「そうですね。彼も気迫を全面に出す選手でした。彼は一度オールスターに出場したことがあります。が、画面から見ても分かるくらい緊張していましたね」

清水「そうですね。そういう憎めないキャラクターもあって、引退後はタレントとして活躍していましたね」

加藤「はい。アニマルはカーリーヘア、田所はシュツとした角刈りで髪型は違うのですが、そのアニマルに田所を重ね合わせて、ファンの間では、田所のことを『ビースト』と呼んでいるそうです」

清水「さて、カバーズの方ですが、2回早々

に多田原が投球モーションに入った際に股関節を痛めるというアクシデントがありました。そのため、急遽、軍畑（いくさばた）がマウンドに上がりましたが打ち込まれ、ダイバースにリードを許している展開になっています。加藤さん、多田原の怪我が心配ですね」

加藤「そうですね」

向井（声）「加藤さん、向井です」

清水「はい。向井アナウンサー、どうぞ」

（同 球場の通路）

向井はマイクを持ちながら、バインダーを見て、

向井「その、多田原投手ですが、既に病院に到着して検査を受けているそうです。同行しているトレーナーからコーチに入った情報によりますと、予想以上に症状が悪いとのことです」

（同 実況席）

清水「どの程度なのでしょうかな？」

（同 球場の通路）

向井「精密検査を受けないと詳しいことは、
分からないのですが、今期の残り試
合の出場は難しいのではないか、このこと
です」

（同 実況席）

清水「それは大変なことになりましたね。投
球時にバランスを崩した際は、それほどで
も無かったように見えたが……」

（同 球場の通路）

向井「はい。私にもそう見えたのですが、多
田原投手本人が、随分前から股関節に違和
感があったが、首脳陣には知らせずに騙し
騙しプレーしていたと話しているそうです。
もしかすると、今後の選手生命に影響を及
ぼすかも知れないとトレーナーが話してい
たとのことですよ」

（同 実況席）

清水「分かりました。追加の情報がありまし
たら、また知らせて下さい」

向井（声）「はい。分かりました」

清水「加藤さん。多田原の怪我ですが、思ったよりも悪いようですね」

加藤「そのようですね。やはり、違和感があった時点で、トレーナーなり、コーチなりに相談することが必要だったように思います」

清水「そうですね。精密検査の結果を見守りたいと思います」

清水「さあ、球場内にパ・リーグ応援歌『白いボールのファンタジー』が流れます」

♪「白いボールのファンタジー」

○同 ビジター席（カバース…三塁側）

観客１「おい、誰かジェット風船くれないか？」

観客２「ああ、あるよ。ほらっ」

観客２が観客１にジェット風船を投げる。

観客１がジェット風船を見る。

観客１「どっちから入れるんだ？ 空気」

観客2「入れりゃあ、分かるよ」

応援歌が終わり、ジェット風船が放たれる。

清水「三塁側から、カバースのチームカラー、ピンクのジェット風船が舞います。さあ、カバースここから反撃なるか、7回表の攻撃が始まります！」

× × ×

○同 試合後インタビュー（本塁付近）

お立ち台。

後にスポンサーとダイバーズの看板。

聞き手は、向井アナウンサー。

以降、マイクは喋る方に向ける。

向井「放送席、放送席。それでは最後に勝利監督インタビュー、木更津アポロダイバーズの村西監督です！」

村西がお立ち台に上がる。

村西が帽子を取って、観客の声援に應える。

前髪をかき上げて帽子をかぶる。

向井「監督：、ナイスゲームでした」

村西「ありがとうございます」

観客より、拍手。

向井「：今日の試合内容を振り返って、いかがでしたか？」

村西「田所の調子が良かったことに尽きますね。打線もいいところで点を取ってくれましたし」

向井「最後、9回はルーキーの遠野が3人で締めました」

村西「田所と遠野は、高校の先輩・後輩になりますから、大差がついていたとは言え、先輩の田所が作った試合を壊す訳にはいかない、奮起してくれたんだと思います」

向井「これで、2位と4ゲーム差の首位。来週からは交流戦が始まります。相手はセ・リーグ首位の東京シエントルマンズです。いきなり、セ・パ両リーグの首位同士の戦いになります」

村西「手強い相手になりました。それも向こ

うのホームの小石川ドームですから、尚更です」

向井「そして、試合は地上波生中継です」

村西「はい。ジャパンCさんにはお世話になっていたので、申し訳ないところもあるのですが、実力の『パ』を見せつけるいいチャンスだと思っています」

向井「どういった作戦で望みますか？」

村西「とにかく初戦を取って、勢いをつけて、交流戦を戦って行きたいと思います」

向井「初戦が大事ということですね？」

村西「はい。そうです」

向井「それでは、ズバリ、初戦の先発は誰で行きますか？」

村西「ははは。もう予告先発はなくなりましたからね。こちらの手の内を明かすようなことは言いませんよ」

向井「そこをもう少し……」

村西「ただ、大事な初戦です。それを誰に任せるか。当然、ウチで一番調子のいいピッ

チャーを立てますよ。言えるのはここまでです」

向井「それでは、交流戦、期待しています！」

村西「ありがとうございます」

向井「以上、勝利監督インタビューでした！」

村西は、歓声に応える。

○シエントルマンズ社長室（同日…夜）

ジャパンCSを見ているシエントルマ

ンズ球団社長。

社長「…まずいな…」

社長が電話を掛ける。

社長「もしもし、菅藤くんか？ 話があるか

ら来てくれないか？」

○シエントルマンズ会議室（廊下から部屋へ）

（昼）

案内の職員の後について、廊下をツカ

ツカと歩く鬼頭。

職員はドアを指して、

職員「こちらです」

鬼頭はドアをバンと開ける。

菅藤が座っている。

鬼頭「菅藤さん！ ペナントレース中に呼び出して、何のつもりですか!? もうすぐ交流戦で、あなたのところと戦うんですよ!? 変な噂が立つようなことはしたくないんですよ！」

菅藤は、鬼頭を手で制して、

菅藤「…鬼頭さん。まあ、そうイキリ立たずに…」

鬼頭はドカッと椅子に座る。

鬼頭「…で、何のご用ですか？」

菅藤「今日は、おり行ってお願ひがありました…」

鬼頭「お願いとは？」

菅藤「ウチとの第一戦目に、そちらは例の新外国人投手を出すようですが…」

鬼頭「それは、監督が決めることです。私は知りません」

菅藤「しかし、カバーズ戦でのインタビューからすると、その可能性が高いと見ていますよ」

鬼頭「：それがどうかしたのですか？」

菅藤「その新外国人投手の呼び方をウチとの試合だけ『マニー』にして欲しいのですが：」

鬼頭は少し、驚く。

鬼頭「菅藤さん、それは出来ません。ジャパンスさんではきちんと呼んでもらっていただきますし、登録名もそうです。彼との契約書にも本名を呼ぶこと、と明記してあるんですよ」

菅藤「：」

鬼頭「それに、なぜ今になってそんなことをおっしゃるのですか？」

菅藤「気を悪くしないで聞いて欲しいのですが、ウチの社長が、彼の名前をウチの親会社である大日本テレビの中継で流したくない、と言っているんです。あなたも分かる

でしょう？」

鬼頭「：確かに、日本人には呼びにくい名前であることは理解できます。ただ、これは彼の名前ですし、先ほどの契約のこともあります。ウチの契約内容に口に出すのは、いかがなものかと思いますが？」

菅藤「仕方ないですね：」

鬼頭「ご理解頂けましたか？」

菅藤「：じゃあ、このままですと、そちらとの試合は、雨で中止ということになりそうですね。当然TV中継は無しになりますが：」

鬼頭は手を広げて、

鬼頭「冗談はやめて下さい、菅藤さん！ドームで雨天中止なんてないでしょう？」

菅藤は少し上目遣いで、

菅藤「：いやあ、分かりませんよ：。ウチの主催試合ですからねえ：」

鬼頭は机を叩いて、立ち上がり、

鬼頭「脅す気ですか!？」

菅藤「脅すなんてとんでもない。ただ、可能性についてお話ししているだけです。晴れていても設備の水漏れとか、そういうのは起こりかねませんからねえ」

鬼頭「…」

菅藤「…」

鬼頭「…わ、分かりました。監督と本人に話をしてみます。ですが、私が出るのはそこまでですよ？」

菅藤「ご協力ありがとうございます。良いお返事を期待していますよ」

○ジェントルマンズGM室（菅藤と鬼頭の電話…昼）

菅藤が電話を取る。

菅藤「はい。菅藤です」

鬼頭（声）「私です。鬼頭です。例の件で」

菅藤「いかがでしたか？」

鬼頭（声）「いかがも何も、監督はカンカンです。本人も契約違反だと反発しています」

菅藤「…では、試合の方は…」

鬼頭（声）「待ってください。彼は日本に来る前に所属していたチームのオーナーには大変お世話になっていたそうで、オーナーの言うことなら無理も聞けると言っています」

菅藤「オーナーは誰ですか？」

鬼頭（声）「MLBオレゴン・オクトパシースのペペロ・コーガンという方です」

菅藤「そちらで交渉をお願いできませんか？」

鬼頭（声）「何を図々しいことをおっしゃってるんですか!? それは出来ません！ 元々そちらのお願いで動いているんですよ？これ以上、ということなら、ドームに雨が降っても結構です！」

菅藤「…分かりました」

○シエントルマンズ社長室（昼）

シエントルマンズ社長が座っている。

菅藤は、その前に立っている。

菅藤「…と、いうことなんですが…。社長、

これ以上は難しい……」

社長は菅藤の言葉を遮ぎって、

社長「何を言っとるんだ、菅藤くん！　ウチ
はジェントルマンズだぞ！　そのコーガン
とかいうのと交渉して来たまえ！」

○コーガンとのＴＶ会議（日本は夜）（アメリカは早朝）

ＴＶの向こうにコーガン。

菅藤の横に通訳。

菅藤「ハロー、ミスター・コーガン」

コーガン「ハロー」

菅藤「マイネーム・イズ・カントウ」

コーガン「カ、カントウ……？」

菅藤「イエス、カントウ」

コーガン「……オ、オーケー、ミスター・カ
ントウ」

※菅藤は「カント（英語で女性器）」の
英語の意味が分からない設定なので、
英語での会話は避けたい。でも通訳が

入るとテンポが悪いので、ここはコー
ガンのみに日本語字幕が入る形をと
ります。

菅藤「何か問題でも？」

コーガン「（英語）い、いや、気にしないで下
さい」

菅藤「？」

コーガン「（英語）それで、ご用件は？」

× × ×

菅藤「：ということなんですが、いかがでし
ょうか？」

コーガン「（英語）彼に働きかけるのは構わな
いが、契約を曲げてまでそうする理由があ
るのですか？」

菅藤「そ、それは、特別な理由があるからで
す」

コーガン「（英語）その特別というのは？」

菅藤「：大変言いにくいのですが、彼の名前
が日本語で女性の局部を意味する言葉に似
ていまして：、放送しにくいと言われてい

るのです」

コーガン「（英語）そうですか…」

コーガン「（英語）でしたら私が彼に働きかけることはしません」

菅藤「なぜですか？」

コーガン「（英語）失礼を承知で申しませんが、あなたの名前の『カント』も同じなのですよ」

菅藤「えっ？」

コーガン「（英語）ですから、正直、あなたのお名前をお呼びするのには抵抗があります」

菅藤「…」

コーガン「（英語）…しかし、他の国でどういう意味であろうと、彼の名前は彼の名前で。それは尊重されるものではないのではないのですか？」

菅藤「…」

コーガン「（英語）ですので、このお話は受けられません」

○ジェントルマンズ社長室（昼）

社長「ダメだったか？」

菅藤「はい。これでは、仕方ないと思います

が……」

社長「仕方ないでは済まされない！ 強行突

破するんだ！」

菅藤「し、しかし、それは……」

社長「やると言ったらやるんだ！」

○小石川ドーム（交流戦…ナイター）

鬼頭が観戦に来ている。

実況「さあ、今日からプロ野球セ・パ交流戦がスタートします。今日は東京ジェントルマンズと、木更津アポロダイバーズの初戦をここ、小石川ドームよりお送りします」

実況「ダイバーズのスターティング・ライン

ナップですが……ピッチャーは……『マニー』

……？と表示されていますが……、これは今期

加入の新外国人投手のことでしょうか？」

解説「どうやら、そのようですね」

マンコビッチは、その表示を見る。

マンコビッチM（英語）これは：？ 前に鬼頭GMから話は聞いていたけど…。コーガンさんがOKを出したってことなのか？なら僕に連絡があってもいいのに…」

鬼頭も表示を見て、驚く。

鬼頭M「コーガンさんがOKを出したのか!? 私は何も聞いていないぞ」

マンコビッチは動揺し、マウンドへ向かう。

× × ×

マンコビッチはベンチに降りて、控室へ入っていく。

スコアは3回裏で、5失点。

○同 試合後のアポロダイバーズ監督室（夜）

村西が監督室に座っている。

鬼頭とマンコビッチ、通訳が立っている。

村西「鬼頭さん、一体どういことなのです

か？ 今回の件、『マニー』と呼ぶことについて、私も彼も何も聞いていないですよ。そうになったならそうだったで、ご連絡頂かないと。彼も動揺してしまって、今日の試合は散々でしたし」

鬼頭「申し訳ない。ただ、私にも連絡がなかったんです。お話していたように、コーガンさんとは向こうの菅藤GMが交渉することになっていましたし……」

村西「こちらから、確認して頂けなかったのですか？」

鬼頭「その点について、私の落ち度です。本当に申し訳ない」

村西「こういうやり方をされるのであれば、他の選手にも不信感が広がります。以後、気をつけて頂けますか？」

鬼頭「はい。承知しました」

○TVスポーツニュース（夜）

女性アナ「さあ、今日で交流戦の全日程が終

了しましたが」

男性アナ「ダイバーズが最下位というのは、意外でしたね。リーグ首位から陥落して、現在4位。クライマックスシリーズ進出も苦しい状況になってしまいました。やはり、新外国人投手の不振が一因になっているようですね」

○コンビニ（夜）

スポーツ新聞1面に「マンコビッチ退団か？」の文字。

当然、微妙に見切れている。

コンビニ客「交流戦に入ってから、ずっと締まらない試合してたからな……。やっぱり、フロックだったのか……」

○TVスポーツニュース（夜）

男性アナ「えー、プロ野球のペナントレースも佳境に入ってきましたが、本日、ダイバーズの村西監督が体調不良を理由に休養に

入ることになったとのニュースが入ってきました。今期の残り試合は黒木ヘッドコーチが監督代行として指揮を取ることにになります。また、今期加入の新外国人投手が退団することが球団から発表されました」

女性アナ「ダイバーズは交流戦前は首位でしたが、現在最下位ですから、その責任をとって、ということでしょうか」

男性アナ「そうですね。黒木ヘッドコーチは取材に対し、『わたくしは、これから脇をしめて、残り試合を戦って行きたい』とコメントしています」

女性アナ「ダイバーズの巻き返しに期待したいところですね」

○マンコビッチの自宅（アパート）：単身赴任の設定（夜）

マンコビッチは帰国のための荷造りをしているところに電話が鳴る。
以下、字幕。

マンコビッチ「(英語) はい」

コーガン(声)「(英語) 君か? コーガンだ」

マンコビッチ「(英語) コーガンさん…。何の

ご用ですか?」

コーガン(声)「(英語) 君の誤解を解いておきたくてな。私は『マニー』の呼称を許可していない」

マンコビッチ「(英語) しかし、実際には…」

コーガン(声)「(英語) それは聞いているが、私にもその経緯が分からないんだ。だから、それを君に伝えておこうと思ってな」

コーガン(声)「(英語) 君がダイバースを退団することも聞いたよ。…もし、君が気を悪くしていないのであれば、こちらに戻ってプレーしてくれないか? 君の投球術は日本に行って確実に上がっていると私は見ている。こちらもしーズン終盤でプレーオフ進出がかかっているんだが、ピッチャーが足りないんだ。私を信じて一緒にプレーしてくれないか?」

マンコビッチ「(英語)：オーナーがそうおっしゃるなら：、喜んで」

○TVスポーツニュース(夜)

男性アナ「さて、ここからは大リーグ情報です。今季途中で、ダイバーズを退団した新外国人投手ですが、メジャー復帰を果たして、いきなり3勝を挙げ、チームのワイルドカード・シリーズ進出に大きく貢献しました」

女性アナ「日本でのペナントレース後半の不振が嘘のようですね」

男性アナ「そうですね」

鬼頭は苦い顔で、TVを見ている。

鬼頭「…」

○シエントルマンズ社長室(昼)

座っている社長と立っている菅藤。

社長「今年は、クライマックスシリーズには進出できたが、リーグ優勝も日本一も逃し

た。ウチの目標は最高で日本一、最低でも日本一だ」

菅藤「承知しています」

社長「：ということ、来年の補強も考えていかないといけない時期に入ってきた。特に、外国人選手だ」

菅藤「はい」

社長「そこで、君には副社長になって大所高所からチームの面倒を見て欲しい」

菅藤は驚く。

菅藤「ちょっと待ってください、社長。私が副社長ですか？　今年GMになったばかりなんですよ？」

社長「不満か？」

菅藤「いえ、そういう訳ではありませんが…、

私はまだ現場に近いところで仕事です」

社長「菅藤くん、気持ちは分かる」

菅藤「では、外国人の獲得などはどうするのですか？」

社長「今回はヘッドコーチとスカウトに任せ

ようと思ってる」

菅藤「なぜですか？」

社長「例のコーガンというのから連絡があつてな。君の、特にアメリカでの活動は控えた方がいいと言われてな」

菅藤「社長はそんなことを間に受けたのですか？ 理由は何なのですか？」

社長「君が行けば、そちらの球団のイメージが悪くなるかも知れないと言われたからだ」

菅藤「私の何が？」

社長「…名前だそうだ」

（フラッシュ）

コーガンとのTV会議。

コーガン「（英語）あなたの名前の

『カント』も同じなのですよ」

（フラッシュ終わり）

社長「君は何も悪くはないのは分かってはいるが、球団のイメージを壊したくないんでな。何せウチはジェントルマンスだ」

菅藤M「…あの時に言っていた話か…。でも、

フィクション劇場 第十二話「名前」

親が考えてつけてくれた名前だぞ？ それ
に苗字なんか変えられる訳がないだろう？
活躍できる、力を発揮できるなら、そんな
こと、どうでもいいじゃないか……」

E
N
D

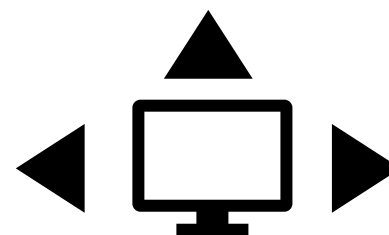
（2025年6月15日 初出）

（2025年11月20日 加筆・修正）



「一日」
フィクション劇場
第十三話

大太
大



フィクション劇場 第十三話「一日」

【登場人物】

佐賀 哲夫（さが・てつお）（60）：毎朝新聞記者。定年退職。愛称は「テツさん」

佐賀 美代子（さが・みよこ）（58）：哲夫の妻

大西 誠（おおにし・まこと）（35）：哲夫の後輩記者

長崎（ながさき）（54）：哲夫の上司

広川（ひろかわ）（38）：桐山市警察 巡査部長。哲夫に電話をかける

岡田（おかだ）（37）：同右。非常線対応

記者1（44）：裁判傍聴記者

記者2（43）：同右

宮原（みやはら）（61）：ワイドショー司会者

澤田（さわだ）（28）：ワイドショーアシスタント

フィクション劇場 第十三話「一日」

橋上（はしがみ）（57）：ワイドショー

解説。弁護士

蘭部（そのべ）（51）：哲夫の弁護士

ニュースキャスター

通行人 1

通行人 2

ドクター

看護師 1（ナースコールを取る）

看護師 2

看護師 3

【あらすじ】

毎朝新聞を定年退職した佐賀哲夫は、妻の美代子と静かな余生を送ろうとしていた。

しかし退職翌日に妻美代子が殺害される。

哲夫は、犯人や捜査状況を知ろうとする

が、既に記者ではないため何の情報も得られず、もどかしさを感じる。

そうした中、後輩記者の大西誠が哲夫の自宅を訪れ、独り言だとして犯人は18歳の特定少年であるので、報道機関単独の判断で、名前が公表できない旨を伝える。

哲夫は裁判の傍聴をするが、少年への配慮で隠蔽措置と人定質問省略がされ、何も分らない。その帰りに哲夫は倒れて入院する。

哲夫は、検察官から紹介された弁護士の蘭部に、訴訟承継するか聞かれるが保留する。

そして、判決当日に結果を待っていた哲夫は、発作が起き治療室へ移される。誰もいないベッドの横の哲夫の携帯に、大西から明日犯人の名前が公開されると、留守電が入る。

○毎朝新聞 玄関前プロティ（夕方）

哲夫の職場のメンバーが集まっている。

長崎の前にはスタンドマイク。

哲夫は長崎の斜め横に立っている。

長崎「それでは、ただいまより、佐賀 哲夫
さんの退職のお見送りを行います。まずは
佐賀さんから、一言、お願いします」

哲夫が正面に出る。

哲夫「みなさん、お忙しいところ、お集まり
頂き、ありがとうございます。みなさんの
おかげで、無事、この日を迎えることが出
来ました。：実は、私は現場一筋でやりた
いと、その時々の上司にお願いしておりま
した。ですので、私は今の上司の長崎さん
を始め、早く昇進された方のお力になれた
のではないかと考えています」

全員、笑い。

哲夫「今後、警察記者クラブの方は、後輩の
大西が引き継いでくれることになります。

こいつには入社してから、私が一から記者のイロハを教えてきました。ですので、安心して任せられます。大西とみなさんの活躍を祈念しています。本日は、どうもありがとうございます

哲夫は一礼。

全員、拍手。

長崎「それでは、記念の花束の贈呈です」

大西が花束を持って、佐賀に近づく。

大西「テツさん、お疲れさまでした」

大西は佐賀に花束を渡す。

哲夫「あとは頼んだぞ」

大西「はい」

全員、拍手。

佐賀は玄関を出て、待っていたタクシーに乗り込む。

車の中から手を振りながら、走り去っていく。

みんなが会社の中に入った後も、大西が一人でタクシーを見送っている。

大西「…」

○哲夫の自宅（その日の夕方）

哲夫「ただいま」

美代子「あなた、おかえりなさい。あら、随分と大きな花束をもらってきたのね」

哲夫「ああ。オレはこういうのは苦手なんだが…」

美代子「そんなことを言っちゃだめですよ。あなたの職場の方の気持ちでしょう？ 飾る準備をしますね」

○哲夫の自宅（夕食…夜）

テーブルに貰った花が飾ってある。

二人は夕食を食べている。

哲夫「美代子：お前には苦労をかけたな。こういう仕事のオレと結婚してくれたんだから」

美代子「何を言ってるんですか、あなた。そういうのは、最期の時に言うものですよ」

哲夫「そうだな……」

哲夫は少し、考える。

哲夫「どうだ、どこか旅行に行かないか？

お前の好きなところに。オレたちには子供
がいないし、二人っきりで」

美代子「嫌ですよ、あなた」

哲夫「どうしてだ？」

美代子「どこに旅行に行ったって、少しでも
気になることがあれば、私を放り出して、
カメラとメモ持って行ってしまおうん
でし
よ？」

哲夫は苦笑い。

哲夫「……新婚旅行の時の話はやめてくれよ。
もう仕事をしなくていいんだから。カメラ
もメモも置いていくよ」

美代子「……それに、そんなにお金もらえない
んでしょう？ 私はあなたと一緒にゆっく
り過ごせればそれでいいんですから。無理
しなくても大丈夫ですよ」

哲夫「……ありがとう、美代子」

○哲夫の自宅（翌日…朝）

哲夫「それじゃあ、ハローワークに行ってくる」

美代子「2、3日ゆっくりすればいいのに

…」

哲夫「会社を辞めたら辞めたで、いろいろ手続きがめんどくさいんだ。この時期は、人が多いって話なんで、早めに済まそうと思ってな。多分、時間がかかると思うから、お昼は外で食べてくる」

美代子「分かりました。いってらっしゃい」

○ハローワーク（昼）

哲夫は受付待ちのフロアで座って待っている。

フロアには20人ほど順番を待っている人がいる。

哲夫M「…しかし、聞いてた通りだな。まあ、9月末で辞める人が多いってのは分か

っていたが……。まだかかりそうだから今のうちに昼飯でも食いに行くか……」

哲夫のスマホが鳴る。

誰からか分らない。

哲夫「はい、佐賀です」

警察「桐山市警察のものですが、佐賀 哲夫

さんでお間違えありませんか？」

哲夫「そうですが 何か？」

警察「奥様と思われる方が……」

哲夫「美代子はどうしたのですか？」

警察「佐賀さんのご自宅で、事件に巻き込ま

れたようでして……」

哲夫「えっ!? 分かりました！ すぐ戻りま

す！」

哲夫はカバンを持って、フロアから飛び出す。

○哲夫の自宅（昼）

哲夫が息を切らしながら走ってくる。

家の前には非常線が張られている。

非常線の前に警官の岡田がいる。

哲夫が岡田に向かって、

哲夫「どうなってるんだ？ 美代子は？」

岡田「あっ、やはりテツさんの奥さんだったんですか？」

哲夫「どこかで見た顔だと思ったが、岡田くんか。：で、美代子はどうなんだ？」

岡田「すいませんが、お伝えすることができません……」

哲夫「なぜだ!？」

岡田「ウチの広報から、テツさんは警察記者クラブのメンバーから外れたと聞いています。定年退職されたと。ですので、こちらから連絡するまでは、何もお話しできません」

哲夫「昨日まで、クラブに入っていたんだぞ？ それなのにか!？」

岡田「ルールはルールですので。心情的にはお察ししますが……」

○ホテル（哲夫が一時滞在…昼）

哲夫が、ホテルでＴＶを見ている。

キャスター「本日、午前９時頃、桐山市杉中町で、近所で悲鳴が聞こえたとの１１０番通報があり、警察が駆けつけたところ、近くの一軒家の中で女性が倒れているのが発見されました。その後、救急車で病院に搬送されましたが、死亡が確認されました。この家に住む５８歳の女性と連絡が取れないため、警察では女性の身元確認を急いでいます。また、現場の状況から、何らかの事件に巻き込まれた可能性が高いとして、捜査しています」

哲夫M「これだけなのか？ 事情聴取は受けたが、美代子はどうなっているか分からない。あいつが変なマネする訳がない。事件に決まってるだろう？ どこまで捜査が進んでるんだ？ 犯人は誰なんだ？」

哲夫は手を握りしめ、食い入るようにテレビを見つめる。

○同ホテル（数日後…昼）

哲夫はTVを見ている。

キャスター「3日前に桐山市杉中町で発生した女性の死亡事件で、死亡していたのは事件が起きた家に住んでいた、佐賀 美代子さん58歳と確認されました。警察では美代子さんは殺害されたとの見方を強めており、引き続き、捜査を進めています」

哲夫「…」

○桐山市警察の霊安室（夜）

白い布が被せられた美代子の遺体が横たわっている。

そこに経っている哲夫と警察官の広川。

哲夫はいつものクセで、手にメモとボールペンを持っている。

広川「テツさん、このたびは…」

哲夫「広川さん。検死に時間がかかっていた

ようですが……」

広川「はい。ご遺体の損傷が激しくて」

哲夫「……」

広川「ご覧になりますか？ ……テツさんには失礼だと思いますが、私としてはご覧にならない方が……」

哲夫「気持ちはいがたいが、オレも元ブン屋だ。ひどい現場もたくさん見てきた。見せてくれ」

広川「……」

哲夫は手に持っているメモとボールペンを見る。

哲夫「いつものクセで、メモとボールペンを持って来ちゃった……。美代子に『あなたったら、また……』って言って欲しいんだ」

広川「……分かりました。ではどうぞ」

広川は白い布の顔の部分をめくり、視線を背ける。

哲夫は美代子の顔を上から覗き込む。
無表情で少し口を開け、呆然とする。

哲夫はメモとボールペンを落とす。

哲夫は声が少し裏返りながら、

哲夫「…人って…、こんなことができるもの
なのか…？」

○ホテル（それから数日後…昼）

哲夫はTVを見ている。

キャスター「次のニュースです。先日、起きた佐賀 美代子さんが自宅で死亡した事件で、警察は、住所不定の18歳の少年を過失致死の疑いで逮捕しました。警察への取材では、少年は取り調べに対し、『殺すつもりはなかった』と話しており、警察では動機などについて、詳しく取り調べを続けることにしています」

哲夫M「18歳？ あんなむごいことをして殺す気がなかっただど？ じゃあ、理由は何なんだ？ 美代子が恨みを持たれることなんか絶対ない。顔見知りの犯行か？ ならオレも知ってるはずだ。でも身に覚えが

ない。それとも通り魔的な犯行なのか？
ウチの家で殺されたってことは、金目当て
なのか？　これだけじゃ、何も分からない
じゃないか？」

哲夫「しかし、こいつは特定少年だ。いくら
故意でなくても刑事事件だろう。検察に逆
送されて起訴になることは確実だ。それで
全てが分かる。もう少しの辛抱だ……」

○桐山市警察署前（昼）

広川「テツさん、証拠調べが終わりましたの
で、ご帰宅頂いて結構です」

哲夫「ありがとう。これで少しは落ち着いて
過ごせるよ。……一人暮らしは寂しいがな」

哲夫は警察署から去ろうとする。

広川が声をかける。

広川「テツさん……」

哲夫は振り返る。

広川「ご自宅は……そのままにしてありま
す」

哲夫「…分かってるよ」

哲夫は歩いて去っていく。

○ワイドショー（昼）

宮原「それでは、次の話題です」

澤田「次は、先日、桐山市で起きました、佐

賀 美代子さん殺害事件の続報です」

宮原「澤田さん、今、どういう状況になって
いるのでしょうか？」

澤田「はい。現在、逮捕されて、家庭裁判所
で取り調べを受けている１８歳の少年です
が、原則逆送対象の事件となっており、検
察官が起訴するかどうかが焦点となってい
ます」

宮原「今日は、弁護士の橋上さんに来て頂い
ております。この『逆送』という意味も含
めて解説をお願いしますでしょうか？」
橋上「はい。まず、ここまでの手続きとい
うのは、刑法や民法ではなく、少年法に則っ
て行われているということ踏まえる必要

があります」

宮原「この少年が18歳だから、ということですか？」

橋上「その通りです」

宮原「しかし、今は18歳が成人となってます。その少年法では18歳は成人とみなされていないのでしょうか？」

橋上「そうです。2022年に民法が改正されて、成年年齢が18歳に引き下げられました。ですが少年法では、20歳未満が未成年であることは変わっていません」

宮原「なるほど」

橋上「これは、少年法は未成年を罰するといふよりも、その更生を目的とする『保護主義』の考え方に依っていることにあるからです」

宮原「では、今まで通り20歳未満の少年の対象になると？」

橋上「はい。未成年として少年法の適用対象になります。ですが、民法改正で成年年齢

が18歳になった際に、同時に少年法も改正されて、18歳、19歳はそれ以下の年齢の少年と区別されて、『特定少年』という位置付けになりました」

宮原「その特定少年になることで、何か変わったのでしょうか？」

橋上「はい。特定少年に適用される項目で、大きく変わったのは2点。一つ目は先ほど澤田さんからありました、家庭裁判所からの原則逆送の対象範囲の拡大です」

宮原「ここで逆送が出てくるんですね？」

橋上「そうです。少年法では、最初に家庭裁判所で犯罪行為について判断する際に、一定以上の罪を犯したと認められた場合は、刑事裁判として起訴されるかどうかを判断します。この一定以上の罪の範囲が広がったということです」

宮原「刑事裁判というのは、いわゆる、私たち知っている刑事裁判のことですね？」

橋上「おっしゃる通りです。成人と同様の裁

判となります。先ほどから出ている『逆送』というのは、検察官から見ると」

橋上は両手を前に出して、

橋上「家庭裁判所に送致した特定少年が」

橋上は両手を戻して、

橋上「自分に通常の裁判所に送致するよう戻ってきたということになるんですね。だから逆送という表現になるのです」

宮原「ご説明ありがとうございます。それで、もう一点は？」

橋上「刑事事件として起訴された場合に、その特定少年の実名報道が可能になった点です。その他の情報も含めて、専門用語では、推定の『推』に『知る』と書いて『推知報道』と言います」

宮原「なるほど。私たちも1、2度、そういう事件を扱ったと思います」

橋上「そうですね。今までいくつか例はありますが、無制限にという訳ではありません。これは先ほどお話しした少年法の改正

時に新たに加えられた、少年法68条を根拠としています。ただ、これも先ほどお話ししたように、少年法の趣旨は、その更生にあります。実名が出てしまうことで、それが阻害されることはあってはならないと考えられています」

宮原「確かに、その点は理解できますが：、他方で憲法では報道の自由も保障されていますが：？」

橋上「その通りです。ですので、この点については、被告側の弁護士と検察官、メディアでの調整が必要になります。ですので、実名報道が可能になっても、各メディアでの判断が分かれることもあります」

宮原「なるほど。では、起訴されるかどうかというのは、刑事裁判になるかどうかと同時に、橋上さんのおっしゃった実名報道をどうするか、という点にも注目する必要があります」と

橋上「おっしゃる通りです。付け加えます

と、刑事裁判では一番最初に『人定質問』、つまり、この裁判に出廷しているのが本人かどうかの確認を行います。その際にも名前を含めた、特定少年へのプライバシーの配慮がなされる場合があります」

宮原「ありがとうございます。この事件については、今後の進展を見守りたいと思います」

○ 哲夫の自宅（昼）

居間に美代子の仏壇が置いてある。

線香に2、3本火がついて、煙が漂っている。

呼び鈴が鳴る。

哲夫が出る。

哲夫「はい。どなたですか？」

大西「大西です」

× × ×

大西は美代子の仏壇に手を合わせる。

哲夫「すまないな、来てもらって…。仕事中

なんだろう？」

大西「大丈夫です。テツさん同様、美代子さんにもお世話になっていましたから」

大西「テツさんの方は、どうですか？」

哲夫「どう、と言われてもな……」

大西「……」

哲夫「結局、家庭裁判所でのヤツの罪状は過失致死止まりだった。だから、家庭裁判所での傍聴の申請も出来なかったよ。だが、美代子のあの姿を見れば、過失じゃないのは誰だって分かる」

大西「そうですね……」

哲夫「過失致死なら罰金だけだ。だが、死体損壊なら懲役が付く。その線で検察官の方と相談してるよ」

大西「……」

哲夫「美代子のあんな姿は誰にも見せたくないんだが……、起訴されれば通常の刑事裁判で、裁判員裁判になる。ヤツの顔は拝める。目に焼き付けてやるよ」

大西「そう…、なんですね…」

哲夫は、少し冗談めかして、

哲夫「なんか、お前に取材されてるみたいだな」

大西は、苦笑い。

哲夫「そのために、来たのか？」

大西「テツさん、冗談はやめて下さい」

哲夫「はははは」

大西「…テツさん…」

哲夫「どうした？」

大西「い、いえ…」

哲夫は大西を不思議そうに見る。

大西「じゃあ、そろそろ会社に戻らないといけないので、帰ります」

大西が立ち上がる。

哲夫「ああ。気を付けてな」

大西が立ったまま、哲夫に対して横向きに止まる。

大西「…テツさん、今から独り言を言います」

哲夫「独り言って…？ お前…」

大西「独り言です」

哲夫は不思議がる。

大西「…佐賀美代子さん殺害の被告少年の起訴に関しては、実名での報道が出来なくなりました。もちろん、裁判官・弁護士・検察官の合議の結果です」

哲夫は大西を少し驚いた顔で見る。

大西「少年は犯行当日が１８歳の誕生日だったそうです。そのため、被告側の弁護士から、『犯行時間が、朝９時頃であり、９時間早ければ１７歳だった。だからその点を考慮して欲しい』との要請があったからです。報道機関にも伝えられました。…もちろん、私は名前を知っています」

大西「でも、言えません」

大西「…それだけです」

哲夫「…」

大西「では、失礼します」

哲夫「待て、大西」

大西は振り返る。哲夫は顔を合わせないようにする。

哲夫「オレにも、独り言を言わせてくれ」

大西「…」

哲夫「オレが辞めた会社には、出来る記者が居た。そいつは、オレが良い記者になると見込んで育ててきたヤツだ。だが、とんだ見当違いだったよ。自分の取材したネタを人に話すなんてな。それも仕事中に、わざわざそいつのところに来てだ。ブン屋として失格だ」

大西「…」

哲夫「だが、不思議と怒る気にはならないんだ。そいつは一番肝心なところは言わなかった。まだ、記者魂が残っているんだと思っただよ」

大西「…」

哲夫「まあ、そいつも、記者である前に人間だ。ブン屋で無くなって、初めてそれが分かるヤツよりはよっぽどマシだ」

大西「…」

○法廷（裁判一回目…朝）

哲夫が傍聴席に入室し、周りを見回す。

傍聴席の正面には「記者席」のカバーがかけられた座席が8つある。

哲夫「…」

哲夫は、記者席を見つめながら、他の記者に見つからないように、傍聴席の奥の後の端に座る。

検察側・弁護側の弁護士、各2名ずつが着席している。

記者席に、記者が座る。

その中に、大西の姿もある。

大西は、哲夫を見つけたが、視線を逸らす。

裁判長と裁判官が入廷する。

裁判長「では、カメラ撮影を始めて下さい」
法廷最後尾にある、代表カメラが、正

面、検察側、弁護側を映す。

裁判長「2分経ちましたので、撮影をやめて退廷をお願いします」

カメラが引ける。

裁判長が裁判員を呼ぶ。

裁判員が裁判官に付き添われて入廷し、着席する。

被告席にすりガラスの衝立が用意される。

哲夫「やはり、そうなのか…」

被告が入廷する。

裁判長「それでは、開廷します」

裁判官「被告については、弁護側から要請されていた遮蔽措置を行います。また、人定質問は弁護側から提出された書類に代えます。そのように進めてまいります」

哲夫「やはり、どちらもダメなのか…」

○同 法廷（続き…意見陳述と冒頭陳述）

裁判長「それでは、冒頭陳述に対する証拠調

べを行います。検察側からお願いします」

検察官「はい。それでは、被害者の殺害現場での遺体の状況を写真にて示します。尚、本証拠については『刺激証拠』として扱うこととし、遺族の意思、及び被害者の尊厳に最大限配慮して、一部にぼかしを入れております。では、証拠写真をご覧ください」

裁判員は自分の前のモニターを見る。

裁判員は、モニターから目を逸らし、手を口に持っていたり、目を閉じながら斜め下に落したり、モニターを見ながら、眉を顰めたりしている。

記者席に座っている記者１と記者２は顔を近づける。

小声で、

記者１「：やっぱり、ぼかしを入れても裁判員にはキツイようだな」

記者２「ああ。これはぼかしがなきゃ出せないよ。本当にひどい。オレたちもこういう

現場はそれなりに見て来てるが、生の写真は見なかった方がいいと思ったよ」

記者1「だけど、弁護側は罪を認めているとは言え、過失致死だ。検察側は、殺人と死体損壊で起訴しているからな。それを立証するには仕方がないと言えばそうなんだが……」

記者2「そうだな。でも、遺族はオレたちもよく知ってる毎朝の佐賀さんだ。証拠でウラを取って記事にするのが仕事だったとは言え、これをそのまま出すのは、さすがに無理だっただろうな」

哲夫は膝に手を置いて、拳を握りしめている。

哲夫「……」

○裁判所の外の歩道（同日…昼）

裁判からの帰り、哲夫は歩いて人通りのある道を地下鉄の駅に向かって歩いている。

哲夫 M「最後まで、誰か分らないのか？

ならば罪を償ってもらうしかない。また、

検察官の方と打ち合わせか？」

哲夫「うっ！」

哲夫は急に胸を押さえて、前に倒れる。

哲夫は苦悶の表情を浮かべる。

通行人 1 が哲夫を見つける

通行人 1「おい！ 誰か倒れてるぞ！」

通行人 2 が哲夫に近寄って、肩を持つてゆらす。

通行人 2「大丈夫ですか？」

通行人 1「救急車を呼ばないと！」

通行人 1 は電話で救急車を呼ぶ。

○病院（大西の見舞い…昼）

ベットに座っている哲夫。

4 人部屋。

病室のドアを開けて、大西がお見舞いの花束を持って入ってくる。

大西「テツさん、大丈夫ですか？」

哲夫「大西か……。また仕事中か？」

大西「そうですね……。今度はちゃんと許可をもらってきましたよ」

哲夫「ははは。花はこっちに置いてくれ。スマホはどけていい」

大西は哲夫のベットの横のテーブルに
スマホを退けて花を置く。

大西「大丈夫なんですか？」

哲夫「今のところはな。心筋梗塞らしいが、発作は治まったそうだ。ただ、ドクターからは、まだ安心は出来ないってことで入院はもう少し続きそうだ」

大西「じゃあ、裁判の傍聴の方は？」

哲夫「無理だろうな」

大西「……残念ですね」

哲夫「ああ。だが、誰か分からないで裁判してるんだ。証言を聞いたって、余計イライラするだけだ」

大西「そうですね」

哲夫「もどかしいよ。ブン屋をやってる時の
とは、違うもどかしさだ」

大西「：しかし、SNSでは既に身バレして
いるようですが：」

哲夫は語気を強めて、

哲夫「オレも元ブン屋だ。きちんとしたウラ
がないものは信じない」

大西「テツさん自身で調べないと、というこ
とですか？」

哲夫「ああ。ただ：、自分の足で調べて見つ
からなかったなら割り切れるが、目の前に
あるのに分からないってのはな：。手を伸
ばせば、届くところにあるってのに：」

大西「：そうですね」

哲夫「大西、オレが前に独り言を言ったよ
な。記者である前に、人間だって」

大西「ええ：」

哲夫「普通の人間ってのは、こんなに窮屈だ
ったのかって思うよ」

大西「：それは、今度のようなことになった

からですか？」

哲夫「そうだ。普通の人間なら、こんな気持ちにはならないだろう？　それが当たり前なんだからな」

大西「…」

哲夫「記者が偉いとは思っちゃいないが、少なくとも情報をもらえる立場にはある。この事件があつてから、それがいいことなのか、そうじゃないのかって、考えることが多くなったよ。まあ、今更考えても仕方ないがな…」

大西「…」

哲夫「仕事があるんだろ？　オレの代わりに裁判の傍聴を頼む。判決の記事は読ませてもらうから。それだけは忘れるな」

大西「はい。失礼します」

○病院（遺族引継ぎ…昼）

大西が帰って哲夫が一息付くと、弁護士
の蘭部が入ってくる。

蘭部「佐賀哲夫さんですか？」

哲夫「そうですが、あなたは？」

蘭部「弁護士の蘭部と申します」

哲夫「はあ。私に何か御用でも？」

蘭部「はい」

×

×

×

哲夫「訴訟承継：ですか？」

蘭部「はい。大変失礼なことだとは思いますが、

検察官の方からご連絡を頂きまして

：

「
哲夫「どういう内容なのですか？」

蘭部「はい。佐賀さんには身寄りがないとお

聞きしております。ですので、もし仮に、

の話ですが、佐賀さんにもしものことがあ

った場合、裁判を続ける、『相続人』と言

いますが、その方がいないという理由で、

裁判が終了してしまうことになるのです」

哲夫「向こうの罪が消えるということですか？」

「

蘭部「結果的に、そうなります」

哲夫は、驚く。

哲夫「…じゃあ、どうすれば…？」

蘭部「代理訴訟人を選んでおくことができません。その場合はご本人が亡くなってから裁判が継続できます。検察官から、その相談をして欲しいと」

哲夫「…」

蘭部「検察側としては、今回の裁判は特定少年が起こした事件とは言え、許容し難いとの認識です。それは、佐賀さんも同じだと思いますが…」

哲夫「…もうすぐ判決が出ますが、高裁まで行く可能性はある、ということですか？」

蘭部「その辺りは被告側の弁護士次第ですが、可能性がない訳ではありません」

哲夫、考える。

哲夫M「罪が消えるなんてもってのほかだ。だが、続けたところで、何も分らない。続ける意味があるのだろうか…」

哲夫「…今の判決結果を待ってからでもかま

いませんか？」

蘭部「はい。こちら無理強いは致しません。名刺をお渡ししますので、必要でしたらご連絡下さい」

蘭部は机に名刺を置く。

哲夫「分かりました。ありがとうございます
す」

蘭部「では、失礼します」

○病院（判決当日…朝）

哲夫はベットに寝ている。

哲夫「今日、判決か…」

哲夫に突然胸の痛みが走る。

哲夫「うっ！」

哲夫は何とかナースコールを押す。

看護師１「佐賀さん、どうされましたか!？」

哲夫は苦しんでいる。

看護師１が哲夫の病室に入ってくる。

看護師１「佐賀さん！」

看護師１はPHSでナースセンターに

電話をする。

看護師1が電話で、

看護師1「503号室の佐賀さんが苦しんで

います！　すぐ来てください！」

看護師2、3、ドクターが集まる。

ドクター「これはまずい……。すぐ治療室

へ！」

哲夫はベッドカバーを半分開けられて、ストレッチャーに乗せられ、移動する。

移動の最中、

哲夫M「…一日…か…」

○病院（哲夫の病室…昼）

ベッドカバーがめくれている、哲夫のベッド。

病室にある、哲夫のスマホが鳴る。

留守電に移る。

大西（声）「もしもし、テツさんですか？」

大西です。さっき判決が出ました。検察側

フィクション劇場 第十三話「一日」

の求刑通りです！ 弁護側は控訴しませ
ん。刑が確定したことで、報道側から再度
要請して、実名が出せることになりました
た！ 今は言えませんが、明日のウチの朝
刊に載ります。必ず見てください！ で
は、失礼します！」

E
N
D

（2025年6月15日 初出）

（2025年11月20日 加筆・修正）



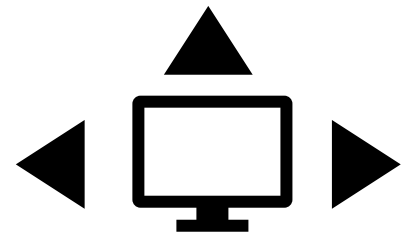
「
一
生
」

フ
イ
ク
シ
ヨ
ン
劇
場

第
十
四
話

大
太

大



フィクション劇場 第十四話「一生」

【登場人物】

小谷 龍二（こたに・りゅうじ）（0ゝ62）

：俳優。俳優一家の生まれ

小谷 真央（こたに・まお）（24／58）：

龍二の妻。旧姓は小柴。

小谷 宏樹（こたに・ひろき）（30）：龍二
の長男

小谷 昌三（こたに・しょうぞう）（32）：

龍二の父

小谷 美沙子（こたに・みさこ）（27）：龍

二の母

宮原（みやはら）（61）：ワイドショー

司会者

澤田（さわだ）（28）：ワイドショー ア

シスタント

小川（おがわ）（37）：ワイドショー 現

地レポーター

ワイドショー カメラマン

フィクション劇場 第十四話「一生」

レポーター1と6

（たくさん出てくるので、アバウトです）

暴漢

龍二のマネージャー

病院のドクター

看護師

マスコミ多数

【あらすじ】

俳優一家に生まれたサラブレッド、俳優の小谷龍二は、突然、暴漢に刺されて病院に搬送され、命の危険に晒される。妻の真央は病院で龍二の容体を見守っている。

意識が戻らない龍二は走馬灯を見る。

誕生した時、初の映画出演、大河ドラマ主演、熱愛報道、真央との結婚、両親の事故死。長男宏樹の誕生と芸能界入り。

その宏樹が病院に駆けつけるが、まだ龍二の意識が戻らず、走馬灯が続いている。

大麻所持、自宅謹慎中、復帰の映画出演。

意識が戻った龍二は、真央に「いつも（マスコミが）一緒だった」と話すが、真央は誤解し、「（私たちは）これからずっと一緒」と話す。宏樹に「まだやることもある」と言われ、自分の死後のマスコミ対応だと受け取って息を引き取る。

そして宏樹は、かつて龍二が主演した舞台の制作会見で、主演としてフラッシュを浴びる。

○ホール出口（龍二 62歳…夕方）

龍二は舞台公演を終えて、ホールから出て、タクシーを拾おうとしていた。周りにはマネージャーを始め数人がいる。

その中で、パーカーを着た男が龍二に近づく。

暴漢「小谷龍二だな？」

龍二は声の方を向く。

龍二「そうだが…、君は？」

暴漢「オレが誰でもいいだろ」

龍二「？」

暴漢は包丁で、龍二の腹を刺す。

龍二「な、何をするんだ…!？」

暴漢「お前みたいなの、悪いことやっても、のうのうと暮らしてるヤツは気に入らねえんだよ…。この場であの世に行きな！」

龍二はその場で腹を抱えて前向きに倒れてうずくまる。

暴漢は、ナイフを捨てて逃げる。

マネージャー「誰か、救急車を呼んで下さい。早く！」

○病院の廊下（龍二 同年齢…夕方）

ストレッチャーに乗った龍二がドクターと看護師に付き添われ、病院の廊下を運ばれている。

（以下、走馬灯シーン）

○病院の玄関（龍二 〇歳…昼）

父の昌三と龍二を抱える妻の美沙子。

フラッシュが炊かれる。

昌三「おいおい、赤ん坊がいるんだぞ。フラッシュはやめてくれないか？」

フラッシュはやめるが、カメラのシャ

ッター音は多数聞こえる。

二人の周りには大勢のレポーターが陣取っている。

レポーター「昌三さん、待望の第一子誕生おめでとうございます。今のお気持ちはい

かがですか？」

レポーター全員が昌三にマイクを向ける。

昌三「素直にうれしいですよ。ホッとしています。美沙子も初めての出産だったので、心配していましたが、病院のスタッフのみなさんがとてもよくしてくれて」

レポーター陣が頷く。

昌三「無事に生まれて、妻ともども感謝しています」

レポーター1「男の子ということで、お世継ぎの誕生で喜びもひとしおだと思いませんか？」

レポーター全員が昌三にマイクを向ける。

昌三はレポーター2の方を向いて、

昌三「ははは。もう、そういう時代でもないでしょう。男の子でも女の子でも、母子ともに健康なら、それで十分ですよ」

レポーター2「お名前はもう決まっているの

ですか？」

昌三「ええ。美沙子と相談して『龍二』と名付けました」

レポーター2「どのような理由で、ですか？」

昌三「龍のようにたくましく育て欲しい、という事と、私の名前に『三』が付いていきますから、それよりも上の人間になって欲しいとの思いで『二』を加えました」

レポーター2「一番ではなく？」

昌三「そうです。何事も世の中で一番というのは難しい。それに一番になれば慢心してしまう。そういうことなく、謙虚さや誠実さを持って欲しい、ということです」

レポーター3「昌三さんより上を目指すというのは、やはり俳優業で、となるのでしょうか？」

レポーター全員が昌三にマイクを向ける。

昌三は少し笑みを浮かべて、

昌三「それは、まだ気が早いですよ。私としては子供の意思を尊重したいと思っています。この世界はみなさんが思っているより大変ですからね」

レポーター4「奥様の美沙子さんの芸能活動は、これからどうされるのでしょうか？」

レポーター全員が昌三にマイクを向ける。

昌三「美沙子と話をして、少し仕事を休んで子育てに専念してもらうことにしました」
レポーター4「どのくらいの期間になるでしょうか」

レポーター全員が昌三にマイクを向ける。

昌三「2、3年の予定です。それ以降も仕事はセーブしてもらって。ベビーシッターさんをお願いして、協力してもらうつもりです」

レポーター5「美沙子さん、お子さんが生まれたことで、美沙子さんからお父さんにお

願いはありますか？」

レポーター全員が美沙子にマイクを向ける。

美沙子「昌三さんには、今まで通り仕事をし
てもらえれば。ただ、仕事が終わったあと
は、真っ直ぐに帰って来てもらえると嬉し
いですね」

レポーター陣は少し笑う。

昌三「おいおい、美沙子。それじゃあ私が今
まで遊び歩いていたみたいじゃないか。そ
んなこと龍二に聞かせられないだろ？」

レポーター陣が笑う。

レポーター6「すいません、それでは最後に
ポーズをお願いします」

カメラのシャッター音が聞こえる。

二人が龍二を抱いてポーズを取る。

昌三と美沙子目線でカメラマンを見
る。

その場面（被写体目線）のまま、次の
シーンへ移る。

○映画制作発表会（龍二 6歳…昼）

前のシーンからの続きで、昌三と龍二
目線（被写体目線）でカメラのフラッ
シュが焚かれる。

舞台の後には「映画『いつか僕にもわ
かること』製作発表会」の文字。

舞台の壇上には、白い布で覆われた長
机に卓上マイクスタンド。

センターに昌三と6歳の龍二。

それを中心に他の出演俳優が並んで座
っている。

× × ×

司会「一通り出演者のコメントを頂きました
ので、ご質問のある方、お願いします」

レポーター「小谷さん、今回は息子の龍二
くんと初共演になりますが、お気持ちは
いかがですか？」

昌三「この映画の主演は一応、私になってお
りますが、龍二が主演と言っても過言では

ありません。スタッフ・キャストのみなさんには、私の息子としてではなく、一出演者として、そして、私も一役者として、監督の満足できる映画にすべく、一緒に演じて行きたいと考えております」

レポーター2「やはり、カエルの子はカエル、ということになりましたね？」

昌三「まあ、私から勧めた訳ではないのですが、テレビに出ている私の姿を見ていたから。自然に、というところでしょうか」

レポーター3「龍二さんに、このオファーが来た時の気持ちはいかがだったのですか？」

昌三「もちろん、びっくりしましたよ。何回か、脇役での出演はありましたが、こんな大きな役は初めてですから。ただ、龍二はそういうことがあまり分らないみたいで。プレッシャーがないのはいいのですが、なさすぎるというものも……」

レポーター陣は少し笑う。

昌三「ハラハラしながら見ていますよ。親として、役者として、どう教えていくのか、バランスを取るのが悩みどころですね」

レポーター4「龍二くん、気持ちはどう？」

龍二「はい！ が・ん・ば・り・ます！」

場内が笑いに包まれる。

フラッシュが焚かれる。

龍二目線（被写体目線）からカメラマンを見る。

そのまま次のシーンに進む。

○大河ドラマ制作発表会（龍二 16歳…
昼）

前のシーンからの続きで、フラッシュが焚かれる。

舞台後ろには「大河ドラマ『四郎時貞』制作発表会」の横看板。

長いテーブルに白い布がかけられ、テーブルの中心には「主演 天草四郎時

貞役 小谷龍二」の紙が貼ってある。

後には金屏風。

レポーター1「龍二さん、今回は10代での大河の主役、大抜擢だと思うのですが、今のお気持ちを聞かせ下さい」

龍二「はい。大変光栄です。しかし、戸惑いもあります。本当に自分でいいのか」と。そして同時に、非常にやりがいのある役を頂いたと思っています」

レポーター2「役作りの方は、何か進めているのですか？」

龍二「はい。過去の四郎を題材にした映画や資料を見たりしています。四郎は若くして亡くなっていますが、その分、中身の濃い人生を送った人だと感じています。人を惹きつける聡明さと妖艶さ、そして、普段見せる親しみやすさなどを演じ分けるのは大変だなと、改めて認識しています」

レポーター3「今度のことについて、お父様から何かアドバイスはありましたか？」

龍二「はい。父は私に取って大先輩になりますから、もちろん話はしました。父は『監督や脚本家の方をはじめ、その他のスタッフキャストの考え方をよく聞いて、役作りをしろ。その上で、自分が思ったことを相談してみる』と言われました」

レポーター4「それでは、この役を演じるに当たったの抱負をお願いします」

龍二「はい。今回、この役を頂いたことは大変光栄ですし、プレッシャーもあります。私にこの機会を与えて下さった関係者のみなさまのために、また、視聴者の方々の期待を裏切らないように、体当たりで演技に行きたいと思いますので、どうぞよろしくお願い致します」

龍二は座ったままで、一礼。

フラッシュが焚かれる。

龍二目線（被写体目線）からカメラマンを見る。

そのまま、次のシーンに続く。

○ホールの裏口（熱愛報道…龍二　26歳…
昼）

前のシーンからの続きで、フラッシュ
が焚かれる。

龍二がサングラスをかけて公演先のホ
ールの裏口から出てくる。

レポーター1「龍二さん！　女優の小柴真央
さんとはどのような関係なのですか？」

レポーター2「龍二さん！　小柴さんと一緒
にいる写真を撮られていますか、ご説明頂
けますか？」

龍二はレポーターの方を見ず、手でレ
ポーターを遮る仕草をして、足早に去
ろうとするが、一旦止まってレポータ
ー陣の方を見る。

龍二「時期が来たら話します」

レポーターはさらに詰め寄る。

レポーター3「時期というのはいつになりま
すか？」

龍二「時期というのは、時期です」

レポーター4「詳しくお話を聞かせて下さい！」

車に乗り込む龍二。

龍二目線（被写体目線）でフラッシュが焚かれる。

そのシーンのまま、次へ進む。

○結婚式の記者会見（龍二 28歳..昼）

前のシーンからの続きで、フラッシュが焚かれる。

金屏風の前に、和服姿の龍二と真央が座っている。

机は白の布で覆われていて、各々に卓上マイク。

マイクの周りには花が添えられている。

龍二「本日、真央との結婚式をとり行ったことをご報告します」

レポーター1「おめでとうございます。プロ

ポーズはどちらから？」

龍二「私からです」

レポーター2「どのような言葉で？」

龍二「一緒にならないか：、と。まあ、レポーターのみなさんからの後押しもありましたし」

レポーター陣が笑う。

レポーター3「どのようなご家庭を築きたいですか？」

龍二「私は俳優一家で育ちましたが、両親とも私のことを優先してくれました。そういう温かい家庭が築けたらと思います」

レポーター4「おしどり夫婦になれそうですか？」

龍二は、真央をちらっと見て、

龍二「おしどりになるか、むくどりになるかは、真央次第、というところでしょうか」

レポーター陣は少し笑う。

龍二「もちろん、私は、おしどりの方がいいのですが：」

真央は下を向く。

会場が笑いに包まれる。

レポーター5「それでは、最後に指輪を見せて頂けますでしょうか？」

二人が立って中央に並び、指輪を見せる。

フラッシュが焚かれる。

二人目線（被写体目線）でカメラマンを見る。

そのまま次のシーンに続く。

○病院の玄関前（龍二両親 自動車事故…龍二 30歳…昼）

前のシーンからの続きで、フラッシュが焚かれる。

レポーター1「龍二さん、今のお気持ちを伺ってもよろしいでしょうか？」

龍二は時折、レポーター陣に顔を向けながら、レポーター陣はその時に頷きながら、

龍二「突然のことで、悲しいというより、まだ頭の整理がついていない感じで……。ひょっこりウチに遊びにくるんじゃないかって……。父は昔から車が好きで、私も子供の頃、よく乗せてもらいました。父の車は二人しか乗れないものが多かったので、母は留守番ということも多くて、拗ねてたりしましたね……。私が結婚して、やっと二人で出かけられるようになった矢先でしたから……」

レポーター2「向こうが原因の事故でしたから、余計に、ですね？」

龍二「ええ。父は自分が事故でも起こしたら、関係者のみなさんにご迷惑がかかるからと、常々、安全運転を心がけていました。それだけ気を付けていた父でも、車線を超えて突っ込んでくる車にはどうしようもなかったんだと……」

レポーター3「真央さんも悲しんでおられますか？」

龍二「はい、もちろんです。かなり参っている
ので自宅に居ます。ですので、取材はご
遠慮下さい」

龍二目線（被写体目線）で、フラッシュ
ユが焚かれる。

そのシーンのまま、次の場面へ。

○葬儀場（龍二両親 葬儀…龍二 30歳…
昼）

前のシーンからの続きで、フラッシュ
が焚かれる。

葬儀場の前。

龍二と真央は喪服姿。龍二は両親の位
牌、真央は遺影を持っている。

レポーターがマイクを向ける。

龍二「本日、私どもの両親である、小谷昌

三、美沙子の葬儀が滞りなく終わりました
ことをご報告致します」

レポーター「龍二さん、ご両親には何
と？」

レポーターが龍二にマイクを向ける。

龍二「今まで、育ててくれてありがとう…、
と。二人は私の親であると同時に、俳優と
しての先輩、そして大切な家族でもありま
した。こういう形で突然の別れになっ
て、自分が役者として成長する姿を見せた
かった。もっと親孝行をしたかったです。
残念でなりません」

レポーター2「真央さんにも一言いただい
て
ますか？」

真央「ちょっと…、言葉になりません。龍二
さんのご両親は私にとってもよくして頂きま
したし、私は美沙子さんのお芝居に魅せら
れてこの世界に入った一人です。まだま
だ、教えて欲しいことがたくさんあったの
ですが…、このようなことになってしまっ
て…」

フラッシュが焚かれる。

そのまま龍二目線（被写体目線）のま

ま場面が移る。

○病院の玄関前（宏樹誕生…龍二 32歳…
昼）

前のシーンからの続きで、フラッシュ
が焚かれる。

龍二と宏樹を抱いている真央。

二人が出てきたところで、フラッシュ
が止まる。

レポーター1「龍二さん、真央さんのご出産
おめでとうございます」

龍二「ありがとうございます」

レポーター2「今のお気持ちは？」

龍二「無事に出産できてホッとしています。

まあ、私が産んだ訳ではないのですが」

レポーター陣は少し笑う。

レポーター3「真央さんにはなんとお声を
かけしましたか？」

龍二「お疲れさまと。そしてありがとう、
と」

レポーター4「男の子ということですが、お名前は何と？」

龍二「『宏樹』と名付けました」

レポーター5「どのような思いで？」

龍二「真っ直ぐな心を持った視野の広い子になつて欲しいという気持ちを込めて付けました」

レポーター6「考えたのはお二人で？」

龍二「そうです」

レポーター6「天国のご両親も、お喜びになられているでしょうか？」

龍二「…そう思います…。両親に孫の姿を見せてあげられなかったのは残念ですが、きっとこれから見守ってくれるでしょう」
レポーター5「それは、俳優として『見守る』ということでしょうか？」

龍二「それを言うのはまだ早いですよ。これから真央とゆっくり考えたいと思います」

フラッシュが焚かれる。

そのまま被写体目線で、場面が移る。

○舞台発表会見場（宏樹　舞台デビュー…龍
二　40歳…昼）

前のシーンから続きで、フラッシュが
焚かれる。

ミュージカル「皇帝と私」舞台発表
会。

龍二と宏樹、その他の出演者が並んで
座っている。

レポーター1「龍二さん、今回はミュージカ
ルに挑戦ですね？」

龍二「まさか、この歳になってお声がかかる
とは思いませんでした。光栄です」

レポーター2「今回は王子役の一人に息子の
宏樹くんも出演されますが？」

龍二「ええ、そうです。言っておきますが、
きちんとオーディションは受けています
よ」

一同、笑い。

龍二「それに、まだ私の出演が決まる前でし

たから、バーターでもありません」

一同、また笑い。

レポーター3「龍二さん、初の親子共演ということで、意気込みをお聞かせ下さい」

龍二「はい。他の王子・王女役の子供たちと同じように、宏樹はまだ小学生なので学校があります。ですから共演と言いましても全ての公演ではなく、日替わりで数回です。出演者表をご覧頂いて、ご興味がありましたら、是非、劇場に足を運んで頂ければと思います」

レポーター「宏樹くん、どう？ 頑張れそう？」

宏樹は、どう答えていいのか分からず、龍二の方を見る。

龍二は、頷きのシエスチャーをする。

宏樹は頷きながら、

宏樹「うん！」

レポーター陣から笑い。
フラッシュが焚かれる。

（走馬灯シーン１終わり）

○病院（龍二の搬送場所…昼）

龍二はＩＣＵで治療を受けている。

意識はない。

□には酸素マスク。

マネージャーが外の廊下で待機している。

小谷真央が駆けつける。

真央「マネージャーさん、龍二さんの容体は？」

マネージャー「まだ、意識が戻らないそうです。ドクターによれば、一進一退の状態とだと…」

真央「龍二さん…」

マネージャー「ところで、宏樹くんには？」

真央「連絡はしました。仕事のリハ中だったらしいのですが、事情を話して。こちらに向かっているそうです」

龍二は目を閉じたまま。

（以下、走馬灯2シーン）

○警察署前（大麻所持逮捕…龍二 50歳…
昼）

○ワイドショー（昼）

宮原「さて、大麻所持の疑いで逮捕されました俳優の小谷龍二容疑者ですが、まもなく八田署に到着するようです。現地には小川さんが行っています。小川さんどういった状況でしょうか？」

（警察署前）

小川「はい。こちらにもまもなく、小谷容疑者を乗せた車が到着するという情報が入っています」

白い大型のバンが警察の前の道をゆっくり進む。

後部座席には、警官に挟まれる形で龍二が俯いて座っている。
フラッシュが炊かれる。

小川「あ、今、小谷容疑者を乗せた車が、八

田署に入って行きます。大麻所持の疑いで逮捕されました小谷容疑者が警察署の方に入って行きます。後部座席に俯いていました、表情は見えませんが

被写体目線で、フラッシュが焚かれる。

○警察署前（釈放…龍二 同50歳…夜）

○ワイドショー（昼）

宮原「さて、大麻所持の容疑で逮捕・拘留されていましたが、俳優の小谷龍二容疑者ですが、昨日夜、釈放されました。その様子をご覧ください」

（VTR）

フラッシュが焚かれる。

龍二が八田署の玄関から出てくる。

黒いスーツ、黒いネクタイ。

小川「小谷容疑者が今、八田署から出て来ました。黒いスーツ姿の小谷容疑者が出て来ました」

龍二「このたびは、関係者のみなさまにご心配とご迷惑をおかけして大変申し訳ありませんでした」

龍二は深々とお辞儀をする。

龍二は用意した車に乗って立ち去る。

小川「所属事務所に抛りますと、小谷容疑者は当分の間、自宅謹慎にするとのことです」

被写体目線でフラッシュが焚かれる。

○龍二の自宅（自宅謹慎…龍二 53歳…
昼）

白亜の豪邸。

T『あの人は、今』

レポーターの小川とカメラマン。

小川「私は今、俳優の小谷龍二さんの家の前に来ております。3年前に大麻所持で逮捕・起訴され、拘禁2年、執行猶予3年の有罪判決を受けた小谷龍二さんですが、執行猶予が明けた後も目立った活動はしてお

りません。今、小谷さんは何をしているのでしょうか？ お話を聞いてみたいと思います」

小谷がラフなスエット姿で、外に出てくる。

小川「あ、小谷さんのようです！ インタビューして見ます！」

レポーターはマイクを向ける。

小川「小谷龍二さんですね？ 少しお話しよろしいでしょうか？」

龍二は渋い顔をする。

小川「小谷さん、最近俳優活動をしていらっしやらないようですが、今、どうしているのでしょうか？ これからの活動のご予定があるのでしょうか？」

龍二はカメラマンを手で追い払って、自宅に入っていく。

小川は龍二にマイクを向け続ける。

小川「小谷さん！ 一言お願いします！」
カメラが小谷を追う。

○会見場（映画出演のキャスト発表会…龍二
55歳…昼）

フラッシュが焚かれる。

レポーター1「小谷さん、今回の映画出演について、一言、お聞かせ下さい」

龍二「：私の：、至らなさで：、事実上、俳優活動をしておりませんでしたが：、今回：、監督から、是非出演して欲しいとのオファーを頂きました：。正直、迷いました：。私が出ることで、映画の評判を落としてしまうのではないか：、他の出演者のみなさんに迷惑をかけてしまうのではないか、と。しかし、監督から、この役は君しかない、出演して欲しい、と言われまして：。本当に迷いました。ですが、私をまだ、役者として見て頂いていることに感謝を受けまして：、今回、お引き受けすることにしました」

レポーター2「今までのイメージを払拭でき

そうですか？」

龍二「この映画への出演を決めたのは、私のイメージ払拭のためではなく、監督のオフアーがあればこそです。そういう言い方は、この作品に関わるみなさんに失礼でしょう？ 私は求められることをやるだけです」

レポーター3「意気込みは？」

龍二「それはもう……。全身全霊で、監督の求める演技を……。いえ、それ以上の演技を目指して行きたいと思います」

フラッシュが焚かれる。

龍二目線（被写体目線）そのまま場面が変わる。

○ホール（日本アカデミー賞 授賞式…龍二57歳…夜）

前のシーンから続きで、フラッシュが焚かれる。

舞台に「第45回 日本アカデミー賞

授賞式」の文字。

龍二はタキシード。

メインの授賞式が終わり、個別のインタビュー中。

龍二はトロフィーを持っている。

レポーター「小谷さん、日本アカデミー賞
最優秀助演男優賞 受賞おめでとうございます
ます」

龍二「ありがとうございます」

レポーター2「一言、お気持ちをお願いしま
す」

龍二「非常に嬉しく思っています。この映画
の制作発表会でもお話しましたが、私の役
者人生にもう一度、光を当てて頂いた監督
に大変感謝しています。また、スタッフ・
キャストのみなさんにも、そういうことを
気にせずに演技が出来る雰囲気を作って頂
いて。この受賞は、映画に携わった方全て
に送られた賞だと思います」

レポーター「奥様の真央さんには何とご報告

を？」

龍二「あの一件以来、真央には迷惑をかけてばかりでした。そして、同じ役者を志している息子の宏樹にも肩身の狭い思いをさせて来ました。この賞を頂いたことで、全てが消える訳ではありませんが、これから役者の末席にいる者として、精進して行きたいと思います」

（走馬灯2シーン終わり）

○病院（ICU）

計器類（バイタル）に囲まれて、ベッドに仰向けになっている龍二。

酸素マスクを付けている。

宏樹が廊下を走ってくる。

宏樹「母さん、親父の様子は？」

真央「まだ、意識が戻ってないの…。一進一退だっ…」

龍二がゆっくり目を開ける。

ドクターがそれを確認して、廊下に向

かう。

ドクター「奥さん、旦那さんの意識が戻りました」

真央「話すこと出来ますか？」

ドクター「まだ、予断を許さない状態です。

医者の立場からすると控えて頂くことを望

みますが：」

真央「少しだけでいいんです！　お願いします！」

ドクターは一息つく。

ドクター「では、5分だけ許可しましょう。

その間に容態が悪くなれば、その場で打ち

切りますよ」

真央「分かりました。ありがとうございます
す」

ICUに真央と宏樹が入る。

真央が椅子に座る。

宏樹は立って、龍二を覗き込む。

真央「龍二さん：」

以後、龍二は上を向いたまま、

龍二「真央…、か」

真央「…」

龍二「今、走馬灯っていうのを見たよ」

真央・宏樹「…」

龍二「いつも…、一緒だったな…」

真央「『だった』なんて言わないで下さい、

龍二さん。これからもずっと一緒ですよ」

龍二「…そうだな…」

宏樹「親父！」

龍二「…宏樹か…。オレはもうダメかも知れ

ん…」

宏樹「何、言ってるんだ、親父。親父にはま

だやらないといけないことがあるだろ！」

龍二「…そうだな。…でも、無理だろう…。

あとは宏樹…、頼む」

宏樹「なに弱気なこと言ってるんだ、親

父！」

○葬儀場（龍二死去 62歳…昼）

フラッシュが焚かれる。

祭壇には龍二の遺影を囲むように花。

喪服姿の真央と宏樹。

真央は龍二の位牌、宏樹は遺影を持っている。

レポーター「真央さん、今のお気持ち

は？」

真央「龍二さんは、私にはもったいないくらいやさしい方でした。家で怒ったところなんて見たことはありません。こういう形でお別れをすることになったのは非常に残念です」

被写体目線でフラッシュが焚かれる。

そのまま、次の場面へ。

○記者会見場（舞台「皇帝と私」制作発表会…昼）

前のシーンから続きで、フラッシュが焚かれる。

出演者は白い長机の後に座っている。

司会「それでは、只今から、ミュージカル

『皇帝と私』の制作発表会を行います。まず始めに、主役の小谷宏樹さんから、ご挨拶を頂きます」

拍手。

宏樹が立ってマイクを持つ。

宏樹「只今、ご紹介に預かりました小谷宏樹です。みなさん、ご承知のように、私は一度、このミュージカルに王子役として、出演させて頂いたことがあります。その時の主役が、父の小谷龍二でした。父は、役者人生がまだこれからという時に、あのような形で、惜しくも亡くなりました。私は、まだまだ若輩者で、父の背中も見えていないのではないかと思っています。ですが、今回、期せずして父の後を継ぐような形となりました。父は私の目標です。このミュージカルを通じて、そしてこれからも父の遺志を継いで行きたいと思います」

フラッシュが焚かれる。

END

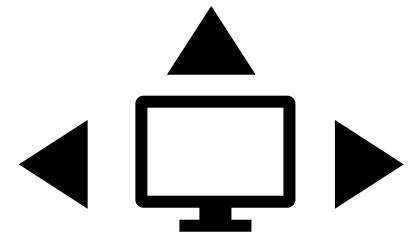
フィクション劇場 第十四話「一生」

(2025年1月21日 加筆・修正)
(2025年6月15日 初出)



フィクション劇場 第十五話
「オリンピック」

大太
大



フィクション劇場 第十五話「オリンピック」

【登場人物】

山上 康之（やまがみ・やすゆき）（73）：

IOC 副会長

国重 誠（くにしげ・まこと）（29）：短距

離走（100m）車椅子パラアスリート。

障がいクラスはT54。

フリッツ・シュナイダー（75）：IOC 会
長。ドイツ人

谷本 圭一（たにもと・けいいち）（53）：

山上の部下

山上 祐希（やまがみ・ゆうき）（41）：康
之の息子

山上 清子（やまがみ・きよこ）（43）：祐

希の妻

山上 小夜（やまがみ・さよ）（7）：康之の
孫

伊藤 貴（いとう・たかし）（34）：IOC

フィクション劇場 第十五話「オリンピック」

総会 TV中継アナウンサー

水谷 由美（みずたに・ゆみ）（33）：同ゲ

スト

坪井 紀和（つばい・のりかず）（40）：男

子 100m決勝 実況アナウンサー

小堀 勝輝（こぼり・かつてる）（47）：同

ゲスト解説

スタッフ1（国重送迎ワゴン運転手）

スタッフ2（国重送迎ワゴン助手席）

男子100mファイナリスト（年齢設定な

し）

1レーン…空き

2レーン…マイク・ゴードマン（白人アメリカ

人）6位

3レーン…ジェームス・ワトソン（黒人イギ

リス）4位

4レーン…カルマン・テラー（黒人アメリカ

人）棄権

フィクション劇場 第十五話「オリンピック」

5 レーン…チャド・アレン（黒人ジャマイ

カ）棄権

6 レーン…フィリップ・ゲール（黒人ジャマ

イカ）1位

7 レーン…マット・ジョーンズ（白人カナ

ダ）2位

8 レーン…アルビン・キメリ（黒人ケニア）

5位

9 レーン…国重誠（日本）3位

【あらすじ】

2039年のIOC総会で2048年夏季オリンピックの開催地が名古屋に決まる。

孫の山上小夜とのオリンピック開催の約束を果たしたIOC副会長の山上康之は、もう一つの約束である「みんなで一緒にできるオリンピック」の実現に動き出し、ダーティーナ手も使い、一部の競技で実現させる。

これは、パラ選手がオリンピックに出場できるというもので、名古屋オリンピックは「統合オリンピック」と名付けられる。

小夜との約束のきっかけを作った車椅子パラ選手の国重誠は、男子100mのファイナリストに残り、銅メダルを獲得する。そして、表彰式でファイナリスト達は国重の車椅子を持ち上げ、選手として対等の意を示す。

その姿を見た山上は、自分のこれまでの行動が責められる前に引退を決意し、IOC委員で部下の谷本に「統合」の文字が消えるまで活動するよう伝え、競技場を去る。

オリンピック総会 会場（現地…夜）

T 『2039年。ドイツ・バーデン＝バーデン』

ホテルの会議場演台にIOC会長のフリッツ・シュナイダーが登壇している。

IOC委員は壇上後方横に座っている。

客席には各国のオリンピック委員及び、その関係者が座っている。

シュナイダーが封筒を開ける。

全員静まり返る。

シュナイダー「（英語）2048年夏季オリンピックの開催地は…」

シュナイダーがカードを観客に向ける。「NAGoya 2048」と書かれている。

シュナイダー「（英語）NAGoya！」

会場に居た日本の招致関係者が、一斉に立ち上がり、歓声を上げて抱き合

う。

IOC副会長の山上康之は、壇上に座って、満足そうに拍手をしている。

その映像が流れる中、中継で、

伊藤貴（声）「2048年の夏季オリンピック

クは名古屋に決まりました！名古屋への

招致は、一度目の1988年から数えて6

0年目。悲願の開催決定です！夏のオリ

ンピック開催は日本では2020年東京以

来28年振りになります。いやく、解説の

水谷さん、ホッとしましたね」

水谷由美（声）「はい。招致活動が身を結ん

だことが、非常に嬉しいです」

伊藤（声）「今回の名古屋招致は、IOCの

山上康之副会長の強力な力添えがあったと

聞いています」

水谷（声）「そうですね。やはり母国開催と

いうのはある意味名誉なことですし。山上

副会長も精力的に働きかけて頂いたと聞いて

おります」

歓喜に沸く、観客席を見ている山上。

山上は左手に巻いてある色がくすんだ
ミサガを見つめる。

山上「…」

（回想シーン）

○山上の息子夫妻の家（昼）

山上小夜が山上に近づいてくる。

小夜「ねえねえ、康之おじいちゃん。おじい
ちゃんって、オリンピックの偉い人なんで
しょ？ 小夜、お願いがあるの」

山上の息子の妻、山上清子は台所で食
事の準備をしている。

清子「こら！ 小夜。おじいちゃんにそんな
こと言っちゃダメよ」

清子の方を向いて、

山上「いいんですよ、清子さん」

小夜の方を向いて、

山上「小夜ちゃん、お願いって何だい？」

小夜「小夜、日本でオリンピックが見たい

の！ 遠くに行かなくてもいいから」

山上「そうか。じゃあ、おじいちゃん頑張ってみるよ」

小夜「あと、もう一つお願いがあるの」

山上「何だい？」

小夜「みんなで一緒にできるオリンピックが見たいの！」

山上「みんなって、いろんな国のみんなが出るんだよ？」

小夜「そういうことじゃないの」

山上「どういうことだい？」

小夜「この前、運動会があって、誠くんがズルしたから」

山上「ズル？」

小夜「そう！」

山上は台所にいる清子の方を振り向いて、

山上「清子さん、誠くんと言うのは？」

清子「小夜のクラスメイトの男の子のことですよ。足が悪くて車椅子を使っているんで

フィクション劇場 第十五話「オリンピック」

す」

山上「…小夜ちゃん、その誠くんがどういうズルをしたんだい？」

小夜「徒競走の時に、後ろから先生に押してもらってたんだよ？　ズルいじゃん！」

山上「…」

小夜「それで文句言ったら、僕も自分だけで走りたかったって」

小夜「だから、みんなで一緒にできるオリンピックが見たいの！」

清子「…小夜は、誠くんの話になると、すぐムキになるから…」

小夜「違うもん！」

小夜「ねえ、おじいちゃんなら出来るでしょう？」

山上「…分かったよ、小夜ちゃん。出来るだけのことはしてみよう」

小夜「ありがとう、おじいちゃん！　じゃあ、ちよっと待ってて！」

小夜が赤とオレンジが編み込まれたミ

サンガを持ってくる。

（赤…情熱・勝負・勇気）

（オレンジ…希望・力強さ）

小夜「おじいちゃん、左の手出して」

山上は左手を出す。

小夜は山上の左手首にミサンガをつけ

るが、うまく行かず、ゆるゆるに結

ぶ。

小夜「はい！ これ、お守り！ お願いだ

よ！」

山上は左手を上げて、ミサンガを見

る。

それから、小夜を見て、

山上「…ありがとう、小夜ちゃん」

（回想シーン終わり）

〇〇〇〇総会 会場（現地夜）

山上は歓喜に包まれた会場で左手首の

ミサンガを見つめている。

山上M「これで一つ目。後、一つ…」

〇〇〇本部ビル・山上の執務室（昼）

〇〇〇本部ビル外観。

山上が執務室でPCを操作している。

机の右にはアタッシュケースがある。

山上「…」

ドアをノックする音が聞こえる。

山上「入ってくれ」

谷本が執務室に入る。

谷本「山上さん、そろそろです」

山上「今日は、各競技連盟との話し合いだっ

たな」

谷本「はい」

山上「何時からだったかな？」

谷本「１５時です」

山上「分かった。…時間までには行くよ」

谷本「はい、お願いします」

谷本が部屋から出ていく。

山上が左腕に目をやり、腕時計で時間を確かめる。

14時50分。

山上は左腕の色がくすんだミサガを見る。

山上「…」

そして、そっと外して机の引き出しにしまう。

そして、アタッシュケースを持って立ち上がり、部屋を出ていく。

〇〇〇本部ビルの廊下（昼）

会議が終わり、山上が廊下を歩いていると、向こうから谷本が歩いてくる。

アタッシュケースは持っていない。

谷本「山上さん、どうでしたか？」

山上「すぐに『はい、分かりました。そうしまししょう』とは行かないよ。粘り強く働きかけるだけだ」

〇新瑞穂陸上競技場前のカウントダウンコメント（夕方）

※モニュメント（Ⅱ名古屋オリンピック
クのエンブレムの案）

（案 始め）

名古屋オリンピックのテーマは「in
finite Possibility（無限の可能性）」

無限大のマークの左半分はオリンピッ
クの色（青、黄、黒、緑、赤）のグラ
デーション、右半分はパラリンピック
の色（赤、青、緑）のグラデーション、
無限大のマークは右と左を人に見
立てて、腕で輪を作って繋いでいるよ
うな形。

その下にオリンピックマーク、その下
に「NAGoya 2048」の文
字。

（案 終わり）

名古屋オリンピックまで、「あと1
日」の表示。

山上はその表示を見ている。

山上「いよいよ、か」

○新瑞穂陸上競技場（夜）

満員の観客。

ライトに照らされるトラック。

各国の国旗がところどころにはためいている。

実況席に坪井紀和と小堀勝輝がヘットセットを着用している。

スタジアムの貴賓席に、山上と谷本を含む、ＩＯＣ委員が座っている。

坪井「さあ、名古屋オリンピックも後半戦に入り、陸上競技がスタートしました。ここからは、解説にＪＰＡ日本パラ陸上競技連盟理事で、ご当地名古屋市出身の小堀勝輝さんをお迎えして、新瑞穂陸上競技場から、男子１００ｍ決勝の模様をお送りします。実況は坪井紀和が担当します。小堀さん、よろしくお願い致します」

小堀「よろしくお願い致します」

坪井「さて、小堀さん。まず、この名古屋の地でオリンピックが開かれることについて、お聞きしたいのですが」

小堀「はい。このオリンピックは前回招致から60年越しの実現ということで、地元出身の私としましては、非常に感慨深いものがあります。：ですが、前回は落選と共に、非常に悲しい出来事もありました。それを思うと少々複雑な気持ちでもありません」

坪井「そうですね」

小堀「ただ、その後2回的大型博覧会が開かれたことで、世界に対する名古屋の知名度が上がったことが、今回の開催に繋がった一つのポイントだったと思います」

坪井「そうですね。ただ、今回のアピールポイントには他にありましたと聞いていますが」
小堀「はい。一言で言うところ海外から来る選手のみなさんへの利便性の訴求ですね」

坪井「具体的には？」

フィクション劇場 第十五話「オリンピック」

小堀「会場をコンパクトにすることはもちろんなのですが、やはり日本に来るということ自体が、選手の負担になってしまっただ元も子もありません。前回と比べると、セントレア（中部国際空港）が出来ましたし、関西国際空港も出来ました」

坪井「そうですね」

小堀「それに、リニア中央新幹線も開通しましたし」

坪井「『まばたき号』ですね」

小堀「はい。リニアが開通したことで、羽田・成田からのアクセスも格段に良くなりました。海外から来る選手のみなさんにとって、名古屋が日本で一番アクセスしやすい場所だと自負しています」

坪井「なるほど。前回招致の時と比べて、周辺の開発が進んだということですね？」

小堀「はい。私は名古屋市守山区の出身なのですが、両親が若い頃は『守山は名古屋じゃない』とか、『東山動物園から向こうに

は、何もない』とか、かなり辛辣なことを
言われていたそうで…、隔世の感がありま
すね」

坪井「それはちょっと…、言い過ぎのような
気がします」

小堀「まあ、聞いた話ですので、どこまで本
当なのかは、よく分かりませんが」

坪井「では、その開発の中で、この新瑞穂陸
上競技場が建設されたのですね？」

小堀「はい。元々ここは競技場として使われ
てはいましたが、2026年に総合的なス
ポーツパークとして生まれ変わりました。

新瑞穂陸上競技場は、その敷地内の野球場
とレクリエーション広場を合わせた土地に
建設されています。ただ、この公園内には
山崎川という川が縦断して、用地
確保のために一部流れを変える工事を行な
っています。また、この競技場は環境にも
配慮して、最新鋭のガス空調設備
が導入されています」

フィクション劇場 第十五話「オリンピック」

坪井「ありがとうございます。それで、今回はオリンピック史上初となる試みもされていますが」

小堀「はい。一部の競技ですが、パラアスリートのみなさんがオリンピックの本競技に参加できる形を実現しました。ですので、私どもは今回のオリンピックを『Unit Olympic（ユニティ・オリンピック）』、日本語では『統合オリンピック』と呼んでいます。私がここに呼ばれている理由もそういうことなんですネ」

坪井「なるほど。しかし、この統合オリンピックを実現するのは、ある意味、招致を勝ち取るより難しいことだったと思うのですが……」

小堀「おっしゃる通りです。IOC内部はもちろん、各競技団体との調整は困難を極めたと聞いています」

坪井「そうですね」

小堀「ですが、IOCの山上副会長が強力な

フィクション劇場 第十五話「オリンピック」

リーダーシップを発揮して実現しました。
山上副会長は表にはあまり出していません
でしたが、相当な覚悟で臨んでいたのだと
思います」

坪井「なるほど。小堀さんはこの統合オリン
ピックの実施について、どうお感じになっ
ていますか？」

小堀「大変喜ばしいことだと思っています。
オリンピックが、また一段と高みに行く一
歩ではないかと感じています」

坪井「そうですね。障がいを持つ選手と健常
者の選手が一緒に競技できる。まさに20
21年にオリンピック憲章のモットーに付
け加えられた『共に』を体现していると言
ってもいい訳ですからね」

小堀「そう思います」

坪井「ところで、小堀さん。この統合オリン
ピックを開催するに当たって、何が一番問
題だったのですか？」

小堀「アドバンテージをどうするか、です

ね」

坪井「パラ選手に対してですか？」

小堀「いえ、両方です」

坪井「…と、言いますと？」

小堀「あまり知られていないと思いますが、陸上のトラック競技で言えば、短距離走はパラ選手が不利です。ですが、中距離、つまり800m以上では障がいクラスによつては、オリンピック選手が太刀打ちできない場合があります」

坪井「その障がいのクラスというのは？」

小堀「主に『T54』、車椅子の選手です

ね」

坪井「小堀さん。この辺りの障がいのクラスについて、視聴者の方にご説明頂いてもよろしいですか？」

小堀「はい。先ほどの『T54』の意味ですが、最初のアルファベットの『T』は『トラック競技』の英語の頭文字を意味します。陸上では『F』もあります。これは

『フィールド競技』の英語の頭文字で、槍投げや走り高跳びなどがそれに当たりま
す」

坪井「なるほど。後の2つの数字についても
お願いします」

小堀「はい。『54』の『5』は障がいのある部位を表しています。この場合は主に下肢、つまり下半身に障がいがある、という意味です」

坪井「他の数字もあるのですか？」

小堀「はい。例えば、『6』ですと、下肢欠損を意味します。『く』の字のバネのような義足を付けて競技をしているパラ選手をご覧になったこともあるかと思いますが、その選手のみなさんが、主に『6』です」

坪井「最後の数字は？」

小堀「最後の数字は、障がいの程度を示しています。『1』が一番重いです。先ほどの『T54』で言えば、4番目に重いことを意味します」

坪井「具体的に重い、軽いの程度はどのくらいなのですか？」

小堀「はい。かなり乱暴な説明になって申し訳ないのですが、『T』の『50』番台で言えば、『2』は胸から下、『3』は腰から下、『4』は足の障がい、でしょうか。TVをご覧のみなさんも一度、日本パラ陸上競技連盟のHPに公式ガイドがありますので、それをご覧いただければと思います」

坪井「詳しいご説明ありがとうございます。話を戻しますが、中距離以上でT54の障がいクラスのパラ選手が有利というお話でしたが、理由はなんですか？」

小堀「はい、車椅子だからです。一般にトラック競技で使う車椅子を『レーサー』と呼びます。その名の通り、早く走ることに特化した車椅子で、前に一つ小さい車輪がある三輪車です。レーサーは車輪を手や腕で回すことで走りますので、ある程度、回してスピードが出れば、惰性で走ることがで

フィクション劇場 第十五話「オリンピック」

きます。だから有利なのです」

坪井「では、アドバンテージはどうなったのですか？」

小堀「結局、中距離以上のトラック競技はアドバンテージの調整が付かず、見送られました。山上さんも残念がっていましたね」

坪井「先ほどおっしゃっていた、IOCの山上副会長ですね」

小堀「そうです。山上さんは日本へオリンピックを招致するのと同じくらい、この統合オリンピック開催に拘っていました。一つでも多くの競技で実施したいと。私は見ていて使命感みたいなものを感じましたね」

男子1000m走 選手が入場。

歓声。

坪井「さて、いよいよ陸上競技の花、男子1000m決勝が始まります。そして、ファイナリストには、そのレーサーを駆るパラアスリート、日本の国重誠選手が名を連ねています」

フィクション劇場 第十五話「オリンピック」

×

×

×

場内アナウンス「レーンNo. 9 マ

コト・クニシゲ ジャパン！」

歓声。

坪井「今、国重がコールされました！ パラ
リンピックのこの種目で4連覇を成し遂
げ、絶対王者の名を欲しいままにした、あ
のフィンランドのレオペッカ・タハティ選
手の後継者とも称されている、この国重。
パラリンピック同種目では向かうところ敵
なし。満を辞してのチャレンジで、ファイ
ナリストの座を手に入れました！」
坪井「さて、小堀さん。先ほどのアドバンテ
ーシですが、この100m走ではどのよう
な形になっているのでしょうか？」

小堀「はい。国重選手の障がいクラスは、先
ほどから出ています、T54です。レーサ
ーではスタートダッシュをすることが難し
いため、10mの助走区間を設けていま
す。スタート地点の後ろにある白線がそれ

になります」

坪井「男子110mハードルのスタート地点と同じところですね」

小堀「そうです。スタート地点と、先ほどの白線の下には圧力センサーが取り付けられています、そのラインをレーサーの後輪が通過すると、10mの線で『セット』、スタートラインで『スタート』の合図が鳴る仕組みになっています」

坪井「なるほど。つまり他の選手は、そのタイミングでスタートすればいいので、後ろを向いたりする必要がない訳ですね」

小堀「はい」

坪井「つまり、パラアスリートには10mの助走区間が与えられるということですね」

小堀「はい。ですが、加えてもう一つアドバンテージがあります」

坪井「それは何でしょうか？」

小堀「ゴールの判定です。通常は体がフィニッシュラインを超えるとゴールですが、レ

「サーの場合はパラリンピックでも採用されている、前輪の軸がフィニッシュラインを通過すればゴールとなります」

坪井「と、言うことは前輪と後輪の軸の間隔が長い方が有利、ということですか？」

小堀「そうなのですが、軸の間隔は1・2m以内と決められています。ただ、この100mでの1・2mは時間にして約0・11秒、決して小さくない数字です」

坪井「そうですね」

小堀「しかし、これらのアドバンテージは、順位をつけるためのものであって、記録にはなりません」

坪井「それは、どういう意味でしょうか？」

小堀「今回のアドバンテージはかなり練られたものになっていますが、今後調整されて行くものだというのが、各競技連盟の認識です。極端な例ですが、あるアドバンテージでパラ選手が100mで9秒フラットの記録を出したとすると、それを超えるこ

とは、オリンピック選手では、ほぼ不可能です。ですので、パラ選手の記録は参考タイムとなります。これがIF（国際競技連盟）が出してきた条件の一つでもあるのです」

坪井「では、国重選手はとにかく順位を追うレースをしなければならぬということですね」

小堀「その通りです。メダルを狙って欲しいですね」

坪井「はい」

国重に三人（スタッフ二人、監視員一人）が近づき、国重の指示で、レーサーの向きを調整している。

坪井「小堀さん、国重選手に誰か近づいているようですが……」

小堀「あれは、レーサーの向きを調整しているんですね。通常、レーサーにはハンドルとブレーキ、そしてトラックをスムーズに曲がれるように、直線とカーブのセッティ

ングを切り替えるトラックレバーというものが付いています。しかし、この100mでは、直線でかつ減速も必要ありませんので、軽量化のために、これらは外しています。ですので、最初の角度調整が重要なのです」

坪井「なるほど」

小堀「しかし、不正行為を防止するために、スタッフには、監視員が付いています。そういう配慮はなされています」

坪井「つまり、最初のレーサーの向きがカギになる、ということですね」

小堀「はい」

坪井「さあ、競技が始まります！」

スタート前、国重は空を見上げる。

そして、左手に目をやり、山上と同じ

くすんだミサガを見つめる。

そして、ミサガの余りを少し捻り、

腕にピッタリするようにする。

○同 競技（夜）

「オンユアマーク」の合図で全員スタート位置につける。

国重のレーサーの前輪の軸が白線の少し後にある。

国重は、一度目を閉じて、息を吐き、まっすぐに見えるレーンを見つめる。
低音のブザーになる。

坪井（声）「国重はこのブザーから5秒以内にスタートしなければなりません」

そして、レーサーを動かし始める。

国重が10m前の白線を通過。

声（場内）「セット」

国重が加速して、スタートラインを通過。

声（場内）「パーン」

（実況）

坪井（声）「スタートしました！」

競技場内、歓声。

坪井（声）「まずは国重がリード！ レーサーはまっすぐに走っています！」

坪井（声）「ゲールとジョーンズが迫ってきます！ 国重持ち堪えられるか！」

坪井（声）「国重抜かれました！ 先頭はゲール！ そしてジョーンズ！」

坪井（声）「レーサーはトップスピードでは不利！ テーラーとアレンに抜かれた！

国重5位！」

坪井（声）「ああと！ テーラーとアレンがスピードダウン！ アクシデントでしょうか!? しかしこれで国重3位に上がった。このまま押し切れるか！」

坪井（声）「ゲール1位でゴールイン！ 続いてジョーンズ。国重、3位でゴールイン！ 銅メダル！ この統合オリンピックでパラ選手初のメダルです！」

歓声に沸く競技場。

国重は日本の国旗を広げてアピールする。

金銀メダルの選手が国重の両方に中腰になって集まる。

フラッシュが焚かれる。

○競技場外（選手村への送迎バス駐車場）

ドーピング検査が終わり、選手村への送迎バス（中型バスと車椅子専用ワゴン）がロータリーに止まっている。

フィリップ・ゲール（金）は国重と手を叩く。

ゲール「（英語）クニシゲ、素晴らしい走りだったよ」

国重「（英語）ありがとう、君もな」

ゲール「（英語）明日の表彰式で、また会おう」

国重と選手は、それぞれのバスに乗り込んで、選手村へ帰る。

○中型バス（国重以外が乗っている）

ゲールが通路に立って、後を向いて、

ファイナリスト達を見る。

ゲール「（英語）みんな、残念なアクシデントはあったが、オレたちは全力を尽くして戦った。胸を張って、国に帰ろうぜ」

他のファイナリストはうなづく。

ゲール「（英語）そして、もっと胸を張って帰れる方法がある。話を聞いてくれないか？」

○車椅子専用ワゴン（国重が乗っている）

運転と乗り降り補助の二人が前に座っている。

助手席のスタッフ2が振り向きながら、

スタッフ2「国重さん、やりましたね。パラ

選手初のメダルですよ！」

国重「ああ。ありがとう……」

スタッフ2「あんまり盛り上がってない感じですが、大丈夫ですか？」

国重「大丈夫。ただ、ホッとしたというか、

約束を果たせたというか：」

スタッフ2「プレッシャーが半端なかったで
しょうからね。選手村でゆっくり休んで下
さい」

国重「ありがとう」

○中型バス（国重以外が乗っている）

バスが交差点を曲がる。

ジョーンズ「（英語）そりゃ、いいアイデア
だ！」

ワトソン「（英語）オレも賛成だ。やろう

ぜ！」

キメリ「（英語）めちゃくちゃクールじゃな
いか！」

ゲール「（英語）じゃあ、決まりだな」

アレン「（英語）：でも、ゲール。そんなこ
として大丈夫なのか？」

ゲール「（英語）ああ心配ない。オレに任せ
てくれ。みんなは準備を頼む」

各自は頷く。

○競技場（夜）（翌日の表彰式）

受賞したアスリートの名前が呼ばれ、
順次表彰台に立ってメダルが授与され
る。

表彰台はパラアスリートに配慮し、台
ではなく、サッカーのゴール裏の広告
みたいな、段差があるように見えるよ
うな絵。

声（場内）「ブロンズメダル、マコト・クニ
シゲ！」

国重の名前が呼ばれ、大きな歓声が起
きる。

そして、銅メダルを首にかけてもら
う。

写真撮影が行われる。

坪井（声）「メダリスト3人、晴れやかな表
情を浮かべています」

ゲールが正面を向いて、大きく手招き
する。

ゲール「カモン！」

坪井（声）「ゲール選手が何かジェスチャーをしたようですが…」

小堀（声）「誰かを呼び寄せているように見えますね」

坪井（声）「あっ、正面から誰か出て来ました」

ファイナリスト5人が、小走りで表彰台の方に向かって行く。

坪井（声）「4…、5人でしょうか？ 表彰台へ向かっています」

小堀（声）「ここからでは遠目で分かりにくいですね…、誰でしょうか？」

カメラが競技場全体（表彰台全体）からメダリストのアップを映しているカメラに切り替わる。

カメラがメダリストの方と逆に向き、入ってくるファイナリストを映す。

坪井（声）「多分、5人とも100mのファイナリストのようですが…」

小堀（声）「何をするつもりなのでしょう
か？」

ファイナリスト達が国重を取り囲む。
国重は、ファイナリスト達を見回す。

国重「（英語）何をするつもりなんだ？」

ゲール「（英語）気にするな」

国重「？」

ゲール「（英語）車輪をロックしてくれ」

ゲールはしゃがんで、国重を指差し
て、

ゲール「（英語）じっとしてろよ」

ゲールがファイナリスト達を見回す。
ファイナリスト達は頷く。

ゲール「オンユアマーク！」

ファイナリスト達は、しゃがんで国重
の車椅子に手をかける。

国重は周りをきよろきよろする。

ゲール「セット！」

ゲール「アップ！」

ゲールの合図で国重の車椅子を、ファ

イナリスト達の視線と同じになるように持ち上げる。(左2人、右2人。後1人。金銀メダリストは持たない)。国重の視線がふわっと上がる。

坪井(声)「あっと? 持ち上げました。国重選手の車椅子をファイナリスト達が持ち上げました」

競技場に拍手が湧く。

無数のフラッシュが焚かれる。

国重は観客を見回す。

ゲール「(英語) どうだ、景色は?」

国重「(英語) 最高だ!」

坪井(声)「小堀さん、これはどういうことでしょうか?」

小堀(声)「これは…、国重選手に、お前はオレたちと同じ目線で戦った。そして、メダルを取ったというアピールではないでしょうか?」

ジョーンズ(銀)が、国重の肩を叩き、メダルを挙げる仕草をする。

国重は頷き、右手でメダルを掴もうとするが、一旦、手を止める。

そして、国重は微笑みながら、ミサンを付けている左手でメダルを掴む。メダリスト全員が一斉にメダルを自分の前に掲げる。

観客からは、より大きな拍手が送られる。

坪井（声）「3人のメダリストがメダルを掲げました！ 国重選手の車椅子を持ち上げてメダルを掲げました！」

観客の拍手が手拍子に変わる。

坪井（声）「オリンピックでもパラリンピックでもアスリートに変わりはない。同じ目線で戦った。ファイナリスト達のアピールに観客も手拍子で答えています！」

○実況席

坪井「素晴らしい…、そして清々しいスポーツマンシップですね」

小堀「はい：」

坪井「小堀さん、史上初めて行われた、この統合オリンピック。この場面を見られただけでも、大成功だったと言えるのではないのでしょうか？」

小堀「そうですね。素晴らしい場面です」

坪井「これからも続いて行くであろう、この統合オリンピック。このシーンは、その歴史の中の忘れられない、そして、その象徴となる場面として、今後も語り継がれることになるでしょう！」

○競技場内貴賓席

手拍子が鳴り止まない中、貴賓席にいた山上が表彰式を見つめる。

そして、静かに席を立ち、階段を上がって行く。

谷本が、それに気づき、山上を追いかける。

谷本「山上さん！」

山上は谷本を見ずに話をする。

山上「谷本：、オレは引退することにする」

谷本「えっ!? どうしてですか? まだまだ

これからじゃないですか?」

山上「オレはこのオリンピックのために、強

引なことをした：。ダーティーなこともし

た：。それが表に出る前に辞める。：それ

が一番いい」

谷本「：」

山上「きっかけは作った。後は頼んだぞ」

谷本「はい。これからも、パラ選手が参加で

きる競技を増やしていきます」

山上「それじゃあ、ダメだ」

谷本「：全部の競技、ということですか?」

山上「違う」

谷本「では、どうすれば：」

山上は谷本の方を向く。

山上「：『統合』の二文字（ふたもじ）が

：、消えるまでだ」

二人は少し笑みを浮かべる。

フィクション劇場 第十五話「オリンピック」

山上は競技場の貴賓席フロアの最上段に上り、左に曲がって、右手をスーツのズボンのポケットに手を入れて、左手はそのまま（IIミサングから見ても競技場の内側が見える状態）、競技場の外周をゆっくり歩いて去る。

♪ 新倉美子「You Belong to me」
（歌い出しから）

E
N
D

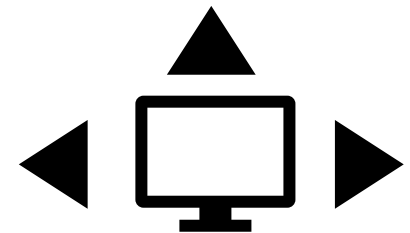
（2025年6月15日 初出）

（2025年11月21日 加筆・修正）



「矛盾」
フィクション劇場
第十六話

大太
大



フィクション劇場 第十六話「矛盾」

【登場人物】

黒田 浩孝（くろだ・ひろたか）（38）：政治団体「むくどりの会」会長。衆議院 兵庫 14 区補欠選挙 立候補者。

（立候補者）

浜口 幸二（はまぐち・こういち）（55）：同選挙区立候補者

大林 秀美（おおばやし・ひでみ）（48）：同右

天本 正雄（あまもと・まさお）（31）：同右

（阪神神戸テレビ）

梅原（うめはら）（43）：TV 討論会 司会

（男性）

磯口（いそぐち）（31）：TV 討論会 司会

（女性）

中村（なかむら）（35）：TV 討論会 ディレクター

フィクション劇場 第十六話「矛盾」

小柴（こしば）（47）：同 プロデューサー
森田（もりた）（30）：同 スイッチャー
羽間（はざま）（45）：阪神神戸テレビ
バ
ラエティ担当プロデューサー

（黒田陣営）

白川（しらかわ）（36）：黒田陣営スタッフ。
黒田スタッフ1

（浜口陣営）

スタッフ1
スタッフ2

浜口の手下（黒服5名）

視聴者

TVキャスター

レポーター

市民1（若者）

市民2（若者）

【あらすじ】

前職の死去に伴う衆議院 兵庫14区の補欠選挙が行われ、4人が立候補する。

候補者の一人、黒田浩孝は、阪神神戸テレビ主催の公開討論会で、選挙の自由を盾に他候補を貶める発言をしたため、他候補はテレビ局側に2回目開催時の対策を求める。

苦慮していた番組Pの小柴は、同局の羽間との話から、黒田の発言の際にテロップで「※諸説あります」と入れて2回目を凌ぐ。

候補の一人、浜口幸二はこれらに立腹し、自作自演の暴行事件を起こし、その犯人の特徴を教えるとして、黒田の事務所を訪れる。

黒田は話を聞き、事件は浜口の自作自演で、自分に危害を加える意図があると知る。それを見た浜口は黒田を拘束し、自由と権利は自分だけのものではないことを説く。

翌日、黒田はアザだらけで演説を行うが無視される。その側で、二人の市民が選挙は自分の「民主主義」を渡す事ではないと話す。

○市民ホール（昼）

TV 討論会 1 回目。

黒田 浩孝はマイクを持って、浜口を指差し、

黒田 「私は！ この浜口という男が！ ひいとをこおろしたと言ってるんだ！」

浜口 幸二 「黒田さん！ 何を言っているんですか！ やめて下さい、そんな根も葉もないことを！」

後には「衆議院 兵庫 14 区補欠選挙 立候補者公開討論会」の看板。

向かって左に司会者の梅原、磯口、右に立候補者 4 名。長机に座っている。

立候補者は奥から順番に、浜口幸二、大林秀実、天本正雄、黒田。

梅原「黒田さん、発言には気をつけて下さい」

会場がざわつく。

討論会が終わる。

○黒田の選挙事務所（討論会后…同日昼）

事務所の道路に面した方に大きな姿鏡、奥に机と椅子がある。

その姿鏡の前で、黒田はネクタイを締め直しながら、鼻歌を歌い、身なりを整えている。

白川「黒田さん、さっきの討論会、大丈夫だったんですか？ テレビであんな事言ってます……」

黒田「ああ、問題ない」

白川「どこからの情報なんですか？ あれ」

黒田「SNSでそういう事を書いている奴がいた。もし、間違いでもオレのせいじゃないよ」

白川「：次からは控えて下さいよ。敵を作らない方がいいですから」

黒田「分かったよ」

黒田はまだ、身なりを整えている。

白川は待っている。

黒田は身なりを整え終わる。

黒田「よし！ 今から駅前で桃太郎だな？」

白川「はい。向こうの準備は出来ているそうです」

黒田「それじゃ、行くぞ！」

○市民ホール（同日）

討論会後の控室に、黒田以外の候補者

3人と、プロデューサーの小柴。

小柴は3人に囲まれている。

浜口「小柴さん、何ですかあれは！ あんな

いい加減なことを言われては、こちらのイ

メージダウンもいいところですよ！ 何と

かして下さい！」

大林「全くそうですよ！ 発言は平等という

ことで、時間で区切って頂いてはいるもの

の、あれは討論じゃなくて、単なる罵詈雑

言でしょう!？」

天本「ただでさえ、こちらの街頭演説を邪魔

されて迷惑してるんです。どうにかならな

いのですか？」

小柴は頭を下げて、

小柴「大変申し訳ありません。ただ、選挙妨害ではないかということについては、選挙管理委員会や警察の仕事になりますから、私どもでは、なんとも……。目に余る行為だとは思いますが、『選挙の自由』を掲げられるとどうしようもないんですよ」

浜口・大林・天本「……」

小柴「ご案内している通り、私たちの阪神神戸テレビでは、もう一度、公開討論会を開く予定ですが、どうしましょうか？　中止にしますか？」

大林「黒田さんはどう考えているのですか？」

小柴「『決まっていることだから、必ず出る。中止にすれば、選挙での発言機会を奪うことになるので、選挙の自由を侵害することになる』……。みなさんに出る出ないを強制はしませんか？」

浜口「黒田さんが出るなら出ますよ。欠席裁判で、これ以上あることないと言われては、たまりませんからね」

大林「私も同じです。出ます」

天本「私も出ます。ただ、視聴者の方に誤解が生じないように対策をお願いします」

浜口・大林「お願いします」

小柴「：努力してみます」

○阪神神戸テレビ局（昼）

報道フロア。

小柴「：困ったな、中村」

中村「：そうですね」

小柴「黒田さんにもう少しトーンを抑えて、政策面での発言をお願いしているんだが、『選挙の自由』の一点張りだからな」

中村「こちらは電波法で中立・公正を求められていますから、録画して編集加工なんて出来ませんしね」

小柴「そんなことをしたら、偏向報道だと言われて、向こうが余計エスカレートするだけだ」

中村「ええ。：その黒田さんの陣営が選挙妨

害まがいなことをしているようですが、取り締まるようなことは出来ないのですか？」

小柴「出来ないことはないんだろうが、そういう状況は想定していないんだろうな。多かれ少なかれ、他の候補者を批判することもあるし。程度問題になるんだろうが、線引きが難しいんだと思う」

中村「でも、ウチの討論会が、視聴者にそういう妨害に加担していると思われると……」

小柴「ああ、そうだ。それに2回目をやることは決まったが、他の候補者から対策をしてくれている言われているし……。少なくとも、黒田さんの根拠のない決めつけ発言だけは、何とかしないといけないと……。本人には気をつけるようお願いしてるんだが、今までのことから考えると、期待が持てないし……」

中村「とりあえず、ウチとしては対策は取りましたよ、という形でも作らないといけない訳ですね？」

小柴「そういうことだ」

○同 休憩室（同日…昼）

小柴がジュースを飲んでいるところに、
バラエティ担当プロジューサーの羽間
が入ってくる。

羽間は自販機でコーヒーを買う。

羽間は小柴を見つけて、

羽間「よお、小柴」

小柴は羽間の方を見る。

羽間は、コーヒーを手に、小柴に近づく。

小柴「羽間か」

羽間は小柴の横に座る。

羽間「お前んとこ、なんか選挙関係で大変
みたいじゃないか」

小柴「そうなんだ。言ってみれば生番組だか
らな。その中にアクの強いのがいるんだよ。
それも自由の騎士と来たもんだ」

羽間「まあ、最近はTVもオワコンだとか言
われているが、こういう時になりゃあ、顔

を売るいい機会になるからな」

小柴「そういうこと。それも中立・公正が建前だから、録画して編集って訳にも行かないし。もし、そうしたとしても、各候補者の確認がいるだろ？ そうしたら修正・修正で終わらないし、揉めることが目に見える」

羽間「他局みたいに『政見放送』って訳には行かないのか？ そうすりゃ録画でも大丈夫だろ？ 編集もいらないし」

小柴「それはそうなんだが、他の候補をけなすような奴がいると、その場で反論が出来ないだろ？ それがそのままネットに流れたりすると、その候補者はたまったもんじゃないからな。結局、こういうやり方が一番無難になっちまうんだよ。ウチは『場』だけ提供しましたって」

羽間「そこまで厄介なのか？」

小柴「そうだ」

小柴はジュースを一口飲む。

小柴「それに比べりゃ、そっちは楽だろ？ ヤ
バいところは、O A前に切っちまえばいい
訳だし」

羽間「おいおい、冗談言うなよ。こっちはネ
タ探しから始まって、ロケもあるし、そこ
からM Aもある。Vを作るのには、そっち
の何倍も時間がかかるんだよ」

小柴「そうか：」

羽間「それに最近はネタも慎重に選ばないと
いけないしな」

小柴「：ネットの力ってヤツか」

羽間「そうだ。一応、こっちでもできるだけ
調べるには調べるんだが、別の意見を持っ
てる人間もいるからな。そういうのに限っ
て、声がデカかったり、つかかってくる
から面倒くさい：」

羽間は自分の紙コップを掲げながら、
羽間「『正義は我にあり』って感じだな」

羽間は自分の紙コップを下す。

羽間「まあ、そこまで行かなくても『こうい

う意見もある』って、一つの根拠だけを取り上げて、SNSに自説を説いてるヤツもいるし。こっちは、間違いだったら下手すりゃ訂正放送だから、そいつらよりは調べているつもりなんだが……。特に歴史ものとかは、伝承の部分も多いし……」

小柴「本当かどうか、ってことか？」

羽間は両手を小さく広げて、

羽間「それすら分らんよ。実際に見たヤツなんてもういないんだから。……こういうのはロマンだって、割り切って観てくれると助かるんだがなあ……」

小柴「いろんな意見か……」

小柴は考えて、気づく。

小柴「そうか……。そういう手がある！」

小柴は羽間を見る。

小柴「羽間、ちょっと教えて欲しいことがあるがあるんだが……」

羽間「何だ？」

○市民ホール（２回目の討論会…昼）

会場レイアウトは前回と同じ。

小柴は移動中継車の調整室。スイッチヤ一の森田が居る。

梅原「それでは、衆議院兵庫１４区補欠選挙立候補者による、２回目の公開討論会を始めたと思います」

会場、拍手。

磯口「各候補者の方には、ご自身の政策を中心にご発言頂いて、根拠のない、あるいは他の候補者を過度に批判する発言はお控え頂くようお願い致します」

黒田以外の候補者は黒田を見る。

黒田は真っ直ぐ前を見ている。

磯口「それでは、天本候補からお願い致します」

天本「天本でございます。よろしくお願い致します。それでは、私からはスポーツを通じた子育て支援政策について、お話をさせて頂きます」

天本が話している。

浜口M「……ったく、TV局は手を打ったと言
ってるが、最初の注意だけで何もなさそう
じゃないか？ 前回と変わらないぞ？ ど
うするつもりだ？」

梅原「それでは、黒田候補、お願いします」

（移動中継車）

小柴「中村、準備してくれ」

中村「はい、分かってます」

（市民ホール）

黒田が発言を始める。

黒田「前回も話しましたように、この浜口と
いう男は、過去に候補者の風上にも置けな
いような数々の言動をしています！ それ
を今から暴露します！」

（移動中継車）

小柴「よし、打て！」

森田が調整室のボタンを押す。

画面に「※諸説あります」とテロップが
出る。

黒田「浜口は、昔、…」

黒田は浜口に対する罵詈雑言を言い始める。

× × ×

○視聴者の家

視聴者が討論会を見ている。

視聴者「何でこんなテロップが？ 間違ってるんじゃないか？」

× × ×

（市民ホール）

黒田が発言を続けている。

浜口M「何だこれ？ 何も変わってないじゃないか！」

浜口は黒田の発言を怒りに堪えて聞いている。

× × ×

梅原「それでは、2回目の討論会をこれで終了致します」

浜口が会場に入ってきた小柴に駆け寄る。

浜口「小柴さん！ 結局何も変わってないじゃないですか！ こちらにもイメージつてもものがあるから、我慢して聞いていたが、約束が違うでしょう!？」

小柴は、両手を出しながら、浜口を制して、

小柴「い、いえ、浜口さん。TV画面の方では『黒田さんのお話されていることについては、必ずしも正しいとは限りませんよ』、という注釈を入れていきます。編集したり、マイクの音を切ったりすれば、こちらが責められますので。私たちとしてはギリギリのところに対処したつもりです。何卒、ご了承ください」

浜口「納得いきませんね！ そういうことでしたら、あなたたちには頼りません。自分たちで何とかしますよ！」

○浜口の選挙カー（討論会の帰り…昼）

車の後部座席に乗って移動中の浜口。

浜口のスタッフが車の運転をしている。

スタッフ1「浜口さん、これじゃあやられっぱなしじゃあないですか！」

スタッフ2「そうですね！ 選挙以前の問題です！ このまま引き下がるつもりですか

!？」

浜口「：」

浜口はシートに深く腰掛けて考える。

浜口「みんな：、私に考えがある。応援してくれている方々に迷惑がかかるやり方になるし、当選も遠のくかも知れない。それでも、協力してもらえるか？」

スタッフ1「もちろんです！」

スタッフ2「何でも言って下さい！ 向こうが選挙の自由を掲げるなら、こちらも選挙の自由を掲げますよ！」

浜口「ありがとう。：じゃあ、事務所に帰ってから、詳しく説明するよ」

○浜口の選挙事務所（討論会后…昼）

他のスタッフを慌ただしく、動いている中、浜口とスタッフ1、2は頭を突き合わせて、事務所の奥で、小声で話をしている。

スタッフ1「えっ？ 浜口さん、それ本気で
すか？」

スタッフ2「そうですよ。何でもやると言
いましたが：、それはちょっと：」

浜口「いや、ここまでやらないと向こうには
分からない。それに、うまく行けば当選で
きるかも知れない」

スタッフ1「しかし、もしバレたら：」

浜口「：だから、車の中でも話したろう。支
援者のみなさんに迷惑がかかるかも知れな
いと」

スタッフ2「それは、リスクが高すぎます。

そんな差し違えるようなことは：」

スタッフ1「その通りです。向こうは当選な
んでできっこない。浜口さんにとって損な
だけですよ」

浜口「なに、実行部隊の準備から何から、全部、私の独断でやる。費用も自腹を切る。

二人は何もしなくていい。こういうことが起きることだけ知っておいてくれればいい」

スタッフ1、2「：」

スタッフ2は、慌ただしく働いている

スタッフを振り向いて見て、

スタッフ2「しかし、他のスタッフは浜口さんを当選させるために、一生懸命頑張っているんですよ？ それを無にする可能性があるんですよ？」

浜口「それは申し訳ないと思っている。：だが、あれは許せない。公衆の面前で、人殺し呼ばわりされて黙っていられるか！」

OTVニュース（昼）

キャスター「速報です。現在、選挙戦が行われている、衆議院兵庫14区補欠選挙に立候補している、浜口幸二候補が昨夜、何者かに刃物で刺される事件が起きました。警

察への取材によりますと、浜口さんは太も
もを刺されたものの、意識があり、命に別
状はないとのことです。警察では傷害事件
として、捜査を進めているとのことです。
ここで、各候補者からのコメントです」

（大林の事務所（昼））

レポーターからマイクを向けられる大
林。

大林「これは許されないことです。選挙の自
由への冒流のみならず、民主主義への挑戦
です。決して容認できる行為ではありません
ん」

レポーター「浜口さんが襲われた理由で心当
たりはありますか？」

大林「浜口さんのプライベートについては、
存じ上げないので、分かりません。討論会
で誹謗中傷まがいのことを言われていまし
たが、冷静でしたし、襲われる理由はない
と思います。もしかすると、その発言を間
に受けてしまった人間が起こしたことかも

知れません。あれは、言葉の暴力です。そういう言葉の暴力を使う人間と、今回、犯人がやっていることは同じです」

レポーター「今後の選挙活動への影響は？」

大林「警察の方から、街頭演説などでは十分注意するよう通達が来ました。しかし、これで選挙活動を自粛するようでは、暴力に屈したことになります。警備の人数を増やして、予定通り選挙戦を戦いたいと思います」

× × ×

（天本の街頭演説会場（昼））

レポーターが天本にマイクを向ける。

天本「正直、驚いています。と、同時に怒りが込み上げています。先ほど、浜口さんのお見舞いに行きましたが、お話も出来て、深刻な状態では無かったので、ホッとしています。ただ、残りの選挙運動はご自身ではできそうにないとおっしゃっていました。選挙ではもちろんライバルですが、正々

堂々と論戦をさせて頂きたかったです」

レポーター「浜口さんが襲われたことについて、思い当たることはありませんか？」

天本「今回の件は、浜口さんへの私怨なのか、この選挙自体の妨害が目的なのかわかりませんので、何とも言えません。しかし、浜口さんは、論戦を通じて裏表のない方だと感じました。TVの討論会で他の候補者にあれだけのことを言われても、平静さを保っていました。今回のことは、まるでその平静さが乱れなかったことに対して、暴力を持って掻き乱そうするような行為に感じています。犯人は今頃、浜口さんを嘲笑っているのかも知れませんが、そういう輩は、絶対に許せません」

レポーター「以上、各候補者からのコメントでした」

○黒田の選挙事務所（昼）

黒田はTVニュースを見ている。

黒田「おい、何でオレのところにマスコミが来ない？」

白川「いえ、存じ上げませんが……」

黒田「それに、あの二人、まるでオレたちの陣営がやったかのような言い回しじゃないか？」

黒田スタッフ「受け取り方にもよるかと思いますが……」

黒田「ああいう言い方をされちゃあ、今までの方は使えないな。……作戦の練り直しだ！」

○黒田の選挙事務所（同日…夜）

事務所の片付けをしている黒田。

黒田「……ったく、あの浜口の一件で完全に悪者扱いだ。とにかく巻き返し策を考えないと……」

事務所の明かりを消していく黒田。

消していく途中で、ドアをノックする音が聞こえる。

黒田「誰だ？」

浜口「浜口です。少しお話があるのですが、
よろしいでしょうか？」

黒田 M「あの浜口か？？」

黒田がドアを開ける。

ドアの外に、スポーツカバンを持った

浜口が立っている。

髪はボサボサ。

黒田は少し驚く。

黒田「やっぱりあんたか……。あんた病院に
いるじゃなかったのか？」

浜口「少し、抜け出して来ました」

黒田「こんな時間にか？」

浜口「昼だと、マスコミがいるので……」

黒田「足怪我してるんだろ？ 入りなよ」

浜口「ありがとうございます。では、失礼し
ます」

浜口は片足を少し引きずって、事務所
に入る。

黒田「無理すんなよ。ここで傷が悪化でもし

たら、オレの印象がますます悪くなる」

浜口「大丈夫です。無理はしませんよ」

黒田と浜口は選挙事務所の奥の椅子に座る。

入り口側に浜口、奥に黒田。

浜口はカバンを自分の横の椅子に置く。

黒田「：で、こんな時間に何の用だ？」

浜口「いや、私を刺した犯人の特徴について、詳しいことを黒田さんにお伝えした方がい
いと思ひまして：」

黒田「警察からだいたいのは事は聞いてるが：、
まあ、用心するに越したことはないからな。
ちよつと待ってくれ」

黒田は紙とペンを準備する。

黒田「浜口さん、こう言っちゃなんだが、ウ
チはいい迷惑だよ。討論会の話と引っ掛け
られて、すっかり犯人扱いだ。自作自演で、
同情票を取ろうって腹なんじゃないのか？」

浜口「そんなことはありませんよ、黒田さん。
そういう姑息なことをしてまで、議員バッ

チを付けようとは思っていませんよ」

黒田は、ペンを持って、書き取る準備をする。

黒田「じゃあ、どうぞ」

浜口「はい。まず、男性でした」

黒田「そうだろうと言うことは聞いてるよ。

背格好は？」

浜口「背は、私と同じくらいでした。体重も

私と同じくらいだと思います」

黒田は、浜口を見る。

黒田「体重？ 服着てたんだろ？ よく分かるな」

浜口「刺された時に体がぶつかったんですが、その力が、私に近かったんですよ。こう見えても、昔、ラグビーをしてましたので」

浜口はがっしりとした体をしている。

黒田「刺されたってのに随分冷静だな。他に
は？」

浜口「髪型は73分けだったと思います」

（フラッシュ）

討論会の浜口の姿（七三分け）

（フラッシュ終わり）

黒田「討論会の時のあんたみたいな感じか？」

浜口「そうですね。今は入院しててボサボサですけど」

黒田「何か身につけてたものは？」

浜口「メガネをかけてました」

浜口は眼鏡をかけている。

浜口「後、時計を付けていました。多分、スマートウォッチだと思います」

浜口はスマートウォッチを付けている。

黒田「時計も見たのか？」

浜口「ナイフが刺されば、犯人の手元は見るでしょう？」

黒田「…まあ、そうだな」

黒田は紙に書く。

黒田「そのナイフってのはどんなのだ？ サ

バイバルナイフみたいなやつか？」

浜口「いえ。普通のナイフですね。似たようなのを持って来ました」

浜口、カバンを机の上に置いて、そこからカバーに入ったナイフを取り出して、机の上に置く。

浜口「これくらいですね。刃渡り15cmというところでしょうか」

黒田「これなら100均でも買えそうだな」

浜口「はい。そこで買いました」

黒田「服装はどうだったんだ？」

浜口「白のスニーカーを履いていました」

浜口は白のスニーカーを履いている。

黒田「夜なのに、よく色が分かったな」

浜口「街灯のそばでしたから」

黒田「そうか。後は？」

浜口「上は、ジャンパー、下はスラックスだったと思います」

黒田「ジャンパーの色は？」

浜口「多分、緑だったと」

浜口は緑のジャンパーとスラックスを履いている。

黒田「このジャンパーの色は、そっちのイメ

「ジカラーじゃないか。身内に犯人がいるんじゃないのか？」

浜口「警察もその辺を疑っているようなんですが、ウチのスタッフは私のためにみんな手弁当で参加している人たちばかりです。そういうことをするとは考えられません」

黒田「まあ、現実問題、身内の可能性は少ないだろうな。：で、そのジャンパーに模様が何かはあったのか？」

浜口「いえ、ただ背中に何か書いてありました。でも、犯人が逃げた時に少し見えただけなので：」

黒田「良く分からなかったってことか」

浜口「はい。多分英語だったと思いますが：」

黒田「あんたのにも何か書いてあるな」

黒田は中腰半身になって、浜口の背中を見ようとする。

浜口「はい。でも日本で売ってる服の英語って、いい加減なものが多いと聞きますから。何が書いてあるかは、ちょっと：」

黒田「そうだな」

黒田は、浜口の背中を見るのを諦めて、
体を戻そうとするときに、浜口の後ろ
にある姿鏡を見る。

そこには「M u r d e r（マ―ダー…殺
人者）」の英語が見える（ジャンパーに
「M u r d e r」の鏡文字が書いてあ
る）。

黒田は、その文字を見て目を見開いて
驚く。

黒田は少し固まる。

黒田は、机の上のナイフを見る。

黒田は、ナイフの上に手を押し付けて
確保しようとするが、先に浜口が手を
置く。

音「ダン！」

黒田は浜口を見る。

浜口は上を向きながら、

浜口「私の…」

浜口はニヤリと笑みを浮かべて、黒田

を見ながら、

浜口「…私物ですから…」

黒田は浜口の目を見て、怯え、声が震える。

黒田は言葉につまりながら、

黒田「い…、いや…。は…、話をするのに…邪魔なので…、し…しまつて頂けませんか？」

浜口は笑顔で、

浜口「はい、分かりました」

浜口はナイフを手で取ろうとするが、

黒田は手をどかさない。

浜口「黒田さん、手をどかして頂かないと、動かしにくいのですが」

黒田は、手をそのままに、

浜口「は…、浜口さんに…、こ…、ここで怪我でもされたら…、た…、大変ですの…」

浜口と黒田はナイフを机の上を横に滑らせるようにして動かした後、浜口のカバンにしまおうと、ナイフを机から

上げるが、二人ともナイフを持ったまま。

浜口「黒田さん、もう大丈夫ですよ。折った丸めたりしませんから：」

黒田「い：、いえ：、さ：、最後まで、き：、きちんとしまわないと、い：、いけませんから：」

二人は、浜口のカバンにナイフを入れる。

黒田は手を素早く戻す。

黒田は椅子に座り直す。

黒田は、浜口のカバンを横目で見ながら、

黒田「は：、浜口さん：。よ：、よろしければ、お：、お荷物、お預かり：、し：、しまししょうか？」

浜口「ご配慮ありがとうございます。黒田さんを信用していない訳ではないのですが：」

浜口は、上目遣いに不気味な笑いを浮かべて、

浜口「大事なものが…、入っていますので…」

黒田は、唾を飲み込み、

黒田「そ…、それでは…、ち…、チャックを
閉めた方が、い…、いいですよ」

浜口「どうしてですか？」

黒田「こ…、この辺は…、ち…、治安が、よ
…、良くない…、で…、ですから」

浜口「ありがとうございます。それでは閉め
ますね」

浜口は、「チチチチ」とゆっくりチャッ
クを閉める。

黒田は視線で追う。

浜口「黒田さん、どうかしましたか？」

黒田は声を振るわせながら、

黒田「い、いや…」

黒田は、事務所の入り口と、自分の座っ
ているところに交互に視線を動かす。

浜口「でしたら、話を続けましょうか？」

黒田「そ…、そうですね…」

黒田は少し間を置いて、

黒田「と…、ところで浜口さんは、刺された時に、て…抵抗されたのですか？」

浜口「はい」

黒田「そ…、それで…、は…、犯人もどこかにき…、傷を負ったのですか？」

浜口「はい」

黒田「ど…、どこに、き…、傷を負ったのですか？」

浜口はにこやかに、

浜口「決まっているでしょう？」

浜口がまた上目遣いで、

浜口「…太ももですよ」

黒田が席を立つ。

黒田「あ、あんた!？」

浜口が手を挙げる。

入り口から、黒い背広・黒ネクタイ・黒い靴・サングラス・マスク姿の5人の浜口の手下が、事務所になだれ込んでくる。

黒田「うわっ!？」

黒田は手下に手足を掴まれる。

黒田は抵抗する。

黒田「や、やめろ！」

黒田は手下に壁に貼り付けみたいな状態に押さえつけられる。

黒田は、手下に手でアゴを下から押さえられて、しゃべれない。

黒田「ううっ！ ううっ！」

浜口は足を引きずって、押さえ付けられた黒田の方に向かう。

あごを抑えていた手下があごから手を放し、代わりに浜口が手を当てる。

浜口が黒田に顔を近づける。

浜口「黒田さん！」

浜口「『自由』って言うのは…、自分たち“だけ”を守る『盾』じゃない！」

黒田「ううっ、ううっ」

黒田が少し暴れるが、浜口はまた手をアゴに当てて、上に押す。

浜口「そして…」

また、浜口が黒田に顔を近づけて、

浜口「『権利』って言うのは…、自分たち“だけ”が使える『矛』じゃない…」

黒田「ううっ、ううっ」

黒田が少し暴れるが、浜口はまた手をアゴに当てて、上に押す。

浜口「もうひとつ…」

また、浜口が黒田に顔を近づけて、

浜口「民主主義の『民』って言うのは…、自分のこと“だけ”じゃないんですよ…」

黒田は暴れようとするが、手下に抑えられている。

浜口「黒田さん、今日のことは、しゃべって頂いてもかまいませんよ…」

浜口「もちろん、私がやったことは内緒で…、ね」

浜口「もし…、誰かにしゃべったら…」

浜口は黒田に顔を近づけて、

浜口「100万票取っても…、バッチは付けられませんよ…？」

浜口は、あごの下の手を離して、部下に変わる。

浜口は出口に歩き出す。

浜口は振り向いて、手下に向かって、

浜口「それじゃあ、少し痛めつけておいて下

さい」

浜口「もちろん、顔だけね：」

○黒田の街頭演説（翌日…朝）

顔中アザだらけで、ところどころガ
ゼが貼ってある黒田が選挙カーをバ
ックに街頭演説をしている。

黒田は自分の顔を指差して、

黒田「みなさん！ 私の顔を見て下さい！
昨日、何者かが私の選挙事務所に押し入
って、私はこのような目に遭わされました！
先日の浜口候補の事件といい、今回の選挙
は選挙の自由、強いては、民主主義への冒
涇が続いています！ 私はこれに対して断
固として戦うため、選挙活動を続けます！

応援よろしくお願い致します！」

市民はしれっと通り過ぎていく。

演説を通りすぎる市民1と2。

市民1「：なんか、物騒だな。今回の選挙」

市民2「そうだな。ニュースで同情票が、勝

敗の行方を左右するみたいなのを言って

ただと：」

市民1「そうらしいな。ところで、お前は投

票行くのか？」

市民2「ああ。期日前投票に行ってきた」

市民1「やっぱ、民主主義に則ってってここ

ろか」

市民2「それは、そうなんだが：」

市民1「何か言いたそうだな」

市民2「オレたちが選挙で一票を投じるのは、

オレたちの『代表』として、国会に行って

もらうためだ」

市民1「そうだけど、それがどうかしたのか？」

市民2「だが：、オレの『民主主義』ってヤ

ツを：、空手で渡した覚えはないぜ」

フィクション劇場 第十六話「矛盾」

E
N
D

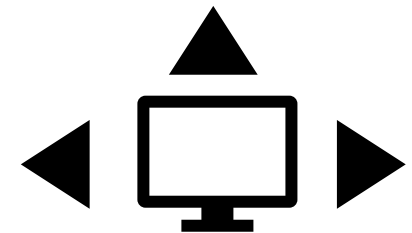
(2 0 2 5 年 6 月 1 5 日 初 出)

(2 0 2 5 年 1 1 月 2 1 日 加 筆 ・ 修 正)



フィクション劇場
「応援演説」
第十七話

大太
大



【登場人物】

藤本文雄（ふじもと・ふみお）（41）：白

川の応援演説者

白川秀之（しらかわ・ひでゆき）（41）：

東京都桐山市長選、立候補者。元桐山市職

員。イメージカラーは白

神田和明（かんだ・かずあき）（45）：同

立候補者、元新聞記者。イメージカラーは

薄紫

関山浩平（せきやま・こうへい）（48）：

白川サイドの選挙参謀

司会（藤本の演説時）

キャスト

通行人1

通行人2（女性の老人）

白川サイドのスタッフ

【あらすじ】

市長の汚職辞任による東京都桐山市の市長選挙が告示される。立候補者は、元市職員の白川秀之と元新聞記者の神田和明の2名。

神田は元新聞記者の経歴を全面に出し、周辺の自治体の取材をして、桐山市の問題点を把握しており、自分が適任であると訴える。

一方、白川は前市長の汚職で、市への信頼が損なわれており、苦戦を強いられている。

白川選挙参謀の関山浩平は、巻き返すべく、白川のキャラクター付けを強くするため、ポスターの作り直し等の作戦を考える。

また、白川の実直さを出すため、白川自身に大げさな演説をさせるのはマイナスと見て、白川に応援弁士の人選を打診する。

白川は、市役所で同期だった藤本文雄に依頼し、藤本は内容不問の条件で引き受ける。選挙最終日、駅前立った藤本は、コロナ禍を例に出し、如何に当事者になった者が結果を出すために努力しているかを説く。

ＯＴＶニュース（昼）

キャスター「東京都桐山市で、不適切な金銭授受の責任を取って辞任した前市長の出直し選挙が、今日、告示されました。立候補者は届出順に、無所属で、革新政党日本推薦、桐山市元職員の白川秀之氏、同じく無所属で元新聞記者の神田和明氏の２名で争われます」

× × ×

（ニュース内のＶＴＲ）

白川が宣伝カーをバックに第一声（朝）。

白川「私は、桐山市の元職員として、今回の市長の不祥事を大変恥ずかしく思っています！ 今後、このようなことがないように、市の職員を代表するつもりで、市政の透明化と立て直しを目指してまいります！」

× × ×

（ニュース内のＶＴＲ）

神田が宣伝カーをバックに第一声（朝）。

神田「私は、桐山市や周辺自治体の取材など

を通じて、この市の行政の杜撰さ、責任のなさに怒りさえ覚えています！ 大所高所から俯瞰して見ることができる自分に、市長を任せて下さい！」

× × ×

キャスター「桐山市の市長選挙は、本日告示、来週日曜日に投票が行われ、即日開票されます」

○商店街（昼）

白川とスタッフが桃太郎をしている。

桃太郎「白川秀之をよろしくお願い致します！す！」

白川が商店街の通行人1に近寄って、握手をしようとする。

白川「白川です。よろしくお願い致します！」

白川が手を出す、通行人1は手で制して、無言で立ち去る。

白川が通行人1を後ろから見ている。

白川が商店街の通行人2に近寄って、

握手をしようとする。

白川「白川です。よろしくお願い致します！」

白川が手を出す、通行人2は手を出

さない。

通行人2「：あんだ、市の職員だったって話

じゃないか」

白川「はい、そうです」

通行人2「あんだも市長とグルだったんじゃない

ないんか？」

白川「そんなことはありません。桐山市をー
から建て直すために、立候補しています」

通行人2「私にや、信じられないね：」

白川「：」

通行人2「：元記者さんのように、きちんと
した人にやってもらいたいね」

通行人2は去って行く。

白川は、通行人を後ろから見ている。

○白川の選挙事務所（同日…夕方）

白川の桃太郎部隊が帰ってくる。

白川「みなさん、戻りました」

スタッフ「お帰りなさい」

桃太郎部隊は旗やメガホンを片づけて
いる。

白川「桃太郎のみなさん、今日はここまでです。帰ってゆっくり休んで下さい。明日も
よろしくお願いします。お疲れ様でした」

白川は桃太郎部隊に一礼。

桃太郎部隊「お疲れさまでした。失礼します」

桃太郎部隊は三々五々事務所を後にする。

関山が白川に近づく。

関山 浩平「白川さん、お疲れさまでした。一
息ついたら、打ち合わせをしましょうか」

白川「はい」

○同所へ打ち合わせ…同日 夜

白川「関山さん、情勢はどうですか？」

関山「まだ、2日目なので何とも言えないところもありますが、私の分析だと向こうが

有利です。いい状況ではありません」

白川「私もそう思います。今日の商店街での
桃太郎でも、握手して頂けなかった方が目
立ちましたし：」

白川「やはり、市長の辞任が金銭のからむ話
だったからでしょうか？」

関山「はい、私はそう見えています。市の職員
だった白川さんも、同じような目で見られ
ていると思われます」

白川「しかし、私は、市政をそれなりに知っ
ていますので、透明性を高める必要のある
部分も知っています。それを実行するとい
うことを中心に訴えています。それが、それでは
足りないのですか？」

関山「そういう正攻法では難しいと考えてい
ます」

白川「なぜ、ですか？」

関山「白川さん、今回の選挙は一對一の対決
です。それに前の市長がああいう形で辞任
しました」

白川「ええ」

関山「そうすると、有権者は候補者に対するポジティブな情報より、ネガティブな情報が優先されることが多いのです」

白川「つまり、私が実行すると訴えていることより、市長の辞任の影響の方が大きいと？」

関山「そうです。この選挙は自分が当選したら何を実現するかよりも、如何に、元新聞記者の神田さんにネガティブな印象を与え、逆に白川さんにポジティブな印象を持ってもらえるか、というところにかかっていると考えています」

白川「アメリカでいう『ネガティブ・キャンペーン』というヤツですね。でも、私はそういうのは好みません」

関山「白川さんがおっしゃることはわかります。ですが、向こうも白川さんや私たちに対してやっているんですよ。それも、それと分からないように巧妙に。新聞は建前上、

中立・公正ということになっていますが、
そういう印象操作は得意でしょうから。そ
の経験を使っているんでしょうね」

白川「例えば、どの辺になりますか？ それ
が分ければ、こちら反論もできるかと思
うのですが…」

関山「反論は難しいでしょうね」

白川「なぜですか？」

関山「私がさきほどお話ししたように、『巧妙
に』しているからです」

白川「『巧妙に』…、ですか？」

関山「はい」

白川「すいません、よく分からないのですが
…」

関山「例えば、向こうは近隣の市町村をたく
さん取材していると言っています。隣の市
で『こういうサービスを導入していますよ』
とだけ言います。それは事実です」

白川「確かに間違いはないと思いますが…、
それが？」

関山「それだけを言うことで、言外に『サービスを導入していないウチの市はダメだね』という印象操作をするんです」

白川「確かにそういう風に思いますね」

関山「ええ。それで『自分が当選したら、やる』とは言わず、そこで話を止めるのです」

白川「なるほど……。そうすれば、自分に無理な公約を掲げなくていいし、こちらにネガティブな印象を与えられる訳ですね」

関山「そうです。ここでもし、白川さんが、『そのサービスを導入します』というポジティブな主張をしても、こういう場合は、向こうのネガティブな批判の方が優っているんです」

白川「サービスを導入していないのは確かだから、そのあたりの実現性も含めて、ということですね」

関山「おっしゃる通りです。向こうは推薦して頂いている革新政党日本も引き合いに出して、同様なことをしています。『一時期、

勢いがあつたけど、最近の選挙では振るわないよね』と」

白川「推薦をもらっているだけで、所属している訳ではありませんし、他の選挙のことは関係ないですからね：」

関山「そうです」

白川「：でしたら、市長の汚職辞任のネガティブさが大きすぎませんか？」

関山「それが、私としても悩みの種でして：」

白川「向こうの、そういうネガティブなイメージ戦略を払拭することは出来ないのでしょうか？」

関山「今のところ、2つ考えています」

白川「教えて下さい」

関山「一つ目は、とにかく自分の勝てる要素や長所を訴えることです。何かありますか？」

白川「あまり思い浮かびません。一時期、コロナワクチンの担当になったことはありますが：」

関山「ワクチンの話は諸刃の剣ですね。対応については、市民の方にも多かれ少なかれ不満はあるでしょうし。返って悪くなる可能性もありそうですから：」

白川「ええ。私もそう思います」

関山「他に何かありますか？ 自治会やPTAの役員をやったとか、地域の安全のための見守りをやっていたとか。小さなことからコツコツと、とかでもかまいません」

白川「：これと言って思い浮かびません」

関山「：それでは、批判覚悟で職員であったことを全面に押し出すしか無さそうですね」

白川「：分かりました。で、もう一つというのは？」

関山「簡単に言うと、キャラクター付けですね」

白川「キャラクター：、私のですか？」

関山「そうです。向こうの選挙ポスターをご覧になりましたか？」

白川「もちろん、見ました」

桐山は、手をおでこに当てて、

桐山「あれは…、してやられました。普通は清廉実直なイメージを持ってもらうために、背広にネクタイの写真を使うのが一般的なのですが、向こうは刑事コロンボのような、ダブダブのコートに、ペンを握って『プロには出来ない、素人がいる』のキャッチコピーですから」

白川「多少、言葉足らずな感じはありますが、言いたいことは伝わりますからね」

関山「ええ。『力をパワーに』とか、意味がよく分からないのに比べればよっぽどマシです」

白川「しかし、コロンボは記者じゃなくて刑事なのに…」

関山「その辺はうまくすり替えています、キャラクター付けとしては分かりやすい。それにコロンボは必ず犯人を追いつめます。つまり、こちらが悪という見方を植え付けることも出来ます。新人の候補が、政治に

対して素人であることを逆手に取るのは常套手段ですが、それもうまくはまっていますね」

白川「では、どうすればいいのですか？」

関山「ポスターを作り替えます」

白川「えっ!? もう張ってあるじゃないですか？」

関山「いや、選挙期間中でしたら、何回張り替えてもいいんですよ。もちろんポスターのサイズは守らないといけません。今のポスターの上からシールのようなものを貼るのも可能なんです。特急でやってくれる業者もいますし、最悪、プリンターでも打ち出せます」

白川「そんなことが出来るんですね」

関山「ええ。印刷はこちらでも出来るので、さほど費用はかかりませんが、写真撮影をやり直すとなるとスタジオを抑える必要などもあるので、時間も費用もかかります。あとはレイアウト決めに外注するかどうか

でも変わります」

白川「今のポスターも、結構時間がかかってますからね」

関山「そうです。市長選挙の選挙運動期間は7日間ですから、その間に変えることはまずないのですが、今回は白川さんのキャラクター付けを浸透させたいので、準備させて下さい」

白川「分かりました。費用はなんとかします。それで、キャラクター付けはどういうイメージを考えていますか？」

関山「実直さを出すというのはどうでしょう？　白川さんには一番合っているかと」
白川「それなら、無理して自分を大きく見せる必要がないので、大丈夫そうです。デザインに案がありますか？」

関山「よく、大臣とかの写真であるような、机の上に腕を置いて、こちらを見ながら仕事をしている感じを考えています。もちろん仰々しくない、普通の職場の雰囲気で」

白川「それでは、私の顔が小さくなりませんか？」

関山「極端なことを言えば、不快感がなければ、顔の大きさはどうでもいいのですよ」

白川「？」

関山「白川さんは、投票所に行って何をしますか？」

白川「そりゃ、投票ですよ」

関山「では、投票する時に、何をしますか？」

白川「投票用紙に、候補者の名前を書きます」

関山「投票スペースには候補者の名前だけを書いてありますよね？」

白川「はい」

関山「つまり、顔写真が貼ってある訳ではないのです。もちろん、投票所の外にはだいたいポスターの掲示板がありますが、投票時に自分の名前を覚えてくれていて、それを書いてもらえばいいのです」

白川「なるほど。だから、名前をアピールできるとかパーカーが禁止さ

れているんですね」

関山「そうです」

白川「では、新しく作るポスターは、やはり私の名前を目立たせるものにするんですか？」

関山「はい。そういう形で考えています」

白川「具体的には？」

関山「使う色は白と濃いめの青だけを考えています。それも中間色はなしで、真っ白と真っ青で」

白川「白と青ですか？ それじゃあ、目立たないじゃないですか？」

関山「いや、逆です。向こうのポスターはロンボのパクリですが、オーソドックスな白地に赤文字です。その方は暗いところでも目立ちますからね」

白川「では、そちがいいのではないのですか？」

関山「私はそうは思っていないです」

白川「？」

関山「白川さんは、夜に市民のみなさんは、
何で移動しますか？」

白川「多分、車ですね」

関山「車ではどちらにせよ、見えにくいでしょう？」

白川「…そうか」

関山「向こうがやっていないことをやるから
目立つんですよ」

白川「…で、詳しいレイアウトはどういうイ
メージですか？」

関山「背景は先ほど言った青、文字は白。『白
川』の『白』だけは大きく。カルタみたい
なイメージですね」

白川「名前をアピールするのに、『白』だけで
大丈夫なのですか？」

関山「多分、大丈夫だと思います。先ほどお
話しましたように、投票所では候補者の
名前を書きますが、フルネームはボックス
に書いてありますから、名前全部をアピ
ールしなくても、最初の『白』だけを強調し

ておけば、行けるかと思っています」

白川「なるほど」

関山「ポスターの文字の色も白にしますので、単に『白の人』と覚えてもらえれば、それで票は稼げるはずです。ただ、これは候補者が少ない時に有効な方法ですが」

白川「それで、イメージカラーも白にしたんですね」

関山「そうです。それだけで大丈夫かと思っただのですが……」

白川「分かりました。では、これをお願いします。私のすることはありますか？」

関山「明日の朝一番に事務所内で写真を撮って下さい。スタッフに画像の加工が得意な人がいますので、加工をしてもらって、事務所でプリントアウトします。明日中に張り替えに行きたいので、レイアウトは先ほどの感じ、ということに任せてもらえますか？」

白川「はい。お任せします」

関山「期日前投票も始まっていますから、急いで取りかかえることにしましょう」

白川「はい」

関山「：あと、もうひとつご相談なのですが：、応援弁士を立てられませんか？」

白川「応援弁士ですか？ それは、どうして？」

関山「白川さんは職員だったので、あまり演説慣れてしていないように感じます。先ほども自分を大きく見せるのが苦手だとおっしゃっていましたし」

白川「はい」

関山「ですので、無理に派手な演説をすれば、実直さのイメージが失われかねません。だからです」

白川「それはそうですが：」

関山「向こうは記者出身ですから、それなりに弁の立つ感じでした。しかし、現役の記者を応援弁士に立てることはしないでしょ。こちら現役職員の方は無理ですから、他に誰かいないかと考えているんです。心

当たりはありませんか？」

白川は考える。

白川「私の同期で、今は辞めて実家を継いでいるヤツがいます。そいつは、大学で弁論部に入ってたみたいで職場でもうまく話の出来るヤツでした。そいつに頼んで見ましょうか？」

関山「はい、そうしましょう。では、電話でアポを取って頂けませんか？」

白川「今からですか!？」

関山「早いに越したことはありません」

白川「…分かりました」

○藤本への電話（同日…夜）

（白川の事務所）

白川は藤本に電話をかける。

呼び出し音。

藤本（声）「はい、藤本です」

白川「お前か？ 白川だけど」

藤本（声）「白川か、久しぶりだな。こんな夜

遅くに何のようだ？」

白川「…実は、オレ市長選挙に立候補してるんだ」

藤本（声）「市長選挙？ 桐山のか？」

白川「そうだ。知らなかったのか？」

（藤本の家）

藤本はソファーに横になっている。

藤本「お前、知ってるだろ？ 実家の後継いでるって。そっちまで新幹線で2時間かかるんだ。ローカルな話なんかわかる訳ないだろ？」

藤本「…で、何の用なんだ？」

白川（声）「お前にオレの応援弁士を頼みたい」

藤本「オレがか？ 冗談はよせよ。オレは政治に関わりたくないし、そもそも、もうそっちの人間じゃない」

白川（声）「そう言わずに、お願いできないか？」

藤本「断る」

白川（声）「…」

（白川の事務所）

白川、少し考える。

白川、声のトーンが低くなる。

白川「藤本。お前、あの時の水害覚えてるか？」

藤本（声）「なんだよ、急に。忘れる訳ないだろ」

白川「あの時は、いろいろ叩かれたよな」

（藤本の家）

藤本「ああ。特に新聞にはな。準備が足りなかっただの、対応が遅いだの。どれだけおれたちが走り回ってたと思ってるんだ、って言いたかったよ」

白川（声）「実は、今回の選挙は一騎打ちでな。

相手は、元新聞記者なんだよ」

藤本「…オレはマスコミも好きじゃない」

白川（声）「そいつはずっとこの地域取材してたって言ってた」

藤本（声）「…」

（白川の事務所）

白川「多分、その時の記事を書いたのもそいつだ」

（藤本の家）

藤本「…リベンジに手を貸せっただのか？」

白川（声）「…そう思ってもらっていい」

藤本がきちんと座る。

藤本「だったら当選させて、当事者がどれだけ大変か分からせてやればいいじゃないか」

（白川の事務所）

白川「いや、ダメだ。そいつは何かあっても誰かのせいにするだろう。そうなれば、職員の間たちに迷惑をかけることになる。頼む、引き受けてくれ」

（藤本の家）

藤本はため息を付く。

藤本「…まったく、お前、当選するためじゃなかったのかよ。昔も今も人のことばっか気にするな…。分かった、引き受けるよ」

白川（声）「すまん」

藤本「ただし…、何を言うかはオレに任せてもらえるか？」

白川（声）「もちろんだ」

藤本「お前に耳の痛い話もするかも知れないぞ」

白川（声）「かまわない」

藤本「…じゃあ、段取りを教えてください。それといくつか聞きたいことがある」

（白川の事務所）

白川「分かった。ここに関山さんって言う、オレの選挙参謀がいる。変わるから話をしてくれ」

白川「関山さん、変わって下さい」

白川は関山に電話を渡す。

関山は電話を受け取る。

関山「もしもし、藤本さんですか？ 夜分遅くすみません、私、白川の選挙参謀をやっております、関山と申します。早速ですが演説の時間と場所について、はい…」

関山は藤本と話をしている。

白川「…」

○選挙ポスター掲示板（翌日…昼）

スタッフが白川のポスターを張り替えている。

○ 駅前のロータリー（選挙戦最終日…夜）

白川の選挙カーが止まっている。

聴衆とのぼり旗。

白川「いよいよ、最終日ですね」

関山「ええ。選挙参謀として、できる限りのことはしましたよ」

白川「情勢はどうですか？」

関山「拮抗しています」

白川「さっき、ここで向こうが演説していたから、これが最後の選挙運動ですね」

関山「はい」

白川は選挙カーの中にいる藤本に声をかける。

白川「藤本、頼む」

藤本「…白川。もう一度聞くんが、何を言ってもいいんだな」

白川「その通りだ」

藤本が外に出る。

白川と藤本は選挙カーの屋根に登る。

司会「本日は、お忙しいところ桐山市長選挙立候補者、白川秀之のためにお集まり頂き、誠にありがとうございます。白川本人の演説に先立ちまして、応援弁士として白川の同期で以前、市役所に勤務をしておりました、友人の藤本文雄さんから激励のお言葉を頂きたいと思います。藤本さんお願いします」

聴衆が拍手。

藤本が両手でマイクを持つ。

（藤本の演説）

藤本「みなさん、藤本と申します。今から少しお時間を頂戴して、白川さんの応援演説をさせて頂きます」

藤本は一息入れる。

藤本「みなさんは与党の政調会長を務めた女性議員の方をご存知でしょうか？」

白川は少し藤本を見る。

藤本「日本初の女性首相候補の一人と言われている方です。その方が、ある記者会見で、『政治は結果だ』と話しているのを見ました」

藤本「私は、この発言に感銘を受けました」

白川、ギョツとする。

藤本「この発言の意図するところは、何か不測の事態が起きた時に、現状を把握し、情報を収集し、完全に特定出来ないとしても、原因を推測し、必要なら法律を作ったり改正したりし、予算を当て、やり方を吟味し、行政に指示して実行してもらう。そして、その結果がどうであれ、自分たちが責任を持つということだと受け止めました」

藤本「直近では、コロナ対策がそうだと思います」

藤本「みなさんは、政府のコロナ禍の対応に何点つけるでしょうか？ いいところ30〜40点くらいだと思います。私も、お世

辞にも良かったとは思えません」

藤本「ただ、地方自治体は国が決めたことを進めなければなりません」

ワクチンの接種案内の封筒を出す。

マイクは片手持ち。

藤本「みなさん、これを見たことがあると思います。市から送られて来た、ワクチン接種の案内です」

藤本「この封筒の右下を見て下さい。『新型コロナウイルス感染症対策推進課』とあります」

藤本「白川さんは、この課に属し、正に先頭に立って、みなさんの命を守る仕事をしてきたのです！」

藤本「この課は、6人です。今、桐山市の人口は約5万人です。つまり、白川さんは、一人で8000人以上の市民のみなさんの為に働いていたことになるのです！」

藤本「では、この『新型コロナウイルス感染症対策推進課』というのは、昔からあった

のでしょうか？ そんな訳がありません。
コロナ禍が始まった2020年に発足して
いるんです」

藤本「では、コロナ禍になって、市役所の職
員の数が増えているのでしょうか？ 14、
5人増えてはいます。ですが、この方々を
全てコロナ対策に振り向けた訳ではないの
です」

藤本「実際、白川さんは市の健康保健部から、
この推進課に移りました。ですが、推進課
の仕事だけをしていたかと言えば、そうで
はありません。半ば掛け持ちで仕事をして
いたのです」

藤本は封筒を司会に渡す。

マイクは両手持ち。

藤本「みなさん、市役所に何かの手続きをし
に行くのを待たされることがありますよね？
自分で言うのもなんですが、私もイライラ
する時があります」

藤本「言い方は悪いかも知れませんが、何か

手続きをしに来た市民の方が、予備知識なしで来れば、当然、職員のみなさんは一から丁寧に説明しなくてはなりません。『あなたに説明するのは時間がかかるから、後回しね』とは言えないのです」

藤本はマイクを片手持ちにして、左手を振りながら、

藤本「そういう通常業務をこなしつつ、白川さんはコロナ対策を進めていたんです！」

藤本「この！ 大変さが！ 市役所の外から見ても分かるんでしょうか！ どうですか、みなさん！」

聴衆、拍手。

藤本は再び、マイクを両手持ち。

藤本「…では、このコロナ禍の中で、新聞・TV、つまりマスコミは何をしたのでしょうか？」

藤本「TVの、朝の情報番組、お昼のワイドショー、夕方の情報番組を思い出して下さい。一体、何人の『専門家』が出て来まし

たか？」

藤本「確かに、ドクターであれば、きちんとした国家資格を持っている専門家です。その方々が出演されることに、私は異論ありません」

藤本「その中で、良く出て来た言葉で『エビデンス』という単語があります。日本語に訳せば『根拠』という意味です」

藤本「つまり、専門家の言うことは『エビデンス』になる。そして、その番組で専門家の発言に基づいて、コロナについてあれこれ言うことが出来る、と言う、いわば『お墨付き』をもらうために、『専門家』の方を出演させているのではないかと考えてしまうのは私だけでしょうか？」

少し、間。

藤本「…そして、思い出して下さい…」

藤本「コロナ禍が激しさを増そうとしていた頃、マスコミは何と報じていましたか？」

藤本はマイクを片手持ちにする。

藤本「（腕を上げて聴衆を指さす）原因が分からない、（腕を上げて聴衆を指さす）ワクチンが足りない、（腕を上げて聴衆を指さす）接種場所も足りない、（腕を上げて聴衆を指さす）日本でワクチンが作れない」

少し、間。

藤本「：それが、コロナがほぼ終息した今、マスコミは何と報じていると思いますか？」

藤本「（腕を上げて聴衆を指さす）ワクチンが余った、（腕を上げて聴衆を指さす）接種場所に来る人がまばらだ、（腕を上げて聴衆を指さす）やっと製薬会社がワクチンを開発できた」

少し、間。

藤本「：みなさん、どうられますか：？」

藤本「マスコミのみなさんは、きつこう言うでしょう。『その時々の問題点を指摘するのが、マスコミの役割だ。私たちが指摘したからこそ、政府や行政が動いたんだ。これは、国民のためになっているんだ』：と」

藤本「そして、こういうでしょう。『これは国民の知る権利を行使しているんだ』…と」

少し、間。

藤本「では！ み・な・さ・ん・は！ マ・ス・コ・ミに！ いつ！ 自分の知る権利を託したのでしょうか！」

藤本は腕を上げながら、

藤本「…託した覚えなんかないじゃありませんか！ みなさん！」

聴衆、拍手。

藤本は手を頭の位置くらいで、聴衆を指差しながら、

藤本「こういう！ マスコミの世界に！ どっぷり浸かっていた人と！ みなさんの！ い・の・ちを守るために！ 結果を出すために！ 手を動かして！ 汗をかいて！ 一生懸命働いた人と！ ど・ち・ら・が市長に相應しいか！」

藤本は腕を上げながら、

藤本「…一目瞭然じゃありませんか、みなさ

ん！」

聴衆、拍手。

藤本はマイク両手持ち。

少し間を作る。

藤本「…白川さんは、嘘をつかない聡明な人です。しかし…、あえて言いますが、もし、市長になったとしても、今、掲げている公約の半分もできればいいところだと思っています」

白川、ギョツとして藤本を見る。

藤本「…みなさん、想像して見て下さい…」

藤本「みなさんが、就職をする、部署を異動する、パートやアルバイトを始める…。その時に、1日目から2年、3年先輩の人と同じように仕事が出来るでしょうか？」

藤本「『君、明日から、社長ね』、と言われて、直ぐに働けるでしょうか？ 私には出来ません」

藤本「白川さんは市役所に勤めていたとは言え、市長になれば、分からないことも多い

でしょう。それを補うのは、やはり時間しかないと思っています」

藤本はマイクを片手で持つ。

藤本「ですので、みなさんの（聴衆に指差す）一票で！ 白川さんを市長にして頂き、そして、時間を与えて欲しいのです！」

藤本「：万が一、みなさんの信用を裏切る、公約が遅々として進まない、言ったこととやってることが全然違う：」

藤本「そう感じたら、今度は遠慮なく！ みなさんの（聴衆を指差す）一票で！ 白川さんを（腕を下に降ろしながら）引きずり降ろして下さい！ そのくらいの！ 緊・張・感を！ 白川さんに与えて下さい！」

聴衆、拍手。

藤本「長々とお話しさせて頂きましたが、白川さんには耳の痛い話もあったかと思えます。昔のよしみでお許し下さい」

藤本「選挙戦も今日で終わりと聞いています。白川さんの思いが、市民のみなさまに届く

ようお祈りしております」

藤本「これで、私からの応援演説を終わらせて頂きます。ご清聴ありがとうございました」

藤本、一礼。

聴衆、拍手。

司会「藤本さま、熱のこもった激励のお言葉ありがとうございました。それでは、白川本人からの、最後の訴えをお聞きください。

白川がマイクを持つ。

（白川の演説）

白川「白川秀之でございます。それでは、私からみなさまに最後をお願いをさせて頂きます！」

E N D

（2025年6月15日 初出）

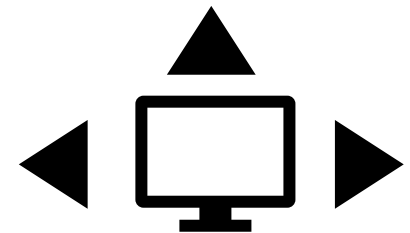
（2025年11月21日 加筆・修正）

フィクション劇場 第十八話「忘却」



「忘却」
フィクション劇場
第十八話

大太
大



【登場人物】

青葉 海（あおは・かい）（25／63）：区切りを変えて「あお・はかい」と読む事ができ、それが犯行時の名前「Blue

Crusher（ブルー・クラッシャー）」の由来になっている

青葉 空（あおは・そら）（22）：海の妹

佐藤 正弘（さとう・まさひろ）（24）：空の彼氏

大東 博也（だいとう・ひろや）（26）：毎朝新聞記者。米子支局勤務。青葉に襲撃され殺害される

鹿野 勉（かの・つとむ）（26／64）：同所勤務。大東の同期。大東襲撃時の第一発見者

京田 剛志（きょうだ・たけし）（30）：鹿野の後輩記者

フィクション劇場 第十八話「忘却」

坪倉 千春（つぼくら・ちはる）（22）…空
の会社の同僚。親友

丸山 桜（まるやま・さくら）（23）…空の
会社の同僚

塚口 佐代子（つかぐち・さよこ）（28）…
同右

青羽 空（あおは・そら）（22）…空に間違
えられた女性

ドクター

看護師

電話応対（声のみ）

家人 1

家人 2

家人 3

掃除のおばちゃん

【あらすじ】

1987年（昭和62年）、技術者の青葉海と、OLの空のきょうだいは二人で暮らしており、空には恋人の佐藤正弘がいる。

ある日、空は佐藤の両親に挨拶に行く日に体調を壊し、キャンセルする。

しかし、翌日の新聞に別人の名前が空と誤植される。訂正記事が出たが、佐藤は信じずに激怒し、空と別れる。精神的に落ち込んだ空は拒食症になり、それが原因で病死する。

海は空の復讐のため、記事を書いた記者が毎朝新聞の大東博也だと突き止め、ペン突き刺して殺害する。同期の記者、鹿野勉は大東を発見するが、既に息絶えていた。

38年後の2025年、事件は既に時効となっており、逃げ切った海は、毎朝新聞の掃除アルバイトとして働いていた。

海は、毎朝新聞の献花台にある大東の遺影に、大東自身が時効後も、このような形になることを望んでいたのか問いかける。

○青葉の自宅（朝）

T『1987年（昭和62年）9月』

青葉空「海兄ちゃん、早く！ 会社遅刻しち

やうよ」

青葉海「もうちょっと待って！」

空「もう……」

二人は玄関を出て、歩く。

海「空、仕事には慣れたか？」

空「まあ、研修は一通り終わったんだけど

……。うーん……。よく分からないな」

海「分からないって？」

空「うん。何か、男の人も女の人も同じよう

に働けるようにしようって話になってるみ

たいんだけど……。あんまり変わってない

みたいな感じ。まあ、普通のOLだね」

海「そっか」

空「海兄ちゃんはどう？ どんなことしてる

の？ 家じゃあんまり話しないから」

海「今年から、携帯電話の開発をしてるよ」

空「携帯電話って、持ち運び出来る電話って

ヤツ？」

海「そう」

空「そう言えば、この前友達が、税務署の職員が主役の映画でそういうの見たって言うてたな……。カバンみたいなのだったって」

海「あ、それは、正確にはシヨルダーホンだな」

空「海兄ちゃんが、作ってるのと違うの？」

海「電話がかけられるってことは一緒なんだけど、今、売ってるのはもっと小さくなってる。普通の受話器の3倍くらいの厚みだね」

空「そうなんだ」

海「それで、今度は受話器より小さいのを作ろうってことになってて」

空「そんな話があるんだ……。確かに、どこでも電話が出来れば便利だろうね」

海「そうだろうけど……。まあ、こういう電話は保証金とか通話料とか、もろもろ高いからね。空の言ってた映画じゃないけど、役

所関係とか、金持ちとかが使ってるだけだよ。普段はあんまり見ないから、空が分からないのも無理ないな」

空は少し、俯く。

空「：それで：さ、話は変わるんだけど：、今度、海兄ちゃんに紹介したい人が居てさ：」

海「おっ、空もそういう年になったか。いいじゃないか。いつ見せてくれるんだ？」

空は、海の腰を叩く。

空「海兄ちゃん！ 見せモノじゃないんだよ!?」

海「ごめんごめん。で、いつ？」

空「一応、向こうのご両親に挨拶してから、と思っでて：」

海「順番としてはそうなるか：。父さん母さんにも紹介して欲しかったけど：」

空「うん：。あの事故がなかったらね」

海「まあ、こればかりは仕方ない。日にちが決まったら教えてよ。ちゃぶ台用意しと

くから」

空は、再び海の腰を叩く。

空「海兄ちゃん、まだそういうのじゃないよ！」

海「冗談だよ」

空「もうっ！」

歩いて、バス停に着く。

海「じゃ、オレは電車だから」

空「気をつけてね」

海は駅に向かって歩いていく。

○空のオフィス（同日…朝）

空「おはよう」

丸山桜・塚口佐代子「おはよう、空」

丸山「ねえねえ、空。今度、彼氏の両親と会うってホント？」

空「えっ!？」

空は坪倉千春の方を向いて、

空「もしかして千春、みんなに話したの!？」

坪倉千春「い、いや、空の話をして、はず

みでさ…」

空「ちよっと！ 千春なら口硬いと思って話したのに！」

塚口「まあ、いいじゃない…。それでいつなの？」

空は、塚口を睨んで、

空「佐代ちゃん、ホントに言わせる気？」

丸山「まあまあ。私らだって空のこと応援してるだからさ。んで、いつ？」

空「…今度の…、土曜日」

塚口「そっか…。(声を大きくして)じゃ

あ、来週、『彼氏のご両親と私』ってタイトルでレポート3枚よろしく！」

空「だから、やめてよ！」

坪倉「空…、真面目な話、お兄さんも気にしてるんじゃないかな。身内は空だけだし」

空「うん。そうだね。いとは何人か居るけど…」

坪倉「ま、空の様子を見るとヘマはしなさそうだから、無理せず頑張ってきたよ」

空「ありがとう、千春」

○その週の土曜日・青葉の自宅（朝）

海「空、オレ会社の用事に駆り出されてるんで、今から出かけなきゃいけないんだけど、調子悪いのか？　パスした方がいいか？」

空「ううん、行ってきて。私は大丈夫だから……」

海「無理するなよ」

空「うん」

空が電話をかける。

空「正弘くん？　私。今日凄く調子悪くて……。うん。せっかくお願いしたのに……。ごめん……。ありがとう。じゃあね」

○空のオフィス（週明け…朝）

空が暗い顔で出社する。

空「おはよう」

坪倉「空、ちょっと！　土曜日大丈夫だった

の？」

空「千春、知ってるの？」

坪倉「知ってるも何も、あんた音楽イベントに行ってたでしょ？ 彼氏のところに行くんじゃないかったの？」

空「えっ？ 私、土曜日は調子が悪いから家で休んでただだよ？ 向こうにもちゃんと電話したし」

坪倉「それじゃあ、これは何？ 家のヤツ持ってきたんだけど」

坪倉は新聞を取り出し、ある記事を指差す。

坪倉「この記事よ」

新聞には、「若者のバンド熱 到来。

各地で自主コンサート」の見出し。

その中のインタビューに、「東京都桐山市の青葉 空さん（22）のコメントとして、「最高です。日頃の鬱憤を晴らすのに持ってこい。また来たい」とある。

空「何これ!? 私、そんなイベント行ってない。これ間違ってるよ」

坪倉「でも、新聞だよ?」

空「新聞でも違う! 今日、早退して電話してみる」

○青葉の自宅(同日…昼)

空は、千春からもらった新聞を持って
いる。

空「毎朝新聞さんですか? 私、青葉 空と言います。そちらの新聞に載っている記事に私の名前が載っているんですが、覚えがなくて…。はい、では折り返しをお願いします」

空は居間で待つ。

電話が鳴る。

空「はい。確認できたんですね。明日ですか。はい。よろしく願いします」

胸を撫で下ろす空。

空は居間に戻ろうとした時、また電話

が鳴る。

空 M 「まだ、何かあるのかな？」

空 「はい、青葉です」

佐藤正宏（声）「空か？」

空 「正弘くん。そうだ、言わなきゃいけないことがあって…」

佐藤（声）「新聞見たぞ、空！ この前ウチに来れなくなったの、コンサートに行ってたからなのか！」

空 「正弘くん、ちょっと待って！ あれは間違いで、今、新聞社の方に連絡したばかりで…」

佐藤（声）「新聞が間違える訳ないだろ！

それに、あの日が大事な日だってことは空も分かってたろ？ ウチの親もその記事知ってるんだぞ！ どうするんだ！」

空 「どうするって言っても…」

佐藤（声）「毎日ストレスが溜まってたとか書いてあったな？ そんなにオレといるのが嫌なのか？」

空「正弘くん！ 私の話も聞いて！」

佐藤（声）「もういい！ 金輪際連絡しないでくれ！」

電話が切られる。

空「正弘くん……」

○空のオフィス・翌々日（火曜日…朝）

空が落ち込んで、仕事が手につかない。
い。

坪倉「空、訂正記事見たよ……。ごめんね」

空「ううん、分かってもらえればいいの……」

坪倉「あれから、彼氏から何か連絡あったの？」

空「……ない……」

坪倉「そっか……。でも見てるはずだよね？」

空「分かんない……。だって凄く小さいんだもん」

坪倉「早く、誤解が解けるといいね……」

空「千春ちゃん……、ありがと……」

課長が近づいてくる。

それを見て、坪倉はそそくさとその場を立ち去りながら、

坪倉「じゃ」

坪倉は空の席から離れる。

課長が近寄ってくる。

課長「青葉くん、仕事が進んでいないようだけれど……」

空「すいません、課長。頑張ってはいるんですが……」

課長「そうか」

課長が空の席から離れながら、小声で、

課長「ま、彼氏にふられたくらいで仕事ができなくなるようじゃあな。やっぱり女の子に仕事を任せるのは無理か……」

空の背中が丸くなる。

○青葉の自宅・次の土曜日（昼）

坪倉が呼び鈴を鳴らす。

海「はい」

海が玄関を開ける。

坪倉がお見舞いの花を持って立っている。

海「どちら様ですか？」

坪倉「空の会社の同期で坪倉と申します。空のお見舞いに：」

海「それは、ありがとうございます。空の兄で海といいます。どうぞ」

坪倉「失礼します」

2人は階段を2階に上がっていきながら、

坪倉「空の様子はとうですか？　ずっと会社を休んでいるので：」

海「正直、良くないです。というか悪いです。部屋にこもってて：。食事も口クに食べないですし：。それに：、何も話してくれないので：」

坪倉「：やっぱり、アレが原因なのかな：？」

海「坪倉さん、アレというのは？」

坪倉「実は…」

×

×

×

海「そうなんですね。そんなことが…」

坪倉「ご存じなかったんですか？」

海「はい。その日は空は体調が悪くって、電話でその旨、向こうに連絡したと聞いてましたから…。そういうことになっていたんですね…」

坪倉「はい」

海「次の日、空がうかない顔をしてたので、どうなのかな？とは思いましたが…。でも、きょうだいとは言え、二人ともいい大人ですから…。それで？」

坪倉「訂正記事は確かに載っていました。小さかったですけど」

海が空の部屋のドアをノックする。

海「空、会社の人がお見舞いに来てくれたよ。坪倉さんって人」

空はクッションをギュツとして、

空M「千春ちゃん…」

空「帰ってもらって」

坪倉「空、千春だよ。少しでいいから顔見せてよ」

空「帰って！」

海・坪倉「！」

二人は引き下がる。

階段を降りて、玄関。

海「：すいません、せっかく来てもらったのに：」

坪倉「私のことは気にしないで下さい。それより空はずっとこんな感じなのですか？」

海「はい。ただ、ウチは両親がいなくて、私も仕事があるので、ずっとつききりという訳にも行かなくて：。正直どうしたらいいのか分からないんです」

坪倉「そうなんですネ：。もし、私で力になれることがあったら言って下さい」

海「はい。ご心配をおかけします」

坪倉「また、少し時間を空けてきますね」

海「ありがとうございます」

○青葉の自宅（1週間後くらいの休日…昼）

空の部屋のドアの前。

海「空、ご飯持って来たよ。もう1週間くらいろくに食べてないだろ？ 体に悪いよ。食べたくなかったらお風呂に入ったら？ さっぱりしたら気分も良くなるよ」

返事がない。

海「空、いるんだろ？」

返事がない。

海「空、入るぞ」

海はそっとドアを開けて部屋の中を見る。
カーテンが閉めてあって薄暗い。

空が壁に寄りかかるようにして気を失っている。

海は空の肩を持って前後に揺さぶる。

海「空！ 大丈夫か!? 空！」

空の意識が戻らない。

海はハッとして、両腕の手首の内側を

見る。

海は、階段を降りて、電話へ向かう。

海は119番を回す。

海「もしもし！ 救急車をお願いします！」

○病院（昼）

空は点滴を受けながらベッドに寝ている。

海はそばで付き添っている。

そこにドクターが近寄る。

ドクター「お兄さん、ちょっとよろしいですか？」

ドクターと海は病室を出る。

×

×

×

海「拒食症？」

ドクター「はい。どうやらそのようです」

海「あまり聞かない名前ですが……」

ドクター「ええ。最近、海外の有名グループの方がかかっています。一般にはあまり知られていません」

海「どうすれば治るのですか？」

ドクター「この病気は心理的ストレスが原因となるケースが多いんです。何か心当たりはありますか？」

海「…ええ…、ありますが…」

ドクター「でしたら、そのストレスを解消すること、回復するかも知れません」

海「でも先生、そのストレスは過去のトラウマのようなものなんです。取り除くことは難しいんじゃないかと…」

ドクター「そうですね、精神科での治療が必要かも知れませんね」

海は少し驚く。

海「精神科…、ですか？ でもそれは…」

ドクター「おっしゃりたいことは分かります。ですが、この病気は内科的・外科的な治療では回復しません。私どもの病院には精神科がありませんので、そうなれば専門の病院に転院して頂くことになります」

海「…」

ドクター「今は、点滴で栄養分を補給して
ますが、とにかく妹さんの体力回復が第一
です。その後、どういう治療を行うかにつ
いては、考えておいて下さい」

海「…はい」

海は病室の空を見る。

海「…」

○青葉の自宅（次の休日…昼）

電話が鳴る。

海「はい、青葉です」

海「何ですって!? 今すぐ向かいます!」

海は外に飛び出す。

天気は晴れている。

○病院（昼）

海が病院の玄関に入る。

海が病院の廊下を走る。

海が空の病室に入る。

ドクターと看護師がいる。

空の顔に白い布が被せてある。

海「!?」

ドクター「先ほど、安らかにお休みになりました。病名は急性心不全です」

海は拳を握りしめる。

海「…」

○同病院（電話の前）

天気は雨に変わっている。

海は電話をかける。

海「もしもし、坪倉さんのお宅ですか？」

私、青葉 海と申します。千春さんをお願い

いしたいのですが…」

×

×

×

海「もしもし、青葉です。お久しぶりです」

海は雨の天気の間を見ながら、

海「…空が…、なくなりました…」

海はまだ雨空を見つめている。

海「以前、新聞記事の話をされていましたよね？ 詳しく教えて頂けませんか？」

○青葉の自宅（昼）

海が新聞社に電話をかける。

電話応対（声）「もしもし、こちら毎朝新聞です」

海「もしもし、私は青葉海と申します。そちらに掲載された記事についてお伺いしたいのですが：」

× × ×

海「えっ？ 教えられない？」

電話応対（声）「はい。誰がその記事を書いたかについてはお答えできません」

海「しかし、先ほどお話ししましたように、この記事が原因で、私の妹は：」

電話応対（声）「妹さんのことについては、お悔やみ申し上げます。ですが、弊社の記事との関係が不明ですので、こちらとしてはご対応致しかねます。では、失礼します」

電話応対は電話を切る。

海の受話器からツーツー音が鳴る。

海、怒りの表情。

海 M「教えてくれないのなら…、自分で探すだけだっ！」

○青葉の自宅（ハローページ…昼）

海は居間のテーブルでハローページをめくる。

海「坪倉さんは漢字が鳥の“羽”に訂正されたと言ってた。その名前の人が取材を受けてるはずだ」

海はハローページを指でなぞり、何人かの「青羽」を探し当てる。

○『青羽』探し その1（夜）

海が、一人目の「青羽」に電話をかける。

家人1（声）「はい、青羽です」

海「すいません、そちらに『空』さんという方がいらっしやいますか？」

家人1（声）「…失礼ですが、あなた、どなたですか？」

海「いろいろと調査をしております…」

家人1（声）「すいませんですが、お答えできません。失礼します」

家人1は電話を切る。

海「…」

× × ×

○『青羽』探し その2（夜）

海が二人目の「青羽」に電話をかける。

家人2（声）「はい」

海「こちらのお宅に『空』さんという方はいらっしゃるますか？」

家人2（声）「いませんが、あなたどなたですか？」

海「いえ、人を探していました…」

家人2（声）「人探しでしたら、警察に行かれてはいかがですか？ 失礼します」

海「…」

海、考える。

×

×

×

○『青羽』探し その3（夜）

海、三人目の「青羽」に電話をかける。

家人3（声）「はい。どなたですか？」

海「毎朝新聞の木村と申します。先般、記事にさせて頂いた方にもう一度取材をしたいのですが、連絡先が分からず困っていました。こちらに『空』さんという方いらっしゃいますでしょうか？」

家人3（声）「あら、記者さんも大変です

ね。すいませんが、ウチにはおりませんよ」

海「ありがとうございます。お時間を頂戴してすみません」

家人3（声）「いえいえ、頑張ってくださいね」

海「はい。ありがとうございます」

×

×

×

○『青羽』探し その4（夜）

海、四人目の「青羽」に電話をかける。

× × ×

海「あなたが、『青羽 空』さんですか？」

青羽空（声）「はい、そうですが…」

海「いやあ、探しました。私の上司から、もう一度取材してくれて言われまして」

青羽（声）「そうなんですね、お手間をおかけしました」

海「いえいえ。ところで、当日取材に行っただけの名前は分かりますか？」

（青羽の家）

青羽は不思議そうな顔をする。

青羽「確か、大東さんとおっしゃってたと思いますけど…」

（青葉の家）

海「大東ですね？ こいつは取材メモとかをすぐなくすヤツで、困ったもんです。取材の方は大東の担当なので、折り返しそちら

によこします。それでは失礼します」

海は電話を切る。

（青羽の家）

青羽「…？　今、自分で取材したらいいのに
…」

○青葉の自宅（同日…夜）

海が、ハローページをめくる。

海「次は『だいとう』だ！」

「だいとう」をリストアップする。

○大東の自宅（早朝）

海が大東の家を見上げる。

海「ここがヤツの住んでいるところか…」

海は隠れている。

大東が家を出て、海は後を付ける。

大東が「毎朝新聞　米子支局」のビル
に入っていく。

海「…」

○毎朝新聞 米子支局（その日の夜）

海はサングラスにマスク目差し帽、手袋で、パンを隠して、米子支局に入っていく。

海は、階段を登って、支局にたどり着く。

海は支局のドアの窓から部屋の中を見る。

居るのは大東一人。

海はドアをノックする。

海「すいません、こちらに大東さんという方はいらっしゃいますか？」

大東「はい。私が大東ですが…、何かご用ですか？」

海「…ええ、…おお有りですよ…」

大東「？」

海は大東がドアを開けようとしたところをバーンと開けて、大東に飛び掛かり、床に仰向けにさせる。

大東は抵抗するが、海が抑える。

大東「な、何をするんですか!？」

海はペンを取り出し、握って振り上げる。

海、語りかけるように、

海「…あなたに、一文字の間違いというものが、どれだけ人の人生を狂わすのか…、教えてあげますよ！」

海は大東の胸を一突きする。

大東「ぐぁー！」

大東は絶命する。

海は、はぁはぁと息をする。

海は「ペンは剣より強し Blue

Crasher」のメッセージカードを大東の上におく。

海は部屋を後にする。

× × ×

鹿野勉が支局に戻ってくる。

支局のドアが開いている。

鹿野「？」

鹿野は支局に入る。

鹿野「戻ったぞ、大東。……まったく夜遅くのネ
夕取りも大変だよ」

鹿野は大東が倒れているところを見つ
ける。

大東の体を揺らしながら、

鹿野「おい！ 大東!? どうした！ しま
りしろ！」

鹿野はメッセージカードを見る。

鹿野は怒りに震える。

鹿野は大東の胸に刺さったペンを見
て、鹿野は再び、怒りに震える。

○ホール（社葬）（昼）

読経が流れる中、参列者が焼香してい
く。

鹿野の番になり、大東の遺影を見上げ
た後、焼香して、お辞儀をする。

頭を上げている時に、現在（2025
年）の白髪の鹿野とオーバーラップ。

○現在（2025年）・大東の献花台（昼）

白いテントの下に、簡素な大東の献花台。

大東の遺影があり、周りに花が飾られている。その前の机にも花が手向けられている。

鹿野と京田剛志が献花台の前。

鹿野は喪服。

京田「鹿野さん…、もう、40年近く前になるんですね…」

鹿野「京田、記者が曖昧な事を言うな。38

年だ」

京田「すみません…」

京田「ところで、鹿野さんはこの日だけは、きちんとした服なんですね」

鹿野「ああ。こいつが見たら、『外回りするのに、その格好はなんだ？』ってどやされそうだな…」

京田「結局、逮捕状も出なかったから指名手配にもならず、時効…、なんですよね」

鹿野「そうだ。15年だった時効が、25年になって、今では廃止されてるがな」

京田「後、1年遅かったら……」

鹿野「バカ言うな。100年遅くても、早いくらいだ」

京田「……」

京田「鹿野さんは、この事件の特別取材チームにいたんですよね？」

鹿野「ああ。オレの同僚だったし、なりより第一発見者だったからな」

京田「大変だったんですか？」

鹿野「大変だったよ」

京田「ずっと、事件を追っていたからですか？」

鹿野「……それは少し違う」

京田「？」

鹿野「京田。お前、記者ってのは、何をする人間が分かっているか？」

京田「もちろんです。取材をして、それを記事にする人間です。当たり前じゃないです」

か」

鹿野「その通りだ。でも、このチームでは、その当たり前が出来なかったんだ」

京田「どういうことですか？」

鹿野「この事件は、大東個人をターゲットにしたものなのか、それともウチの会社をターゲットにしたものか、分からなかったからだ」

京田「当時の紙面を見たことありますが、そうみたいです。それが？」

鹿野「普通なら、警察が事件を捜査する。そして、オレたちは警察に取材して、それを記事にする。：だが、もし会社をターゲットにしたものとしたら、オレたちは警察に捜査される側であり、かつ、警察を取材する側にもなる。つまり、両方の立場になる」

京田「確かに：」

鹿野「だが、マスコミは『情報源の秘匿』を守るが大前提だ。だからウチの取材で

得られた情報を警察に渡す場合にも、当然
それが必要になる。その匙加減が難しかっ
たんだよ」

京田「社内でそんな事があったんですね：」

鹿野「ああ。こういう場合、オレたちの調べ
たことは証拠にもなり得るから、表に出す
ことには慎重にならざるを得ない。つま
り、記者として取材をしても、記事を書け
ないこともあったってことだ」

京田「それが、『違う大変さ』、だったと？」

鹿野「ああ。：大変というよりジレンマだ
な。記者としての：」

少し、間。

鹿野「ところで京田。この事件の初報を読ん
で、何か感じなかったか？」

京田「そう：、ですね、なんか曖昧だった気
がします。凶器は『鋭利なもの』だけでし
たし、犯人は『ブルー・クラッシャー』と
しか書いてなくて、どういう形でそれが分
かったのかとか。普通そういうのは、記事

になるんじゃないかと思うのですが……」

鹿野「そうだ。そういうところが記事に出来なかったってことなんだよ」

京田「……」

鹿野「……凶器はペンだった。それで胸を一突きだ」

京田「……」

鹿野「……そして、『ブルー・クラッシャー』は、現場で見つかったメッセージカードに書いてあった」

京田「……」

鹿野「……そして、メッセージカードには、こうも書かれてあった」

鹿野は語気を強めて、

鹿野「……『ペンは剣よりも強し』ってな」

京田「……」

鹿野「これは、オレたちに対する侮辱以外の何ものでもない。嘲笑以外の何者でもない。挑戦だ。その時、オレは怒髪天の意味が初めて分かったよ……」

京田「…まだ、その取材チームがありますよね？」

鹿野「ああ。オレはチームから離れているし、もうすぐ定年だ。だが、この事件の真相を明らかにすることは、大東への弔いだ。そして、暴力で言論の自由を攻撃する輩への鉄槌だ。必ず真実を暴いて見せる」

京田「…」

鹿野と京田は献花台を後にする。

○ 献花台（同日）

鹿野と京田が献花台から去った後、掃除のおじさん（海）とおばちゃんがバケツとモップを持って、掃除にやってきた。

大東の遺影を見る海。

海 M「…あんた…、幸せか？」

海は、目を伏せながら、

海「ふっ…、殺されて幸せな訳ないよな…」

海 M「…でも、毎年こうして、あんたを思い

出して、手を合わせてくれる人がたくさん
いる……」

海 M「多分……、これからもずっとそうなん
だろうな……。例え、100年経っても……」

海 M「……そして……、あんたが殺された、その
ことだけが残っていく……」

海 M「あんたが犯した……、小さなミスのこと
は忘れ去られてな……」

少し。間。

海 M「……あんた、記者なんだよな。取材し
て、ペンで記事を書く……」

海 M「オレも、昔はペンを使ってたよ……」

海 M「……一度だけ……、違う持ち方をしたけど
な……」

少し。間。

海 M「今は、誰でもペンが持てるようになって
た……」

海 M「時々、画面に向かってペンを使ってる
ヤツらを見るよ。オレの一度だけの持ち方
と同じ……、でも見えないペンをな……」

海 M「：そういうのを知らないで済んだのは、良かったのかも知れないな：」

少し、間。

海 M「：なあ：、これはあんたが望んだことなのか？」

海 M「こうやって：、何かの象徴になるってことが：」

海 M「もし：、今、犯人が見つかったら：、あんたの仲間たちは、どうするんだろうな：」

海は大東の遺影を見ながら、しばし佇む。

後ろから、

おばちゃん（声）「青葉（あおば）ちゃん、何、ぼおっとしてるんだい？ 早く掃除に行かない、日が暮れちゃうよ」

海は、おばちゃんの方を振り返る。

海「おばちゃん、また名前間違えてますよ。私は、青い葉っぱと書いて『あおは』、下の名前は『海（うみ）』と書いて『かい』。

フィクション劇場 第十八話「忘却」

『あおは・かい』ですよ。

おばちゃん「はいはい。じゃあ海（うみ）ち

ゃんいくよ」

海「もう…、ちゃんと覚えて下さいよ…」

海は大東の遺影を横目で見て、おばち

ゃんの方に向かっていく。

E
N
D

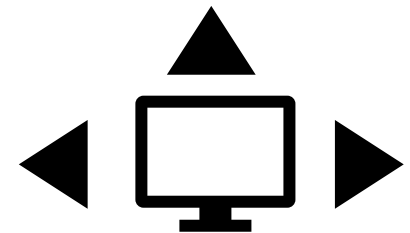
（2025年6月15日 初出）

（2025年11月21日 加筆・修正）



「因果
応報」
フィク
ション
劇場
第十九
話

大太
大



【登場人物】

東郷 十三（とうこう・じゅうぞう）（72）

：東郷グループ会長。企業団体連合会（企
団連）会長

東郷 恒夫（とうこう・つねお）（43）：十

三の息子（名前のみ）

青葉 陸（あおは・りく）（63）：東郷の顧

問弁護士。第18話の青葉海のいとこ

石崎（いしざき）（30）：大日本テレビ記

者

小野（おの）（31）：毎朝新聞記者

福島（ふくしま）（36）：日本社会新聞記

者

滑川（なめかわ）（41）：アルプステレビ

記者

井出（いで）（67）：与党幹事長

杜若（かきつばた）（63）：日本新聞連合
会会長

フィクション劇場 第十九話「因果応報」

国会委員長

広川 あかり（ひろかわ・あかり）（40）：

国会議員（与党）

遠野 清美（とうの・きよみ）（48）：国会

議員（野党）

暴漢（男）

キャスター

【あらすじ】

企業団体連合会の会長に就任した東郷十三は、経営者ファーストを掲げて与党への献金を積極的に行い、世の中の先行き不安払拭を目指すと宣言する。同時に、息子の恒夫の裁判に係るマスコミの報道に立腹している。

そこで、東郷は青葉陸（第18話の青葉海のいとこ）を顧問弁護士に雇い、献金の中止をチラつかせて、誤報の場合に報道時と同等の紙面を謝罪に割く「報道名誉回復措置法」を与党の議員立法として国会に提出させる。

青葉は法案審議に対して、自分と日本新聞連合会長の杜若の参考人招致を働きかける。出席した青葉は、あくまで誤報に限ることを強調すると共に、誤報は「不祥事」であり、一般企業ならマスコミはそれを追及するのに、自分達にはしていないと主張する。

結局、法案が廃案の可能性が高くなる。そして、青葉は自由を謳う暴漢に刺され、自分がどう報道されるかを思い、命を落とす。

○ホール（東郷の企団連会長就任記者会見）
（昼）

司会「それでは、只今より、企業団体連合会の東郷十三新会長の就任記者会見を始めます」

司会「それでは、東郷会長から一言お願い致します」

東郷は壇上に立つ。

東郷「この度、企団連の会長に就任した東郷だ」

東郷「私が会長としてやりたいことはただ一つ……」

東郷は指を立てて、前に出す。

東郷「『経営者ファースト』だ」

東郷「最近、国会で大企業が、大企業が、と、まるで大企業が悪の権化であるかのような発言を耳にするが、これについては非常に腹立たしく思っている」

東郷「確かに、今は大企業だが、最初は身内や知り合いの数人で始めて、大きくなった

会社がほとんどだ。つまり、最初から従業員が1万人、2万人居て、左うちわのような会社などないのだ」

東郷「そこまで会社を大きくするために、経営者がどれだけの労力を使ったのか。そして、リスクを取って投資し、事業を広げていったのか。どれだけ苦渋の決断をして頭を下げたのか。それが想像出来ていないのではないか」

東郷「企団連には、同業他社もいるし、海外の競争相手もいる。その中で、よりよいものを、安価でカスタマーに届けるために日夜努力している。決算を見ても、利益が数%の会社が多い」

東郷は両手を広げて、

東郷「なのに、どこかの新聞は週一回発行で月990円も取るんだぞ!? 利益率は何%なんだ? 競争相手だっていない。ぼったくりじゃないか!」

東郷、両手を戻す。

東郷「あと、槍玉に上がるのが内部留保だ。

企業の内部留保は政府の統計では600兆円だ。だが、資本金10億円以上の、いわゆる大企業の内部留保は半分の300兆円だ。なのに、さっきの新聞は600兆円全てが大企業のものだと言っている」

東郷は会場を指差す。

東郷「大嘘だ！」

東郷が両手を広げる。

東郷「フェイクニュースだ！ 資料を見れば一発だ！」

東郷は会場を指差しながら、

東郷「それに、借金がある会社もある。特に、インフラ系の通信・電力・鉄道だ。ウチには入っていないが、大赤字のところもある。君らも車や家をローンで買うだろう？ それと似たようなものだ。貯金がなければ心配だろう？」

東郷は指を戻す。

東郷「借金して大きな買収をして、利益を低

く見せて、税金逃れをしているなんて言われているところもあるが、それぞれの会社の戦略だ。外野がとやかくいう話ではない！」

東郷「そういうところを無視して、600兆円という数字だけが一人歩きしていないか？　それで内部留保に今より高い税金をかけられて、会社が傾くようなことがあったらどうするんだ？　誰が責任を取るんだ？　誰が社員の面倒を見るんだ？　国会議員か？　マスコミか？」

東郷は指を立てて、前に出しながら、

東郷「…経営者だろう？」

東郷「しかも業績が悪くなれば、経済評論家だとか言ってるヤツらが、経営の失敗だの、こうすれば良かっただのと、責任のない後付けコメントをドヤ顔で解説するだろう？」

東郷「そういうことがないように経営者には経営に専念してもらいたい。だから、経営者ファーストなんだ」

東郷「そもそも、何で企業が内部留保
思っているんだ？ 個人の貯蓄が2000
兆円あるのは何故なんだ？ 世の中の先行
きに不安があるからだろう？ それは企業
でも個人でも同じことじゃないか」

東郷「不安を払拭するには、政治の安定が必
要だ。だから、これからは与党に積極的に
献金していくつもりだ。もちろんパティ
ー券も買う。以上だ」

○同 質疑応答

司会「東郷会長ありがとうございます。そ
れでは質疑応答に入ります。ご質問のある
方は挙手して、所属と氏名を言ってからご
質問をお願いします」

数人が手を挙げる。

司会「では、そのグレーの背広の方、どうぞ」
石崎「大日本テレビの石崎と申します。東郷
会長は先ほど、与党に積極的に献金すると
おっしゃりましたが、具体的な額はどのく

らいを考えておられますか？　もう一つ、この献金について、企団連の会員への働きかけはどうするおつもりですか？」

東郷「はっきりした額は言えんが、100億以上は確保する。資本金で出せる額の上限までお願いするつもりだ。もちろん細かく分けて名前を出さないようにするような、セコい真似はしない。正々堂々と出す。東郷グループはもちろん、会員にも強く働きかけるつもりだ」

司会「では、次に、そちらの紺の服の方、どうぞ」

滑川「アルプステレビの滑川と申します。企業献金は自身の会社への利益誘導ではないかという疑問が付きまいますが、これについてはどうお考えでしょうか？」

東郷「それはない。さっきも言ったように、献金の目的は、世の中の先行き不安を払拭するためのものだ。特定の業種や企業の利益ではなく、世の中全体に資するものだ。

もちろん、みなさんのためでもある。全く問題ない」

司会「では、はい、どうぞ」

福島「日本社会新聞の福島です。現在は各政党には政党助成金が交付されています。会長がおっしゃった世の中の不安を払拭するのであれば、国会をきちんと機能させるべく、野党にもそれなりの献金をしてもらいたい。かと思うのですが、ご見解をお聞かせ下さい」

東郷「まず、野党への献金だが、そちらも知っている通り、党として企業献金を禁止しているところがある。そういうところには、もちろん出せない」

東郷「もう一つの政党助成金についてだが、私は、あれは公平な制度ではないと考えている」

福島「どういうことでしょうか？」

東郷「助成金の分配方法だ」

東郷「政党助成金は文字通り政党に交付する

訳だから、政党要件を満たす必要がある。
君たちマスコミがよく報じている『国会議員5人以上』が世間では有名だが、もう一つあることは当然知っているだろう？ 詳しいことは省くが、対象となる選挙で2%以上の得票があれば、政党とみなされ、政党助成金の対象になる」

東郷「：そこまでは、まあいい。問題はその後だ」

東郷「政党助成金の半分は議員の頭数での分配だ。これも問題ない。だが、残り半分は過去の国政選挙の得票率で決まるだろう？」

東郷「これを計算すれば、与党が一人当たり45000万に対して、公党で『男が産めるのは大便だけ』とかいう、下品なデモに参加したヤツは一人で2億8000万もらえるんだぞ。こんなバカな制度があるか！」

東郷「だから、与党だけに献金するのは、何の問題もない！」

司会「それでは、はい、どうぞ」

小野「毎朝新聞の小野と申します。来週、息子の恒夫さんの裁判の判決が出ますが……」

東郷は話を遮る。

東郷「また、その話か!? 毎朝見るのは新聞じゃなくて、天気予報でいい! これくらいのことでは最高裁まで行くななんて馬鹿げてる! もちろん無罪に決まっとる! 気分が悪い。これで終わりにする!」

東郷は、ツカツカと早足で舞台を去る。

司会「……で、では、今日の記者会見はこれで終了致します」

記者は三々五々席を立てて帰る。

石崎「大演説だったな……」

滑川「ああ。さすが『日本のトランプ』って言われるだけのことはある」

○与党本部 玄関（昼）

与党本部外観。

幹事長の井出が与党本部の玄関で立つ

ている。

そこに、黒塗りのセンチュリーが横付けする。

後部座席から東郷が降りてくる。

井出は頭を下げる。

井出「会長、わざわざお越し頂いて恐縮です。

いつも時間通りですね」

東郷「ワシも忙しいからな。しかし、あんたもワシを呼べるようになったか……。偉くなつたもんだ」

井出「そう言わないで下さい、会長。国会が始まる前で身動きが取れないんですよ。ささ、お入り下さい」

井出が手を出して、エスコートする。

○同 応接室（昼）

応接室に二人で座っている。

東郷「じゃあ、要件を聞こうか」

井出「はい。献金の使い道についてなんですが……」

東郷が井出の話を遮る。

東郷「使い道は任せると言ったはずだぞ？
世の中の不安を払拭するためなら何に使って
もいいと。そもそもこちらからお願いし
たら、利益誘導になってしまいうだろう？」

井出「はい。では、申し上げますが、本部が
老朽化しておりまして……」

東郷は井出の話を遮る。

東郷「回りくどい言い方はやめてくれ。要点
だけ頼む」

井出「はい。本部の建て替えに優先的に使
いたいと考えておりますが、いかがでしょう
か？」

東郷「……まあ、悪くはないんじゃないか。快
適に仕事が出来るとなれば、いいアイ
デアも出てくるだろう」

井出「ありがとうございます。ただ、そう
なりますと最初に少々費用がかかりまして……」

東郷「金のことなら心配いらん！　すでに1
00億以上は集まる予定だ。ただ、各々社

内での手続きがいる。だから、先に振り込むことは出来ない。すまないが、初期費用はそちらで持ってくれ」

井出「かしこまりました」

東郷「他には？」

井出「はい。党内に『未来創造本部』を設置して、専任の本部長と職員を配置し、今後の日本の在り方を検討したいと考えております。党内の関連する議員連盟や勉強会、もちろん政府とも連携しながら。必要な法案があれば、提出するつもりです。どうでしょうか？」

東郷「やってみていいんじゃないか。ただ、一つだけ言わせてもらえば、『創造』は付け足すだけではないことを承知しておいてくれ。付け足して行けば予算が膨らんで、余計不安を与えるだけだ。法律や制度を2つ3つ潰してもいい覚悟で頼む。もちろん自分たちに不利になることもだ。そこで官僚と揉めることもあるだろう。その時は、こ

ういうことをしても良いんだ、ということ
を教えてやってくれ。何なら、私から各省
庁のOBに働きかけてもいい。官僚も人間
だ。情も必要だ」

井出「かしこまりました」

○ホール（１ヶ月後の定例会見）（昼）

にこにこしながら登壇する東郷。

司会「それでは月例の…」

東郷が、手で司会を制する。

東郷「こちらからの内容はレジュメの通りだ。

（手を広げて）さあ、質疑応答に入ろう！」

× × ×

にこにこして質問に答える東郷。

× × ×

普通の表情で質問に答える東郷。

× × ×

イラついた表情で質問に答える東郷。

× × ×

司会「それでは、質問もないようですので…」

東郷が、手で司会を制する。

東郷「ちよつと待て。お前たち私の息子のことを聞かないのか？ 無罪になったんだぞ？ 毎朝新聞の小野とかいうのが居たな。どうなんだ？」

小野「東郷会長、その件はもう終わった話ですから、取り立ててお聞きすることはないかと……」

東郷「なんだと!? お前のところは判決が出るまで、ウチの息子が罪を犯したかのような記事を散々書いてたじゃないか！」

小野「い、いえ、会長。私どもはあくまで『疑惑』という形での報道でしたので……」

東郷「じゃあ、何か？ 『疑惑』と付けば何でもありなのか？ 『疑惑』なんてもやっとした話なのに、その裏付けはどこで取って報道してるんだ？ そもそも、事実かどうか分からない話をなぜ載せるんだ？ お前んとこの政治部は９段階のファクトチェックをしてるんだろう!? 息子の話は何

段目なんだ？ 君たちは新聞社じゃないか？ ゴシップ週刊誌と同じようなことをしてもいいのか!？」

東郷、ヒートアップ。

東郷「それに、社説で『今後はこういう疑念を持たれないように行動して欲しい』だと？ まるで自分たちのこれまでの記事が、息子に騙されて書かされてたような言い方じゃないか！ こっちに説教するつもりか！ そんなに最高裁の判決が気に入らないのか！」

小野「い、いえ。そういう訳では……」

東郷、少しくールダウンして上から視線で、

東郷「まあ……、君たちは、最高裁の決定にこねたことがあるから、当然か……。それで持つて民主主義がどうのこうの言ってたな……」

東郷、再びヒートアップ。

東郷「司法の！ それも最高裁の判断にこねていて何が民主主義だ！ 自分たちの都合

よく、その言葉を使うんじゃない！」

東郷「そっちがその気なら、こっちにも考えがある！ 目にもの見せてくれるわ！」

東郷は大きな足音を立てて、会場を去る。

○東郷の自宅（昼）

応接スペースに、弁護士の青葉 陸が座っている。

そこに、東郷と東郷の秘書がバインダーを持って入ってくる。

青葉が立ち上がる。

東郷「まあ、座ってくれ」

青葉「はい。失礼します」

東郷は座って秘書からバインダーを受け取り、開く。

東郷「青葉 陸くんか……」

青葉「はい」

東郷「君をウチの顧問弁護士の一人にした理由は……分かってるな？」

青葉「承知しています」

東郷「…で、行けそうなのか？」

青葉「今回のご子息のようなケースは難しい
と考えています」

東郷「詳しく説明してくれ」

青葉「はい。このケースだと二つの関門があります。名誉を毀損したのかどうか、それと毀損したことに對する回復措置の程度です。前者が民法709条、後者が同じく723条を根拠としています」

東郷「具体的には、どの辺が難しいのかね？」

青葉「はい。民法703条に抵触するかどうかで一番争点になるのは『真実相当性』だ
と思います」

東郷「よく、週刊誌とかが主張するヤツか？」

青葉「おっしゃる通りです。取材を尽くした
上での報道は名誉毀損には該当しない、
という点です」

東郷「だが、はっきりするまで取材するとい
うのは、週刊誌でも新聞でも同じだと思う

が？」

青葉「そうです。しかし、100%の事実だけを報じる、となると難しいのです。極端な例ですが『何々はない』と報じることができなくなります。それは報道機関が許さないでしょう」

東郷「いわゆる『悪魔の証明』ってヤツだな？」

青葉「はい」

東郷「なるほどな……。で、もう一つの方は？」

青葉「はい。回復措置としては、謝罪広告などが一般的ですが、判決で認められることは少ないです。損害賠償も認められてはいませんが、個人的には少額だと感じています」

東郷「それはなぜかね？」

青葉「毀損された名誉の度合いの認定が厳しいためです」

東郷「…大体のことは分かった。…で、君の作戦は？ 私のマスコミへの不満を解消してくれるものと期待しているが…」

青葉「はい。まず、マスコミの誤報に絞ります」

す」

東郷「しかし、さっき君は真実相当性とかで難しいと言ってたんじゃないのかね？」

青葉「誤報と言っても、誤植や数字の間違いなどです。民法703条には『故意又は過失』とあります。これらは明らかに『過失』ですから、その点のハードルは低くなると考えています」

東郷「なるほどな。じゃあ、名誉回復についてはどうなんだ？」

青葉「はい、先ほどお話ししたように、民法723条を適用しようとしても、判例で大きな回復が見込めません。ですので、新聞・雑誌・放送などの、いわゆるマスメディアは発信力・影響力が強く、既存の民法での判例では名誉回復が著しく不利かつ困難であるため、措置法で別途定める、という主張で行こうと考えています」

東郷「…私の不満解消というよりは、君のい
とこの敵討ちのようだな…。まあ、その点

も含めて君を雇ったんだが……」

青葉「会長のご意見は否定しません。今の状況は一般人に対して明らかに不利だと考えています。それに対して問題提起できるのであれば、私は会長であっても利用します」

青葉は東郷を見つめる。

東郷「……いい覚悟だ。気に入ったよ」

青葉「しかし、法案成立の可能性は低いことだけはご承知下さい」

東郷「分かった。だが、おおごとになる。それも承知の上だな？」

青葉「覚悟しています。こういう結果になっても……」

東郷「よし。それでは、進めてくれ」

青葉「かしこまりました」

○与党本部・幹事長室（昼）

井出と青葉が座っている。

井出「献金が難しいというのですか？」

青葉「はい。私が献金予定の企団連会員に問

い合わせた結果です。ほとんどの企業が出
せないと言っています」

井出「東郷会長はこのことを……」

青葉「承知しています」

井出「しかし……本部の建て替えの段取りは
既に始まっていて、費用も……」

青葉「それも承知しています」

井出「東郷会長は何と？」

青葉「井出さんに、一つお願いがあると。も
ちろん、世の中の先行き不安を払拭するた
めをお願いします」

井出「き、聞かせて下さい」

×

×

×

井出「え？ 青葉さん、本気ですか!? それ
は無理です。党内でもまとめきれません。
以前、私たちが下野している時にもそのよ
うな話がありました。が、実現していません」
青葉「井出さん、それは承知しています。し
かし、今回は明らかに間違っているものに
対する措置法ですから」

井出「し…、しかし…」

青葉「それに、井出さんもお承知のように、この法案には予算が伴いません。ですので、衆議院の議員さん20名以上で議員立法として提出できます」

井出「…確かに、それは…、そうですが…」

青葉「井出さん。この法案を通すことは難しいでしょう。それは、私も会長も同じ認識です。ですが、このまま放置していい問題ではありません。間違いがあれば正して相応の措置を取る、普通のことを実現したいだけなのです。法案が出ることで自体に意味があるのです」

井出「…」

青葉「ご協力頂けませんでしょうか？」

井出、悩む。

井出「…分かりました。法案成立が必須ではないのでしたら、何とかなるかも知れませんが…」

青葉「それで結構です。それと、この件は相

当な反発が予想されます。ですので、法案審議の際に、参考人招致をお願いしたいのですが」

井出「どなたになるのでしょうか？」

青葉「この件は、東郷会長が推し進めていますが、会長はそれを隠すことはしないと話しておられます。ただ、受け答えが専門的になるかと思えますので、東郷会長の名代として、私を参考人として出席させて下さい」

井出「青葉さん一人ですか？」

青葉「いえ。あと、日本新聞連合会の杜若（かきつばた）会長にもお願いしたい」

井出「賛成反対の両方の意見を聞くという形ですね？」

青葉「はい。向こうはこの法案には反対でしょうから、そうなるかと思えます」

井出「しかし、参考人招致での出席はあくまで任意です。もちろん委員長から出席の要請はしますが、実際に出るかどうかは保障

は出来ませんが…」

青葉「承知しています。あちらの人たちは発信はする割に、公の場に出たがらないでしようから。ただ、杜若さんには『出席されないのであれば、好きに言わせてもらいますよ』とお伝え下さい。議事録も残りますし」

井出「分かりました。…で、カメラはどうしますか？」

青葉「私はかまいません。どこかのテレビ局のように紙芝居みたいなマネはしません。

オープンでやらせて下さい」

井出「分かりました。早速協議してみます」

青葉「よろしくお願いします」

ＯＴＶニュース（昼）

キャスター「次の通常国会で、マスコミの誤った報道によって、名誉を傷つけられた方や団体に対し、過去に行った当該報道と同等の紙面や放送時間を当事者の名誉回復に

充てることを柱とする『報道名誉回復措置法』が与党議員から議員立法として提出されることが明らかになりました。与党・井出幹事長の話です」

数人の記者がマイクやレコーダーを向けている。

井出「憲法で報道の自由が保障されていることはもちろん承知しています。ですが、マスコミは第四の権力とも呼ばれているのもまた事実です。信頼性の高いマスコミに過ちがあったとすれば、当然、当事者への影響が大きいですし、裁判となれば個人や団体で争うことは困難を伴います。裁判費用もかかりますし、勝ったとしても損害賠償金は微々たるものです」

井出「最近ではSNSでのデマや誹謗中傷が問題視されていますが、裏を返せばマスコミが発信する情報に誤りがあれば、それが即座に拡散されることを意味します。それも信用性の高い情報として、です」

井出「ただ、この法案の審議は報道の自由と照らし合わせて慎重に行わなければならないことは、私たちも承知しています。よってしかるべき方を参考人招致して、お話を伺いしたいと考えております」

○東郷グループ本社（昼）

東郷の車が玄関に横付けする。

東郷が車を降りる。

マスコミがマイクヤーレコーダーを出して殺到して、周りを取り囲む。

東郷は振り返る。

東郷「ワシの後に立つな！」

後に居た記者は前にまわる。

石崎「東郷会長が、今度の報道名誉回復措置法を主導したと言うのは本当ですか？」

東郷「ああ、本当だ」

石崎「与党への献金を盾にして、恐喝まがいのことをしたという話もありますか？」

東郷「君！ 恐喝というのは、脅して金品を

奪うことを言うのだろうか？ 私、何か与
党が持っているものを奪ったりしたかね？」

東郷「献金についてももう一つ言っておくが、
まだ献金は渡していない。つまりこちらか
ら献金を送って今回の件の便宜を図ってく
れとお願いした訳ではないのだ。君たちも
記者なら言葉の意味くらい覚えてきたまえ」

○国会予算委員会…杜若（午前中）

委員長席。

委員長「以上をもちまして、杜若参考人に対
する尋問は一応終了いたしました。午後1
時より再開することといたし、この際、暫
時休憩いたします」

議員は三々五々、委員会室を出ていく。

× × ×

青葉は控室で立ち上がる。

青葉「…」

○国会予算委員会…青葉（同日…午後）

青葉は答弁席に座っている。

委員長「これより会議を始めます。それでは、まず青葉参考人お願い致します」

青葉は立ち上がる。

青葉「東郷グループの顧問弁護士をしており、まず、青葉陸と申します。今回、このような機会を与えていただき、本当にありがとうございます」

青葉「本日、私がお話しさせていただきましたのは、本案の趣旨および目的でございます」

青葉「議員の先生方には従来よりご承知の通り、現在は、インターネットの発展により、大小・多種多様な情報発信が可能となっております。これが今まで容易に獲得出来なかった、例えば過去の貴重な映像であったり、さまざまな専門的な知識などの情報に接することができるようになったのは周知の事実かと思えます」

青葉「しかし、その中で虚偽の情報や誹謗中傷が問題になっていることもまだ事実であ

ります。その点に付きましては、プロバイダ責任制限法などの施策がなされております」

青葉「しかし、このような世の中にあっても、信頼性が高い情報は、やはり新聞・テレビに代表される、いわゆるマスメディアの情報であると認識しております」

青葉「従いまして、これらのマスメディアに仮に誤報があったとすれば、その影響力は大きいため、当事者に対する名誉回復も相応のものにすることが妥当であると考えております」

青葉「しかし、現在の民法の元での判例では、損害賠償が認められることまでは至るものの、名誉回復まで至るケースは少ないのが現状です」

青葉「ですので、社会的な影響力がある者には社会的な責任が伴う、ある意味ノブレス・オブリージュ的な観点から本法案を議員立法として提出をして頂いた次第です。以上

でございます」

青葉は座る。

委員長「青葉参考人ありがとうございます。
これより参考人に対する質疑に入ります。
質疑の申出がありますので、順次これを許
します。広川あかり君」

○同 広川の質問

広川は紙の資料を持ちながら、（以
下、同様）

広川「青葉参考人、本日は、お越し頂きあり
がとうございます。午前中にありました杜
若参考人の証言に基づきまして、いくつか
ご質問申し上げます」

広川「まず、杜若参考人より、本法案は報道
の自由を萎縮させるものであるとの証言が
ありましたが、この点についてどのように
お考えでしょうか？」

青葉が手を挙げる。

委員長「青葉参考人」

青葉「それは、逆説的に言えば『誤報を容認しなければ、報道の自由が担保できない』、と受け止められます。あくまで、本法案は名誉毀損や人権侵害のような、判断が難しいものではなく、明らかな誤報のみに限定されており、信頼性が高いことを自負しておられるマスメディアが、誤報があることを前提としなければ成り立たないというのはいかなるものかと思います」

広川が手を挙げる。

委員長「広川くん」

広川「しかし、誤植などのミスは発生する可能性はゼロではありません。そのような場合も対象となるとお考えですか？」

青葉は手を挙げる。

委員長「青葉参考人」

青葉「はい。そういう認識でございます。この法案の根拠とする民法703条では『故意又は過失』とあります。当然、どのような過失も対象となると考えております」

広川は手を挙げる。

委員長「広川くん」

広川「杜若参考人は、誤植も含め、訂正とお詫びはしているので、それで十分ではないかと発言していますが、その点はいかがお考えでしょうか？」

青葉は手を挙げる。

委員長「青葉参考人」

青葉「一部の新聞には『名前と数は即訂正』という不文律があると聞いております。ただ、新聞は日刊なら次の号が出るまで24時間かかります。その間にSNS等で『新聞がこう言っている』という誤報が流布した場合に、誰が責任を取るのでしょうか？加えて、杜若参考人が十分対応していると述べているようですが、誰が十分だと判断しているのでしょうか？少なくとも誤報をされた側が十分だと判断しているとは思えません」

広川が手を挙げる。

委員長「広川くん」

広川「杜若参考人は、SNSに関しては新聞社の業務の範疇ではないので、その責任を考慮する必要がないと証言していますが、その点はいかがでしょうか？」

青葉は手を挙げる。

委員長「青葉参考人」

青葉「確かに、今回提出された法案はSNSには言及しておりません。ただ、新聞は2000年に制定された『新聞倫理綱領』の人権の尊重の項目で『新聞は人間の尊厳に最高の敬意を払う』と謳っております。その後の文で『報道を誤ったときはすみやかに訂正し、』とあります。本法案は、この『最高の敬意を払う』という部分が不足しているのではないか、との趣旨で提出されたものです。よって、SNSについても、誤報が原因で引き起こされた事案であれば、先ほどの『最高の敬意を払う』ことに鑑みて、その道義的な責任は免れないと思いま

す」

広川「これで質問を終わります」

○同 遠野の質問

委員長「引き続き、質疑を行います」

遠野が手を挙げる。

委員長「遠野清美君」

遠野は、紙の資料を持ちながら、立つて（以下、同様）

遠野「遠野でございます。早速ですが、ご質問させていただきます」

遠野「先ほど杜若参考人は、訂正について、同等の紙面を確保するのは現実的ではないとの発言をされていましたが、今までの全ての訂正についてそうなのででしょうか？」

青葉が手を挙げる。

委員長「青葉参考人」

青葉「いえ、同等ではありませんが、私から見て大きな紙面を使って、検証記事が掲載されたことがあります。『同等』がどの程度

になるかは、先生方にも判断が分かれるところだと思いますが、現実的ではないというのは当たらないと考えております」

遠野が手を挙げる。

委員長「遠野清美君」

遠野「もう一つ、杜若参考人が懸念を示していたのは、裁判が行われて結果として無罪になった場合、それまでの報道も対象となってしまうのではないか？　ということでした。この点についてのご意見をお聞かせ下さい」

青葉が手を挙げる。

委員長「青葉参考人」

青葉「私ども日本弁護士連盟は、1999年に『報道のあり方と報道被害の防止救済に関する決議』で、判決で有罪が確定するまでは原則匿名とすることを要望しております。つまり、推定無罪の原則に従って欲しいということです。ですので、これは報道の仕方の問題であると考えております」

遠野が手を挙げる。

委員長「遠野清美君」

遠野「繰り返しになりますが、誤植等のミスも対象になるとお考えですか？」

青葉が手を挙げる。

委員長「青葉参考人」

青葉「はい、対象になると考えております。私としましては、例え過失であつても、『不祥事』であると考えております。不祥事というのは、なにも法を犯すことだけではありません。例えば、ＡＴＭが使えなくなる、電車が人的・物的な被害なく止まってしまふ、と言ったものでしょうか。もし、一般の企業がそのような『不祥事』を起こせばどうなるでしょうか？ 新聞を始めとするマスメディアは、会見を開け、謝罪しろ、誰が起こした、責任者は誰だ、原因は何だ、対策はどうする、いつまでにやる？ 報告書はいつ出す？ と聞きますよね。しかし、メディアが『不祥事』を起こしても会見は

開かない、起こした人物は匿名、下手をすると報道もされない。国民の知る権利に奉仕するといふのであれば、奉仕される側の要求も聞く必要があるのではないでしょうか？ それを実現するための措置法とご認識下さい」

青葉「それに、先生は誤植と簡単におっしゃいましたが、誤植で人が死ぬこともあるのです。…ペンで…、人が死ぬことが…」

○東郷の部屋（昼・雨）

東郷「法案の方はどうかね？」

青葉「インターネット上では盛り上がっています。ただ、議員さんも表立って賛成すれば、それこそメディアに叩かれますから及び腰です。法案提出にご協力頂いた議員さんも曖昧な受け答えに終始しています。私としては継続審議でも…、と考えていたのですが、審議未了で廃案になりそうです」

東郷「そうか…。やむなしだな」

青葉「はい…。一矢報いたとは思いますが…」

東郷「分かった」

東郷は立ちあがろうとする。

青葉「あっ、会長。献金の方はどうされますか？」

東郷「この法案が通らなかったから出さないという訳にも行かんだろう。進めてくれ」

青葉「かしこまりました」

○東郷グループ前の歩道（昼・雨）

雨が降っている中、東郷グループのビルから青葉が出てくる。

東郷が傘を差して歩いている。

パーカーを着た暴漢が傘を差さずに正面から近寄って、正面に立つ。

青葉「？」

暴漢「あんたが、青葉ってヤツか？」

青葉「そうですが…、何か？」

暴漢はナイフで青葉の腹を刺す。

青葉「な、なにを…」

フィクション劇場 第十九話「因果応報」

暴漢「お前が死なねえと……」

暴漢はそのまま、もう一段深くナイフを刺す。

青葉「ぐはっ」

暴漢「……自由が死ぬんだよ」

暴漢はその場を走って立ち去る。

青葉はその場で倒れる。

青葉「……明日の……新聞が楽しみだ……」

青葉「私は……、見ることができないだろうか
な……」

雨が降っている。

E
N
D

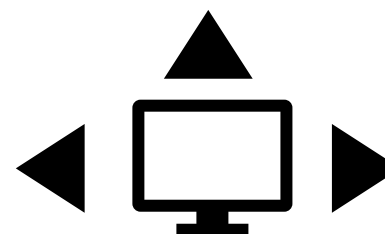
(2025年6月15日 初出)

(2025年11月21日 加筆・修正)



フィクション劇場 第二十話
「椅子取りゲーム」

大太
大



フィクション劇場 第二十話「椅子取りゲーム」

【登場人物】

村上 望（むらかみ・のぞみ）（48）…アル

プステレビ制作局長

二神 吉貴（ふたがみ・よしとか）（45）…

大日本テレビ制作局長。元アルプステレビ

プロデューサー

（アルプステレビ）

佐藤 幹夫（さとう・みきお）（62）…アル

プステレビ社長

坂本 昌幸（さかもと・まさゆき）（57）同

取締役兼編成本部長

水木 茂雄（みずぎ・しげお）（53）…同

報道局長

本田 浩史（ほんだ・ひろし）（55）…同

技術局長

森山 清（もりやま・きよし）（47）…同

編成局長

丹羽 武文（にわ・たけふみ）（38）…同

コンテンツ部長

フィクション劇場 第二十話「椅子取りゲーム」

阿部 俊光（あべ・としみつ）（45）：同
営業部長

渚 康二（なぎさ・こうじ）（45）：同 制
作局プロデューサー

長峰（ながみね）（50）：アルプステレビ
ワイドショー プロデューサー

宮原（みやはら）（61）：同 司会者

澤田（さわだ）（28）：同 アシスタント

菅野（すがの）（30）：人気俳優

菅野のマネージャー

萩村（はぎむら）（67）：大日本テレビ
社長

中村（なかむら）（65）：毎朝テレビ社長

二神の部下（大日本テレビプロデューサー）
坂本取締役の秘書

黒川 孝之（くろかわ・たかゆき）（26）

フィクション劇場 第二十話「椅子取りゲーム」

：大日本テレビ社員（窃盗）

本田 拓郎（ほんだ・たろう）（41）：

毎朝テレビ社員（スプレー）

キャスター 1

キャスター 2

キャスター 3

大日本テレビ取締役 数名

【あらすじ】

2034年、関連法案が改正され、在京キ
ー局5社の中で最低評価の局が教育テレビと
電波を共用することになる。参院選の行われ
る年に実施され、3年毎に見直しされる。評
価は5項目あり、有権者の投票も含まれる。
アルプステレビ制作局長の村上望と大日本
テレビ二神吉貴もライバルとして対峙する。
そんな中、各局が生き残りをかけ、有権者
の好印象を得るため、受験生に対する特番、
他の局員や自社の局員の不祥事の速報、不祥
事を起こした局の社長の謝罪会見、報道フロ
アの一般開放が行われ、村上也躍起になる。
結局、大日本テレビが落選。村上を飲み込
み、誘った二神は教育の番組のCM人気を見て、
番組が先か、スポンサーの意向が先なのか、
自分の番組制作の考え方への疑問を話す。
6年後、社長になった村上は、二神の言を
思い出し、年始挨拶で無理せず落ちたら自分
たちの仕事を見つめ直す機会になると話す。

○アルプステレビのホール 新年仕事始め

（朝）

舞台の後ろに「2034年度 新年仕

事始め」

演台には社長の佐藤幹夫。

佐藤「諸君！ 今年は法律が改正されてから
最初の参議院選挙の年だ。今のところ、ウ
チの調査では横一線。従って、この7月ま
でが勝負になる。とにかく、我々は生き残
らなくてはならない。利益は出なくてい
い。是が非でも局を死守する。キープ・
ザ・マイ・ウェーブだ！ いいな！」
全員「はい！」

○人気俳優 菅野の事務所（昼）

ソファーに俳優の菅野とマネージャー
が並びで座っている。

その向かいにアルプステレビ制作局長
の村上望と同プロデューサーの渚康二
が座っている。

村上「是非とも、4月期のドラマに菅野さんのお力が必要なんです。よろしくお願い致します」

× × ×

村上と渚は立ってお辞儀をして、事務所を出て、エレベーターで一階に降りる。

エレベーターのドアが開くと、前に二神吉貴と大日本テレビプロデューサーが居て、鉢合わせとなる。

お互いびっくり。

村上「何しに来た!? 二神」

二神「村上か。そりゃこっちのセリフだ」

村上「けっ」

村上と渚はエレベーターを降りる。

二神と大日本テレビのプロデューサーはエレベーターに乗る。

村上「あいつらも同じか…」

渚「村上さん、あの人はもしかして？」

村上「そうだ。大日本テレビの二神だ」

渚「制作局長：、でしたっけ？」

村上「ああ。表にはほとんど出てこない。そいつがここに来たってことは、向こうも本気だってことだ」

渚「でも、村上さんと仲が悪いようですが、何かあったんですか？」

村上「あるものにも、あいつは元々ウチに居たんだ」

渚「引き抜かれたってことですか？」

村上「そうだ。会社に育ててもらった恩を忘れてな」

村上「それより、今から戻って作戦会議だ」

渚「はい」

村上と渚は足早に去っていく。

○アルプステレビ社内 応接室（昼）

局長会議（報道局長、制作部長、技術部長、編成局長、コンテンツ部長、営業部長）

各々、ソファーに座っている。お誕生

日席は取締役の坂本。

Ｔ『取締役兼編成本部長 坂本 昌幸』

坂本「みんな揃っているな。それでは、局長
会議を始めろ」

Ｔ『同 編成局長 森山・清』

森山「しかし、坂本さん。けったいな法律が
出来ましたね。在京キー局５社の内、一つ
が教育と同じチャンネルと一緒に放送しろ
というのは。それも参議院選挙がある３年
ごとの見直しで。今までの免許の更新は５
年ごとでシャンシャンだったのに：」

坂本「お上の言うことだから、仕方ない。こ
ちらは首根っこを握られてるんだ」

Ｔ『同 制作局長 村上 望』

村上「しかし、落ちればウチの番組制作数は
確実に減ります。そうなれば、当然、系列
局にもしわ寄せが行きます。プレッシャー
が半端ないですよ」

坂本「お題目としては、放送局間の競争原理
の促進、電波の有効利用、国営放送ＪＢＡ

の番組制作費の負担軽減と受信料の引き下げ、の一石三鳥って形だからな。教育は受信料がなくても見られるようになるし」

Ｔ『同 報道局長 水木 茂雄』

水木「まったく、石を投げられる方は、たまったもんじゃありませんよ。今まで業界で平和にやって来たのに……。声が大きいだけの民意とか、変えればいいだけの改革とか、そういうのに左右されないのが報道だと思うのですが……」

坂本「決まったことだ。変えられん」

○同 会議（教育にいったらどうなるか？）

坂本「あまり考えたくはないが、教育に移った場合にどうなるか、ＪＢＡと民放各局で協議している内容を共有させてくれ。移行が７月に決まって、翌年１月開始だから時間がない。まず、大きいところで編成だな。森山君頼む」

森山「はい、坂本さん」

森山「民放は教育の半分を使えることになっています。具体的に言いますと、全日帯の半分の9時間ですが、その内、ゴールデンは2時間以内となっています。深夜帯の放送は任意です」

坂本「そうになると、朝・昼・夕方の情報番組が1つか2つ減ることになるな」

森山「多分、そうなります。どれを減らすかは、制作の村上さんと検討中です」

坂本「分かった。次は制作局の村上君、頼む」

村上「はい。先ほど、森山さんが言われたように、他にも含めて、番組は確実に減ります。制作会社も気を揉んでいて、もしもの時の番組継続の確約が欲しいと言ってきているところもあります」

坂本「こればかりは難しいな……。出来るだけ引き止めておいてくれ」

村上「分かりました」

坂本「本田君、技術的な部分は、どうなりそ

うだ？」

T『同 技術局長 本田 浩史』

本田「はい。放送については、教育と同じチャンネルを使いますが、時間帯によって、お互いが送波したり停波したりするのは、混信を招きます。ですので、送波は教育で一括管理して、民放からはVの納入となりそうです」

水木「本田さん、ちょっと待ってください。：ということは生放送や中継はどうなるのですか？」

本田「生放送をやるとすれば、向こうのスタジオを借りることになります。そうするとスタジオを押さえないければなりませんし、ウチのスタッフも向こうの機材に慣れる必要があります。加えてレンタル費用も安価にはなりませんが、かかります。ですので、生放送は難しくなるでしょうね」

水木「報道は速報性が命ですよ？ それはマズい。死活問題です。何とかならないので

すか？」

村上「報道もそうですがワイドショーはもっと時間が長い。これも難しいと？」

本田「そうです。生放送の可否によっては、編成も考えなければなりません。難しいようなら、大きな変更が必要となります」

村上「本田さん、何とかありませんか？」

本田「この辺は：、坂本さんレベルでないと交渉は難しいかと思います」

水木「坂本さん、お願いします！」

村上・森山「お願いします！」

坂本「分かった。できるだけ今の編成が維持できるよう、生放送については、交渉しよう」

坂本「後は、コンテンツと営業か：。どうだ？」

T『同 コンテンツ局長 丹羽 武文』

丹羽「コンテンツは今の民放共通のプラットフォームを継続して使えることになっていきます。ですが、私たちの部署がアシストで

きることはありません」

坂本「CMの方は？」

T『同 営業部長 阿部 俊光』

阿部「はい。坂本さんもお承知の通り、CMは民放の規則では番組放送の総量の18%以内になっています。ですが今回の場合、民放が使える枠は半分です。現在の規制のままでは単純計算で9%になってしまますので、全日帯の総量の12〜14%で調整しています。深夜帯は今のところペンディングです」

坂本「製作費が要らない分、割合は低いってことか？」

阿部「そうです。通常の民放と比べると少ないのは事実です。ただ、教育に行った局が潰れては、民放間の競争も何もないので、その辺は向こうも分かっていると思いますが……」

坂本「生かさず、殺さず、というところか……」

阿部「言い方は悪いですが：、そういう事のようです」

村上「阿部さん、じゃあ、向こうが制作した番組にもCMが入れるってことです
か？」

阿部「そうなる予定です。どの番組になるかは教育との調整をしている最中です」

阿部「：ただ、CMにも条件があります」

村上「条件？」

阿部「はい。まず、過払金とかローンとか株式投資とか、そういうお金関係の広告はNGです」

村上「まあ、そうだろうな。他にもあるのか？」

阿部「はい。ギャンプル系はもちろんダメです。あと映画やCD、DVD、ライブなどの宣伝もダメです。ゲーム関係も依存症などの問題が取り沙汰されていますので難しいです。各メーカーは反対していますが：。ですので、純粋な企業のCMが望まし

いと言われている。ただし、クラシックコンサートやスポーツイベントの告知は許可されそうです」

坂本「確かに：、映画のCMで『大ヒット上映中』とか言ってる、実際ガラガラなんてことは良くあるからな。こちらはそのまま流さないといけないから仕方がないが、教育の方に、誇大広告だと苦情が行く可能性もあるってことか」

阿部「ええ。いろいろ考えすぎて：、というか考え無さすぎて、原作とはかけ離れてしまった外国映画のリメイクなどは、特に」

村上「で、具体的にCMの打てる番組は？」

阿部「先ほどお話ししましたように、まだ、これからです。ただ、自社制作の番組には必須です」

阿部「後、向こうの番組のフォーマットに合わせて、CMは番組の前後のみで、番組内には入れないで欲しいとのことですよ」

村上「だとすると、構成は考えないといけない

いな……」

阿部「そうですね……。ただ、視聴者はCM跨ぎでの煽りにはあまりいい印象がないようですので、悪いことばかりではないかと思えますが……」

村上「あれは、いろいろ事情があるんですよ！」

坂本「村上君、まあ、落ち着いてくれ。森山君、深夜帯はどうなりそうだ？」

森山「はい。今までは、深夜帯は少し尖った番組を当てていましたが、向こうからは、あくまで教育なので、ゴールデンレベルの節度ある範囲に納めて欲しいと言われていきます。ですので、深夜に放送するメリットは薄くなると思います」

坂本「深夜アニメもか？」

森山「はい。特に、女の子だけ出てるのをいいことに、セリフをBGMで誤魔化した、画面に謎の光をバンバン入れるようなマネは出来ないでしょうね」

坂本「確かに。教育でそれをやったら免許剥奪もあり得るからな」

森山「はい」

坂本「ただ、アニメは一定の層が見てくれるし、当たれば映画化や円盤・グッズ収入も見込める。製作委員会も含めて広告代理店と相談しておいてくれ」

森山「分かりました」

坂本「そう言えば、その広告代理店の動きはどんな感じなんだ？」

村上「今のところ、どの局が移るのか、枠がどうなるのかがはっきりしていません。ですの、特定の局に肩入れはしていないように見えます。全方位外交ですね」

坂本「分かった」

○同 会議（対策）

坂本「さて、現状把握が長くなったが、ここからが本題だ。ボードを出してくれ」

秘書がボードを持ってくる。

坂本の向かい側に止める。

ボードには以下が書いてある。

（ボード始め）

【評価項目】

- 1 .. 全日帯視聴率
- 2 .. 報道の正確性・透明性
- 3 .. 人権への適切な配慮
- 4 .. 放送される情報の有用性
- 5 .. 有権者の投票

（ボード終わり）

全員、ボードを見ている。

村上「坂本さん、これを見て毎回思うんですが、有権者の投票ってのが必要なんでしょうか？ それもこの5項目の評価の割合が同じなので20%ある。先ほどお話ししましたが、参議院選挙と同時にですから、今年からは3年ごとにコレですよ」

坂本「これだけのために投票の準備を整えるのは、一般人から見れば、金の無駄遣いだと思われるからな。参議院選挙は衆議院と

は違って3年ごとって決まっているから、同時にやれば費用は少なくて済む」

森山「それに、ここのところずっとテレビに對しては風当たりが強いので仕方ないでしょう。1はきちんと数字として出てきますが、2と4は総務省の評価です。そこで密室だ、出来レースだ、利権だとか言われるのが辛いんでしょう」

○同 会議（具体的な対策）

坂本「まあ、嘆いても仕方ない。この中で、各々工夫出来るところはあるか？」

森山「坂本さん、先ほどもお話しましたが、2と4は結局、お上の評価ですから、それほど差はつかないと思います。変に低い評価を付ければ、総務省は何をしていたんだ、っとブーメランになりかねませんか。ただ、投票への影響はあるかと思いません。局のイメージと言うか」

村上「私もそう思います。『人権への配慮』

だと、ワイドショーの振る舞いがネットでネガティブな話題になることが多い。その辺、もう少しマイルドな感じにした方がいいと思っています。番組の模様替えまではしないでいいと思いますが」

森山「水木さん、報道の方は？『報道しない自由』とか揶揄されているみたいですが……」

水木「そういう批判があるのは承知していますが、一般人に媚びれば、報道でなくなる。このまま粛々とやらせて欲しい」

坂本「水木くん、言わんとすることは分かるが、これは局の趨勢を担うものだ。できるだけ工夫してくれ」

水木「…分かりました」

坂本「あと、視聴率は？何かキラコンテントはないのか？」

森山「今年はちょうどサッカーワールドカップの年ですが、場所がサウジアラビアです。2022年のカタールの時と同じく暑

さ対策で開催は11月です。放映権は動きませんが、選挙には間に合いません」

森山「ウチの独占コンテンツのバレーですが、今年はありません」

森山「ただ、オリンピックもWBCもありませんし、他局の世界水泳・世界陸上も今年はありません。スポーツ関係は横一線だと思っています」

村上「それに、あったとしても配信で見る視聴者が多いです。よっぽどのスーパースターが出ないと数字は見込めません」

坂本「そうか……。そのスーパースターを引っ張って来たいが……。昔、やらかしてるからな」

森山「今も引きずってますからね。当時のヤツらを恨んでやりたいですよ、ホントに」
坂本「昔の番組の再放送とかは考えているのか？」

丹羽「それは、オンデマンドで出しています。地上波で再放送するから削除します、

なんて事になれば、ウチの評価が下がるだけですよ」

坂本「難しいか……」

坂本「では、投票は？ この辺が一番読みにくいと思うのだが」

村上「ネットやSNSでの評判で左右されやすいですから、とにかく不祥事だけは避けたいですね」

坂本「偽情報が出た場合は？」

村上「民間のファクトチェック機関があります。今回のテレビ局の選挙については、興味を持っていると思いますが、あくまでも、とりあえず、体裁としては独立機関です。から、ウチのイメージを損なっている話題をチェックしてくれ、というのは難しいでしょう」

坂本「……まあ、あそこは毎朝出身者が多いからな」

森山「もし、そういう話題が出た場合は、編成で調整して釈明の場を設けることも可能

です。もちろん、しっかりと証拠を出して。この辺は、水木さんと村上さんにもご協力をお願いしたい」

水木「もちろん協力しますよ」

村上「私もです。番組内でそういうコーナーを作ってもかまいません」

坂本「じゃあ、その線で頼む」

坂本「逆にイメージアップに繋がる方法はないのか？ 特にネットに対して」

丹羽「いろいろ考えられますが、逆効果になる可能性が高いと思います。何をしても、やらせだ、嘘だ、都合の悪いことは隠している、となりそうです。インフルエンサーとかに宣伝をお願いすれば、お前は金で転んだんだろ、とか言われかねません」

坂本「うーん……。結局、消極的な方法にならざるを得ないのか……」

丹羽「今のところ無難な形で、としか……」

坂本「分かった。じゃあ出来るところから始めてくれ。できるだけ早くだ。頼む」

坂本以外「はい」

○ワイドショー打ち合わせ（午前中）

セットの前で打ち合わせをしている。

司会の宮原、制作局長の村上、プロデ

ューサーの長峰。

宮原「もう少し、マイルドに：、ですか？」

村上「そうです。あとコメンテーターにも、

その旨、伝えてもらいたい」

長峰「しかし、村上さん。宮原さんのワイド

ショーは舌鋒鋭いのが売りなのは、ご存知

でしょう？ コメンテーターもある意味、

クセがあって発言力の強い方を選んでいま

すし」

村上「分かっている。だが、人権への配慮が

必要なんだ。変に世間を煽るような発言も

マズい。失言はもっての他だ。それが、選

挙でのイメージアップにも繋がるんだ」

長峰「しかし：」

村上「長峰くん、もし、教育に行くようなこ

とがあれば、生放送はほぼ全滅だ。やるならそれなりの費用とスタッフの訓練が必要になる。スポンサーも離れるかも知れない。それでもいいのか？」

村上は宮原の方を向いて、

村上「宮原くんはどうなんだ？」

宮原「：それは：、困ります」

村上「だったらそうしてくれ」

○アルプステレビ制作フロア（昼）

村上は番組のアイデアを練っている。

村上のスマホが鳴る。森山から。

村上「森山、どうした？」

森山（声）「今すぐこっちに来てくれ！」

村上「どうした？ 慌てて」

森山（声）「TKテレビがやりやがった。とにかく来てくれ！」

○アルプステレビ編成フロア（昼）

村上が森山のところに駆け寄る。

村上「どうしたんだ？ 森山」

森山「どうしたもこうしたもない！ TKテレビが大手予備校講座の放送を始めた！」

村上「何だって？」

森山「もうすぐ始まる、大学共通テスト対策講座と、二次試験のランク別の集中講座

だ！」

村上「そんなのTKが出来るのか？ 昔は教育系の局だったのは知ってるが……」

森山「大手予備校から買ってるんだよ！」

村上「えっ？」

森山「それも平日は夜9〜12時、土日は朝から午後6時までぶっ通しだ。それもサブチャンネルまで使ってやる」

村上「何で、そんなに大きく編成を変えたんだ？」

森山「選挙対策に決まってるだろ！ 視聴率はそれほど出ないかも知れないが、受験生にとって有用性がある。それも対象は高校3年生だ。つまり選挙権のあるヤツらがい

る。浪人もいるだろう。印象は悪くはならない。親の印象もだ！」

村上「…あそこは、他で何があっても通常運転だと思っていたが…、先手を打ってきたってことか」

森山「対抗するから、編成を変えるぞ！ 決まったら連絡するから、制作会社にその旨、伝えておいてくれ！」

村上「分かった！」

○アルプルテレビ制作フロア（昼）

制作局。各局のTV画面モニター。

村上はアイデアを練っている。

SBS首都圏テレビのモニターに、チャームと共に、「SBSニュース速

報」の文字。

村上はそれを見る。

村上M「ん？ 何か事故でもあったのか？ 水木さんのところは知っているのか？」

村上はモニターを見ている。

モニターには「大日本テレビ社員 現
行犯逮捕」のテロップ。

村上はびっくりして身を乗り出す。

村上「!? 何があったんだ？」

画面が切り替わる。

キャスター１が座っている。

キャスター１「番組の途中ですが、ニュース
をお伝えします。先ほど午後２時頃、東京
都港区東新橋のビルの地下２階にあるコー
ヒー店で４０００円相当のタンブラー一個
を盗んだとして、大日本テレビ社員の黒川
孝之容疑者（２６）が、現行犯逮捕されま
した。繰り返しお伝えします。…」

バックで繰り返しキャスターの声。

村上「なんだあ？ 窃盗？ これで速報なの
か？ そもそも他局の不祥事でも名前は滅
多に出さないのに…。なんでだ？」

大日本テレビのモニターからチャイム
がなる。

「大日本テレビニュース速報」のテロ

ッブ。

その後、「社員不祥事に対する社長記者会見」の文字。

村上「今度は、大日本テレビが!? 不祥事って窃盗のことか? それで社長の記者会見ってなんだ? タイミングが早すぎないか?」

大日本テレビの画面が切り替わる。

キャスター2が座っている。

キャスター2「番組の途中ですが、ニュースです。本日、大日本テレビ社員が窃盗容疑で逮捕された件に付きまして、ただいまより大日本テレビ社長の萩村が記者会見を行います。それでは、会場から中継です」

テレビ画面に社長会見場。

萩村（社長）「今回は、我が社の社員の不祥事に対し、みなさまにご迷惑とご心配をおかけしたことを心よりお詫び申し上げます」

萩村と取締役数名がならんで頭を下げ

る。

フラッシュが焚かれる。

村上「…さっぱり分かん。何がどうなっているんだ？」

村上「誰か説明してくれよ！」

村上は水木に電話をかける。

呼び出し音になり、水木が出る。

村上「水木さん、村上です。SBSと大日本見ましたか!？」

水木（声）「ああ、見てる」

村上「こう言っではなんですが、窃盗で速報とか社長の謝罪会見とかするものなんですか？」

水木（声）「オレもよく分かん。このくらいじゃ普通はスルーだし、よほどのことがない限り、他局の話はしない」

今度は、毎朝テレビのチャイムが鳴り、「毎朝ニュース速報」が画面に出る。

次に「ビルの壁に落書きをした弊社社

員、警察へ任意出頭」

テレビ毎朝の画面がキャスターに切り替わる。

村上はスマホを水木との通話のまま、フロアのテレビを見る。

毎朝テレビの画面が切り替わる。

キャスター3「番組の途中ですが、速報です。本日、午後2時頃、建築途中のビルの壁にスプレーで落書きをしたとして毎朝テレビ社員、本田拓郎（33）容疑者が、築地警察署へ任意出頭しました。警察では、建造物損壊罪に当たる可能性があるとして、取り調べを行っています。繰り返します……」

キャスター3は繰り返し伝えている。

村上「今度は毎朝!? それも自分のところの話じゃないか? おかしい、何かある!」

× × ×

毎朝テレビの会見場。

中村「……私どもへの信頼回復の第一歩とし

て、来週から1週間、本社報道フロアを一般の方に開放し、私どもの真摯な報道姿勢を直にお見せしたいと考えております。詳細は別途お知らせ致します」

水木（声）「村上！ 村上聞いてるか？」

村上は、持っていたスマホを耳にやる。

村上「はい、聞いています」

水木（声）「村上、分かったぞ！」

村上「どういうことなんですか？」

水木（声）「選挙対策だ！ イメージアップ

だよ！」

村上「でも、謝罪会見とか、自分とこの不祥事とかイメージが悪くなりませんか？」

水木（声）「逆だ。悪いことをしたら、すぐ動くことでイメージはアップする。素直に間違いを認めてるってことでな。TKがたまにやってたりするだろ？」

村上「!? そういうことですか！ 水木さんのところも何とかありませんか!?」

水木（声）「なるもならないも、悪いことは

何もしていない！」

村上「じゃあ、誰かを人柱にして、何とかして下さい！ 局のためです！」

水木（声）「…仕方ない。…今回は目を瞑る」

村上「お願いします！」

○菅野の事務所（昼）

ソファーに俳優の菅野とマネージャーが並びで座っている。

その向かいに村上と渚が座っている。

村上「是非とも、今度のドラマに菅野さんのお力が必要なんです。よろしくお願い致します」

× × ×

村上と渚は立ってお辞儀をして、事務所を出て、エレベーターで一階に降りる。

エレベーターのドアが開くと、前に二神が居て、鉢合わせとなる。

お互いびっくり。

村上「何しに来た…、負け犬が」

帰ろうとする村上に向かって、

二神「…なあ、村上」

村上は振り返る。

二神「今度メシでも食いに行かないか？」

村上「移行作業で忙しいんじゃないのか？」

それも含めて愚痴りたいってところか？」

二神「そう思ってもらっていい。お前の考え

てる愚痴とは違うかも知れんがな…」

村上「？ 思わせぶりだな。まあ、いい。じ

ゃあ連絡をくれ。番号は分かってるよな」

二神「ああ。連絡する」

○居酒屋（夜）

村上「…そんなに悪くないだって!？」

二神はビールを飲む。

二神「そうだ…」

村上「使える時間が半分なのにか？」

二神「ああ…」

村上「どの辺がなんだ？」

二神「お前、教育が制作した番組にもCMが打てることは知ってるよな」

村上「ああ。まだどこって決まってないって聞いてたが！」

二神はビールを飲む。

二神「それがな：、朝のビックコンテンツに打てることになったんだ」

村上は目を見開いて、二神を見る。

村上「朝のって：、もしかしてあの番組のことか!？」

二神「そうだ。自分たちが見てた時のお兄さんとお姉さんが誰だったかで、ママ友が盛り上げれる番組だ」

村上「そりゃ凄いいじゃないか！」

二神「凄いなんでもんじゃない。おむつ、離乳食、お菓子、おもちゃ、服。スポンサー依頼が代理店に殺到してる。広告費も青天井だ」

村上「確かに、そりゃそうだろうな」

二神「ただ、番組が番組だ。CMの制限は他に比べて格段に厳しい。もちろんチェックも入る。だからイメージCMに近い。もちろん、トラは出せない」

二神はビールを飲む。

村上はつまみを食べる。

村上「でも、企業からしたらそこまでしても出したいよな」

二神「ああ」

村上は箸を二神に向けて、

村上「で、結局どこにしたんだ？」

二神「決められなくてな。曜日ごとで打ってもらうことにした。基本、一社週一だ」

村上「それで、それほどCMの入りが減らないってことか。他はどうなんだ？」

二神「他も割と埋まっている」

村上「教育なのか？」

二神「そうだ」

村上「どんな感じなんだ？」

二神「海外の自然を紹介する番組なら、航空

会社や旅行代理店、国内ならバスツアー
…、変なのじゃ…」

村上は二神の話を遮る。

村上「そのくらいは分かる」

二神「あとホテルとか。ワインディングを走る番組ならバイクや車メーカー、キャンプ関係の番組なら、アウトドア・グッズってとこだ」

村上「なるほどな」

二神「あとは、神社・仏閣めぐりなら、和菓子通販とか。苦労しているのは、自分とこの制作番組ってんだから、笑うしかない」

村上「それが、お前の『愚痴』ってことか？」

二神「それは、ちょっと違うな…」

二神はビールを飲む。

二神「村上。教育の番組とウチらの番組でCMの食いつきが違うのはなぜだと思う？」

村上「やっぱり、番組の質とか制作費の問題」

とかか？」

二神「いや、オレはそうは思わない」

村上「じゃあ、何だ？」

二神「特化してるんだよ」

村上「特化？」

二神「そうだ。番組の中にあれもこれも入れてごちゃっとさせないで、風景なら風景、建物なら建物と割り切ってる。割り切ってるから、CMを打つ側としては分かりやすい。ターゲットになる層に興味を持ってもらえば、それで良い訳だしな」

村上「効率が良いつてことか」

二神「ああ。数字は高くないかも知れないが、満足度は高いだろう：」

二神はビールを飲む。

二神「教育に来て分かったのは、そういうことなんだ：」

村上「つまり、自分とこの番組は、構成とかいろいろと変えてスポンサーを呼び込もうとしているのに、忖度なしで先に作ってた

番組の方がウケがいいってことがか？」

二神「そう。だが、教育でも数字は気にするって聞いたことがあるよ。視聴者への『還元度合い』という意味でな」

村上「それじゃあ、ある意味、受信料を払ってるヤツがスポンサーなんだから、同じじゃないのか？」

二神「そうなんだが、元々受信料を払っている層が広い。だから教育は一つの番組で全部満たそうとせずに、チャンネル全体のバランスを取って、視聴者の満足度を上げようとしているんだと思う。さっきのビックコンテンツなんかいい例だ」

村上「チャンネル最適の考え方だから、ある分野に特化した番組が作れるって訳か」

二神「そうだと思う」

村上「つまり、オレたちの努力は、ってこと？」

二神「ああ。1時間・2時間の番組だから、ターゲット層を絞るのは悪くはないし、そ

うせざるを得ない。ただ、今の状況を見ると、結局、何を信じて番組を作ればいいんだろうか、とな。ただ食べているだけの番組なんかは、多分、特化しているからウケてるんだろうな。」

村上「…これが、お前のいう『愚痴』って訳か。」

二神「そういうことだ。お前にわかってもらえるかどうかは…、分からないが。」

○アルプステレビのホール新年仕事始め

（朝）

舞台の後ろに「2040年度 新年仕事

始め」

司会「それでは、村上社長からご挨拶を頂きます。

村上が社長として登壇。

村上「みなさん、今年は参議院選挙の年です。つまり、勝負の年です。みなさんには頑張ってもらいたいです。無理をする必要は

フィクション劇場 第二十話「椅子取りゲーム」

ありません」

場内がざわつく。

村上「落ちたところで、会社が潰れる訳では
ありません」

場内が再びざわつく。

村上「一度、自分の仕事を見つめ直す機会に
なるかも知れませんが。自分の仕事の「別の
意味での」難しさというものを」

E
N
D

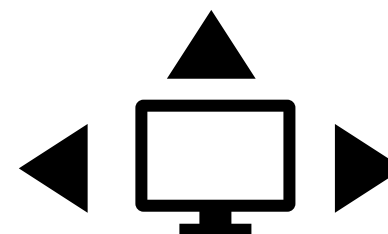
(2025年6月15日 初出)

(2025年11月22日 加筆・修正)



「空」
フィクション劇場
第二十一話

大太
大



フィクション劇場 第二十一話「空」

【登場人物】

吉田 郁夫（よしだ・いくお）（49）：桐山

市職員。総務部長

菅原 直之（すがわら・なおゆき）（33）：

桐山市住民

広山（ひろやま）（78）：桐山市住民。女

性

寺本 実（てらもと・みのもる）（31）：桐山

市職員。証明書窓口 受付担当

貴島（きじま）：同 1階誘導係

渡辺（わたなべ）：同 ホールの番号渡し係

川口 恵子（かわぐち・けいこ）：同 一階

通常窓口受付担当。

尾上（おがみ）：同右

下野（しももの）：同右

川島（かわしま）：同右

証明書窓口担当1

証明書窓口担当2

【あらすじ】

桐山市で台風による水害が発生、死者は出なかったが、建物の損壊や浸水が起こる。

市の職員は各種証明書発行の対応に追われるが、住民の菅原直之は、手続きが進まないことに腹を立て、責任者を出すよう要求し、これに総務部長の吉田郁夫が対応する。

吉田は、菅原を市役所の外に連れ出し、台風が原因だから、責任は「空」にあると言うが、菅原は納得できず、ワイドショーの内容を引き合いに出し、吉田たちの責任を問う。

吉田は、ワイドショーは専門家・コメンテーターを含め「外野」であり、この水害を「誰か」のせいにすることで、自分たちへの印象をよくしようとしていると話す。

それでも納得できない菅原は、税金の支払いを拒否し、顛末をSNSに書き込むと脅すが、吉田はブラフで会話を録音していると言い、反撃する。そして、菅原にSNSへの書き込みをするかどうかの判断を迫る。

○豪雨（昼）

豪雨の中、桐山市の防災無線から緊急放送が流れる。

スピーカー1放送「本地域に土砂災害警戒情報と氾濫危険情報が出されました。警戒レベル4の避難指示を発令します。住民のみなさんは直ちに、安全な場所に避難して下さい」

桐山市の別の場所で、同じく緊急放送が流れる。

スピーカー2放送「本地域に土砂災害警戒情報と氾濫危険情報が出されました。警戒レベル4の避難指示を発令します。住民のみなさんは直ちに、安全な場所に避難して下さい」

桐山市のまた別の場所で、同じく緊急放送が流れる。

スピーカー3の放送は音が小さく、雨の中で聞こえるか聞こえないかの程度。

スピーカー3放送「本地域に土砂災害警戒情報と氾濫危険情報が出されました。警戒レベル4の避難指示を発令します。住民のみなさんは直ちに、安全な場所に避難して下さい」

○豪雨後・市役所（昼）

住民の広山が市役所の一階に書類を持って入ってくる。

誘導役の職員（貴島）が入口に立っている。

階段のそばには「各種証明書（り災、被災、被災届）申請窓口は2階ホールへ」と書いてある矢印の入った看板を立てかけてある。

広山が貴島に向かって、

広山「ちょっといいかね？」

貴島「はい。何でしょうか？」

広山「家が水に浸かったんで、保険会社に連絡したら、なんとか証明書？　ってのが必

要だって言われたんだけど……」

貴島「はい。こちらで申請を受け付けています。失礼ですが、保険は建物のみですか？」

広川「保険会社に聞いたらそうだって」

貴島「では、り災証明書になりますね。ご自宅の状況の写真などはお持ちですか？」

広山「保険会社に言われたので、スマホで撮ってきてますけど……」

貴島「それで結構です。2階ホールに臨時の申請窓口を設けていますので、そちらで受付をお願いします」

広山「2階ね。ありがとう」

広山は階段を上がろうとするが、振り向いて、

広山「しかし、あんたがたも大変だね」

貴島「大丈夫ですよ。被害は大きかったです
が、亡くなられた方がいらっしやなかった
たのが、せめてもの救いです」

広山「そうだね」

広山は2階への階段を上がっていく。
程なくして、菅原直之がカツカツと市役所に入ってくる。

菅原は、貴島に向かって、

菅原「証明書ってのは、どこでももらえるんだ？」

貴島「今回の水害の証明書ですか？」

菅原「それ以外に何があるってんだ」

貴島「失礼しました。階段を登って2階に臨

時の申請窓口を設けております」

菅原「分かった」

菅原は、カツカツと階段を上がって2階に行く。

○同 2階ホール（証明書申請）

菅原が2階廊下を歩いている。

菅原は2階ホールの入り口の壁に、
「各種証明書（り災、被災、被災届）
臨時申請窓口」の紙が貼られているの
を見る。

菅原「ここか……」

菅原は2階ホールに入る。

菅原は目を見開く。

菅原「うわっ！」

ホールにはアクリルの仕切りに窓口番号がふってある臨時窓口3つと、待合のためのパイプ椅子が30脚くらいあってほぼ埋まっている。

窓口対応をしている職員は3人、後ろに書類の整理などで3人。

いずれも髪や服装が乱れ気味で疲れている。

入り口に職員（渡辺）が立っている。

渡辺（声）「申請を希望される方ですか？」

菅原は振り返る。

菅原「そうだ」

渡辺「それでは、順番にお呼びしますので、番号札をお持ち下さい」

渡辺は「27番」と書かれた番号札を渡す。

菅原は、番号札を見て、苦々しい顔を
して、

菅原「あのう、ウチは浸水が酷かったんで、
先にしてもらえませんか？」

渡辺「申し訳ありません。今回は、被害が市
内東部のほぼ全域になりますので申請の方
が多いのですから。お待ち頂けま
すか？」

菅原は、プイと横を向き、ホールに入
って、どかと椅子に座る。

× × ×

窓から入る日差しの向きが少し変わっ
ている。

受付担当の職員（寺本実）がホールに
向かって、

寺本「27番でお待ちの方、3番受付までお
越し下さい」

寺本が両手を膝に置いて、立ち上
り、3番受付に向かう。

菅原は受付の椅子に座る。

寺本「り災証明書の申請ですか？」

菅原「そうだ」

寺本「それでは、順番にご記入をお願いします」

以下、寺本が申請書の該当欄を指差しながら（東京都大田区のものを参考にしています）、

寺本「最初に、申請者のご住所とお名前をここに記入して下さい」

菅原は記入する。

寺本「次に、り災した方のご住所とお名前をご記入下さい」

菅原は記入する。

寺本「その次に、世帯の構成員のお名前と続柄をお願いします」

菅原「私、一人ですが」

寺本「それでしたら、空白のままに結構です」

寺本「『り災原因』は、今回の台風でよろしいですね？」

寺本「それ以外になんがあるって言うんだ？」

寺本「失礼しました。それでは、『令和9年8月20日の台風12号による』とご記入下さい」

菅原は記入する。

寺本「次は建物に関する項目ですが、所在地はこちらの住所と同じですか？」

寺本「同じに決まってるだろ？ 2つも3つも家持っていないよ」

寺本「失礼しました。では、『り災住所に同じ』をチェックして下さい」

菅原はチェックする。

寺本「今回、り災した建物は居住用ですか？」

菅原「もちろんだ」

寺本「では『住家』にチェックをお願いします」

菅原はチェックする。

寺本「この建物は、何で出来ていますか？」

木造ですか、鉄筋ですか？」

菅原は不貞腐れる。

菅原「…あのさあ、家が水に浸かったんだから、この辺はどうでもいいんじゃないのか？」

寺本「いえ、申請書には所定の項目を記入する必要がありますから。ご了承下さい」

菅原「ったく…」

寺本「先ほどの続きになりますが、木造ですか？ 鉄筋でしょうか？」

菅原「確か、木造だったと思う」

寺本「では、『木造・プレハブ』にチェックを入れて下さい」

菅原はチェックする。

寺本「この家は、ご本人さんの持ち家ですか？ それとも賃貸ですか？」

菅原「くだいな。持ち家だ」

寺本「すいません。では、この『持家』にチェックして下さい」

菅原はチェックする。

寺本「今日は、ご自身の身分を確認できるものをお持ちですか？ 運転免許証とか、マイナンバーカードとか」

菅原「マイナカード持って来てるよ」

寺本「それでは、見せて頂けますか？」

菅原は財布から、マイナンバーカードを取り出して、机の上におく。

寺本は手に取って確認する。

寺本「ありがとうございます。念の為、一部コピーを取らせて頂きますか、よろしいですか？」

住民「そうしないとダメなんだろう？ 許可とかいらないよ」

寺本「失礼しました。それでは、少しお待ち下さい」

寺本はマイナンバーカードを持って席を外す。

菅原はイライラしながら顎に手を当てて、机を指で叩く。

寺本は受付窓口後ろにあるコピー機で

コピーして戻ってくる。

寺本「ありがとうございます。カードの方、お返します」

寺本がマイナンバーカードを机の上において、菅原に渡す。

菅原がマイナンバーカードを取って、財布にしまう。

寺本が、申請書を取り、指でなぞりながら小声で、項目を確認する。

寺本「申請書類の方は大丈夫です。それでは、最後に、り災した住居の写真の提出をお願いしますか？」

菅原は驚く。

菅原「写真だって？」

寺本「はい」

菅原「そんなもん必要なのか？」

寺本「はい。できれば印刷してあるものがないのですが……。難しいようでしたら、スマホで撮った写真とかでも結構です」

菅原「無しじゃダメなのか？」

寺本「り災証明書の場合は、この申請書を元に、市の職員が実際に確認して証明書を発行致します。事前に確認する部分の写真などがあれば、スムーズに確認出来ますし、あらかじめ被害の程度を見積もっておくことができます。市のホームページにも、その旨、掲載しているのですが……」

菅原「それじゃあ、写真を撮って持ってこいってことか？」

寺本「そうなります。申請のために必要となりますので……」

菅原、切れ気味。

菅原「3時間待たされて、出直してこいっていいのか？」

寺本「そう申されましたも……、規則ですから……」

菅原は立ち上がる。

菅原「分かったよ！　すぐ、撮って持ってくる。でも写真を持ってきたらすぐ受け付けてくれよ。また待つのはゴメンだからな」

菅原「分かったのか！」

寺本は気おされる。

寺本「わ、分かりました」

菅原はカツカツと階段を下って、1階に降りてくる。

菅原は、1階にいる職員に向かって。

菅原「この税金泥棒が！ もう少し、住民のことを考えて仕事しろ！」

菅原はカツカツと市役所を出ていく。

職員の川口と尾上は小声で、

川口「怖っ！」

尾上「何でそんなに怒ってんだろ？」

川口「2階から降りてきたから、証明書の申請書類の書き方がどうこうじゃないの？」

尾上「そっか……。でもあれは項目は多いけど、他の書類と比べて難しくないと思うんだけどなあ……。だけど、滅多に書かないから、普通より時間がかかるのは確かなんだけど……」

川口「あんな書類、一生、書かなくていいん

だよ」

尾上「それはそうだけど……」

職員（下野）が、菅原の大声を聞いて

川口と尾上に近づいてくる。

下野「あんたら、あの人には何かしたの？」

川口「いえ、別に……。わたしにもよく分かんなくって……」

下野「とにかく、あの人には関わらない方がいいよ」

尾上「知ってるの？ あの人」

下野「うん。菅原さんって人。この前もここに來て文句言ってた」

尾上「何て？」

下野「防災無線の音がうるさいから、小さくしろって」

川口「……で、どうしたの？」

下野「結局、言うこと聞いたみたいだよ」

川口「そっか……。確かに、私ら税金からお給料もらってるけど、住民様は神様ですって訳でもないんだけどねえ……」

下野「そうそう」

○同（午後）

菅原が、写真を持って2階に上がって
いく。

それを貴島は目で追っている。

菅原は渡辺に事情を説明し、窓口に行
く。

菅原「これでいいのか？」

寺本「はい。ありがとうございます。これで
住居の方は申請を出しておきますね」

菅原の顔色が変わる。

菅原「おい、『住居の方は』ってどういうこ
とだ!? 家財とか全部じゃないのか？」

寺本「家財の方は、別途『被災証明書』の申
請が必要になりますので…」

菅原「そんな話聞いてないぞ！」

寺本「そうは申しませんが、ルールですので
…」

菅原イライラ。

菅原は机に手をついて、

菅原「…でっ！　今度は何が必要なんだ？」

寺本「書類は、り災証明の申請書と似たようなものをご記入頂きます。加えて、家財の散乱の様子の写真などが必要になります
が」

菅原「家財の散乱？　これも役所が来て確認
するのか？」

寺本「いえ、確認は不要ですが、今後保険の
支払いなどで使うことがあります。被災直
後の様子が分かる写真が必要です」

菅原「ちょっと待て。もう台風が過ぎてから
2日も経ってて、片付けを始めてるんだ
ぞ？」

寺本「そう申されましても、市としましては
…」

菅原、大声でまくしたてる。

菅原「ウチの一階にはな、TVとか、昔から
集めてたビンテージのオーディオ機器とか
があって、全部水を被っているんだぞ！

避難するまでに時間があれば、2階に持っていくことも出来た。防災無線がよく聞こえなくて、気がついたら床上浸水だ。お前らのせいなのに何言ってるんだ！」

寺本は下を向いている。

ホールはシーンとなる。

菅原「市のやることは、こんなことばかりだ！ 責任者を出せ！」

寺本「私にそう言われましても……」

臨時の窓口の後ろにいた吉田が、寺本に近づいてくる。

吉田「寺本くん、どうかしたのか？」

寺本「この方が、責任者を出せと……」

吉田は菅原を見て、

吉田「住民の方、すいませんが、何の責任でしようか？」

菅原「今回の台風のことだ！」

吉田「……」

吉田「分かりました。では玄関にお越し頂けますか？」

菅原「なんで責任者が、ここに来ない？」

吉田「ここは申請窓口で、他の住民の方もいらっしゃいますので…」

菅原「分かったよ」

菅原は1階に降りていく。

吉田がポケットから自分のスマホを取り出して寺本に渡す。

吉田「寺本くん、話の途中で私に連絡があるかも知れないから、その時は電話に出て、後で折り返しかけると言っておいてくれ。

ロックは外してある」

寺本「はい、分かりました」

吉田が1階に降りる。

○同 玄関

玄関に吉田と菅原。

吉田「それでは、ご案内します。こちらへどうぞ」

吉田は、菅原を玄関の外に連れ出す。

吉田「責任者はここですので、ご自由にお話

下さい。それでは失礼します」

吉田は庁舎内に入ろうとする。

菅原は手を吉田に向けて、

菅原「おい！ ちょっと待て！」

吉田は振り向く。

吉田「何でしょう？」

菅原「『何でしょう』じゃないだろ？ 誰も

いないじゃないか？」

吉田「いえ、責任者はおりますよ」

菅原「何処に？」

吉田は空を指さして、

吉田「今回の件の責任者です。よく見えてい
るじゃありませんか」

菅原「ふざけるな！ オレは責任者を出せと
いってるんだぞ！」

吉田「はい、今回の件は台風が原因です
ら、責任者は『空』になります。何か間違
っていますでしょうか？」

菅原「お前、自分が何を言ってるのか分かっ
てるのか!? そんなのは詭弁だろ？」

吉田「いえ、私どもでは台風の進路や雨はコントロールできませんから」

吉田は戻ろうとする。

しかし、菅原は吉田を指差して、

菅原「でも、おまえらのせいだって言ってたぞ！」

吉田は菅原の方に顔を向けて、

吉田「どなたが、ですか？」

菅原「ＴＶのワイドショーだ！ 専門家が出てきて、ハザードマップに不備があったとか、避難経路が長いから避難が遅れたとか。避難場所の数も少ないし、場所も悪いとか。コメンテーターもそう言ってたぞ！」

吉田「そうなんですか……」

菅原「司会者も『そうだ』って感じで話してた！ だから、おまえらが悪いんじゃないか？」

吉田「……あなたが、こういうＴＶ番組を見て、誰が専門家やコメンテーターとして出

演して、どのように言ったのか。：詳しいことはわかりませんが：」

吉田は少し手を広げる。

以降、にこやかに。

吉田「その方々：、『外野』です」

菅原はびっくりする。

菅原「なっ：!?」

吉田「そして、言ってることは『後付け』です」

菅原は再度びっくりする。

菅原「それはいくらなんでも：」

吉田「あ、失礼しました、少し違いますね。

その方々は『外野』ではなくて、『外野席でビール飲んでメガホン叩いてる人たち』ですね」

菅原は口をあぐり。

菅原「：なんで、そんなことが言えるんだ？」

吉田「例えば、司会者やコメンテーターの身内の方が私どもの職員だったとしたら、そ

んなことが言えるでしょうか？」

菅原「…」

吉田「きっと、『住民のために昼夜を問わ

ず、献身的に働く職員たち』みたいな美談になるでしょうか？」

菅原「…」

吉田「そして、その専門家の方が、私どもの防災計画に携わっていたら、そういうことが言えるでしょうか？」

菅原「…」

吉田「関わっていなかったとしても、自分より格上の専門家が関わっていたとしたら、どうでしょうか？」

菅原「…」

吉田「まあ、自分が関わったことでこういうことが起きてしまったとしたら、TVに出ることはないでしょうが。当事者として質問攻めにあうのは、目に見えていますから」

菅原「…」

吉田「仮に、その専門家が『内野』としてTVに出たとしても、作成した責任は最終的には私どもにありますから、土砂崩れの起こりそうな場所が全部自分で確かめられなかったとか、お金の関係で避難する場所が増やせなかったとか、そういう話し方をするでしょうね」

菅原「：」

吉田「株や為替の話もそうです。専門家という方は、TVでは意見を言ったとしても『可能性がある』くらいまでです」

菅原「これから先の話なんだから、当然だろう？」

吉田「その通りです。もし断言してしまえば、結果が出るまでは、『内野』にいないければなりませんから。自分の発言に対してどうなるか分からない訳ですからね。断言とは行かなくても、『こうなるだろう』程度の予測でも、それが外れた後に、もう一度、同じ方がTVに出てきたのを私は見た

ことがあります。：まあ、何事もなかったかのように出演している海外のスポーツ評論家の方もいらっしゃいますが：」

菅原「そんなに専門家が嫌いなのか？」

吉田「いえ、そんなことはありません。専門家の方はその道で20年、30年と研究や仕事を重ねてきた方々でしょうから、知識・知見は私たちではとてもかなわないでしょう。しかし、TVでは、『視聴者に分かりやすく15秒で』、みたいなオーダーが出ているんじゃないかと思っています。VTR編集されているようなところもありますし。もっと時間や専門用語を使ってもいいのであれば、と忸怩たる思いを抱えている方もいらっしゃるようです」

菅原「：専門家の話は分かったよ。でも、あなたは外野席って言ってたが、利害関係のない、いろんな角度から物事を見るっていうのは必要なんじゃないのか？」

吉田「そうです。しかし、ある程度広く見

て、自分でもそれなりの知識を得てから判断することが前提です。どこかの方向だけの話しか聞かずに不満をぶつけるのはどうかと思いますよ。あなたのように……」

菅原「……」

吉田「あなたは、こういうことが起きた時に、なぜ、誰か『人』のせいになろうとするのですか？　ご自身の不満を、その『人』にぶつきたいだけなのではないのですか？」

菅原「そうじゃない！　ワイドショーで言うてたから……」

吉田「ワイドショーが『人』のせいにする、つまり『悪人』を作りたがるのは、それを批判すること、あたかも『自分たちは視聴者のみなさんの味方ですよ』という構図を作りたいたからではないでしょうか？　私に言わせれば、印象操作、パフォーマンスですよ。所詮、外野席に座っている人たちですから、何とでも言えますし

ね」

菅原「：」

吉田「加えて、司会者が自分で言うところと番組的に問題になりそうな話を出したい時は、まず、コメンテーターに振ることが多いように見えますね。『こういうことです、コメンテーターの方、どうですか？』みたいに。そうすることで『言ったのは自分ではない』と逃げられるからでしょうから。ワイドショーをよくご覧になるのでしたら、そこを注意して見るというですよ」

菅原「：」

吉田「あなたは、先ほど防災計画についてお話しされていましたが、今見れば、市のハザードマップの想定範囲が甘かったのかも知れません。ただ、これは議会の承認を得ているものです。それはつまり、みなさんが選んだ議員さんが議会で決めたことなのですよ？」

菅原「ぎ、議員から、そんな詳しい話が聞ける訳ないだろう？」

吉田「では、防災計画の承認を住民投票であれば良かったのですか？」

菅原「…」

吉田「今回の件を批判するのは結構です。ただし、それはあなたが今回の台風の被害者の立場“だけ”だと思っているからです。実際、そんなことはないんじゃないでしょうか？」

菅原「オレが加害者だって言うのか？ オレが何をした？」

吉田「防災無線ですよ。あれの音量を小さくしろと文句を言ったのは…、菅原さん、あなたですよね？」

菅原は身構える。

菅原「…」

吉田「あれについては、周辺にお住まいの方から、聞こえなかったから避難が遅れたと苦情が来ているのですよ。…住民の方にそ

の旨、説明しましょうか？ 責任追及でも
しましょうか？」

菅原「く、苦情は言ったが、実際に動いたの
は、役所だろ？」

吉田「でしたら、ハザードマップも役所が動
いていきますので、あなたがあれこれはない
と思いますが……」

菅原「……」

吉田「あなたは自分がどういう立場になるの
か選べますが、職員は必ず『内野』です。
守備に付かなくてはなりません。みなさん
にレベル4の避難指示を出して避難しても
らっている時に、職員は避難どころか市役
所に来ます。市民のために。家族がいるに
も関わらず、です」

菅原「さっきから屁理屈ばかりじゃない
か！ 単なる言い訳だろ？ 自分たちはや
ってますアピールだろ？ 納得できるわき
ゃねえよ！」

吉田「……」

菅原「これ以上、こねくり回した言い方をするなら、これから市の税金は払わないからな！」

菅原は立ち去ろうとする。

吉田「…でしたら払わなくて結構です」

菅原は振り返る。

菅原「えっ…!? …ホントにいいのか？」

吉田「はい、かまいません。あなた一人が税金を納めて頂かなくても、市の財政はびくともしません。その代わり、今、市が行なっている、住民票や印鑑証明などの市役所での窓口サービス、上下水道、ゴミ回収などのサービスは全て止めさせて頂きます。もちろん、り災証明の対応もしません」

菅原「ち、ちょっと待て！ 本気で言ってるのか!?」

吉田「はい、本気です。あなたにも私にも納税の義務があります。それを果たして頂けないのであれば、仕方ありません。こちらとしてもタダ働きは嫌ですので…」

菅原「…」

吉田「『税金泥棒』とか言われてまで、その方に行政サービスをしたくありませんし。税金は収めなくて結構ですよ」

菅原「…」

吉田「どうされますか？」

菅原「…脅迫するっていうのか？」

吉田は手を広げて、

吉田「はい、そうです」

菅原「…!?」

吉田「あなたが窓口でしていたことと差して変わらないと思いますか…」

菅原「…開き直るのか？」

吉田「はい、その通りです」

菅原は吉田を指差して、

菅原「…そっちがその気なら、この話、S Nで拡散させてやるからな！」

菅原は、また立ち去ろうとする。

吉田「どうぞ」

菅原はまた、びっくりして振り返る。

吉田はポケットをポンポンと叩きながら、

吉田「実は私…、今の会話をスマホで録音しております…」

菅原「ウソつけ！」

吉田「ウソだと思うのでしたら、それでも構いませんよ。どうぞSNSに上げて下さい」

菅原は氣おされる。

菅原「…」

吉田「多分、あなたは自分の都合のいいところだけ、例えば、『少し文句を言っただけで、行政サービスを止めるとか言い出しやがった！』みたいな書き方をするのでしょう？」

菅原「…」

吉田「あなたの書き込みを見た方が、私どもの役所が横柄な態度を取ったと見て、攻撃をしてくるでしょうね。あなたは、悪を暴いた正義のヒーローになるでしょう」

吉田は再びポケットをポンポンと叩きながら、

吉田「そこで、私たちがこの録音音声を上げたらどうなるでしょうか？ とたんにあなたは嘘つき野郎の悪の権化になりますよ？ あなたの最初の書き込みへの反響が大きければ大きいほど」

菅原は目を見開く。

菅原「…」

吉田「そうなれば、すぐに身バレして、叩かれるだけ叩かれるでしょうね」

菅原は、もう少し大きく目を見開く。

菅原「…」

吉田「まあ…、『外野席』の正義というのは、怖いですからねえ…」

菅原は、もっと大きく目を見開く。

菅原「…」

吉田「もちろん、こちらもあるあなたに反撃しますよ。…あなたの情報がどこから漏れるかは…、わかりませんが…」

フィクション劇場 第二十一話「空」

菅原は、MAX目を見開く。

菅原「…」

少し、間。

吉田「さて、どうされますか？」

菅原は、MAX目を見開いたまま、

菅原「…」

吉田は菅原に向けて、パーで手を前に出す

吉田「…5秒以内に、決めて下さい」

菅原は目をMAX見開いたまま、恐怖の表情。

吉田は指を折りながら、

吉田「5、4、3、2、1…」

菅原「わっ！」

菅原の言葉が途中で切れる。

暗転。

E
N
D

(2025年6月15日 初出)

(2025年11月22日 加筆・修正)



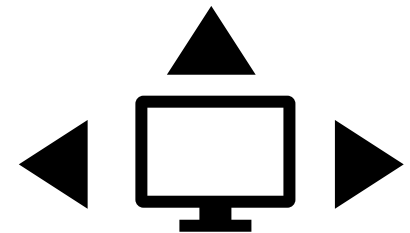
「
双
子
」

フ
イ
ク
シ
ヨ
ン
劇
場

第
二
十
二
話

大
太

大



フィクション劇場 第二十二話「双子」

【登場人物】

木原 和明（きはら・かずあき）（32）：双

子の兄

木原 昌明（きはら・まさあき）（32）：双

子の弟

木原 秀美（きはら・ひでみ）（31）：和明
の妻

木原 恵美（きはら・えみ）（3）：和明の娘

水沼 一騎（みずぬま・いっき）（53）：和

明・昌明の父親。二人にDVを加えていた

茂木 雅子（もぎ・まさこ）（33）：昌明の
恋人

岡田 龍平（おかだ・りゅうへい）（35）：

茂木に交際を迫った俳優

加藤（かとう）：大日本テレビ レポーター

宮原（みやはら）（61）：ワイドショー

司会

フィクション劇場 第二十二話「双子」

澤田（さわだ）（28）：ワイドショー
アシスタント

一色（いっしき）：毎朝テレビ記者

喫茶店店員

喫茶店の客（女性）

和明の会社の課長

裁判長

弁護士1（弁護側）

弁護士2（弁護側）

弁護士3（検察側）

弁護士4（検察側）

精神鑑定医

裁判官1

裁判官2

フィクション劇場 第二十二話「双子」

裁 判 員 6	裁 判 員 5	裁 判 員 4	裁 判 員 3	裁 判 員 2	裁 判 員 1	書 記

【あらすじ】

一卵性双生児の兄・木原和明と弟・昌明は側から見てよく似ている仲の良いきょうだい。大学まで同じ学校で過ごしたが、子供の頃に父親の水沼一騎からDVを受けている。それを抱えながら生活を送っていたが、昌明は恋人の茂木雅子を巡って俳優の岡田龍平とトラブルになり、岡田を殺害してしまう。和明はマスコミから責任などを追求、イメージ悪化を恐れた会社から退職させられる。和明は昌明の裁判で、検察側・弁護側両方から証人依頼が来るが、弁護側が昌明の心神喪失を主張することを知り、検察側を選ぶ。裁判の証人尋問で、和明は昌明が心神喪失なら、同じDVを受けた自分がないのはなぜか疑問を呈し、DVが原因なら、遺族は気持ちをどこに向ければいいのかと訴える。そして、昌明に自分たちに対するマスコミの報道は続くだろうが、弟のお前を信じて待つから、黙って罪を償ってくれと頼む。

○喫茶店…イントロ（昼）

明るい日差しの休日。

女性が、喫茶店のカーテンの閉まっている窓際でお茶をしながら本を読んでいる。

読んでいる本は「ファウスト」。

入り口の扉が開き、鈴を鳴らす。

店員「いらっしゃいませ」

木原和明が喫茶店に入る。

店員「お好きな席にどうぞ」

女性は知明の顔を見る。

和明は、女性の横を通り過ぎて、奥のテーブルに座る。

× × ×

入り口の扉が開き、鈴を鳴らす。

店員「いらっしゃいませ」

木原昌明が喫茶店に入る。

和明が昌明に対して、手でこっちだと合図する。

昌明が和明の座っているテーブルに向

かって行く。

女性は昌明の顔を見る。

女性はびっくりして、本を置き、カー

テンを開ける。

女性は窓の端をぐるりと見回して、

女性「壁になってないから…、大丈夫よね

…？」

○同 店内（昼）

和明はすでに、アイスコーヒーを頼んでいる。

座っているのは奥。

和明「昌明！ 遅いぞ！」

昌明「ごめんごめん、電車に乗り遅れちゃっ

てさ」

昌明は和明の対面に座る。

和明「こっちは、娘をあやすのを嫁さんに頼んで来てるだぞ」

昌明「悪い悪い。ホントごめん」

店員が水を持ってくる。

店員「いらっしやいませ」

昌明は店員さんに向かって、

昌明「ホットを一つ」

店員「かしこまりました」

×

×

×

アイスコーヒーの氷が少し、溶けている。
る。

量が少し減っている。

昌明がコーヒーを飲む。

和明がアイスコーヒーをストローでぐるぐる回しながら、

和明「…で、用事っていうのは何だ？ 電話で出来ない話だっていうから、わざわざ、ここまで来てやってるんだが」

昌明「いや、実はさ、結婚を前提にお付き合いしている人が居てさ。そろそろかなって思っ

って…」

和明「おお。そりゃいいじゃないか。でも、そういう人がいるなんて初めて聞くぞ？ 身内はオレだけだって言うのに、水臭いじ

やないか」

昌明「それが…、向こうは芸能人の人でさ。話が漏れると、兄貴にも、いろいろと迷惑がかかると思って…」

和明「なるほどな。まあ、そういうことなら仕方ないか。…で、誰なんだ？」

昌明「茂木雅子って人」

和明は目を上にして、考える。

和明「…名前は聞いたことがあるが…、見たことはないな」

昌明「…それだと、余計に言いにくいんだけど…、兄貴の嫁さんによく似てるんだ」

和明は手を頭の後ろに回しながら、ソファにもたれ掛かる。

和明「また、そういうのかよ!? オレたちや、コーラスグループとかじゃないんだぞ？」

昌明は両手を和明の方に向けて、

昌明「まあ、そう言うなよ、兄貴。オレたちは腐れ縁じゃないか」

和明「一卵性双生児に腐れ縁もへったくれもあるか！ それを言うなら最初から腐れ縁だ。顔が似てるからって、オレにどれだけ迷惑が掛かってたと思ってるんだ？」

昌明はムツとして、

昌明「兄貴。そういう言い方はないだろ？ 迷惑だったのは、オレも一緒だよ」

和明「何言ってるんだ。お前、高校の時に、オレに告白するつもりだった女の子が間違えてそっちに告白したら、そのままOKして、付き合ってたろ！」

昌明「それを言うなら、バイトのシフトに入れないから、急に代わりに行ってくれて、泣きを入れてきたのは、兄貴じゃないか！」

和明「…」

昌明「…」

和明「…不毛だな」

昌明「…そうだね」

和明「こういう話をし出すと、1日かかる」

昌明「そうだね」

和明「しかしまあ：、ここまで一緒だとな

あ

昌明「そうだね。幼稚園、小学校、中学校が一緒なのは仕方ないけど」

和明「でも、クラスまで一緒っていうのはな：。誰かが仕組んだとしか思えねえよ」

昌明「オレもそう思う」

和明「それで、中学の時に、あまりにも見分けが付かないからって、クラスの連中に

（手で四角を作りながら）（左に）『和

明』、（右に）『昌明』ってでっかい名札付けたけ、とか言われるし」

昌明「それに、どっちが上か下かも分からないから、ついでに（手を左、右と出しながら）『兄』、『弟』も付けろとか言われるしね」

和明「：ホント、いじめだよな、これ」

昌明「でも、兄貴。それ聞いて、片方だけ分かりゃいいんだから、オレにだけにつけさ

せときゃいいいだろ？　とか言ってたらしいな」

和明は驚いて、手を組んで、首を振る。

和明「知らねえ…、オレは何も知らねえ…」

昌明は呆れる。

昌明「ったく…。終わったことだからいいけどさ…」

和明「それでもって、高校も大学も一緒のこと受けて、一緒に受かったって」

昌明「『受かったって』はないだろ？　兄

貴。両方受かったんだからいいじゃないか」

和明「まあ…、そうなんだが…。やっと、会社が別になったかと思ったら、今度は結婚したい人も似てるっていうのはなあ…」

昌明「その辺はしょうがないだろ？　わざとやってる訳じゃないんだし」

和明「まあ…、昔から趣味も似てたからな…」

雨が降り出す。

和明は、アイスコーヒーのストローを
回しながら、

昌明「：小さい頃の話が、こんな馬鹿馬鹿し
いことだけだったら、楽しかったんだけど
ね：」

和明「：親父のことか？」

昌明「うん」

和明「親父は酒飲むと、手がつけれなかつ
たからな。今で言うDVってヤツか。とに
かく小さかったオレたちは怖くて隠れるか
逃げるかしかなかった。でも、どっちにせ
よ帰るところは家しかなかったし。帰れ
ば、帰ったで、殴る蹴るは当たり前だった
しな：」

昌明「結局、家に入るのが怖くて、外で隠れ
てたりとかしてたからね」

和明は窓越しに外の雨を見る。

和明「ああ。：こういう雨の日は辛かったな
：。特に冬は：」

昌明「そうだね……。だけど、母さんが一番辛かったんだと思う。ある意味、親父とオレらの板挟みだったから」

和明「多分な。大学に合格して、下宿するころになった時はホント安心したよ」

昌明「うん。でも、母さんを置いていくのは心配だった。だけどオレらの手が離れたところに合わせたのかな？ 結局、離婚して」

和明「そのタイミングで、オレらは名字を『水沼』から母さんの姓の『木原』に変えたんだよな。親父との関わりを少しでも切りたくて……」

昌明「そうだったね。それで、親父は一人になっても酒がやめられなくて、結局アル中で死んで」

和明「オレらも母さんも、親父の葬式には出なかったよな」

昌明「ああ。確かにオレたちの親父には間違いなかったけど、線香をあげる気にはなれ

なかった：」

和明「そうだな。それからほどなくして母さんが亡くなって：。オレたちよく、グシなかつたと思うよ」

昌明「ある意味、兄貴が支えになってくれたところがあるからね」

和明「オレもそうだ」

和明は太ももを両手でパンと叩いて、

和明「さ！ 暗い昔話はこれくらいにして、本題に入ろうか。どういう用事だ？」

昌明「実は：、茂木さんとデートする時に、兄貴に𠬞を：」

和明は、テーブルをバンと叩き、身を乗り出して、

和明「それかい！」

○和明の家（夜）

和明の家族が寝静まった後に、和明は自分の部屋で、パソコンを開いて、仕事をしている。

天気は雨。

和明は妻・秀美と娘・恵美が寝ている
部屋のドアを少し開ける。

二人はすやすやと寝ている。

和明「…」

和明は微笑む。

和明は机に座る。

和明「家で仕事なんて、ホントはダメなんだ
けど、秀美の手伝いもしてやりたいし…。

仕方ないってところか…」

和明「昌明のヤツ、今度、茂木さんを紹介す
るって言ってたから、うまくやってるみた
いだな…。まあ、オレを見てびっくりする
ことだけは確かだろうけど」

和明はパソコンで作業を続ける。

○同 昌明からの電話（夜）

和明のスマホになる。

和明がスマホの表示を見る。

「昌明」の表示。

和明 M 「昌明から？ こんな時間にか？」

和明が電話を取る。

和明 「もしもし昌明か？ こんな時間にどうした？ 何かあったのか？」

息の荒い昌明。

昌明（声）「兄貴…、すまない…」

和明 「どうしたんだ？ 昌明」

昌明の電話から以下の声が聞こえる。

電話（声）「おい、こいつを抑えろ！」

昌明（声）「うわっ！」

電話（音）バサバサという人が揉み合

う音が聞こえる。

電話（声）「誰か、警察を呼んでくれ！」

和明 「昌明!? 何かあった!？」

昌明の電話から、サイレンが聞こえ

る。

和明 「昌明、返事をしてくれ！ 今、どこだ！」

昌明の電話が切られる。

和明 「何があったって言うんだ…？」

和明は昌明に電話を掛け直すが、出ない。

○和明の家（翌日…昼）

秀美が恵美を保育園に送って帰ってくる。

秀美は洗濯を回し、コロコロで部屋の掃除をしている。

インターフォンが鳴る。

秀美はインターフォンに向かう。

秀美「はい。どちらさまですか？」

加藤「大日本テレビの加藤と申しますが、和

明さんの弟の昌明さんについてお話をお伺いしたいのですが」

秀美「昌明さんに何かあったのですか？」

加藤「昨日遅くに、昌明さんが、俳優の岡田龍平さんを刃物で刺して、殺人の疑いで逮捕されたんです。それについて、コメントを頂きたいのですが」

秀美「えっ!？」

秀実 は驚く。

秀美 「コメントと申しまして。残念です
としか言いようが。」

加藤 「それだけですか？ 謝罪の言葉はない
んですか？」

秀美 「しかし、昌明さんがしたことについ
て、私がこうは……。すいません、失礼
します」

秀美 はインターフォンを切る。

再度 インターフォンが鳴る。

秀実 「：はい。どちらさまでですか？」

一色 「毎朝テレビの者ですが、昌明さんの件
でお聞きしたいのですが。」

秀実 「いや、先ほど別の方にお話ししまし
たように。」

一色 は秀実の話を遮る。

一色 「人が亡くなっているんですよ？ コメ
ントなし、なんてないでしょう！」

秀実 「とは言いまして。」

一色 「そちらの旦那さんに共犯の疑いがかか

ってるんですよ？」

秀実「えっ!? いや、ウチの主人がそんなことは……」

一色はやや怒気を含んで、

一色「報道陣が集まっているんですよ！ やましいところがないなら出てきて質問に答えてもらえませんか？」

秀実はカーテンを少し開けて玄関を見る。

報道陣が群がっている。

秀実は怖くなってカーテンを閉める。

秀実はインターフォンが鳴っても出ない。

秀美は、TVを付けてワイドショーを見る。

○同 ワイドショー（昼）

宮原「昨日夜遅くに、俳優の岡田 龍平さんが、男に路上で刺される事件が発生しました。岡田さんはその後、救急車で病院に搬

送されましたが、出血多量で死亡しました。犯人は現場で通行人に取り押さえられ、駆けつけた警察官に現行犯逮捕されました。男は木原昌明容器者32歳とみられています。警察では木原容器者を殺人の疑いで逮捕し、取り調べを進めているということです。澤田さん、これ原因はなんだっ
たんでしょうか？」

澤田「木原容器者は女優の茂木 雅子さんと交際をしていたそうなのですが、岡田さんが割って入る形になり、口論の末、犯行に及んだと見られています」

宮原「茂木さんご本人からのお話は聞いたのでしょうか？」

澤田「それぞれの事務所に問い合わせましたが、今のところノーコメントとのことです」

宮原「分かりました」

澤田「後、もうひとつ警察で捜査を進めていることがあります」

宮原「何ですか？」

澤田「木原容疑者には、一卵性双生児の兄がいるらしいのですが、非常に良く似ており、兄の方も今回の事件に関わっているのではないかとの情報があります」

宮原「そんなに似ているのですか？」

澤田「二人の写真を入手しております。ただ、兄の方は一般の方ですので、宮原さんだけにお見せすることにしますが……」

宮原はTV画面から分らないように二人の写真が載っているフリップを見る。

宮原「これは……似てますね。私では見分けが付きません。コピーとかじゃないんですよ？」

澤田「いえ、別人です」

宮原「しかし、犯行現場の状況からこのきょうだい両方が、その場に居たという可能性はあるのですか？」

澤田「それは、今後の捜査で明らかになるか

と思いますが、警察では、兄の方に参考人として話を聞くことも検討しているようです」

○和明の家（同日…昼）

秀美はびっくり。

秀美「和明さんに連絡しないと！」

スマホを取り出し、和明に連絡する。

○和明の会社（昼）

和明が秀美からの電話を取る。

和明「はい。ああ、秀美か。仕事中は電話しないでくれと言ってるはずだけど、何かあったのか？」

和明は秀美からの話を聞く。

× × ×

和明はびっくりする。

和明「えっ!?、本当か!? うん、うん。分かった。上司に話をして今すぐ帰る。うん」

和明は帰り支度をして、会社を出る。

和明 M「昌明、お前なんでことをしたんだ。

茂木さんと何があったか知らないが、絶対
やっちゃいけないことを……」

○和明の家（2週間後）（夜）

和明がコンビニ弁当を自宅に帰ってく
る。

レポーター陣が待ち構えている。

加藤「木原さん、この事件にご自身が関わっ
ているという情報がありますが」

和明「そのようなことはありません。詳しい
ことは警察に聞いて下さい。私から話すこ
とはありません」

和明は家に入る。

インターフォンは外してぶら下がって
いる。

和明はカバンを置いて、ネクタイを外
す。

和明は、台所を見る。シンクに汚れも
のが溜まっている。

ゴミ箱もコンビニ弁当のトレイで溢れている。

和明はソファーにどかっと座る。

和明は秀美に電話をかける。

呼び出し音。

和明「もしもし、秀美か？」

和明「実家の方は、大丈夫か？」

和明「そりゃ良かった。まあ、マスコミはオシ目当てだからな」

和明「恵美はどうだ？」

和明「そこは、すまないな。保育園には当分休むって言うてあるから。友達と遊べないのは仕方ないよ」

和明「オレの方も、ビデオ通話だけだと物足りないけど……」

和明「ああ。オレもそうしたいんだが……、そっちに行けば、秀美やご両親に迷惑がかかる。我慢するよ」

和明「いつまでかは、分からない。昌明の裁判が終わって、ほとぼりが覚めたらって感

じだろうな」

和明「…ごめんな」

和明「ああ。もう少し辛抱してくれ」

和明「じゃ、切るよ」

○和明の会社（昼）

木原の上司の課長が近づいてくる。

課長「木原くん、ちょっと来てくれない

か？」

和明「はい？」

二人は会議室に向かって歩いていく。

○会社の会議室（昼）

和明「えっ!? 会社を辞めろ、とおっしゃる

のですか？」

課長「『辞めろ』と言ってるんじゃない、『自

主的に退職して欲しい』と言っているん

だ」

和明「どっちも同じじゃないですか？」

課長「…」

和明「なぜですか？ 弟の件ですか？」

課長「：」

和明「課長に協力してもらって、その時間は自宅でパソコンを使って作業していたと警察に話して、私は関係ないと認めてもらったじゃありませんか？」

課長「：木原くんが、この事件に関係がないのは私も承知している。だが会社のイメージというものがあるんだ」

和明「イメージって：。課長、私たちが似ているのは自分たちではどうにもならないのですよ？ それだけで、私を追い出すというのですか？」

課長「そういう言い方はやめてくれ。あくまで『自主的に退職して欲しい』ということだ」

和明「：」

○和明の家（夜）

和明は居間のソファに座っている。

和明 M「秀美に：、なんて言えばいいんだ
：」

和明の電話が鳴る。

登録していない電話番号。

（弁護士からの電話）

和明「はい、木原です」

和明「弁護士の方ですか？　もしかして、昌
明の件ですか？」

和明「はい。私に？」

和明「つまり：、証人として出て欲しいとい
うことですか？」

和明「差し支えなければ、私がどういう話を
すればいいのか、教えて頂けませんか？」

和明「：そういう方向なのですね？」

和明「はい、はい」

和明「いいえ、平日でも大丈夫ですが：」

和明「すいません、内容は分かりましたが

：、少し、考えさせて頂いてもよろしいで
すか？」

和明「一週間程度欲しいのですが、よろしい

ですか？」

和明「はい。こちらからお電話差し上げますので。この番号でよろしいですか？はい、失礼します」

和明、考える。

和明の電話が鳴る。

（検察側からの電話）

和明 M「さっきの弁護士さんか？」

和明は電話を取る。

和明「はい、木原です」

和明「弁護士の方ですか？先ほどもお電話

がありましたか？」

和明「あ、すいません。失礼しました。それ

で、ご用件は？」

和明「はい。私に？」

和明「つまり：、証人として出て欲しいというかどうか？」

和明「差し支えなければ、私がどういう話をすればいいのか、教えて頂けませんか？」

和明「：そういう方向なのですね？」

和明「はい、はい」

和明「いいえ、平日でも大丈夫ですが…」

和明「すいません、内容は分かりましたが、

少し、考えさせて頂いてもよろしいです

か？」

和明「一週間程度欲しいのですが、よろしい
ですか？」

和明「はい。こちらからお電話差し上げます

ので。この番号でよろしいですか？ は

い、失礼します」

和明、手を口に当てて再び考える。

和明「…」

○裁判所（昼）

裁判所外観。

法廷内観。

裁判長が入廷する。

裁判長「では、お願いします」

書記官が控室に電話をする。

昌明が手錠縄で入廷する。

裁判長が拘束を外すよう指示する。

昌明が傍聴席の方を見る。

昌明「兄貴…、来ていないのか？」

裁判長は裁判員を呼び出すよう、書記官に指示する。

裁判官と裁判員が入廷する。

○同（裁判1回目。冒頭手続…昼）

裁判長「それでは、意見陳述を行います」

裁判長「まず、検察側からお願いします」

弁護士3（検察側）「検察側は、被告が有罪であることを主張します。証拠につきましては、凶器、警察の現場検証結果、被告を取り押さえた方の証言、及びその他の証人質問にて示します」

裁判長「では、検察側どうぞ」

弁護士1（弁護側）「弁護側は、被告の無罪を主張します。証拠につきましては、精神鑑定医の鑑定結果を示します」

昌明「…」

○同（裁判2回目。証拠調べ手続き…昼）

裁判所外観。

昌明は傍聴席を見る。

昌明「…今日も来てないのか…」

裁判長「今日は証拠調べを始めます。それでは弁護側からどうぞ」

弁護士1（弁護側）「はい。精神鑑定医の結果から示します。先生、ご説明をお願いします」

鑑定医が説明する。

精神鑑定医「よろしくお願い致します。被告は幼い頃に父親から母親と共に、暴力、つまりDVを受けておりました。そして、犯行時、自分の恋人を被害者に奪われそうになった際に、恋人を自分の母親と同じ状態に置かれたと認識し、その記憶が想起されたと考えられます。そして、その想起された母親が被害者に暴力を振るわれるのではないかと思ひこみ、善悪の判断が失われた

状態で、その暴力から想起された母親と自分の身を守るために、被害者に凶器を向けてしまったと考えられます。よって、主文としては心神喪失状態との判断を致しました」

裁判長「ありがとうございます」

裁判長「それでは、検察側からお願いします」

弁護士4（検察側）「はい。ではご説明します。まず、凶器ですが…」

無音で、説明している弁護士4（検察側）。

×

×

×

弁護士4（検察側）「凶器については、以上です。次に、証人への質問に入ります」

裁判長「それでは、証人に入ってもらって下さい」

和明が入ってくる。

昌明が驚く。

昌明 M「兄貴：!?。弁護士の先生から、オレ

の弁護を断ったって聞いてたけど…、そっ
ちの証人なのか？」

和明が証言台に座る。

裁判長「証人の名前は、木原和明さんで正し
いですか？」

和明「はい」

裁判長は、書類を片手で持って示し
て、

裁判長「住所などは、この書類に記入した通
りでよろしいですね」

和明「はい」

裁判長「それでは、証人への質問に入ります。
検察側、弁護側の順にお願いします」

無音 和明は証人席に座って、質問に
答える。

弁護士2（弁護側）「以上で、質問を終わります」

裁判長「ありがとうございます」

裁判長は和明を見て、

裁判長「木原和明さん。最後に何か付け加えることはありますか？」

和明「はい……。裁判長。立って話をしたいのですが、よろしいでしょうか？」

裁判長「あなたが、話しやすいのでしたら、それでかまいません。ただし、マイクで声が拾えるようにして下さい」

和明「ありがとうございます」

和明は立って、マイクを伸ばす。

和明は深呼吸する。

和明「被告と私は、一卵性双生児で、幼い頃からずっと一緒でした。大学まで同じ学校に通っていました。そして、精神鑑定医の先生がおっしゃった通り、同じように父親からDVを受けていました」

和明「しかし、そうであるにもかかわらず、状況こそあれ、被告が心神喪失状態になったのに、私が今までそうっていないのはなぜなのでしょうか？」

弁護士2（弁護士側）が手を挙げる。

弁護士2（弁護士側）「異議あり。証人は弁護士側が示した証拠について、自分の思い込みで否定しようとしています」

弁護士3（検察側）が手を挙げる。

弁護士3（検察側）「異議あり。証人は被告と自分との経験に照らし合わせて、発言をしています。思い込みではないと判断します」

裁判長「検察側の主張を認めます。続けて下さい」

和明「ありがとうございます、裁判長」

和明「私も、今回、証人を引き受けるにあたり、精神疾患について少し勉強しました。この裁判のためでもあり、私たち二人のためにも、です」

和明「この病気は、何かしらの症状が出て、それを精神科医の先生が、症状を見ながら試行錯誤して薬を変えて症状を安定させて、長い時間をかけて治療するものだと知りました」

和明「そう考えると、専門家であるドクターの診断とは言え、犯行時の状況を正確に確認できない中で、その時の精神状態を判断するというのは難しいのではないかと感じています」

弁護士1（弁護側）が手を挙げる。

弁護士1（弁護側）「異議あり。先ほどから証人の発言は、弁護側の証拠を貶めようとしています」

弁護士4（検察側）が手を挙げる。

弁護士4（検察側）「異議あり。証人は一般的な精神疾患の治療について、自身の考えを述べているだけです」

裁判長「検察側の主張を認めます。引き続きお願いします」

和明「ありがとうございます」

和明「もし、心神喪失の状態だとするならば、犯行前後のいつからいつまでそうだったのかを判断できるのだろうか、とも思います。検察側の弁護士の方から、被告は犯

行前から刃物を持っていたと聞いています。そこから心神喪失状態だったのでしょうか？」

和明「また、仮に被告が犯行当時、父親のDVが想起されて心神喪失状態だったとすれば、この事件で罪を問われるのは誰なのでしょうか？ 原因を作ったのがDVをしていた私の父親だというのであれば、そうなるのでしょうか？」

和明「しかし、父親はすでにこの世にいません。ご遺族は、被害者が殺されたという気持ちを感じなければいいのでしょうか？ 誰に向ければいいのでしょうか？」

和明はずっと裁判長の方を向いたまま、

和明「昌明。お前がこの事件を起こしてから、オレのところに毎日マスコミが押しつけている」

和明「俺たちのことを調べ上げて、死んだ親父や母さんの知り合いのところにまで取材

に行ってる。離婚した理由はDVだったのか、自分もDVを受けていたのか、とか。オレたちの忘れたい過去に対して、容赦なく：」

昌明「：」

和明「オレはお前と同じ境遇で育ってきた。だから、『あなたも犯罪を犯す危険性があるのではないですか?』とか『あなたもDVで精神を病んでいるのですか?』とか、な：」

昌明は、下を向く。

昌明「：」

和明「そういう話が会社にも伝わって、退職させられたよ。これから家族をどう養おうかって考えてる：」

昌明は、和明を見つめ直す。

和明「お前は知らないかもしれないが、オレにはそっちとこちらの両方から、証人として出廷して欲しいって話があったんだ」

和明「：そして、オレはこちらを選んだ：」

和明「…なぜだか分かるか？」

昌明「…」

和明「お前を信じているからだ」

昌明は、和明を見つめる。

和明「そちらの弁護士の先生から、どうい

証言をすればいいのか聞いた。この心神喪

失状態の証左の一つとして、って話だっ

た」

昌明「…」

和明「だから…、断った」

昌明「…」

和明「この話を認めるってことは、お前を信じてないのと同じだろう？」

昌明「…」

和明「お前を信じてないってことは、オレ自身を信じてないってことだ…。自分を否定できる訳ないだろう？」

昌明「…」

和明「…多分、これからもオレたちはそういう目で見られるだろう」

フィクション劇場 第二十二話「双子」

和明は昌明を見る。

和明「…でも、お前はオレの弟だ。ずっと一緒だったオレの弟だ」

和明「…だから、オレは待ってる」

昌明「…」

和明は裁判長の方を見て、

和明「昌明…」

和明「黙って罪を…、償ってくれ」

E
N
D

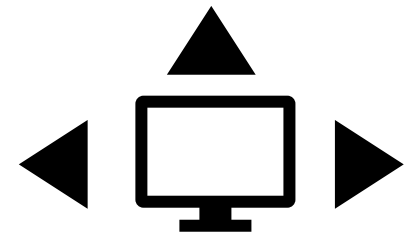
(2025年6月15日 初出)

(2025年11月22日 加筆・修正)



「幼なじみ」
フィクション劇場
第二十三話

大太
大



フィクション劇場 第二十三話「幼なじみ」

【登場人物】

外山 正雄（とやま・まさお）（32）：毎朝

新聞政治部記者

園部 健一（そのべ・けんいち）（32）：弁

護士。外山の幼なじみ

山田 宗春（やまだ・むねはる）（名前のみ）

：外山・園部二人の小学校時代の恩師

川崎（再婚後） 幸子（かわさき・さちこ）

（30）：外山の元妻

川崎（再婚後） 知子（かわさき・ともこ）

（6）：外山の元娘

川崎の夫（再婚後）

岡本 浩平（おかもと・こうへい）（26）：

犯人

犯人の母親

裁判所の職員1、2

裁判長

【あらすじ】

新聞記者の外山正雄と弁護士の園部健一は幼なじみ。小学校時代の恩師・山田宗春の影響で、「社会」に関する仕事をしている。

その二人が久しぶりに会って、お互いの仕事の話をするが、外山は離婚し、園部はうだつがあがらずで、順風満帆とは言い難い。

そんな中、川崎知子という女兒が殺害された裁判を傍聴することになった外山が、法廷に赴くと、検察側に元嫁の幸子があり、女兒が自分の娘であることを知り、動揺する。

一方、園部もその裁判で弁護側弁護士として出廷し、外山に自分が好きではないと話していた心神喪失での被告の無罪を主張する。

裁判が終わり、外山はデスクに電話をかけ、傍聴を他にまかせて欲しいと申し出る。

園部も被告の母親に電話をかけ、無罪の主張の変更を提案する。

二人は自分の仕事が全う出来ないことを詫び、一人の人間であることを自覚する。

○政治家の家の外…朝方

外山正雄は電話をかける。

外山「もしもし、デスクですか？ 外山で

す。はい、空振りです。今日はもう上が
っていいですか？ はい、では失礼しま
す」

外山は地下鉄に乗る。

電車の中のデジタルサイネージにニュ
ースが表示される。

「通り魔事件で川崎知子ちゃん（6）
を殺害した犯人逮捕。容疑者は岡本公
平（26）」

外山はそれを見る。

外山は地下鉄を降り、くたびれた感じ
で歩道を歩いている。

向こうから幼なじみの園部健一が歩い
てくる。

園部「おう、外山じゃないか？ 久しぶりだ
な」

外山「あっ、園部か」

園部「なんかよれよれって感じだな」

外山「腹が減っててな」

園部「腹？　こんな時間にか？」

外山「ああ。これからメシに行くんだが、付き合ってくれないか？」

園部「午前中に急ぎの用事はないから、１時間くらいならいいぜ」

○ファミレス（昔話・午前中）

二人はファミレスに入る。

店員「いらっしゃいませ」

二人は店員に注文する。

× × ×

テーブルには外山はチーズハンバーグ

定食、園部はアイスティー。

お互い、食べ・飲みしつつ、

○同 外山（記者）の話

園部「ところで、こんな時間にメシっていうのは、何かの取材か？」

外山「ああ。今日も朝３時から、政治家の家

に張り込みだった。与党の偉いさんと会ってという話でな。情報は信用できそうだったから、他社の連中も来てたんだが……」

園部「で、ネタは取れたのか？」

外山「それが、スカされてさ。朝早かったから、今日はもう上がっていいってことで」

園部「そうか……。で、誰からの情報だったんだ？」

外山「それは言えねえよ。報道には『情報源の秘匿』ってのがあからな」

園部「よく、『政府首脳』とか『党幹部』とかいって、微妙にはぐらかしているのも、そのためか？」

外山「そうだ。ああいうのは、オフレコ取材で得られたネタってことを意味してる。バラすと、次からネタをもらえなくなるし、下手すりゃ出禁になる。まあ、オレら記者の印象を悪くするヤツで、何人か出禁にしてやりたいのもいるがな」

園部「なるほどな」

外山「でも、あの呼び方も全くだいい加減って訳でもないんだぜ」

園部「どうということだ？」

外山「まず、『政府首脳』って言えば、ほぼ官房長官のことだ。まあ、モロバレだな。

後は、『党幹部』って言えば、幹事長、総務会長、政務調査会長ってとこだ。政治部の記者なら知ってて当たり前的事だ」

園部「でも、そんなあからさまに身バレしてるのに、匿名ってことになるのか？」

外山「ああ。さっきも言ったように、オフレコ取材でのネタっていうのが前提だからな」

園部「それだけの地位のある人なら、素直に話せばいいのに……」

外山「まあ、本音を言うと影響力が大きいってのもあるからな。逆に、向こうが『自分はどう思ってるんだぞ』っていう牽制に使うこともある。オレらマスコミを使ってな」

○同 園部（弁護士）の話

外山「ところで、そっちの方はどうなんだ？

お前は頭が良くて弁護士になったから、順風満帆ってとこか？」

園部「茶化すのはやめろよ。こっちは3回目
でやっと司法試験に受かったんだぞ。受か
ってからも『司法修習』ってのがある。そ
れをクリアして初めて弁護士だ。今は必死
で仕事を取ってきてる身分だ」

外山は園部をフォークで指して、

外山「いわゆる『ノキ弁』ってやつか？」

園部「そういう言い方をするな！」

外山「まあ、そんなに裁判がある訳じゃない
から大変だよな」

園部「外山、弁護士の仕事ってのは裁判だけ
じゃないんだよ。マスコミが報じてるから
目立ってるだけで、他にもいろいろあるん
だ」

外山「例えば、どんなのだ？」

園部「まずは、裁判の逆側だな」

外山「逆側？」

園部「そう、裁く側。つまり、裁判官とかだ」

外山「あの人たちにも必要なのか？」

園部「おいおい、向こうだって法律の知識がないとこっちのいうことも分らないし、判決も出せないだろうが」

外山「なるほどな。ワイドショーとかで、『元裁判官で弁護士の誰々』ってよく聞くけど、辞めてから弁護士の資格を取ってるって訳じゃないのか」

園部「そういうこと」

外山「あとは？」

園部「企業の法務部とかだな。裁判沙汰になれば、当然、表に出るが、それが起きないようにするために契約書作成とかに携わることもある。あらかじめ火種を摘んでおくイメージだな」

外山「企業か……。法律っていうと著作権もそ

うなんだよな？」

園部「その通りだ。エンタメ系で言えば、国内、海外、それぞれ一社づつ強力なところがある。海外のやつだと法律を変えるほどの力を持っていたりするよ。落書きでも弁護士連れて、乗り込んで来たって話も聞いたことがある。そんなところに務める夢ってのもあったがな……」

外山「でも、著作権ってのは、いつかは切れるんだろ？」

園部「ああ。日本では著作者の死後、70年だ。具体的に言えば、明治の文豪の本とかだな。電子書籍でも良く見るだろ？ 無料のヤツ」

外山「海外でも……だよな？」

園部「そうだ。最近、アメリカの有名なキャラクターの著作権が切れたんだが、切れた途端に殺人鬼みたいな役で映画になってるものもある。その映画、儲かったって話は聞かないが、続編が作られたらしい。映画を

作った奴らは、よっぽど恨みでもあるんじゃないかと思ってるよ」

外山「なるほどな」

園部「あとは、トラブル対応だな。裁判まではいかない離婚とか、相続とか、お金関係のこととか」

外山は水を飲む。

外山「そっぴゃお金関係って、よくCMで宣傳してるお金が返ってくるってアレか？」

園部「あれは、司法書士でもできる」

外山「弁護士とどう違うんだ？」

園部「どちらも国家資格なんだが、簡単に言えば、司法書士だとできることに制限がある。2002年に『認定司法書士』っていう制度が出来たんだが、それを取ってる人間じゃないとダメだ。かつ、140万以下の金額しか扱えない」

外山「そういう制限があるんだ」

園部「そうだ。まあ、CMを見て連絡してくる人らに、そんな額の金がからむのはそう

いないだろうから、大丈夫なんじゃないかな。うまく処理出来れば戻ってきた金の25%くらいは成功報酬で取るから、正直、美味しい。だからあれだけバンバンCMを打てるってことだ。ただ、あの電話番号の連呼だけはどうかして欲しいけどな」

外山「電話は分からんでもないよ。でも、何も分からなくても、とか言ってるだろう？調べるのが大変なんじゃないのか？」

園部「いや、こういう話は、『信用情報機関』ってところで一元管理してるんだ。日本には3つある。だから、そこに問い合わせれば一発だ。金融系の漫画で、誰がどこからいくら借りたかって情報を取るシーンがあったりするだろう？あれと同じようなもんだ」

外山「お前、詳しいな」

園部「当たり前だろ？ 弁護士でもできるんだから。何件かやったことがあるよ」

○同（裁判の話）

外山「でも、やっぱり表に出る裁判の方が、箔がつくんじゃないのか？」

園部「まあ、目立つという意味では、そういうことにはなるんだが：、刑事事件の場合には、人の人生を左右することになる場合が多いからな。その分、責任は重いよ」

外山「そうだろうな」

園部「ただ、お前の言うように、実績を積んで箔が付けば、弁護を依頼する側も自分たちの目的に合った人、ということで依頼してもらえるんだ。民事に多いけどな」

外山「目的？ 弁護士って、そんなアラカルトみたいなもんなのか？ みんなニュートラルだと思ってたんだが：」

園部「それは違うと思う。絶対、無罪にしてもらえそうな人とか、とりわけ人権を重視してもらえる人とか。一概に弁護士といっても得意分野があるし。もちろん法に則ることが大前提だが、完全にニュートラルっ

て訳じゃないよ」

外山「そうか。オレは弁護士ってのは、全員正義の味方だと思ってたけど」

園部「確かにそうなんだが：、ちょっと難しい解釈が必要な部分もあるんだ」

外山「解釈？ 何の解釈だ？」

園部「『弁護士職務基本規定』ってやつ解釈。その最初の一文に『弁護士は、基本的人権の擁護と社会正義の実現を使命とする』って書いてあるんだが：」

外山が園部の言葉を遮る。

外山「だったら、正真正銘、正義の味方じゃないか」

園部「だけど、その規定の第四章の第四十六条に『弁護士は、被疑者及び被告人の防御権が保障されていることにかんがみ、その権利及び利益を擁護するため、最善の弁護活動に努める』とも書いてある」

外山「：なんか、矛盾してる感じがするな。被疑者とか被告人とかを守るっていうとこ

ろがよく分からないんだが……」

園部「ここで、お前が矛盾してるって感じるのは、多分『社会正義の実現』と『被疑者・被告人の擁護』ってところだろう？」

外山「そうだ。社会正義ってのは、文字通り『正義』なんだろう？」

園部「基本的にはそうだ。だが、ここがさっき言った解釈が必要のところになるんだ」

外山「どういう解釈になるんだ？」

園部「まず、裁判中は被告が有罪か無罪か分からない。つまり『不正義』と確定していないことが前提だ」

外山「いわゆる、『推定無罪』ってヤツだな」

園部「そうだ」

外山「でも、自分がやったと自白したとか、明らかな証拠があるとか、そういう時はどうなんだ？」

園部「そこが難しい。それに悩んでいる同業者も多いようだ」

外山「あまり悩むところではないと思うんだが……」

園部「いや、そうでもないんだ。お前がいう形になっても『正義』は存在するという考え方をするんだ」

外山「？ よく分かんない」

園部「検察の主張が『法律に則って』いるかをチェックする、その行為そのものが、『正義』っていう解釈なんだ」

外山「ますます分からんな……」

園部「簡単に言えば、もし、お前が言ったように、明らかに有罪だったとしても、検察の求刑が『法律に則って』妥当かどうかをチェックすることが『正義』だという考え方だ。検察側と弁護側で主張する懲役、最近の名前が『拘禁』になったが、その重さに差が出たような時に、どちらが『法律に則っているか』っていうところが争点になる場合とかだな」

外山「なるほどな。弁護って言うのは、有

罪・無罪の二択だけじゃなくて、罪の重さについて、そういうせめぎあいがあるってことか」

園部「そう。それが、法律に則っているかってところでな」

園部はアイスティーを飲む。

園部「：だが、被告を擁護する姿を見て、被害者やその遺族がどういう感情を抱くか：、そのくらいオレだって分かる。それに殺人事件なら裁判員裁判だ。裁判員の処罰感情は強い。だが、さっき言ったように法律に則ることを『正義』とするのであれば、そういう弁護が必要なんだ。冷血と言われてもな：」

外山「正義の味方は孤独だってことか：。お前の話は大体分かったよ。でも、なんでそこまでムキになるんだ？」

○同（国選弁護士）

園部はアイスティーを飲む。

園部「：今度、国選弁護人で殺人事件の法廷に立つんだ。もちろん被告側だけど」

外山「国選弁護人って、お金が用意できないから利用できるってやつか？」

園部「まあ、そんな感じの制度だ」

外山「いきなりで、大丈夫なのか？」

園部「それは、分からない。でも、裁判所がオレを選んでくれたんだ。一生懸命、弁護しないとイケないと思ってるよ」

外山「裁判って言えば、最近、精神鑑定がどうこうって話を聞くけど、あれは何だ？

裁判の時にやらないといけないものなのか？」

園部「いや、必ずという訳じゃない。精神鑑定ってのは、平たく言うと、事件を起こした時に責任能力があったかどうかを判断する材料として行うものだ。状態としては『心神喪失』と『心神耗弱』の2つがある」

外山「また、難しい言い方だな：。何が違う

んだ？」

園部「『心神喪失』は、その名の通り、『心神』が『失われている』状態な訳だから、責任能力がないとして、無罪の対象になる。『心神耗弱』は、それが弱っているという意味で、減刑の対象になる。だが、精神鑑定医の診断がこうであっても、裁判官が証拠として認めるかどうかは、別だ」

外山「実際、どのくらい認められるものなんだ？」

園部「殺人事件で、6%くらいだな」

外山「そうか……」

園部「ああ。実際、証拠として提出したが、認められなかった数は分からない。だから、多い少ないはオレには何とも言えないね」

外山「確かにな」

園部「……ただ、実を言うと、個人的にはあまり好きない方じゃないんだ」

外山「労力をかける割に、実りが少ないから

か？」

園部「いや、違う。精神鑑定を行う場合、事件前から精神疾患を患っているって人はあまりいない。大体、事件を起こしてから鑑定する。そして報道される。そうすると証拠云々に関わらず、精神疾患を持っている人、イコール、殺人者・危ない人というのが一般の人に印象付けられる。確かにひどい事件もあったが、こういうのもどうかと思ってるな」

外山「ウチら報道にも問題があるってことか？」

園部「言っちゃ悪いが、影響があることは確かだと思う。精神鑑定を行なったことは事実だから、仕方のないことだとは思っけど」

外山「少なくとも嘘じゃないからな」

園部「ああ。それに、さっきも言ったように今度の事件は殺人だ。当然、裁判員裁判になる。世間の精神鑑定に対する見方は正

直、厳しいと思ってるよ」

外山「でも、自分の好みの手段で弁護するって訳にも行かないからな」

園部「そんなところだ」

○同（昔ばなし）

外山はハンバーグを食べる。

園部はアイスティーを飲む。

外山「それにしても、オレたちがこういう

『社会』に携わる仕事に就くようになった

のは、小学校の先生の影響なんだろうな」

園部「オレもそう思う。山田先生だったか。

社会が専門だったからな」

外山「ああ。社会が一番楽しい授業だった」

園部「教室飛び出して、フィールドワークみ

たいなこともしたし」

外山「笑えるのが、教科書もやらないといけないからって、普通の授業もやったんだよな。それもテスト前の一回だけ」

園部「そうそう。先生が居たから、お互い社

会っていうのに興味を持ったんだよな」

外山「ああ。オレは記者、お前は弁護士。仕事は違うが、『社会』ってのに携わっているからな」

○同（外山の家族）

園部「ところで、そっちの奥さんと娘さんは元気か？　奥さんには結婚式以来会ってないし、ちょっと前まで年賀状はもらってたけど、最近は来てないし」

外山「：別れたよ」

園部「それはすまん：。いらんことを聞いたな」

外山「いや、いいんだ：」

外山「あいつは最初は『あなたの働いている姿が好き』とか、言ってくれてたんだが、夜討ち朝駆けの仕事だろ？　娘が生まれてもロクに家事とか育児とかを手伝ってあげられなくてな。：まあ、自分が悪いんだけどさ：」

園部「それで、奥さんと娘さんは、今、どうしてるんだ？」

外山「分からない」

園部「分からない？」

外山「ああ。離婚の条件として、娘の親権は向こうが持つことと、以降、お互い一切の連絡を取らないってことになったんだ。電話番号も変えられてて、引越し先の住所も分からない。娘のこともあるから、そんなに遠くじゃないと思うんだか……」

園部「でも、気になるだろう？」

外山「そりゃ気になるさ。特に娘は……な。でも興信所とか使ってたまでは、ってところだ。今は、寂しく一人暮らしだよ」

○外山のアパート（夕方）

外山「ふう、今日も仕事終わりっと。早めに出がったから、酒でも飲んで寝るか」

家族の写真立てを見る

写真には、3人の集合写真。

向かって左から、幸子、知子、正雄が
並んでいる。

各々に「Sachi」、「Tomoko」、

「Masao」の文字がある。

外山は、特に娘のところの写真を見つ
める。

外山「可愛くなってるだろうな……」

○外山の会社 政治部フロア（昼）

デスク「おい、外山。ちょっと来てくれ」

外山「はい」

×

×

×

外山「オレが、裁判の傍聴に……ですか？」

デスク「急ですまないんだが……」

外山「でもなんでです？　こういうのは政治

部じゃなくて、社会部の仕事でしょう？」

デスク「それはそうなんだが……、社会部の担

当者の親御さんが倒れたらしくてな。これ

から介護が必要になるかも知れないって、

向こうのデスクに連絡が入ったそうだ。社

会部も急な話だから、人が割けないらしい」

外山「でも、それでなんでオレが？」

デスク「政局の方は、それなりに安定してるし、これくらいの裁判だと、公判5回、2ヶ月くらいで終わる」

外山「そう言われても……」

デスクは手を口の横に持って行って、
小声で、

デスク「実を言うと、向こうのデスクがオレの大学時代の先輩でさ……。断り切れないんだよ。頼む、この事件だけでいいから」

外山はため息を付く。

外山「仕方ないっすね……。その代わり、本来の仕事は少なくして下さいよ。特に、時間外は」

デスク「ああ、そうする。助かるよ。向こうのデスクを通じて、記者クラブには連絡してもらおうようにするから」

○裁判所入口（昼）

外山が裁判所に向かって歩いていく。

外山が裁判所の入り口に入る。

職員「持ち物検査を行いますので、荷物をこちらのカゴに入れていただけますでしょうか？ あと、身につけている金属類も入れて下さい」

職員はカゴを金属探知機に入れる。

職員「それでは、ゲートを潜って下さい」

何も反応せず。

職員「ご協力ありがとうございました」

外山は荷物を持ちながら、職員に、

外山「随分ともものしいんですね。まるで

空港の検査場みたいだ」

職員「すいません。過去に法廷内に凶器を持ち込まれて、トラブルになったことがありますまして……」

外山「外国では、拳銃で発砲とかよく聞きますもんね」

職員「はい。流石に日本では、そこまでき

ませんが：」

職員「：ただ、こういうことをするのが、憲法何条かの『裁判公開の原則』に反するのではないか？　という弁護士の方もいらっしやいまして。手荷物検査が裁判所に入りにくい状態を作り出しているのではないか、と：」

外山「へえ。そんな話があるんですね」

職員「はい。でも、これを止めたことが原因で、関係者のみなさんが法廷で傷つけられでもしたら、私どもの責任になりかねませんから。少なくとも自分の責任だとは言わないでしょうし。法律に則った要求をしただけですよってところまで。弁護士さんは『法律に則る』ことが原則ですから」

外山「知り合いの弁護士から、それぞれ得意分野があると聞いたことがあります、そういうことですか？」

職員「そんな感じですね：。私からすると、飛行機に乗る時とほぼ同じですから、入り

にくいもなにもないと思うんですが……」

外山 M 「園田の言ってた通りってことか……」

○裁判所 建物内

外山は、裁判所内を歩いている。

外山は受付職員のところに行く。

外山 「すみません、記者クラブのところに行きたいんですが」

職員 2 「記者の方ですか？」

外山 「はい。毎朝新聞の者です。外山と申します」

職員 2 「記者クラブの控室がこの先にありますので、そちらでお待ち下さい」

外山 「はい、ありがとうございます」

外山は記者クラブに向かう。

○同 法廷内

左に被告側弁護士2名、右に検察側弁護士2名。

外山は傍聴席を見回す。

外山「記者席はっ。あの最前列の白い力
バーのあるところか」

外山が記者席に座る。

外山は左の弁護士を見ると、園田がい
る。

外山M「そ、園田じゃないか!?。お前が担当
する裁判ってのは、これだったのか?」

被告が入廷。刑務官が3名。

書記官が裁判長に電話。

裁判長が入廷。全員で礼。

裁判長が、被告の縄と手錠をはずすよ
う指示。

刑務官が外し、被告と刑務官着席。

書記官が裁判官に電話。

裁判官と裁判員が入廷。

幸子と再婚した夫が入ってきて、弁護
士の後のパイプ椅子に座る。

外山はそれを見つける。

外山M「さ、幸子じゃないか!?。名前は川崎
だが、確かに幸子だ。どういうことだ?」

幸子も外山を見つけ、再婚した夫の方
を向き、顔を背ける

外山「そうか……。再婚したのか。それで苗字
が変わって……」

外山「……ってことは、この殺された知子って
いう女の子は……、オレの……、娘なのか!？」

外山は呆然。

○同 法廷内（裁判開始）

裁判長「それでは、審理を始めます」

裁判長「始めに人定質問を行います。被告

人、証言台へ」

被告の岡本浩平が証言台に立つ。

裁判長「あなたは、岡本浩平さんで間違いあ
りませんか？」

岡本「はい」

裁判長は書類を手にとって、

裁判長「住所、その他はこの書類の通りで間
違いありませんか？」

岡本「はい」

裁判長「それでは、お戻り下さい」

岡本は被告席に戻る。

裁判長「次に検察官・弁護人両方からの冒頭

陳述を行います。まず、検察官からどう

ぞ」

検察官「それでは、始めさせていただきますま

す」

×

×

×

検察官「以上です」

検察官の陳述が終わる。

裁判長「それでは、次に弁護人、お願いしま

す」

園田がその場で立つ。

園田「はい」

園田は立った瞬間に、傍聴席の外山を

見つける。

園田は外山を見つめたまま数秒間固ま

る。

園田は少し詰まりながら、

園田「わ、私どもは…、被告人が犯行当時、

心神喪失だったとして無罪を主張します。
その証拠としまして、精神鑑定医の先生から、診断結果をご説明頂くことにします」

外山は園田を見る。

園田は座って前を向いたまま。

（暗転）

○以下、全て真っ暗（音声のみ）

○電話…外山（電話を介した音声）

呼び出し音、受話器を取る音。

外山「もしもし、デスクですか？ 外山で

す。今、今日の裁判が終わりました。は

い、記事の方はデータベースに、はい」

外山「…それで、お願いがあるのですが…。

はい、この裁判の担当を、別の記者に変え

て頂けませんか？ はい、そうなのです

が、あまりにも酷い事件で…。はい、私に

はとても…。はい、記者として失格かも知

れません。ですが…。はい、詳しいことは

明日出社してから相談させて下さい。は

い、それでは失礼します」

○電話…園田（電話を介した音声）

呼び出し音、受話器を取る音。

園田「もしもし、浩平さんのお母さんです

か？ 弁護士の園田です。今日はお疲れさ
までした。大丈夫でしたか？」

園田「それで、お母さん…、ご相談の通り、
浩平さんが心神喪失で無罪の主張をしたの
ですが、その時の裁判員の方の反応をご覧
になりましたか？ 私が見る限り、正直、
芳しくありません。はい…、『またか』と
いう雰囲気さえあります。はい…、精神鑑
定医の診断に疑いはないのですが、証拠と
して採用される可能性が…。はい…、この
まま行けば、検察の求刑通りの判決になり
かねません…。はい、拘禁１３、４年くら
いになるでしょう」

園田「それで、ご提案なのですが、心神喪失
ではなく、心神耗弱かつ情状酌量で刑を軽

くする方向で進めませんか？　はい…、拘
禁刑にはなるのですが、浩平さんの今後の
事を考えると刑期は短い方が…。はい、力
量のなさを痛感しています。弁護士として
失格なのかも知れませんが。はい…、とにか
く全力を尽くしますので。はい、また打ち
合わせの日時については調整させて下さ
い。はい、では失礼します」

電話を切る音。

E
N
D

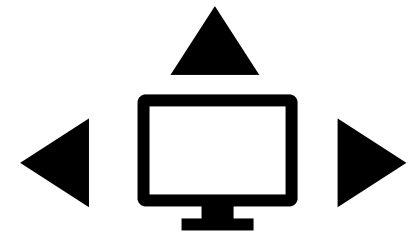
（2025年6月15日　初出）

（2025年11月22日　加筆・修正）



フィクション劇場
「化粧」
第二十四話

大太
大



【登場人物】

加納 琴子（かのう・ことこ）（29）：一般

社団法人「C o o o o」代表

小川 鈴（おがわ・すず）（28）：同スタ

ッフ

仁科 ひびき（にしな・ひびき）（28）：同

宅建建築士取得者

中谷 奏一（なかに・そういち）（45）：

同 監事

女の子（16）：家出して、加納に保護され
る

村松 恵子（むらまつ・けいこ）（35）：U

N F P A 駐日事務所スタッフ（メールの

み）

矢口 つぼみ（やぐち・つぼみ）（40）：U

N F P A 指定の公認会計士

職員（男35）「C o o o o」の情報開示

フィクション劇場 第二十四話「化粧」

請求に対応する都の職員。

部長（男48）：職員の上司

金井理沙（かない・りさ）（女30）：一般

社団法人「くりっぷ」代表（声のみ）

【あらすじ】

加納琴子は少女を保護する、一社「C o c o o ー」の代表。UNFPA（国連人口基金）の3年6億円の事業公募で最終に残る。加納は、先方指定の公認会計士の監査を受審するが、いくつかの項目で不備を指摘される。しかし、保護した女の子のプライバシーを守るためだと説明し、一定の理解を得る。また、先方要求の「他団体との比較」を行政からの信頼度と判断し、東京都に他団体を含む助成金関連資料の情報公開請求を行う。しかし、職員のプライバシー保護を理由に、全ての項目が白塗りの資料が渡される。結果、C o c o o ーは落選、加納の知り合いのNPO法人「くりっぷ」が採択される。加納は、その代表の金井理沙に問い合わせ、同じ資料を都知事選前に入手したと知り、選挙前後で対応が違っていたと分かる。そして、都庁では確認ごとに白塗りの「化粧」の部分がが増えていく書類が回される。

○雨の歩道（夜）

加納 琴子が傘を差して、道を歩いている。

道沿いの喫茶店の小さなひさしの下に、15、6歳の少女がしゃがんで、マホをいじっている。

琴子はしゃがんで、少女の上に傘をかざす。

琴子「…どうしたの？」

少女はしゃがみながら、横を向いて、マホをいじり始める。

琴子「…ずぶ濡れじゃないの」

琴子は少女に手を差し出す。

琴子「よかったら…、ウチに来ない？」

少女は琴子を見てびっくりする。

そして、その場から立ち去ろうとする。

琴子は、少女の腕を掴む。

少女は恐怖の表情で、琴子を見る。

琴子は笑みを浮かべて、

琴子「私が…、悪い人に見える？」

琴子は少女と一言二言会話をし、少女の肩を抱いて、その場から去っていく。

〇〇〇〇〇〇のスタッフルーム（同夜）

〇〇〇〇〇〇のスタッフルームで、小川鈴と仁科ひびきがパソコンの前に座って作業をしている。

配置は、窓側に琴子の席、向かって左に鈴、右にひびき。入り口は鈴側。

琴子が、スタッフルームに少し疲れた様子で入ってくる。

琴子「ふう〜」

ひびきが琴子に気づく。

ひびき「琴子、女の子は？」

琴子は歩いて自分の机に戻りながら、
琴子「とりあえずシャワーを浴びてもらって、サイズの合う服に着替えてもらって…、そんで部屋で休んでもらってる」

鈴「ひびき、あと、何部屋空いてるんだっけ？」

ひびき「二（ふた）部屋」

琴子は窓枠に後ろ手について、

琴子「はあ、相変わらず、ギリだね」

鈴「…で、琴子。あの子のこと何か分かったの？」

琴子「いや、まだ何も」

鈴「今日は遅いし、明日だね」

琴子「明日でも聞けないよ。私たちを完全に信用してくれてるわけじゃないみたいだし。もう少し、ゆっくり落ち着いてもらって、それからだよ」

ひびき「…しかし、これだけお金がないと、ウチらの活動もままならないね」

琴子「そうだね。ウチらは元々NPO法人だったけど、活動範囲を広げたいから、一般社団法人に鞍替えしたんだけどね」

ひびき「まあ、日本ではNPOって文字が付くと、ボランティアってイメージが強いっ

てのもあったんだけどさ」

鈴「そうそう。んで、ボランティアは無償って考え方だからね。正真正銘のボランティアだったらそうだけど」

ひびき「だから、私たちが活動費用の中からお給料もらってることに渋い顔をする人もいるし」

琴子「まあ、ウチらは法人だと言っても、利益を追わない会社だからね。フルタイムで活動してるから、私らもいくらはお金を貰わないと生活できないし。今でもカツカツだしさ」

鈴「それで、少しでも黒字になると、文句言う人もいるし」

ひびき「プラスになれば、その分、女の子を保護するためのお金に回せる訳だし。活動の規模を広げるために使うのにね」

琴子「そうそう。NPOは活動の種類が20種類の分野のどれか一つじゃなきゃいけないとか、NPOでも、法人格、つまり会社

組織の形じゃないとNPO法人と名乗れないとかさ。一般の人にもNPO全体の仕組みとか活動内容とかを知ってもらえるとい
いんだけど」

ひびき「そうだね。法人格を取ると、どこかと契約を結ぶ時とかに便利だからね。会社同士ってことになる訳だし」

鈴が机を両腕で叩く。

鈴「でも琴子！ それより、なにより、まずお金だよ！ 現ナマでなくてもいいからさ、土地を提供してくれて、そこに1億くらいの家をドンと建ててくれる人探そうよ！」

琴子「そんなの無理に決まってるじゃん。紫のバラの人でも無理だよ。期待していると、瞳が白くなるよ？」

鈴「でも、誰かの貯金だけど誰のか分からないってお金でもあれば、ワンちゃんあるかも知れないよ？」

琴子「何のワンチャンだよ！」

琴子は上を見て、

琴子「…あゝあ、でもウチだけのビル建てた
いなあ…」

ひびき「あんた、そればかりだね。それこそ、夢の…、また夢だよ」

○同 公募の話

鈴「そういやあ、琴子。お金って言えば、あんた、海外の公募とかに、いくつかエントリーしてなかったっけ？」

琴子「してるけど、ウチみたいな弱小は歯牙にもかけてないよ。ダメ元。さ、みんなも今日のまとめしよ」

三人は、P Cの前で作業する。

ひびき「お、琴子。あんた宛にメールが来てるよ。U N F P Aの駐日事務所の松村さんって人から。覚えある？」

鈴「何それ？」

琴子「国連の機関だよ。『国連人口活動基金』の略称」

鈴「えっ!? あの世界の人口統計とかやっているとところ!?」

琴子「そう」

鈴「何でそんなところから!? 何か話がデカくない？」

琴子「あんまり知られてないけど、ここは、女性への暴力撤廃とか、そういう活動もやってるんだよ。今年（注…2025年）は1975年の国際女性年の50周年記念事業ってことで、アジアとか各地域の国内で活動している団体の支援をするって話を聞いて。それで応募したんだよ」

琴子はひびきを見て、

琴子「で、なんて書いてあるの? どうせ

『お祈りメール』あたりでしょ?」

ひびきはPC画面を覗き込み、

ひびき「添付ファイルを見てくれて書いてある…。開いてみるね」

ひびきが添付ファイルを開く。

ひびき「ええっと…、『貴団体の活動計画書

の概要を検討した結果、最終審査へ進むことになりました』って？」

琴子「え!？」

3人が顔を見合わせる。

琴子「…マジか！ やったよ！ で、いくら貰えるの？」

琴子がひびきの方に駆け寄る。

鈴「琴子、まだ貰える訳じゃないでしょ？」

琴子「何言ってるの？ 第一関門クリアなんだよ？」

琴子がひびきのパソコンを覗き込む。

ひびき「補助金の額は3年間で…、6億円？」

一同、固まる。

琴子「…ビル…、立つよ…」

ひびき「ただ、そのための追加資料が必要だって書いてあるよ」

琴子「読んで！ 何でもするよ！」

ひびき「…えっと、向こう3力年の費用も含めた詳細な活動計画、過去3年間の活動報

告書とU N F P A 指定の公認会計士が確認した収支報告書、貴国で同様の活動をしている団体との比較、の3つ。いずれも2ヶ月以内に提出のこと：」

ひびき「あと、このメールでお分かりの通り、日本人スタッフがおりますので、全て日本語で大丈夫です：。担当は村松恵子さん、だって」

琴子が拳を握る。

琴子「よおし！ 6億ゲットするぞ！」

琴子「さて！ どこからやろうか！」

以後、全員少し早口で、

鈴「とりあえず、会計監査は時間がかかりそうだから、そこからだね。他はウチらでもできそうだし」

琴子「ひびき、あんた宅建と建築の両方持ってたよね？ ビルの見積もりの方、頼むよ。鈴は活動報告書関係をお願い。会計監査は私がやる！」

琴子「じゃあ、まず担当の人に連絡取ろう！

連絡先か何か書いてある？」

ひびき「うん、書いてある。矢口さんって女の。電話番号も書いてある。24時間対応で予約ができるって」

琴子はスマホを取り出す。

琴子「OK！ 番号読み上げて！」

ひびき「うん。0230」

琴子は番号を押す。

琴子「0230」

ひびき「90-90-90」

琴子は番号を押す。

琴子「90-90-90っと」

琴子がスマホを耳に当てる。

呼び出し音になる。

○矢口の事務所へ向かう途中の歩道（昼）

琴子と監査役の中谷が歩いている。

琴子が都知事選のポスターを見る。

中谷「加納さん、今度の選挙、気になりますか？」

琴子「もちろんです。こういう活動に理解のある人になってくれるといいな……って」

中谷「そうですね」

○矢口の事務所（昼）

琴子が事務所の扉をノックする。

矢口「はい」

矢口が扉を開ける。

矢口「あ、加納さん。お待ちしていました。

どうぞ」

琴子「失礼します」

琴子と中谷が来客用ソファに座る。

矢口が二人にお茶を出す。

矢口「資料を持ってきましたので、少し待って下さいね」

矢口が一旦離席する。

矢口が再び資料を持って部屋に入ってくる。

矢口が来客用の机に資料を置く。
いくつかのページに付箋が貼ってあ

る。

矢口がソファに座る。

矢口「先日はわざわざ資料をお持ち頂いてありがとうございます」

琴子「いえ、こちらこそ。急なお話ですいません」

矢口「かまいませんよ。公募用の資料ですから、こちらも心得ています」

矢口が中谷の方を見る。

矢口「加納さん、この方が監査の方ですか？」

琴子是中谷に手を向けながら、

加納「はい。私たちの監査を担当しています、中谷さんです」

中谷はお辞儀をする。

中谷「中谷と申します。よろしくお願い致します」

矢口「はい、よろしくお願い致します」

矢口「では、早速、本題に入りましょうか」

○同 監査

矢口「資料の方は、拝見しました。大きな問題は無いようですが、いくつかお聞きしたいことがあります。よろしいですか？」

琴子「はい」

矢口は資料ファイルの付箋のところを

開いて、ページを指でなぞる。

矢口「まず、給食費ですが、一部領収書のない支出が見られます。これは？」

琴子「はい。わたしどもでは落ち着いてきた女の子を外へ散歩に連れて行っています。基本、スタッフが同伴しますが、私たちが問題ないと判断した子には一人で散歩してもらっています」

矢口「…大丈夫なのですか？」

琴子「スタッフ不足で止むを得ないというのが正直なところです。ただ、今のところ、トラブルは起きていません」

矢口「それと領収書と、どのような関係が？」

琴子「女の子達も外に出れば、飲み物や甘いものの一つでも欲しがるでしょうから、一人一回当たり、１０００円を渡していただいて、必ずレシートを持ち帰るように伝えているんです。ですが……」

矢口「一人で散歩に出た女の子がそれを守ってくれない時があると……」

琴子「その通りです」

矢口「中谷さん、このようなことはよくある事なのですか？」

中谷「他のＮＰＯ法人さんの事はよく分かりません。ただ、以前、行政が支援事業を請け負った団体に対して、点検を行ったことがありまして、それで、いくつか領収書の不備があったと聞いています」

矢口「だからと言って……」

中谷が話を遮る。

中谷「そうです。だからと言って、私たちの不備が許されるものではありません。ですので、私たちの方では女の子から残金を返

してもらうことと、出金伝票とを合わせて
レシートに変わる出金の証左として認めて
います」

矢口「分かりました」

矢口が違う付箋の貼ってあるページを

開く。

矢口「では、もう一つお伺いしますが……」

琴子「はい」

矢口がファイルを指でなぞる。

矢口「旅費交通費の項目で、飛行機を利用さ
れているようですが、スタッフ以外の方の
チケットの半券が無いのはなぜですか？」

琴子「はい。飛行機ですから、誰が乗ったか
はもちろん分かっています。ですが、既に
卒業してる子もいます。その子の名前が残
ることで、今後の生活への影響がないか心
配しているんです。もちろん管理はしっか
りしています。でも、女の子の今後のこと
に関わる話なので、慎重にならざるを得な
いんです。この件は、中谷さんにも相談し

ました」

中谷「ええ。加納さんから説明を聞きまして、私として宿泊費に対して、法人一括決済を使う事を提案しました」

矢口「宿泊費に対して：、ですか？」

中谷「はい。私どもでは、飛行機を利用する場合は、必ず宿泊が伴います。法人一括決済をすれば、宿泊費の合計金額は分かりますから、飛行機に乗った人数も間接的に分かるということ、運用しています」

矢口「：分かりました。UNFPAにはそう伝えましょう」

琴子・中谷「ありがとうございます」

矢口「ただ、今回の公募は額が額です。今の決算報告のやり方では弱いと思います。領収書の管理とプライバシーの保護が両立できるとような仕組みを考えておいて下さい」

琴子「分かりました」

中谷「加納さんと一緒に考えてみます」

矢口「よろしく願いますね」

〇 C o c c o 〇 事務所（昼…矢口の事務所から直帰）

琴子がドアを開ける。

琴子「ふう、ただいま」

琴子が自分の机に向かう。二人は琴子を視線で追う。

鈴「おかえり、琴子。どうだった？」

琴子は自分のバックを机の上に置く。

琴子「とりあえず、及第点ってところ」

鈴「『とりあえず』ってのは？」

琴子「改善の余地ありってこと」

ひびき「女の子の名前が出せないってところ？」

琴子「そう。宿題だね」

琴子は二人を見回す。

琴子「みんなの方はどう？ ビルの方が気になるけど」

鈴「結局、そっちかよ」

琴子「まあまあ、ちゃんと鈴にも聞くから

さ。ひびき、どこまで出来たか教えてくれる？」

○同 ひびきの説明

ひびき「うん。こっちに来てくれる？」

琴子はひびきの机に行き、後ろでパソコンの画面を見る。

琴子「新宿でお願いしてたけど行けそう？」

ひびき「新宿は土地が高くて無理。坪120

0万円くらいする。土地買って終わりだ

ね」

琴子「新宿の周りは？」

ひびき「土地が安かったから中野を考えて

る」

琴子「中野!? ブロードウェイあたりはやめ

てよ、変なの多いから」

ひびき「大丈夫。具体的には中野坂上駅あた

り。新宿まで2駅だし、坪350万円くら

いで買える」

琴子「…いい感じだね。まあ、そんなもん

か」

ひびき「そんなもんか、じゃないでしょ、琴子！ これでもいろいろ調べたんだから！」

琴子「ごめん、ごめん」

琴子「…で、ビル自体はどんな感じになりそう？」

ひびき「50坪の土地が買えれば、1フロア40坪で5階建て、ってところだね」

琴子「まあまあかな。もっとお金があれば、10階建てくらい行きたいけど」

ひびき「琴子、それは無理」

琴子「どうして？」

ひびき「『容積率』ってやつで制限がある。

名前は聞いたことあるでしょ？」

琴子「何となく聞いたことはあるけど…」

ひびき「『容積率』ってのは、土地に対する建物の延べ床面積の割合のこと。中野坂上駅の交差点あたりは容積率が400%くらいだから、50坪の土地なら延べ床面積は

50の4倍で、200坪が限度。1フロアの面積が40坪で、最大5階までってこと」

琴子「50坪の土地に1フロア40坪なの？」

ひびき「そう。これは『建ぺい率』ってやつで制限がかかってる」

琴子「そっちにもあるのか」

ひびき「うん。『建ぺい率』ってのは、土地の広さと建築面積の割合のこと。土地50坪で、建ぺい率80%なら、 50×0.8 で40坪が限界」

琴子「なるほどね」

琴子「ビルの中のレイアウトは？」

ひびき「とりあえず5階建てとして、1階は事務所と来た女の子の相談コーナー」

琴子「相談コーナーは個室だよな？」

ひびき「もちろん」

琴子「上は？」

ひびき「2階の半分はみんなで食事とかでき

るような共用スペース」

琴子「じゃあ、キッチンも欲しいね」

ひびき「私もそう思ってる。同じフロアにウチらの宿直室と洗濯スペース。セキュリティの問題もあるから、三人の内、誰かが常駐しないといけないかもってことで」

琴子「その辺はスタッフの増員とかも考えないといけないね」

ひびき「そうだね。2階の残りと3階から5階は女の子の部屋。もち個室。各々の階に共用で洗面所とトイレとシャワー。5階に出来るなら、4階に小さい共用スペースがあってもいいかもね」

琴子「で、何人くらい入れる？」

ひびき「基本、短期で休んでもらうだけだから一部屋5畳で見て、全部で32〜3人くらい。ちょっと狭いけどね」

琴子「車は止められそう？」

ひびき「土地の形にもよるけど、2台は無理。バン1台がいいところ」

琴子「分かった。んで、この仮定でどのくらいかかりそう？」

ひびき「土地で1億7500万円、建物で2億3400万円、内装で1億5000万円、合わせて5億5900万円。不動産取得費用と消費税が乗っちゃってちょうど6億くらいだね」

琴子「：ギチギチだね。どっか削らないと：」

ひびき「まあ、場所がいいからね。ベットとかの備品もあるから、もうちょっと土地の安い高円寺あたりも考えてる」

琴子「分かった」

ひびき「でも、琴子：、これじゃあ、補助金をいっぺんに使うことになるけど、大丈夫なの？」

琴子「早めに建てて、女の子をたくさん保護できれば、それだけ活動実績も大きくできるでしょ？ この線で行こうよ」

ひびき「分かった。もう少し詰めてみる」

琴子「お願いね」

○同 鈴の説明

琴子が鈴の方に歩み寄る。

琴子「鈴、おまたせ！ 資料の方はどう？」

鈴「活動報告書とかは全然簡単なだけで

：、同様の活動をしてる団体との比較ってのが、もやっとしててさ：」

琴子「うーん：。つまり、比較するってことは、何かの差を向こうが判断材料にするってことなんだろうと思うけど：、その『何か』が分からないってこと？」

鈴「そう、琴子の言う通りだよ」

琴子「UNFPAの村松さんに聞いてみた？」

鈴「聞いてみたけど、選考項目に関わることだから、教えられないって」

琴子「そう言われると仕方ないな：」

鈴「琴子、何か分かりそう？」

琴子、考える。

琴子「…多分…、だけど…、選ぶのは1つの国で1つの団体とかにしてるんじゃないかな？ 偏るといろいろ文句が出そうだし、各々の国で問題とかそういうのは違うだろうから。なら、比較する意味が出てくるよね？」

鈴「じゃあ、日本にライバルがいるって事？」

琴子「その可能性が高いと思う」

鈴「でも、だったら余計に何を調べれば…。
大体どこも活動はオープンになってるでしょ？」

両者、悩む。

琴子「鈴…、逆に考えてみたらどうなるだろう？」

鈴「逆？ 何が逆なの？」

琴子「私たちが選考委員だったらってこと」

鈴「でも、選考って言っても、自分たちのや
っている活動以外のことはあまりよく知らないよ」

琴子「いや、活動内容とかじゃなくて、単に6億のお金を出すってことだけに限ってみて」

鈴「そりゃ、きちんと活動計画を実行してくれるところに出すよ。当たり前じゃん」

琴子「私もそう思う。…つまり言い換えると『信用』できるところに出すって考えられない？」

鈴「そっか。私たちが他よりも信用してもらうための比較か。なら分かる」

鈴は手を頭に回して、

鈴「分かるけど…、これまたもやっとしてるよね…」

琴子「そうだね。世間には信用してもらってると思ってるけど、他に何かあるかな？」

鈴「…寄付してくれる人の人数とか、…サポートしてくれる企業とか？」

琴子「後は…、行政の助成金とかかなあ？」

鈴は琴子に顔を向ける。

鈴「琴子！ その助成金がいいんじゃない？」

つまり、お上から信用されてるってことだからさ」

琴子「でも、助成団体はHPで公表されてるから見りゃ分かるし、助成金額も公表されてる。：最大2600万円で、どこもほぼ上限までもらってる。助成金だけじゃ差が付かないよ」

鈴「でもあれって前借りするようなことができたでしょ？」

琴子「ああ、概算払いのこと？ 助成金は後で貰うけど、あらかじめお金もらわないとできないことがあるから、そのための仕組みだね。ウチも金欠だから、早めに申請を出してもらっているよ。もち理由は必要だけど。それがどうかしたの？」

鈴「さっき琴子言ってたことだよ。前借りできるってことは、行政に信用されてるってことにならない？」

琴子「うーん、考え方としては悪くないと思うけど……。まあ、概算払いは理由がOKじ

やないと貰えないから、そういう意味では計画実施能力みたいなものには当てはまるかもね」

琴子、考える。

琴子「…とりあえず悩んでてもしょうがないからやってみるか」

鈴「よし。決まりだね。…でも、他のところの資料って見れるんだっけ？」

琴子「情報公開請求ができるはずだから、役所行って聞いてみるよ。そっちは私がやるから、二人は作業を進めておいて」

ひびき・鈴「OK！」

〇都庁（昼）

職員「情報公開請求ですね。都にお住まいの方でしたら、出来ますよ」

琴子「じゃあ、すぐに申請します。いつ貰えますか？」

職員「原則30日以内と決まっていますから、問題なければそれまでには…」

琴子が話を遮る。

琴子「これ、重要なことに使うんです！
で
きるだけ早くお願いします！」

職員は気圧される。

職員「わ、分かりました。善処します」

〇〇〇〇〇のスタッフルーム（昼）

3人はPCに張り付いている。

琴子「みんな、資料の方は大丈夫？」

ひびき「こっちは間に合いそう」

鈴「こっちも大丈夫」

琴子「後は、例の比較のやつだけだね。連絡

あったから、取りに行ってくるよ」

鈴「すぐ戻ってきてよ、琴子！」

琴子「あたぼうよ！」

琴子は走ってスタッフルームを出てい
く。

〇都庁（3週間後…昼）

職員「加納さん、お待たせしました。これが

請求頂いた書類になります」

琴子「ありがとうございます」

琴子が書類を4枚（団体が4つとして
各々1枚ずつ）受け取る。

しかし、4枚とも承認者、団体名、請
求金額、理由が全部白塗りで分からな
い。

琴子は書類を凝視する。

職員に向かって、

琴子「何ですか!? これ！ 何にも分からな
いじゃないですか！」

職員「いや、私におっしゃられても……」

琴子「理由を教えてください！」

職員「い、いや。私が承認した訳では……」

琴子「じゃあ、上の人を呼んで下さい！」

職員「……」

職員は渋々、

職員「簡単に言いますと、プライバシーの問
題ですよ」

琴子「プライバシーって……、どういうことで

すか!？」

職員は承認者の欄を指差して、

職員「まず、承認者の名前を出してしまうと、誰が承認したかが分かってしまいます」

琴子「それは当たり前でしょう？ それに問題があるのですか？」

職員「はい。もし、承認者が分かってしまうと、助成から漏れた団体が、自分たちを落としたのはこいつだ、とSNSなどで非難する可能性があります。：私が言うのもなんですが、行政は悪者扱いされやすいので：。承認者が身バレして家族なども標的にされるのは困るのです」

琴子は、助成団体の項目を指差して、

琴子「では、他の項目はいいんじゃないですか？ 少なくとも助成する団体はHPで公開されているでしょう？」

職員「はい。ですが、概算払いの申請をしているということは、基本的に金銭的なやり

くりが難しいところだと、都民の方は思っているはずですよ。ですから、先にお金を貰わなくても活動していけるなら、なぜ先に貰うのか？　いうことになってしまいました。ですので、団体名も出せないのです」

琴子「…」

職員「加えて、理由や金額が分かってしまうと、もっと安くできないのかとか、みなさんの今後の活動に支障が出かねないといっているんです。その辺を考慮してのことなのですが…」

琴子「考え方は分かりますが…、いくらなんでもこれは…」

職員は少し、身を乗り出して、周りを見回す。

職員は、小声で、

職員「…ここだけの話にしてもらいたいのですが、いいですか？」

琴子「理由が分かるのでしたら」

職員「実は、あなたの少し前に同じ書類の公

開請求をした方がいらっしやいまして…」

琴子「まったく同じですか？」

職員「はい。まったく同じものです。その時にもこの形で書類をお渡ししているんです。行政としては、請求者によって開示範囲が異なるというのは大問題になります。私どもとしては、心苦しいところではあるのですが。行政サービスも大切ですが、職員のプライバシーも守らなければなりません。申し訳ありませんが、ご了承下さい」

〇 〇 〇 〇 〇 のスタッフルームへ結果発表

表…夜

琴子は椅子を揺らしている。

鈴「琴子、そろそろ結果発表だけど、大丈夫

そう？」

琴子「うーん、やるだけはやったけど…」

ひびきがPCを覗き込む。

ひびき「あ、ホームページに結果出たよ！」

琴子と鈴がひびきのPC画面を覗き込

む。

琴子「どう？」

ひびき「やっぱダメだった……。『くりっぷ』

って一社（一般社団法人の略）が受かった
みたい」

琴子「え!? 理沙ちゃんどこ？」

鈴「琴子、知ってるの？」

琴子「うん！ 昔、イベントで会ったことが
ある！」

ひびき「あっ：と、琴子にメールが来てる
よ。知らないメアドだけど。村松さんって
人から」

琴子「あの、村松さん？」

ひびき「それっぽい」

琴子「ちょっと見せて」

琴子は村松からのメールを読む

琴子「村松です：」

村松（メール…声）「プライベートアドレス
から送ります。ご承知の事とは思いますが、
今回、○○○○○さんは残念ながら

落選しました。私はみなさんの活動計画を高く評価していたのですが、選考委員の間では、お金の管理の部分と、他の団体との比較のところで評価が芳しくなかったと聞いています。これにめげず、これから活動頑張ってください。陰ながら応援しています」

3人は力が抜けて椅子に座る。

琴子「やっぱ、その辺だったかあゝ 薄々は感じてたけど……」

鈴「でも、お金の管理は別として、比較のところはどこも同じじゃないの？ 資料、白塗りだったでしょ？」

ひびき「そうだね……。『くりっぷ』はどうしたんだろ？」

琴子「聞いてみる！」

琴子は電話をかける。

○同所 電話

呼び出し音が鳴る。

理沙（声）「もしもし、『NPO法人クリツ
プ』です。」

琴子「もしもし、理沙ちゃん？ C o c o i
o の加納だけど」

理沙（声）「ああ、琴ちゃん、久しぶり」

琴子「あの…、UNFPAの公募の件、見た
んだけど…」

理沙（声）「琴ちゃん、見たんだ！ ウチみ
たいなところが受かるなんて夢見たいだ
よ！ すっごい額だし！」

琴子「…実はウチも応募しててね。落ちちゃ
ってさ…」

理沙（声）「そうなんだ…。それは残念だっ
たね」

琴子「それで、理由が他の団体との比較が弱
かったって聞いたんだけど、理沙ちゃんと
こはどうしてたの？」

理沙（声）「何を比較したらいいのか、いろ
いろ迷ったんだけど、やっぱり行政からの信
用度かなって思って。助成金は、どこもい

っぱいいっぱいもらうでしょ？　けど、概算払いの資料なら何のためにお金を使うか理由が書いてあるから、コスパとかも含めて信用してもらってるってアピールしたよ。琴ちゃんのところも貰った」

琴子「え？　…ってことは、私たちの概算払いの額とか知ってたの？」

理沙（声）「うん。書類の開示請求でもらったから」

琴子「ちょっと待って。ウチも取ろうとしたけど、全然、分らないのが出てきて。職員の人が、請求者によって開示範囲が違うのは問題だからって言ってたけど…」

理沙（声）「琴ちゃん、いつ、取ろうとしたの？」

琴子「最終審査が通ったって、連絡があってから。9月だよ」

理沙（声）「じゃあ、タイミングが違うね。ウチはいつも概算払いの許可が出たあたりで請求してる。6月の都知事選で知事が変

わったから、方針変更でもあったんじゃない？」

琴子「…」

理沙（声）「いずれにせよ、ウチが補助金を受けられることに変わりはないから、琴ちゃん
の分まで頑張るよ。たまに協力してもらう
ことがあるかも知れないんで、よろしく
ね。あ、ちゃんとお礼は払うからさ。悪い
けど、今からお祝いパーティーなんだ。じ
ゃあね！」

電話が切れる。

琴子「…」

○都庁（昼）

職員「課長、情報開示請求が来ていますの
で、ご確認頂けますか？」

課長「この前のヤツとは別のか？」

職員「そうです」

課長が資料を見る。

開示される部分は、承認者、団体、金

フィクション劇場 第二十四話「化粧」

額の3つ。

課長「承認は、いつものルートか？」

職員「はい。課長の次は、部長、最終承認は

局長です」

課長は承認者の欄を指して、

課長「ここに『化粧』をして、部長に回して

くれ」

職員「分かりました」

職員が去ろうとしたところで、

課長「もちろん、白塗りだな」

E
N
D

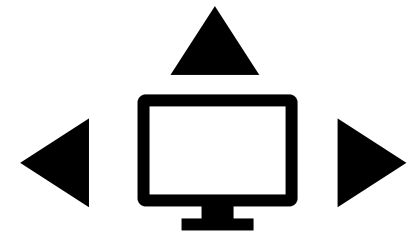
(2025年6月15日 初出)

(2025年11月22日 加筆・修正)



フィクション劇場
「危険運転」
第二十五話

大太
大



フィクション劇場 第二十五話「危険運転」

【登場人物】

福村 習仁（ふくむら・しゅうじ）（36）：

主人公

福村 香（ふくむら・かおり）（35）：習仁

の妻。交通事故により死亡

福村 里奈（ふくむら・りな）（5）：習仁の

娘。交通事故により死亡

福村 龍次（ふくむら・りゅうじ）（32）：

習仁の弟。

井口 清（いぐち・きよし）（49）：福村の

弁護士。

館山 正光（たてやま・まさみつ）：裁判

長。

速水 翔一（はやみ・しょういち）：事故の

犯人

検察側弁護士

フィクション劇場 第二十五話「危険運転」

弁護側弁護士

自動車店の店主

同 店員 1

裁判員

【あらすじ】

福村習仁は、妻の香と娘の里奈を、暴走した速水翔一の車に轢かれ、失う。

そして裁判前、弁護士の井口清は福村に危険運転致死での起訴は、故意、つまり「相手に死ぬことを要求したかどうか」を立証する必要があり難しいと話すが、福村は同罪での起訴を決断し、意見陳述に立つ。

福村は、刑法の考え方は「こんなことをしてはいけない」とメッセージを出す、というのであれば、判決で示して欲しいと訴える。

裁判長の館山正光は、危険運転致死は判例が少なく、これから積み重なることで理解が得られると話すが、福村は、では自分の妻と娘は判例になるために死んだのか、と問う。

2年6ヶ月後、福村は危険運転致死の要件に当たる可能性が高い路上駐車をして、出所した速水の暴走車に追突事故を誘発させる。

福村は追突された車内で、エアバックを妻と娘のように笑顔で抱きしめて絶命する。

○事故（音声のみ）

画面は暗い。

ブレーキ音（キキィー）

衝突音（ドン）

救急車のサイレン（音）

○事故現場・画面あり（夜）

現場に救急車、ライトを回す警察車

両、事故を起こした黄色のスポーツカ

ー（人を轢いたので、変形はあまりし

ていない）。

○福村習仁の家（昼）

仏壇に手を合わせる、弟の龍次。

仏壇には白木位牌が2つある。

一つには「俗名 福村 香 行年 三十

五歳」

もう一つには同じく「俗名 福村 里

奈 行年 5歳」と書かれている。

習仁は横に居る。

龍次「習仁兄さん…、こんなことになるなん

て…」

習仁「ああ…。こっちが気をつけていれば、交通事故なんて…、って思ってたんだがな…」

龍次「そうだね…。誰にでもあることだって話には聞くけど、まさか身内に…ってのはね」

習仁「…ところで、龍次。今日は一人なんだな」

龍次は少し目を伏せる。

龍次「娘には…、分からないからね…」

習仁は察する。

習仁「…悪いな」

龍次「気にしなくていいよ、兄さん」

龍次は習仁の顔を見て、

龍次「ところで、兄さんはテレビの取材とか結構、受けてるみたいだけど…」

習仁「ああ…」

龍次「大丈夫なの？」

習仁「大丈夫な訳ない。知らない奴らがネッ

トでいろいろと、な……。毎日、自分の気持ちを押し殺してるよ」

龍次「そこまでして……ってことなの？」

習仁「そうだ。矢面に立つのは覚悟の上だ」

龍次「でも、誰のために？ 二人のため？

それとも、こういうことが起きないようにするため？」

習仁「……オレのためだ」

少し、間。

龍次「で……裁判の方は？」

習仁「明日、弁護士先生と会うことになってる。その後に検察官の方と打ち合わせをする」

龍次「二人の無念を晴らせるといいね」

習仁「……ああ。きっちり償ってもらおう」

（以下、セリフの「福村」は福村習仁）

○井口弁護士の事務所（昼）

福村と井口は向かい合って座っている。

福村「えっ？ 無理なんですか？」

井口「無理だと言っている訳ではないんですよ、福村さん。危険運転致死罪で起訴するのは難しいということなんです。これは検察官の方でも同様の考えだと思います」

福村「でも、どうして？ 向こうは127kmのスピードで突っ込んできたんでしょ？ そんなスピード普通出さないじゃないですか。明らかに危険運転でしょう？」

井口「：福村さん、危険運転致死罪が規定されている法律を読みましたか？」

福村「もちろん、読みました。『制御するところが困難な高速度で自動車を走行』ですよ？ 横断歩道を渡ろうとした二人を避けきれなかったのだから、当然、当てはまるでしょう？ この法律の適用が難しいという話は知っていますが、そもそも具体的な速度が書いていないから、曖昧だからじゃないんですか？」

井口「書き方が曖昧に見えるのは、私も承知

しています。ただ、曖昧なのは理由があるからなんです。むしろこういう形でしか書けないですよ」

福村「なぜですか？」

福村は、少し身を乗り出す。

井口「…」

福村「なぜなんですか？」

井口「…」

井口は息をはく。

井口「…それほどおっしゃるのでしたら、お話しします。ただし、福村さんをご立腹させるかも知れません。それでもかまいませんか？」

福村「かまいません」

井口「…分かりました。それではご説明しましょう」

少し、間。

○同（危険運転の規定）

井口「まず、仮定の話で恐縮ですが、もし、

この法律に速度130km以上という規定があったら、福村さんは、今回の事故は、危険運転でないと納得されますか？」

福村「それは：、仮定の話ですから、何とも言えません」

井口「そうですね。では、120km以上という規定になっていたとします。すると、今回の事故は危険運転に当てはまります。しかし、今回追突してきたのはスポーツカーです。これが110kmで走行してきた大型トラックなら危険運転に当たらないということになります。それで納得されますか？」

福村「：それも仮定の話です。そもそも、そういうスピードを出しているのが悪いのではないのですか？」

井口「おっしゃる通りです。法定速度を守っていないのは法律違反ですが、仮定の話が起きないとも限らないのです。車の車種、例えば乗用車と大型トラックでは、『制御

することが困難な高速度』となる速度は同じではないでしょうか？」

福村「：そうだとは思いますが：」

井口「あと、法律の7項の信号無視の規定もそうです。『殊更（なおさら）に無視』というのも、具体的な数値などが示されていないという意味では曖昧です。ではここで、『尚更に無視』というのを、信号のある場所から何m前でブレーキを踏むか、置き換えて、この後の文言の『重大な交通の危険を生じさせる速度』と組み合わせると、どのくらいのスピードで信号の何m前でブレーキを踏むことなのかを車種を問わず、一律に規定することが難しいのです」

福村「では、排気量などで、分ければいいのではないですか？」

井口「分けることは不可能ではないでしょう。ただ、そうすると自分が普段乗っている車の排気量で差が付くことになります。購入された方は、乗りたい車に乗っている

のであって、それが事故になった場合に他の車と比べて危険運転の可能性が高くなり
ますよ、と言われても納得はされないで
しょう。トラックやバスも同様です。仕事で
使わざるを得ないのに、抵触の可能性が高
くなるというのは、その方々の生活に関わ
りますから……」

福村「……」

井口「それに、路面の状況、例えば濡れてい
るか乾いているかなども要素に入ってきてま
す。そうなれば、どこまでが濡れているの
か、乾いているかを規定しなければなりま
せん。場合分けが多すぎるのです。多分、
いくら場合分けをしても抜け漏れが生じて
しまう可能性が高いのです」

福村「……」

井口「ですから、そういう要素を全て加味し
て判断しないといけないのです。あのよう
な文言になっているのは、そのためなので
す」

福村「…納得はしていませんが、理解はしました。ですが、全て否定されているようで、あまり気分は良くありません」

井口「そうだと思います」

福村「では、なぜこのような判断が難しい形にしたのですか？ 危険運転より罪の軽い『過失運転致死罪』の拘禁を危険運転並みに重くすればいいのではないのですか？」

井口「はい。そのご説明も出来ます。ただ…、福村さんのご気分をさらに悪くすると思います。…かまいませんね？」

福村「…はい。話して下さい」

○同（故意犯）

井口「私は例え話でお伝えするのがやりやすいので、そうさせて頂きますが」

井口は右手を前に出して、

井口「例えば、福村さんが歩道を歩いていて」

井口は左手を曲げて、左手の前に出し

て、

井口「向こうから歩いてきた人と」

井口は右手と左手の指先をくっつけて、

井口「肩がぶつかって」

井口は左手を少し下げて、

井口「その方がよろけて、打ちどころが悪くて不幸にも亡くなってしまったとします。その時に福村さんは罪に問われるとお考えですか？」

福村「…偶然ですし…、こちらにその意図はないですから…。ちょっと分かりません」
井口「この場合は、ほぼ『過失致死』になります。50万円以下の罰金です。拘禁はありません」

福村は驚く。

福村「拘禁がないのですか!？」

井口「罪としてはそうです。ただ、ご遺族への謝罪や補償などはあるかと思いますが」

福村「…それで？」

井口はナイフを持って、刺す仕草をしながら、

井口「同じ状況で、福村さんがすれ違いざまにその方をナイフで刺して、殺害したとします。この場合はどうでしょう？」

福村「私は、そういうことはしないと思いますが……、殺人ですか？」

井口「ほぼそうなります。殺人の判決が確定すれば、5年以上の有期刑です。無期拘禁や最悪、極刑もあり得ます」

福村「……こう言うっては失礼なんでしょうが、随分と差があるものなんですね」

井口「そうです」

福村「なぜなんですか？」

井口「これは、『故意犯』と『過失犯』の違いです」

福村「意図して起こしたか、そうではないのか、ということですか？」

井口「その認識で大体合っています」

福村「つまり、過失の場合は罪が軽くて、故

意に起こした場合、罪が重くなると……」

井口「そうです。これはご理解頂けますか？」

福村「多分、大丈夫だと思います」

井口「では、一番最初の例に戻らせて下さい。私は福村さんが肩をぶつけた話をしましたね。これが、福村さんが急いでいて走っている状態で」

井口は両手の指先をパーンとぶつけて、

井口「パーンとぶつかって相手が亡くなったとします。これはどうですか？」

福村「それは、故意ではないですから、『過失致死』になると思いますが？」

井口「この場合はそうなると思います。では、これを自動車事故に置き換えてみて下さい。『危険運転致死罪』というのは、先ほどのパーンとぶつかった時の状況によつては、福村さんが『故意』に行つたと見なせる場合があるとしている法律なのです」

福村「ち、ちょっと待って下さい。私にそんなつもりはないですよ？　それはあまりにも乱暴ではないのですか？」

井口「そうです。この法律は異例な法律なのです」

福村「……」

井口「確かに近い人が交通事故で亡くなつたとすれば、どういう理由であれ、遺族の方からすれば殺人と同じでしょう。相手のドライバーが飲酒やスピードの出し過ぎをしていれば尚更です。しかし、『過失運転致死罪』はあくまで『過失犯』に対する罪ですから、大きな量刑を課せば、法律全体の整合性が崩れてしまうのです」

福村「……」

井口「ですから、それらの行為に対して今までより重い罪を課そうとすると、『故意』という位置付けが必要になります。その位置付けを規定するための法律なのです」

福村「……しかし、先ほどの例だと、私は故意

に何も悪いことはしていません。スピード違反や赤信号無視、飲酒運転は法律違反で、しかもそれを分かってやっているなら故意なのでしょう？ その話とは別じゃないのですか？」

井口「おっしゃる通り、それらの行為は法律違反です。ただ、それは道路交通法違反であって『危険運転致死罪』で認定できる『故意』ではないのです」

福村「：では、この場合の『故意』というのは、一体何なのですか？」

井口「この場合の『故意』とは『結果を要求しているかどうか』です。危険運転致死罪なら『相手に死ぬことを要求したかどうか』です」

福村、テンパる。

福村「：」

井口「つまり、福村さんが走ってぶつかったことが、相手に死ぬことを要求したかどうかを立証しなくてはならないのです。しか

し、それだけ言われてもどこを切り口にすればいいのか分かりません。ですから、その類型として、法律に8つの項目が示されているのです」

福村「…」

井口「それに、刑法の考え方は、結果に対して処罰することもあります。『こんなことをしてはいけない』というメッセージを出す役割もあるのですよ」

福村は身を乗り出して、

福村「メッセージ!? 私だけならまだしも、妻や娘のことをいろいろほじくり出して、ネットにさらしたり、誹謗中傷まがいの罵詈雑言を書き込んでいる連中に…」

福村はテーブルを叩きながら、

福村「何を伝えろって言うんですか！」

井口「…」

福村「…井口さんには私の気持ちが分からないのですか？」

井口「…分かりません」

福村「えっ？」

井口「今、私が福村さんの気持ちが分かるな
どと言うのは、福村さんへの侮辱だと思っ
ています。軽々にそんなことを口に出すの
はおこがましい」

福村「…」

井口「冷血無比だと思って頂いてもかまいま
せん。私は弁護士です。法律に従ってしか
動くことができない人間です…」

福村「…」

井口「…ですが、法律の範囲内で最大限のこ
とはできます。ご不満があるのでしたら、
外して頂いて結構です」

福村と井口は目を合わせる。

福村「…分かりました。お願いします」

井口「ありがとうございます」

○同（今後の件）

井口はメモ帳を取り出して、

井口「では、今度の検察官との打ち合わせの

話になりますが、『被害に関する心情等の意見陳述』というのがありまして、今の福村さんのお気持ちを公判でお話することが出来ます。検察官への申請が必要になります。すが、どうされますか？」

福村「もちろん、申請します」

井口「分かりました。あと、これはできれば、なのですが……」

福村「何ですか？」

井口「この法律に関する資料に目を通して聞いて頂きたいのです」

福村「？　でも、法律の文言とかは既に……」

井口「いえ、法律そのものではなく、法律が出来る過程の資料です」

福村「過程？」

井口「はい。法律を作る際には、法務大臣から法制審議会というところに諮問、簡単に言いますと、検討依頼が出されます。そこで、何回か会議が開かれるのですが、その議事録です」

福村「そういうのがあるんですね」

井口「はい。全部ですと大変かも知れませんが、この法律は平成25年に独立した法律になりましたが、最初は刑法の一部改正として平成13年に規定が出来ました。その時、3回会議が開かれましたが、最後の会議のものが分かりやすいかと思います。今の規定とは少し異なりますが、考え方は参考になるかと思います」

福村「ありがとうございます。見てみます」

○習仁の家（夜）

習仁がノートパソコンで法務省のHP
を見ている。

平成13年の法制審議会の第3回の議
事録をクリックする。

福村「テキストファイルか…、大分前だから
な…」

習仁はテキストファイルを開いて読
む。

福村「『自動車の進行を制御することが困難な高速度』について：

『道路そのものの状況に依じて的確な操作ができない意味』、

『車の車種も考慮する』、

『車種、車の状況であるとかいったことを一切除外して、一つの道路については一つの高速度しかないというものではない』」

福村「：井口さんの言ってた通りだな」

習仁は次を見る。

福村「『進路に沿って自車をコントロールすることができるとかという判断基準』」

福村「：直線で、スピードを出した事故があったけど、『進路に沿って』だから、車線からはみ出さなかったらいいってことなのか：？」

福村「『仮に人が出てきたら止まれるかどうかという、判断ではない』」

福村「えっ？　こういう時にぶつかっても、

高速じゃ無いってこと？」

福村「…」

習仁はまた、画面を見る。

福村「『駐車車両があつた場合は、避ける必要があるから、カーブと同視できるので、カーブが曲がれないのと同じ』」

福村「この場合は、カーブで車線から逸脱するのと同じと見て、適用される可能性があるのか…」

○裁判所（昼）

裁判所外観。

○法廷（同）

福村は、検察側の後のパイプ椅子に座っている。

被告側には速水がふてぶてしく座っている。

裁判長（館山）「それでは、裁判を始めます」

×

×

×

○裁判所の外の歩道（同日…昼）

福村と井口は第一回目の裁判を終えて、裁判所から出て、歩いている。

福村「井口さん、やはり向こうは過失致死で来ましたね」

井口「そうですね。検察官と協力してやるしかないです。次は福村さんの番です。よろしくお願いします」

福村「出来るだけのことはします」

○裁判所（法廷・次の審理…昼）

館山「それでは、開廷します」

館山「今日は、検察側から刑事訴訟法第29条の2に基づき、被害に関する心情等の意見陳述の申し出がありましたので、これを許可します。参考人、証言台へ」

福村が証言台に向かう。そして着席する。

館山「お名前をどうぞ」

福村「福村習仁と申します」

館山は、手元の書類を見せながら、

館山「住所、その他は提出頂いた書類に記載された内容で間違いないですね？」

福村「はい」

館山「それでは、お話し下さい」

福村は手を挙げる。

福村「裁判長。立って話をしたいのですが、かまわないでしょうか？」

館山「そちらの方が話しやすいのであれば、それでかまいません。ただし、声がマイクに入るようにして下さい」

福村「ありがとうございます」

福村は立って、マイクを伸ばす。

福村は一呼吸置く。

福村「私は、被害者の家族の福村習仁と申します。今から、少しお時間を頂き、私の思うところをお話させて頂きたいと思ひます」

福村「まず、私は被告に対し、危険運転致死罪の適用を求めます」

福村「今までの裁判に出席し、また、弁護士の先生、及び、検察官の方からお話を聞いて、適用が難しいということは承知していますし、頭では分かっています。しかし、どうしても許せないのです」

福村「なぜなら、私の妻と娘に何の落ち度もなかったからです。『車は走る凶器』とも言われますが、誰とも分らない人間の、その凶器が私の家族に向けられる理由がないからです。こういう事情であれ、人が死んでいるのは事実なのです。人が死んでいるのですよ？ 私にとって、それは殺人に等しいのです」

福村は裁判長や裁判員を見渡して、

福村「みなさんは動画サイトにあるニュースのランドの交通安全CMをご覧になったことがありますか？ 10年ほど前に作られたものだそうです」

福村「2台の車が衝突する寸前にストップモーションになって、お互いの運転手が外に

出てきて会話をします。二人とも後悔して謝ります。もう止めることが出来ないのが分かっているのに、です。そして、車に乗り込んで時間が動き出し、衝突します。しかも、一台の後部座席には男の子が座っています。何も知らずに……」

福村「この動画のタイトルは『ミステイク』というのだそうです。この二人はお互いに間違いを認めて後悔しています。ですが、今回の裁判の中で、私には被告から、その後悔の情が見えません」

被告席の速水が横柄な態度で座っている。

速水「……」

福村「この裁判が始まる前に、弁護士の先生から、刑法の考え方は処罰をする他に、『こんなことをしてはいけない』というメッセージを出す役割もあると聞かされました。もし、この裁判で危険運転致死罪が適用されなければ、どのようなメッセージに

なってしまうのでしょうか？　このくらいなら大丈夫だというようなメッセージになってしまうのではないのでしょうか？　私からすれば先ほどのCMの方が、よっぽど伝わるものがあると思っています」

福村「もし、メッセージを出す役割、というのであれば、こちらの主張通りの判決で、それを伝えて下さればと思います」

福村は一礼して座る。

館山「ありがとうございます。本日の審理はこれで終わりになりますが、私から福村さんに少しお話したいことがあります。よろしいですか？」

福村は少し驚く。

福村「私は…、かまいませんが…」

館山「検察側はよろしいですか？」

検察側弁護士「はい。かまいません」

館山「弁護側は、どうですか？」

弁護側弁護士「裁判長がそうおっしゃるのでしたらかまいません。ただ、裁判員の方も

いらっしやいます。被告が不利になるような発言はご遠慮下さい」

館山「分かりました」

○同（判例）

館山「さて、福村さん。福村さんは『判例』という言葉をご存知ですか？」

福村「：今までに判決が出た裁判の記録のことでですか？ 結果や内容も含めて」

館山「その認識で大丈夫です」

館山「私たち裁判官は、担当している事件の内容はもちろん、その判例についても判断材料の一つとして使います。理由は、憲法第14条の『法の下の平等』の原則に基づいています。簡単に言えば、同じような罪を犯した人には、同じような刑罰を与える、他の要因によって差をつけない、と言うことです。そのために判例を参考にします」

福村「：」

館山「判例というのは、私たちの先輩方が積み上げて来た道標のようなものです。そのおかげで、今の判決がより正確に、法の下
の平等に基づいた判断が出来ると考えています」

福村「…」

館山「しかし、この『危険運転致死罪』については、刑法の一部としての改正がされてから24年ほど、独立刑法になってから12年ほどです。どちらかと言えば、まだ新しい法律です。ですから、まだ判例が多いとは言えません」

館山「加えて、今までのこの公判から福村さんもご承知のように、『過失犯』と『故意犯』のどちらかに判断するのが難しい裁判です。この辺りはご存知ですか？」

福村「はい。以前、弁護士の先生から聞きました」

館山「ありがとうございます。これについては、私たち裁判官も含め、弁護士、検察

官、また法学者のみなさんは、その異例さゆえの難しさを承知していますし、その認識はほぼ同じでしょう。ただ、福村さんも含め遺族のみなさんの処罰感情は強い。見ず知らずの人を殺しておいて、その程度の罪なのか、と」

福村「：」

館山「私も裁判官であると同時に、一人の間です。その証言台で涙ながらに訴える遺族の姿を見て、心が揺らないはずがありません」

福村「：」

館山「しかし、人間であると同時に裁判官でもあるのです。法の番人なのです」

館山「私たちが、その時々で最大限の力を使って判決を出していくことで、この刑の判例が積み重なって、先ほどあなたがおっしゃったように、一般の方へのメッセージとして理解が得られるものだと考えています」

福村「裁判長……」

福村「では……」

福村は俯きながら立ち上がって、

福村「私の……妻と娘は……」

福村は裁判長を見て、少し前のめりで、

福村「……判例になるために死んだのですか？」

館山の表情が硬くなる。

館山「……全てを受け止めて、判決を出すのが

……私の役割だと信じています」

福村「……」

○町の自動車店へ2年6ヶ月後…昼

黄色のスポーツカーに乗って、丸坊主の速水がやってくる。

速水「ようっ」

店長「おお、速水じゃねーか。随分、ご無沙

汰だな。何かあったのか？」

速水「そういう言い方はやめろよ。分かって

るだろうが。大人しくしてなきゃダメだったんだよ」

店長「んで、今日は何しに来た？」

速水「久しぶりに転がそうかと思ってよ。点検頼むわ」

店長は茶化して、

店長「それにしても、古いな、この車。2、3年前に見た時は新車だったけど」

速水「だから、そういうわざとらしい言い方はやめろっつーの！」

店長「まあ、点検するのはいいが、まだ免許ダメなんだろ？ さっき乗って来た時はびっくりしたが」

速水「近くだしいいだろ？ ま、いつでも乗れるようにしておこうと思ってな」

店長「……ったく。ウチを巻き込まないでくれよ」

速水「分かってるよ。じゃよろしくな！」

速水が歩いて帰る。

店員1が店長に近づく。

店員１「店長、ちょっとトイレ行って来ます」

店長「ああ、いいぞ」

店員１はトイレに入る。

店員１はトイレでスマホを取り出しS

MSを立ち上げる。

（以下、文字）

店員１「来ました」

福村「頼む」

店員１「了解です」

（文字終わり）

○郊外の道路（夜）

見通しの良い、まっすぐな道。

窓を開けた、つや消しブラックの運転

席に福村が座っている。

エンジンとライトは切っており、

車の位置は道を塞ぐように斜め。

○福村の乗っている車の車内

福村のスマホにSMSで「来ます」の表示。

福村はシートにもたれかかって深呼吸する。

福村「…」

速水の乗った黄色のスポーツカーがエンジン音を響かせて、高速で向かってくる。

福村は車内灯に手をかける。

福村は速水のスポーツカーを見る。

福村は目を瞑って、車内灯をつける。

速水は光に気がついて、ハンドルを右に切る

速水「うわー！」

福村は車内灯を消して、目を閉じる。

音「ガッシャーン」

2台がぶつかる。

速水がふらふらしながら車を出る。

福村の車は運転席のドアが飛ばされて
いる。

福村はエアバックにもたれて意識を失っている。

福村の意識が戻るが半目。

福村「う、うう……」

福村が手を動かそうとして、エアバックを触る。

福村がエアバックの肌触りに気づく。

福村が少し微笑んで、エアバックを2、3回、回すようにゆっくりと撫でる。

福村が顔を右横にしてエアバックに埋めるように、ギュッと抱きしめる。

※カメラ大引き

福村の右腕が力無く垂れ下がる。

E
N
D

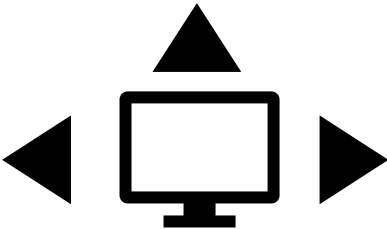
(2025年6月15日 初出)

(2025年11月23日 加筆・修正)



フィクション劇場 第二十六話
「怪文書」(ショート)

大太
大



フィクション劇場 第二十六話「怪文書」

【登場人物】

久保 正夫（くぼ・まさお）（75）：東京都

笹井市 市長

（議会関係）

岡山 義輝（おかやま・よしてる）（45）：

久保の秘書

越川 正行（こしかわ・まさゆき）（55）：

久保と同会派の市議会議員。出直し選挙立
候補者

岡山 義政（おかやま・よしまさ）（23）

：義輝の息子

杉山 元（すぎもと・はじめ）（50）：笹井
市 市議会議員。出直し選挙立候補者。当
選し、新市長となる

（ワイドショー）

宮原（みやはら）（61）：ワイドショー

フィクション劇場 第二十六話「怪文書」

司会者

澤田（さわだ）（28）：ワイドショー ア

シスタント

小田島（おだじま）（66）：ワイドショー

コメンテーター

（マスコミ）

麦林（むぎばやし）（34）：毎朝新聞記者

立石（たていし）（31）：大日本テレビ記

者

大友（おおとも）（45）：日刊アルプス記

者

藤野（ふじの）（44）：共同プレス記者

日野（ひの）（35）：SBS首都圏テレビ

記者

司会者：市長記者会見

ニュースキャスター

記者1（大日本テレビ）

【あらすじ】

東京都笹井市市長の久保正夫は謎の怪文書で学歴詐称を疑われる。そのため、マスコミに卒業証書の白黒コピーを提示するも、真偽を疑われ、疑惑が晴れず辞任する。

出直し選挙は、久保前市長の後継候補の元市議の越川正行と、前市長の疑惑を追及していた同じく元市議の杉本元の戦いとなる。

その少し前、久保の秘書を務めていた岡山義輝は、息子の義政がアルバイトのために電子証明付きの卒業証明書を取得しようとしていることを知り、久保の濡れ衣を晴らすべく、その証明書の取得に動く。

岡山は、取得した証明書を大日本テレビの記者立石に送って確認させ、久保の疑惑を晴らす報道をするよう頼むが、立石は選挙中に特定の候補者に偏る報道は出来ないと断る。そして、ワイドショーは杉本が勝利したことを告げ、誰が投稿したのか分からないSNSの発信に惑わされないようにと話す。

○市議会（昼）

杉山が質問に立っている。

資料を片手で持って、叩きながら、

杉山「久保市長！ 私はシンプルにこの文書が正しいのかどうかを聞いているんです。

何も問題なければ即答できるはずでしょう？」

久保が発言台に立つ。

久保「杉山議員。この件に関しては、私としても突然のことでございまして、現在各種資料を探しているところでありますので……」

杉山「資料も何もないでしょう？ そんなものは後でいいですよ。あなたが、この国際信州学院大学というところを卒業したかどうかということなんですよ。自分が卒業したかどうかは覚えているでしょう？」

久保「それにつきましては、きちんと資料を揃えてから答弁を……」

杉山「イエスなのですか？ ノーなのです」

か？　それだけなんですよ！」

久保「…」

○ワイドショー（昼）

宮原「それでは、次に東京都笹井市の久保市長の学歴詐称疑惑についてお伝えします。

澤田さんお願いします」

澤田「はい。この件は、笹井市の市議会議員数名に、久保市長の経歴の中で『国際信州学院大学卒業』とあるのは誤りだという封書が送られてきたことに端を発しています。久保市長はこれまで卒業はしていて、誤りではないとされていますが、卒業証書など客観的な資料は示されていません」

宮原「澤田さん、それでこの封書を出した人物は分かっているのですか？」

澤田「いえ、今のところ不明です。久保市長としては、名誉毀損で被害届を出すことも検討しているそうです」

コメンテーターの小田島の方を見て、

宮原「小田島さん、この件、どう見ますか？」

小田島「はい。政治家の方のこう言った詐称疑惑というのは、今までも中東の大学がどうか、国籍がどうか言う話はありませんたね」

宮原「そうですね。今度、参議院選挙に出る予定の方にもありましたか？」

小田島「まあ、その方はそれ以前の問題という話もありますが、こういう事は卒業証書などを見せれば済む話ですし、なによりご自身が知っている訳で、そんなに回答を引き伸ばす必要があるのかと。ただ、封書を送った人間が誰かという問題はあるかと思っていますが……」

宮原「そうですね。何もなければ否定すれば良い訳ですし……」

小田島「そう思います。先ほどもありましたように、久保市長は名誉毀損で被害届を出すことも検討しているとの事ですので、そ

うなれば警察も捜査を始めます。その際にはきちんとした証拠を提示する必要があるでしょうから、それを待つことになるかも知れませんか」

宮原「ありがとうございます。追って情報が入り次第、この番組でもお伝えして行きます」

○市長室（昼）

久保と秘書の岡山義政が座っている。

久保「岡山くん、参ったな。言いがかりも甚だしい。この前の選挙で落選した関係者の嫌がらせなんじゃないか？」

岡山「そうかも知れませんが、市長。しかし警察沙汰にまでする話なのかというところもあります」

久保「…とは言え、濡れ衣は晴らさなきゃいかんだろう」

岡山「…はい」

ドアをノックする音が聞こえる。

岡山「どなたですか？」

越川（声）「越川です」

久保「入ってくれ」

市議会議員の越川正行が入ってくる。

越川「久保さん、大丈夫ですか？」

久保「あまり大丈夫ではないが、卒業証書は家で探してはいるが、何せすいぶん昔のことなんでな。それを見せれば問題ない」

越川「しかし、マスコミは詐称したのも同然のような報道をしています」

久保「証拠がないのに中途半端なことを言っても仕方がない。私が詐称していないと言ったところで『じゃあ、証拠を出せ』ということになる。結局、一緒だ」

越川「でも、その間は『疑惑』と称してやりたい放題ですよ？ それも誰が出したか分からない封書とかいうものを根拠に。黙っているおつもりなのですか？」

久保「そうせざるを得ない」

越川「私は久保さんと同じ会派ですから信じ

ていますが、世の中の風向きは強くなる一方ですよ」

久保「卒業証書が見つければ収まるよ」

越川「…」

○記者会見場（昼）

司会「それでは久保市長の記者会見を行います。市長どうぞ」

久保「みなさんにお渡ししているのは私が国際信州学院大学を卒業証書のコピーです。これでご納得頂けると存じます」

各記者、配られた卒業証書のコピーを見る。

麦林「市長、原本はないのですか？」

久保「ありますが、こちらで持っているものですので、お出し出来ません」

立石「コピーだけでは分かりませんよ。捏造の疑いだってある。原本を見せて下さい」
大友「そうです。こちらでも真偽の検証をします。各社にお願いします」

久保「そう言われましても、卒業証書ですから、一部しかありませんので：」

藤野「市長、何か隠してるんじゃないやありませんか？」

久保「そんなことはありません。きちんと証拠をお渡ししたつもりです」

○ワイドショー（昼）

宮原「さて、笹井市の久保市長の学歴詐称疑惑ですが、昨日、市長の会見が開かれまして、各メディアに大学の卒業証書のコピーが配布されましたが」

澤田「はい。それが白黒のコピーでして、原本は出せないということでした」

宮原「それはどういう理由で、ですか？」

澤田「大学から悪用の恐れがあるので、複写は白黒のみ、という条件があったとのことですよ」

宮原「なるほど。ともかく証拠としては提示された訳ですが、真偽のほどはどうなので

すか？」

澤田「別の卒業生の方にご協力頂いて、その方の原本と今回のものとを、専門家の方に比較して頂いているのですが、市長の証書の方が白黒コピーのため、印鑑の色などが分かりにくく、100%本物とは断言出来ないとおっしゃっています」

宮原「では、この疑惑については、市長の出された卒業証書のコピーでは決着していないということですか？」

澤田「はい。そういうことになります」

○市長室（昼）

久保と秘書の岡山が座っている

久保「あれでも、ダメなのか……」

岡山「市長には失礼な言い方かも知れませんが、余計に悪くなっている感じがします」

久保「原本を出さなかった、ということがか？」

岡山「そう思います」

久保「しかし、最近は写真を撮って、そこから加工される可能性があるからまずいと思ったんだが……」

岡山「はい。大学側に対して自分たちの存在そのものを脅かしかねないと思われるようなことはしたくありませんから」

久保「そうだな。しかし……、今回の件は封書を送った人間が誰かも分かってないんだろう？　それでこちらが責められるっていうのは納得がいかん。これじゃあ、言ったもん勝ちじゃないか？」

岡山「その通りなのですが、ここまで話が大きくなってしまうと、何をやっても……、という気がします」

二人は、考える。

久保・岡山「……」

越川がドアを開けて飛び込んできた。

越川「久保さん、大変です！」

久保「越川くんか、どうした？」

越川「久保さんの不信任案が提出されるよう

です！」

久保「何だって!? この件でか？」

越川「その通りです。市政を混乱させたとして、この問題追及の急先鋒である杉山議員が提案しようとしています」

久保「…で、どうなんだ？」

越川「杉山議員の会派はもちろん、こちらからもかなりの数が賛同しそうです！」

岡山「次の選挙を意識して、ということか？」

越川「…残念ですが、そのようです」

3人は考える。

久保・岡山・越川「…」

久保がソファーに寄りかかる。

久保「…ここまでか…」

岡山「市長、何を弱気なことを…」

久保「…いや、もう真偽の話ではなくなって
いる。ここまで説明しても無理なら仕方ない。
身を引くしかなさそうだ…」

越川「では、市長。私が選挙に出ます！ 出

て、きちんと疑いを晴らします！」

久保「気持ちはありがたいが……。しかし、私
が応援に行けば逆効果だろうから協力出来
ない。会派のみんなもそうだろう。それで
も出るのか？」

越川「はい！」

岡山「……」

○ニュース（昼）

岡山が自宅でテレビを見ている。

キャスター「久保前市長の辞任に伴う、出直
し市長選挙が来週公示されます。立候補予
定者は、元市議会議員の杉山 元氏、同じ
く元市議会議員の越川 正行氏の2名で
す。今回は前市長の学歴詐称疑惑での市政
の立て直しと信頼回復が焦点になるものと
思われます」

息子の岡山 義政が後ろから、

岡山義政「親父、昼間っからテレビ見てない
で、就職先探したら？ また、誰かの秘書

とか。このままじゃ生活大変になりそうだから、オレもバイト始めようかと思ってるのに」

岡山「黙ってろ、義政。こっちも考えてるよ。パソコンの前に座っているだけが就職活動じゃないぞ」

義政「そういう言い方はないだろ、親父。最近バイトでも、どこの高校出身だとか、どこの大学に通ってるかとかを証明する書類がいるんだ。向こうもうるさいんだよ」

岡山「：どこも一緒だな。：で、卒業証書とかは見つかったのか？」

義政「そんなもんじゃ信じてくれないよ。だから、学校のホームページに行って証明書の発行をお願いしてるんだ。パソコン使ってるのはそういうことなんだよ」

岡山はハツとする。

岡山「義政！ それ、詳しく教えてくれないか？」

義政は身構えて、

義政「な、何だよ。急にがつついてきて」

義政「とにかく、教えてくれ！」

岡山と義政は、一緒に義政のパソコン

画面を見る。

×

×

×

岡山「…これなら、行けそうだ！」

岡山はスマホを手に取り、久保に電話
をかける。

岡山「もしもし、久保さんですか？ 岡山で

す。ご協力して欲しいことがあるのですが

…」

○大日本テレビ・政治部フロア（昼）

立石が、休憩室で記者仲間と話をし
ている。

記者１が休憩室に入ってくる。

記者１「おい、立石。お前に電話が入って
るぞ。岡山ってヤツから」

立石「岡山？」

記者１「とにかく出てくれ」

立石は、自席に戻る。

立石「もしもし、お電話代わりました、立石です」

岡山（声）「もしもし、私、久保さんの秘書をしていました岡山ですが」

立石「ああ、その岡山さんね。で、何のご用ですか？」

岡山（声）「立石さんに、私からの封書が届いているかと思いますが、ご確認頂けませんか？」

立石「ちょっと待って下さい」

立石は机にA4サイズの封筒が届いているのを見つける。

封筒の後を見て、岡山からのものと確認する。

立石「岡山さん、届いてます。何ですか、これは？」

岡山（声）「久保さんの卒業証明書です」

立石は苦笑い。

立石「また、その話ですか？　いくらおっし

やられても、真偽が分からないと…」

岡山は話を遮る。

岡山（声）「いいえ、今度のものは電子署名付きのものです。『PORTA』というのだそうです。確認方法を添付してありますので、すぐ確認をお願い出来ませんか？」

立石「今からですか？」

岡山（声）「重要なことなんです！ お願いします」

立石「…分かりましたよ」

立石は封書を開ける。

添付の資料を見ながら、スマホにアプリをインストールする。

写真を撮って確認する。

× × ×

立石「岡山さん、確認しましたよ。一応、確かに正しい証明書のようにですね」

岡山（声）「立石さん、これを報道して頂けませんか？」

立石は考える。

立石「岡山さん、今は無理です」

岡山（声）「立石さん、なぜですか？ 今回の市長選挙の争点の一つでしょう？」

立石「それは理解しています。ただ、今はダメなんです」

岡山（声）「ダメ？ 理解されているのですしたら、なぜ？」

立石「選挙期間中だからです。岡山さん、メディアは選挙期間中は特定の候補に肩入れすることは禁じられているんですよ。具体的に言うと、公職選挙法の第168条にその記載があるんです」

岡山（声）「しかし、これは事実でしょう？ 事実を伝えるのに選挙期間中も何もありません？」

立石「いえ、これは久保さんが推している越川さんに有利な情報になってしまします。逆に言えば、杉山さんに不利な情報です。メディアは選挙中は各候補への中立・公平

性にいつも以上に気を使います。残念ですが、出来ません」

○岡山の部屋（同）

岡山「立石さん、有利も不利も事実じゃないですか？　そもそもこの話は、誰か分らない人間の告発から始まっているんですよ？　それを久保さんに問い詰めていたのは、あなた方じゃありませんか？」

立石（声）「岡山さん、それは誤解です。向こうが誰か分からないのですから、取材する側としては、久保さんに聞くしかなかったんですよ」

岡山「じゃあ、何で告発した人を探そうとしないんですか？」

○大日本テレビ・政治部フロア（同）

立石「…私たちは警察ではありません。そういうことはしません」

岡山、しばし沈黙。

岡山（声）「…では、選挙終了後に報道して頂けませんか？」

立石「情報は上に上げますが、報道するかどうかは、私の一存では決められません」

岡山（声）「では、働きかけて下さい」

立石「とりあえず、言ってはみますが…、ただ、確約は出来ませんよ」

岡山（声）「…分かりました。お願いします」

立石は証明書を見ている。

立石「…」

○ワイドショー（昼）

宮原「さて、笹井市の出直し市長選挙ですが、杉山候補の圧勝になりました。小田島さん、どう見ますか？」

小田島「やはり、前の市長の久保さんの学歴詐称疑惑の影響が大きかったように思います」

宮原「しかし、結局、この疑惑の真偽が最後

まで分からなかった訳ですが：」

小田島「そうですね。ただ、今回の選挙では、SNSでの誹謗中傷などは少なかったことは幸いでしたね」

宮原「はい。加えて、最近の選挙ではSNSでの誤情報・偽情報も見られますね。有権者のみなさんには、そういう誰が書き込んだか分からない、真偽不明の情報に左右されないような投票を心がけて欲しいと思います。私どもメディアも根拠のある正しい情報をお伝えし、みなさんに信頼される情報発信を行うことの必要性を肝に銘じつつ、そのご判断の手助けになれば幸いです」

E
N
D

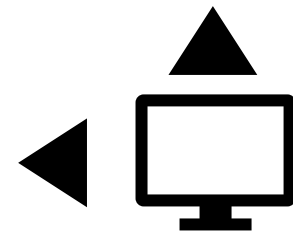
（2025年7月1日 初出）

（2025年11月23日 加筆・修正）



フィクション劇場 第二十七話
「彼氏」(ショート)

大太
大



フィクション劇場 第二十七話「彼氏」

【登場人物】

来戸 哲也（きど・てつや）（55）…フリー

ジャーナリスト。元SBS（首都圏テレ

ビ）報道局デスク

来戸 友里恵（きど・ゆりえ）（52）…哲也

の妻

来戸 えり（きど・えり）（17）…哲也の

娘。高校2年生

（SBS報道番組「報道Prism」（プリズ

ム））

村上 健二（むらかみ・けんじ）（50）…ア

ンカー

山下 梨香（やました・りか）（29）…アシ

スタント

吉川 浩史（よしかわ・ひろし）（48）…プ

ロデューサー

日野 正夫（ひの・まさお）（29）…アシス

タントディレクター

フィクション劇場 第二十七話「彼氏」

オマル（１９）：えりの彼氏。難民申請中。

中東系出身。両腕にタトゥー

（えりの学校の友人）

山川 素子（やまかわ・もとこ）（１７）：え

りのクラスメイト

市岡 靖子（いちおか・やすこ）（１７）：同

右

浦上 恵（うらがみ・めぐみ）（１７）：同右

【あらすじ】

元SBS（首都圏テレビ）報道局デスクで、フリージャーナリストの来戸哲也（きど・てつや）は古巣SBSの報道番組「報道Prism（プリズム）」で解説をしている。

来戸は外国人対策がテーマの回に、難民の呼称や、過去にトラブルがあったが、収束した例を出して、好意的な形で解説する。

一方、哲也の娘で、高校2年生のえりは、オンラインゲームで知り合ったハンドルネーム「サーバン」に好意を抱き、妻の友里恵を通じて、哲也に顔合わせしたいと頼む。

妻の説得で会うことになった哲也だが、えりの彼氏は近隣に住むオマルという難民申請中の青年だった。哲也は転居を選択する。

その最中、番組のAD日野正夫は本番後に哲也を呼び止め、番組で報道していることに矛盾を感じていると話す。

哲也は当たり前前のことを疑う日野を評価し、自分は台本通りやっているだけだと話す。

フィクション劇場 第二十七話「彼氏」

O S B S 「報道 P r i s m」生放送スタジオ
(タ方)

中央に大型ディスプレイ。

向かって左にアンカーの村上健二、右
にアシスタントの山下梨香、村上の左
にフリージャーナリストの来戸哲也。

吉川「じゃあ、日野くん、カウントお願い！」

日野正夫「分かりました、吉川さん」

日野「はい。それではスタートします！ 5

秒前、3、2、1」

♪ジングル。

出演者3人が座って礼をする。

村上・山下「こんばんは」

村上がカメラ視線で、

村上「S B S・首都圏テレビ『報道 P r i s
m』の時間です」

村上「今日は、日本の外国人政策の課題と今
後の展開について、掘り下げて行きたいと
思います」

山下「解説は、元SBS報道局デスクでフリージャーナリストの来戸哲也さんです」

山下は来戸の方を向いて、

山下「来戸さんよろしくお願い致します」

T:『フリージャーナリスト 元SBS報道

局デスク 来戸哲也』

来戸は礼をしながら、

来戸「よろしくお願い致します」

村上「まず、外国人政策の現状についてVT

Rにまとめていますので、ご覧下さい」

× × ×

村上は来戸の方を向いて、

村上「さて、来戸さん。VTRをご覧になっ

て如何お考えでしょうか？」

以下、来戸は台本をめくったり、視線を台本に向けたりを多めにしながら、

来戸「はい。まず、世界的な動向の話させ
て頂きたいのですが、アメリカ・ヨーロッ
パを始めとした各国でナショナリズムの機
運が高まっていることが挙げられます」

村上「それは、右派の力が強まっている、ということですか？」

来戸「それは一概には言えません。確かに欧州の一部の議会では右派が議席を伸ばしているのですが、以前のような右左（みぎ・ひだり）の分かれ方とは少し違うと感じています」

村上「具体的には？」

来戸「シンプルに言えば、今の閉塞した社会への不満という形で、その矛先が在留資格の無い外国人を始めとするみなさんに向けられているのではないかと考えています」

山下「いわゆる『不法移民』に対してですか？」

来戸「それは表現があまり良くありませんね。在留資格がないというのは、法律、具体的に言えば入管法に違反していることは確かなのですが、ルールに違反しているのであって、不法、つまり犯罪を犯している訳ではない、という解釈がなされています

す。国際的には『非正規』とか自国民として登録されていないという意味で『無登録』という表現を用いることが要請されています。日本では、その入管法に基づいた難民申請をしている方が、ほぼそれに当たるかと思っています」

村上「なるほど。失礼しました」

来戸「いえ。アメリカでも民主党の前政権ではそうしていましたが、今の政権では『不法移民』に戻っていますから。そのあたりで分かりにくくなっていますので、仕方のないところだと思えます。他局の番組で司会者の方が『不法移民の犯罪率は低い。データはある』と言ったことについて一部で揶揄されていましたが、これも呼び方の問題でそういう誤解を招いていたのだと思います」

村上「分かりました。しかし、その無登録の方とのトラブルの話や一部逮捕されたという話もありますが？」

来戸「はい、それは事実です。逮捕に至った事案は弁解の余地はないと思いますが、トラブルについては文化の違いが大きいのではないかと思います。これは今に始まったことではありません」

村上「と、言いますと、過去にもあったのですか？」

来戸「はい。１９８０年代から９０年代にかけて、大手自動車メーカーの関連企業が南米からの出稼ぎ労働者を雇い入れたことがありまして、そして、その方々が同じ団地に住むようになったことで、以前から住んでいた日本人住民との間でトラブルが起きたことがあります。かなり大きかったと聞いています。ただ、今では両者の交流が進んでいるそうです。ですので、外国人のみなさんとのトラブルは、ある意味、その過渡期にあるのではないかと考えています」

村上「文化の違いですか……」

来戸「そうですね」

来戸「最近、日本人選手が活躍している事で、アメリカ大リーグの試合をご覧になっている方もいらっしゃるかと思います。タトゥーを入れている選手が目につきますよね？ これは誰かを威圧しようとして入れている訳ではないでしょうから、そういう違いでしょうか」

村上「私も、一種の自己表現やファッションだという話を聞いたことがありますね」

来戸「はい。日本人では顔に手を当てて、少し上から視線をするくらいが精一杯だと思っています」

山下「しかし、来戸さん。文化の違いであっても、最低限守るところは必要かと思いますが……」

来戸「おっしゃる通りです。両者の文化は尊重されなければならないと思いますが、個人としては『郷に行っては郷に従え』の考え方で、生活に関わる公共のルールなど

については、こちらに合わせて欲しいと思っています」

村上「来戸さん、他に課題はありますでしょうか？」

来戸「宗教ですね。カルト的な宗教を信仰する無登録の方は少ないと思いますし、そういうみなさん取材することは、もうないと思います。これは文化と違って、すり合わせが出来ませんので、『棲み分け』という形が必要かと思います。タブーなどは特に」

村上「それでは、今後はどういう形でこれら課題に向き合って行けばいいのでしょうか？」

来戸「N G O なども声明を出していますが、法整備などが急務だと思います。排他的な考えではなく、インクルージョン（包括性）の視点に立つ必要があると考えています」

村上「ありがとうございました」

× × ×

村上「それでは、今日はこの辺で失礼します」

♪ ジングル。

三人は一礼する。

少し、間を開けて、

日野「はい、終了です。お疲れさまでした！」

村上、山本がセットから降りてくる。

来戸は座ったまま閉じた台本を見ている。

来戸「…」

吉川は、それを見て、

吉川「来戸さん、どうされましたか？」

来戸「いえ、何でもありません」

来戸は台本を持ってセットから降りてくる。

吉川が出演した3人に向かって、

吉川「お疲れさまでした。では、今から反省会と来週の打ち合わせをしますので、会議

室にお願いします」

来戸「吉川さん、どのくらいかかりそうですか？」

吉川「いつも通り1時間くらいです」

来戸「分かりました」

来戸はスマホを取り出し、妻の友里恵に電話をする。

来戸「もしもし、友里恵か？　今、終わった。2時間くらいでそっちに着くから。ああ、8時くらい。じゃあ」

○来戸の自宅（夜）

来戸は夕食を取るためにテーブルに座る。

続いて、妻の友里恵が座る。

娘のえりの座るところには、食べた食器が置いてある。

来戸「えりはどうした？」

友里恵「食事はもう済ませました。部屋に居ますよ」

来戸「一緒に食べないのか？」

友里恵「なんでもオンラインゲームをするんだって言って」

来戸「またそれか……。最近、こういうのでおびき出されるような事件も起きてるからな……」

友里恵「えりに限ってそういうことはないですよ」

来戸「まあ、その辺は大丈夫だろうが……。しかし、毎日毎日じゃなんだろう？ 週2日はやらない、とか出来ないのか？」

友里恵「学校の友達と一緒にやっていて、毎日ゲームをしないと向こうが心配するみたいなんですって」

来戸「ったく……。課金は友里恵がちゃんとチェックしておいてくれよ」

友里恵「分かっていますよ」

二人は食事を進める。

友里恵「ところで、この辺でも外国の方が増えたでしょう？」

来戸「ああ。隣町に多く住んでたが、増えるみたいだから、こっちにも来てるんだろうな。それがどうかしたのか？」

友里恵「近所で話してたんだけど、少し先のアパートに住んでる方から苦情が出てるらしくって。夜、騒がしいって」

来戸「まあ、その辺は日本人と違いがあるから仕方ない」

友里恵「でも、自治会長さんが話をしに行っただけと言うことを聞いてくれないって。日本語は分かるみたいだけど……」

来戸「時間が経てば、聞いてくれるようになるよ」

来戸は食事続ける。

友里恵「……」

○同 えりの部屋（夜）

えりがスマホでオンラインゲームをしている。

ここでは「ホワイトアウト・サバイバ

ル」を想定（実はあまり知りません

（笑）

えりのハンドルネームは「エリー

ナ」。

ハンドルネーム「サーバン」（オマ

ル）とクラスメイト数名で同盟を組ん

でいる。

サーバンからえりに個人チャット。

（以下、チャット）

サーバン（以下、オマル）「こんばんは」

ユリーナ（以下、えり）「こんばんは」

オマル「今日もがんばろう！」

えり「うん！」

笑顔でプレイするえり。

○登校（朝）

えりが、クラスメイトの市岡靖子と浦

上恵と3人で話ながら登校している。

同 山川素子がえりの後ろから、

素子「えり、おはよ！」

えりは首を後に向けて、素子を見ながら、

えり「あっ、モトちゃん、おはよ」

山川が3人を見ながら、

素子「何の話してたの？」

靖子「もち、同盟の話だよ」

素子「大分増えたもんね、メンバー」

恵「がちり領地守って広げて行こ！」

素子「そうだね。ねえ、えり」

えり「…う、うん」

靖子「えり、どうかしたの？」

えり「…なんでもない」

恵「遅くまでやってるから疲れてるんじゃない無

いの？ ほどほどにしときなよ」

えり「うん…、そうする」

4人は学校に向かって歩く。

○来戸の自宅（夕方）

友里恵が台所で、食事の準備をしている。

えりが後ろから、

えり「お母さん、ちょっと話があるんだけど

…」

友里恵「どうしたの？ えり」

○同（夜）

来戸と友里恵がテーブルで食事をして
いる。

来戸は箸を持ったまま驚いて、

来戸「紹介!？」

友里恵「ええ…」

来戸「えりはまだ高2だぞ？」

友里恵「そういう大げさなものじゃなくて、
とりあえず挨拶したいってことみたいで

…」

来戸「向こうがか？」

友里恵「いえ、二人で相談したみたいで…」

来戸「…」

来戸は少し落ち着く。

来戸「まあ…、悪いことじゃないが…。で

も、何でそんな話になったんだ？」

友里恵「詳しいことは教えてくれなかったけど…、あなたＴＶに出てるでしょ？　それで強面みたいに感じたらしくって…」

来戸「あれはＴＶ用だってことは、えりも知ってるはずだぞ？　向こうにそれを言わなかったのか？」

友里恵「その辺は私も…」

来戸は席を立て、

来戸「えりに直接聞く！」

友里恵は来戸を手で制して、

友里恵「待って」

来戸は振り返って、友里恵を見る。

友里恵「…えりも年頃だから、ここは黙ってＯＫしたら…？　ちゃぶ台を用意する訳でもないでしょう？」

来戸はため息をつく。

来戸は椅子にドカッと座る。

来戸「…で、いつだ？」

友里恵「今週の日曜日が良いって」

○日曜日（昼）

来戸とえりは居間で座っている。

来戸は腕組み。

えり「…ゴメンね、お父さん」

来戸「…まったく大げさな。そんなに私が怖いのか？」

えり「そうじゃないんだけど…、ちょっと…ね」

インターホンが鳴る。

えりがインターホンに向かって、

えり「はい。行きます」

えりが小走りに玄関に向かう。

来戸が後ろからゆっくり向かう。

えりが玄関のドアを開ける。

外には、両腕タトゥーの中東系のオマールが立っている。

来戸は目を見開く。

オマルはうつむきながら、

オマル「ハジメ…マシテ。オマル、ト、イイ

マス」

オマルが両手を前に組み、軽くお辞儀をする。

来戸「…」

えりが来戸の方を向いて、

えり「オマルくんとはゲームで知り合ったんだ……。偶然、この辺に住んで……。難民の人なんだって」

来戸はオマルを凝視する。

オマルは来戸を少しうつむいたまま見ている。

えり「お父さん……。いい……。よね？」

来戸「…」

○登校（数日後…朝）

えりが一人でとぼとぼと登校している。

素子が後から近づきながら、

素子「えり、おはよう！」

えりは沈んだ声で、

えり「おはよう…」

素子「えり、あんた最近元気ないね。ここん
とこゲームにも入ってないけど、なんかあ
ったの？」

えり「同盟…、抜けようかなって思ってた

…」

素子「抜けるの!？」

えり「…うん」

素子「みんなで楽しくやってたのに？」

えり「そう…」

素子「よく分かんないね」

えり「…モトちゃん。あと、もうひとつ、言

わなきゃいけないことがあるんだけど…」

素子「何？」

O S B S 「報道 P r i s m」生放送スタジオ
(夕方)

村上「それでは、今日はこの辺で失礼しま
す」

♪ジングル。

三人は一礼する。

日野「はい、終了です。お疲れさまでした！」

来戸、村上、山本がセットから降りてくる。

来戸は台本を持っている。

吉川は3人に向かって、

吉川「お疲れさまでした。では、今から反省会と次回の打ち合わせをしますので、会議室をお願いします」

来戸は吉川に向かって、手を伸ばして、

来戸「吉川さん」

吉川は来戸の方に振り向く。

吉川「来戸さん、どうかしましたか？」

来戸「申し訳ないのですが、来週から反省会を中座してもいいですか？」

吉川「まあ、最近は大きなトラブルはないので構いませんが……。どうかしたのですか？」

来戸「いや、引っ越すことにしまして。帰宅するのに、今より３０分ほど時間がかかるので、早めに帰らせて頂けたらと：」

吉川「来戸さんは家族想いですからね。分かりました。他の方には私から話をしておきます」

来戸「ありがとうございます。それで今日はその準備があるので、これで失礼させていただきます」

吉川「はい。そういうことでしたらＯＫですよ」

来戸「では、失礼します」

来戸は吉川に一礼する。

吉川「お疲れさまでした」

来戸は台本を持ったまま、スタジオを後にしようとするが、日野に呼び止められる。

日野「来戸さん、少しよろしいですか？」

来戸「はい。長くならなければ」

日野「今日の放送ですけど、ちょっと自分の

にしっくりこないところがあって：」

来戸「どの辺が、ですか？」

日野「この前の例の知事選で、落選した候補に対して『外国人の参政権を認めるつもりだ』っていうデマがあったじゃないですか」

来戸「ああ、ありましたね。この番組でも取り上げてましたから覚えています」

日野「この時の話って、参政権を与えることに対してネガティブなイメージだったと思うのですが：」

来戸「まあ、いろんな考え方の人がいらっしやいますから、私としては何とも言えないですね。デマということもありますし」

日野「それはそうなのですが：。でも、今日の放送って『長く日本にいる外国人が、なぜ政治に参加できないのか？』っていう内容があったような感じなのですが：」

来戸「そうとも取れるかも知れませんか」

日野「でしたら、何か矛盾していません

か？」

来戸は少し考える。

来戸「番組の内容については、私には何とも
言えませんよ。片方はあくまでデマでした
から」

来戸「…でも、日野さんの姿勢はいいと思い
ますよ。自分たちの放送していることが、
当たり前のことなのか？ って疑うという
ことは。この話は吉川さんに聞いてみては
如何ですか？ きちんとしたお返事を頂け
ると思いますよ」

来戸「私は…」

来戸は手に持っている台本を顔の横に
上げて、

来戸「台本通りにしゃべっているだけですか
ら」

E
N
D

（2025年7月16日 初出）

（2025年11月23日 加筆・修正）

